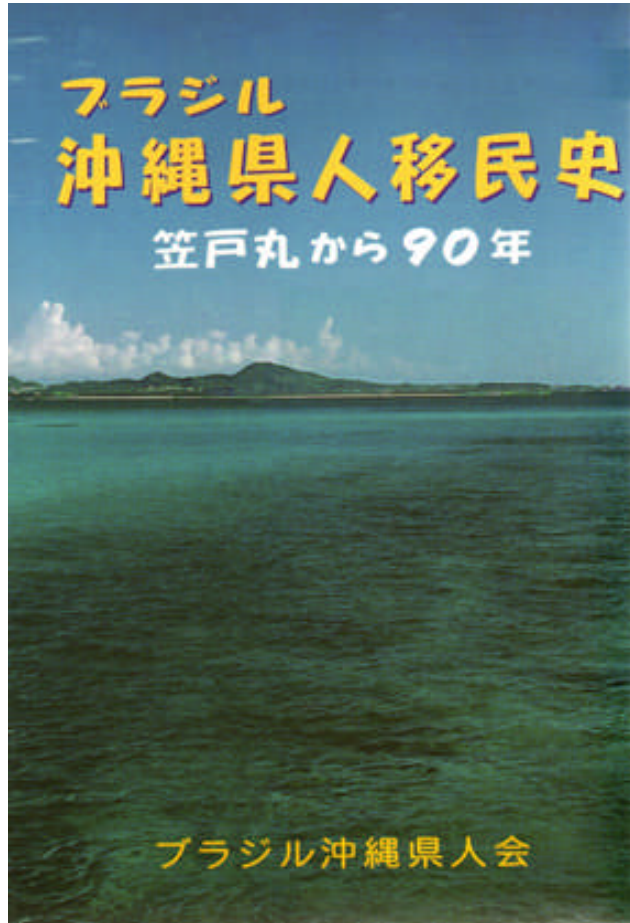


ブラジル沖縄県人移民史(2)

笠戸丸から90年

1908～1998



刊行のことば

ブラジル沖縄県人会々長

仲 川 実 留

この度は、待望の『沖縄県人移民90年史』を会員各位にお贈り出来ることを最も喜ぶものであります。

ふり返って見ると、近年一世会員の高齢化が進み、10年後の移民100周年には殆ど総ての印刷物がポルトガル語に打って変わり、日本語での著作活動は、本誌が最後ではないかと巷の声も聞かれます。そういうこともあつてかこの度の記念誌編纂はことのほか真剣かつ熱意が注がれて参りました。

編集委員の皆様におかれましては、移民90年の長い道程を先人達がどう歩んできたか、未知の国ブラジルで、「金のある木」を追い求めて流浪し、望みをかなえないまま、錦衣帰郷の夢も破れ、異国の土となった、わが先人達の苦難の足跡が、最早忘却の彼方に消えつつあるかにみえる今日、いかにしてその史実と資料を蒐集するか、そして後世に伝えるか、に腐心したのであります。その見地から県人先駆者が最も多く活躍し定着した移民の故里、サントス・ジユキア地方やノロエステ鉄道敷設で開けた町カンポ・グランデ一带に焦点をあて、その資料収集と調査を実施するなど1年有半の歳月を費やして取り組んできたのであります。また同時に、去った第二次大戦を境に永住を余儀なくされた戦前移民達が「敵性国民」として背負った苦難と信じ難い日本の敗戦の中で、在伯日系人がとった悪辣千万の振舞（「勝ち負け」騒動）でブラジル国民からの不信をつくりだしてしまった日本移民の戦中戦後の空白期、そして戦後移民が再開され、新時代の日伯友好構築が目覚しく発展し、今日の繁栄に繋がっていく一連の移民史を多彩な

資料を駆使して抄録しております。更に日系社会で著名な県人二世諸氏による「埋もれた史実」の座談会やブラジルに於ける「沖縄芸能の継承過程」など、専門的分野の研究資料、克明な移民史年表など多くの参考資料が、読者に読み易く親しめるように、きめこまかく編集されております。是非会員各位の御愛読をお奨め致します。

光陰矢の如く刻一刻新世紀がおとずれて参ります。20世紀初頭、わが先人達はあらゆる困難を克服し、子弟教育の重要性を説き確固たる日系社会を築きあげたその功績をわたしたちは、決して風化させてはならない。その意味も本書の果たす役割は大きいものがあると思います。1人でも多くの方々が御活用頂きますことを願ってやみません。末筆になりましたが、編集刊行に関わりました皆様各位の御努力に対し深甚なる感謝の意を表し刊行のこ

とばいたします。

2000年2月20日

（注・この巻は第二部以降を収録）

沖縄県人ブラジル移住90年、

ブラジル沖縄県人会創立60周年記念誌

ブラジル沖縄県人移民史

―目次―

刊行のことば ブラジル沖縄県人会会長 仲川 実留

祝 辞 沖縄県知事 稲 嶺 恵一

祝 辞 沖縄県議会議長 友 寄 信助

カラー口絵

ブラジル移住90年・県人会創立60周年記念祭典

白黒フオート：歴代会長（初代～15代）……沖縄ブラジル対図

第1部 歴史編（沖縄移民90年の足跡）

第1章 ブラジル一般事情と日本人移民

第1節 ブラジルという国31

- ・第2節 ブラジルへの日本移民導入
- ・第3節 沖縄県の海外移住概観

第2章 笠戸丸沖縄移民325名の足跡

- ・第1節 なぜ沖縄移民が多かったのか
- ・第2節 乗船とその名簿
- ・第3節 耕地 配耕から90年の足跡

配耕以後90年の足跡

カナーン耕地の男女 152人
フロレスタ耕地の男女173人

第3章 耕地での生活と逃亡

第1節 耕地配耕とその生活

- ・第2節 耕地からの逃亡とその主要因

第4章 流転の歲月

第1節 サントスへの流浪

- ・第2節 アルゼンチンへの「転航」
- ・第3節 受難の日々

第5章

笠戸丸移民と戦前移民

- 第1節 カンボ・グラndeへの定着
- ・第2節 サントスへの定着
- ・第3節 ジュキア線沿線への進出
- ・第4節 サンパウロ市への定着
- ノロエステ鉄道沿線その他の地域への進出

第6章

戦前の沖縄県人社会

- 第1節 戦前の地域的県人組織
- ・第2節 球陽協会の結成
- ・第3節 差別撤廃を目指して

第7章

移民の空白期

- 第1節 戦時下の移民たち
- 第2節 日本の敗戦と戦後の混乱
- ・第3節 県人内の対立と抗争
- ・第4節 混乱と悲劇はなぜ生じたのか

第8章

戦後移民の再開

- 第1節 戦後移民の概観と県人移民再開
- ・第2節 青年隊移民
- ・第3節 伊佐浜移民
- ・第4節 南米拓殖会社移民
- ・第5節 ブラジリア移民
- ・第6節 カッペン移民
- ・第7節 ボリビアからの転住者

第9章 戦後県人社会の組織化と活動

第1節 県人会組織の確立と活動

・第2節 県人会支部

・第3節 協和婦人会の結成とその活動

・第4節 県系人の組織化・青壮年会を中心に

・第5節 在伯同郷団体組織の結成と活動

・第6節 沖縄文化センターの設立

第10章 沖縄県（系）人の社会的参加

第1節 日系人の社会的進出

・第2節 沖縄系の社会的進出

第11章 沖縄文化の継承とその現状

第1節 ブラジルにおけるウチナアンチュの食生活

・第2節 琉球芸能組織と団体組織

・第3節 沖縄系人と祖先崇拜

第12章 海を越えるウチナアンチュ・ネットワーク

第1節 世界のウチナアンチュ大会と民間大使制度

・第2節 WUB 一世界のウチナアンチュ・ブラジル・ネットワーク

第3節 移民80年祭

コラム〈評論・談話・エッセイ・事件〉

・妻が語る笠戸丸移民

・子が語る笠戸丸移民

・大城立裕著「ノロエステ鉄道」から

・ブラジルのコーヒーは「苦かった」

・沖縄移民総代、城間真二郎のヤマトンチュー嫌いの理由

・水洗式便所と日本移民

・日本に帰ったブラジルの勝ち組

・理想郷、今ここに（運天政助）

・サンジョアン祭りの花火、初の二世誕生と国際結婚

・南米大陸を駆け抜けたイッパチの賭博人生

・沖縄角力よよみがえれ

・「沖縄移民女性史」

・全伯支部対抗陸上競技大会

・二世会員が始めたスポーツ行事

・アナジアス村の一家惨殺事件と「七輪の花」 217

（2）は第2部から収録）

第2部 ルポ編（移民のふるさとを訪ねる） 10

①移民の故里を支える人々 10

フォーラム：第二の故郷・カンポ・グランデを語る

出席者Ⅱ具志堅弘／知花幸信／山里吉松／前田オスカル／司会・赤嶺尚由

②若きニューリーダーの意見 29

カンポ・グランデ沖縄県人会会長 比嘉ボニファシオ

③移民の故里に生きる先駆者たち 34

金城文子／大城カメ／新垣三郎／ 仲尾福寿／仲宗根源昌／金城平太

④姉妹州県 51

南マツト・グロツソと沖縄

・移民のふるさとと見たまま聞いたまま：金城寛信／姉妹州県提携の経緯／姉妹州県提携の展望：具志堅弘／カンポ・グランデ名物沖縄ソバ

⑤クイアバーに新しい移民の故里を造ろう 61

山内義寿／山内昌吉／山内寛春／金城盛吉／田中康宏／山内貞子／金城啓子

⑥移民の故里めぐり 70

・サントスージュキア線訪問記・サントスージュキア線駆け足リレー・インタビュー・沖縄の教訓歌・絆は堅くサンビセンテ、那覇姉妹都市・F a m i g クラブの横顔、・イーリヤ・グランデ

⑦結び笠戸丸移民から何を学ぶか 138

第3部 記録編（座談会・懸賞論文） 149

座談会 沖縄移民・埋もれた史実を探る

出席者：山城ジョゼー、山里アウグスト、上原幸啓、赤嶺尚由、山城勇、司会者・仲川実留

懸賞論文（入選作） 183

・日本語の部、第1位 宮城あきら／第2位 赤嶺磯之子／第3位 高江洲義盛・ポルトガル語の部、第1位 金城R行秀／第2位 与儀アケオ／第3位 神谷ヒデオ

第4部 年譜・資料編（総合90年史、笠戸丸乗船者名簿など）

221

折込み：石原家（昌二・ウシ）の家系図／笠戸丸移民石原家の人々

／笠戸丸移民乗船者名簿／ブラジル沖縄県人会定款／歴代会長／戦後歴代支部長／県人会の財源・会館の施設／支部と会員数／叙勲者名簿／90年祭記念行事特別寄付者芳名／90年祭記念行事割当寄付／90年祭祭典委員会／祭典委員会正副委員長／総合90年史年譜／あとがき・編集後記／刊行委員会

251

文芸〈琉歌、自由詩、支部歌など〉

●詩 イバーの花(安慶名信夫) ●琉歌(翁長文吉) ●歌 ブラジル・サバクイ(屋比久孟清) ●サンカエターノ歌(山内盛続作詞) ●ビラ・カロン支部の歌 ●琉歌7人集(金城シズ子、宮平ヤス、前田セイ、比嘉キク子、奥原うと、比嘉ウシ、宮城よし子) ●琉歌(和宇慶朝六) ●琉歌(山内ハル、玉城登吉) ●琉歌(梶門寛俊) ●詩 夢(東谷) ●琉歌(仲栄真盛長) ●詩 我家五大洲(山内盛彬) ●琉歌(山内盛続) ●琉球政府主席 松岡政保歓迎の詩(山内興蒲) ●二世が詠んだ短歌(志伊良) 詩(トカシキ生)

第 2 部

ルポ 編

移民のふるさとを訪ねる

第2部

ルポ 編

移民のふるさとを訪ねる

① 移民の故里を支える人びと

フォーラム：第二の故郷、カンボ
・グランデを語る

出席者

具志堅 弘 会長 (65)

知花 幸信 顧問 (85)

山里吉松 会計監査 (74)

前田 オスカル 第一書記 (52)

司 会：赤 嶺 尚 由

(記念史取材班・ウチナー民間大使)

と き：1999年2月27日

ところ：カンボ・グランデ沖縄県人会



出席者＝ 右から前田オスカル第1書記、具志堅弘会
長、知花幸信顧問、山里吉松会計監査、＝
カンボ・グランデ会館で。

南マツト・グロース州の州都であるカンポ・グランデは、1910年頃から始ったノロエステ線の鉄道工事で大きく栄えた町である。この鉄道工事を目当てにブラジル国内の各地はもとより、遠くペルーあたりからも沖縄県人が集まり、やがて南聖海岸のジュキア線一帯と並んで、ウチナーンチュの移民の故里と称される程の一大集団地が建設されていった。

ある地域の発展の軌跡には、一つの周期説みたいなものがあった。浮き沈みを繰り返していくのが常であるが、カンポ・グランデ周辺に形成された沖縄県人の移民の故里は、もう長い歴史を経ているのに、まだ相当の活力を秘めているように見うけられる。その秘密の一つは間違いなく、捨て石的ではあるが骨太で、教育熱心な一世移民の手により意気に燃え、責任感があり、且つ社会的地位の高い二世や、三世など次世代を担う人たちが育っていることである。一本の木も根元がしっかりしていればこそ、枝や葉も見事に繁る。

こんな立派な移民の故里が建設された陰には、きっと関係者各位の並々ならぬ苦労があったに違いないと考え1999年の2月も、もう終わりにかけた頃、実際に現地に足を運び、カンポ・グランデ沖縄県人会（具志堅弘会長）を始めとする県人関係の各団体の幹部たちから貴重な話を聞く機会を得た。カンポ・グランデ市周辺に形成されたウチナーンチュの、移民の故里のもっとも大きな試練とか岐路といったものは、第二次世界大戦が終わってからも勝ち組と負け組に分かれ、ともすれば陰鬱になりがちだった当時の日系地域社会の状況を一日も早く收拾し、沖縄県人にとどまらず広く日系人を一つに大同団結させることであった。そういった重大な試練の時をうまくいくことが出来たからこそ、現在のカンポ・グランデ市周辺に広がる移民の故里の繁栄もあるといえよう。【赤嶺尚由】

司会 このカンポ・グランデ市を中心に、こんな素晴らしい沖縄移民の故里が出来上がった原因と、今から考えて過去もとても大切な岐路といったものについて、お聞かせください。

勝ち負けを越えて大同団結を促すふたりの恩人、

師団長と陸軍検事

知花 それについては、まず、私から言いたいことがあります。第二次大戦が勃発してブラジルの日本移民の間にも勝ち組、負け組が出てきて、それはずっと後まで尾を引きました。正直な処、私は勝ち組でした。このままいくと、争いやら諍いと、ある日、この町に駐留する第九軍司令部へ行ってマリオ・メンデス・ゴンサルヴェス・ピント・ゲース師団長にお伺いを立ててみることにしました。そして、師団長日く「日本が終戦を迎えた以上、ここでの勝った、負けたというのは、もうどうでもよいではないか。ただ、いえることは、日本人は農業面でブラジルに大変貢献してくれた。これは、とても素晴らしいことだ。われわれブラジル側は、決して日本人を軽くは扱わない。安心して日々の生活に精を出しなさい」ということでした。

また、さらに私は当時、勝った負けたのいざこざのために、流罪同然になっていた日本人を救出する方法について尋ねたら、その師団長は「UNIAO ATLETICO ESPORTIVO CAMPO GRANDENSE」というスポーツ団体を作り、アタリバ・アルヴァレンガ陸軍検事を会長に迎え、その他の役員は、君たちコロニアの人で良い」といわれその通りにしました。その上で正式にDIARIO OFICIAL(連邦官報)にも掲載しました。

ドトール・アタリバに対する恩は、もつとあります。多くの日

本人が流刑になったその場所まで自分で行ってくれて、日本人は「罪人ではない。（ああいう勝ち組と負け組の事件も所詮）愛国心の持ち主であればこそ、発生したものである」という風に理路整然と説明されたので、全員身柄を釈放されました。1945年の頃だったと思います。さらにプロミツソンから日本語の先生を招聘して日本語学校を創立しました。体育関係も充実していき、柔道部が出来たので、まず自分の子供を入れ、ついでに自分も入りました。

随分後になって、平良さんという琉球大学の先生が来て、われわれ沖縄県人の恩人ともいうべきマリオ・メンデス・ゴンサルヴェス師団長とアタリバ・アルヴァレンガ陸軍検事に沖縄県から感謝状を送らなければならないということになり、その時、たまたまブラジリアで警察署長をしていた私の甥の中里カルロスに二人の近況を調べさせ、その旨沖縄の方に送ったが、何の音沙汰もありませんでした。その後で知ったのは、師団長も検事ももうこの世にはいらっしやらないということです。検事は90年1月4日に亡くなっております。

具志堅 カンポ・グランデ市周辺に沖縄県人の移民の故里みたいな集団地が形成された原因として、他に指摘できますことは、気候が沖縄に似ていて暖かく住み易いこと、県人が一カ所に集まれば、お互いに何かと心強く助け合えること、といった点もあったに違いありません。

しかし、第二次大戦が終わった頃の生活は、カンポ・グランデ方面でも大変だった。豊かになった現在では想像も出来ないような日々の暮らし向きであった。そして、日本人が毎日の生活を営んでいく上で、数えきれないほどブラジル人のお世話になった。そういったウチナアンチュの移民の故里の発展史のいしずえ（礎）になったこの国の人々のことは、出来るだけ記録に残しておいて、

いつまでも忘れるべきではない。我が沖縄県人会の記念史発刊などの意義の一つも実はそこにある筈である。

司会 あの際の移民の生活振りについて少し話してください。

300人の県人に老齢年金を入手してくれた

オリンピオ弁護士

知花 私は自分の肩で荷をかついで、フェイラ（露天市）に売りに行っていました。皆が苦しい時代でした。当時はまだ、誰も老齢年金（アポゼンタドリア）を貰える資格はありませんでしたが、それをカンポ・グランデ近辺で何とかもらえるように奔走し、取り計ってくれたのがオリンピオ・デ・オリヴェイラ・パレーデ弁護士でした。その頃、一千家族位の沖縄県人がいて、かれこれ300人内外が年金を貰っていました。

司会 あの当時は、まだほとんどが農業でしたか。

知花 はい、そうです。農業でした。

司会 何をつくっていましたか。

山里 カンポ・グランデ近郊は、野菜作りでした。ファゼンダ（農園）では、コーヒーとかピングア（火酒）を作っていました。また、アレ ندا（借地農）の形で、3年間アロース（米）を栽培している人もいました。1938年頃には、コペラチーバ・アグリーコラ・デ・カンポ・グランデ（カンポ・グランデ農業組合）という組織が出来て、米とバタチンニャ（馬鈴薯）とコーヒーを扱い始めました。

知花 終戦後、移民の第一陣が和歌山県から来てドウラードスに入った時のことです。3年後に野菜を作ったので、それを町へ出荷するのに橋を架けてほしい、と交渉役を頼まれました。

ドウラードスには、あいにく知り合いが一人もいなくて、ある日、町の中で途方に暮れたまま立っていたら、偶然にも以前からちよつと顔見知りのジョルダン判事が通りかかり、「そんなところで何をしているのか、知花」と、聞くので、事情を話して、相談を持ち掛けると、「自分が協力してやろう」と、解決に乗り出し、橋を架けてもらいました。

司会 あの時、どんな仕事をしていましたか、知花さん。

知花 はい、チントウラリア（洗染業）をしていました。私には特に沖縄県人という強い意識は、ありません。何県人であつても、すべて日本人といった考え方です。日本人が困っていれば、誰にでも少し手助けしたい、といつもそんな気持ちでご奉公してきました。今は、カンポ・グランデ市近辺の日系人の実態調査を手弁当でやらせてもらっています。

山里 知花さんは、日本移民90周年を祝して州政府からオンラ・デ・メリット・カンポ・グランデンセという立派な勲章を貰っています。今まですべて自腹を切って、日系人のために尽くしてきた功績が認められてのことです。

司会 カンポ・グランデ市という我々沖縄県人が、他に誇り得るような移民の故里に来てみますと、すっかり有名になった沖縄ソバ専門のフェイラが週2回も立ったり、琉球音楽や舞踊などの郷土芸能も盛んで、何一つ不自由しません。しかし、取材させていただいたあるお年寄りの言葉の中に「今は、子や孫に囲まれて、少しも淋しいことや不自由することはありませんが、それでも時々たまみる夢は、やはり、ウチナーグチを使つての沖縄のことばかり」というのがあつて、それが何故か頭の中に強くこびりついてきて、なかなか忘れられません。50年以上この国で過ごしてきても「我尚旅路に有り」というのが移民の宿命でしょうか。そこで、終戦直後の当地における沖縄県人家庭の食生活の模様を

ちよつとお伺いしたい、と思います。山里さんのお父さんは、何をしていましたか。

山里 コーヒー園にいました。当時のコーヒー園における移民の食生活は、昼がアロース(米)とフェイジョン(豆)にマンジョウカ、それにカルネ・セツカ(乾肉)とアボーブラ(カボチャ)といった内容でした。夜は、ソーミンの汁とご飯に漬物でした。

司会 日本の食べ物はありませんでしたか。

山里 いいえ。ありませんでした。

司会 豆腐は、ありましたか。

山里 町に行くことができました。私たちのファゼンダの中では一軒だけ豆腐を作って配っていました。ほとんどの県人がブラジル人と同じ食事をしていました。

司会 お父さんのお名前は？。

山里 はい、山里平常です。

司会 お父さんは、何年移民でしたか。

山里 1914年です。第一次大戦が終わってすぐに来ています。軍艦に守られながらブラジルに来たそうです。

司会 移住した直後は、どんな仕事をしたでしょうか。

山里 鉄道工事の枕木(まくらぎ)を敷く仕事をしていました。それと薪取りなんかしたそうです。笠戸丸移民の大城幸喜さんに雇われていたそうです。

司会 当時は、医者も薬局も少なかったと思いますが、病人が出たら、どんな治療処置を講じていましたか。

県人家族の健康を守ってくれた

薬剤師二代宮城重吉郎・重夫父子

山里 あの頃のカンポ・グランデには、宮城重吉郎さんがいました。この方は、沖縄で薬局に勤めたことがあり、ちょうどその方面の心得があり、皆よく助けられたものです。サンパウロで先年亡くなられたドートル・ミルトン宮城のお父さんにあたられる方です。宮城重吉郎さんは、必要に応じて自分で産婆もし、腹痛や頭痛の薬も調合してやっていました。その後に、ドートル山城興栄が日系のお医者さんの第1号になられて、この方には多くの人たちが大変お世話になっていきます。現在、80歳になりますが、まだ第一線に立って頑張っております。日本政府からの研修生第1号も、ドートル山城でした。昔は、ドートルになるといったら、医学にしか行きませんでした。他の大学があるのは、多分知らなかったのでしょうか。それほど、カンポ・グランデ市には、現在、お医者さんが沢山います。

カンポ・グランデ市在住の県人各位のお叱りを受けることを覚悟してあえて言えば、確かに石を投げると、県人子弟のお医者さんに当たる位に、この町には、メージコ（医者）の数が多い。従って、これからは、特に県人子弟のお医者さんたちには、ソロバンを片手に算術がお得意のドートルたちではなくて、病人の痛みも分かるような仁術を心得たドートルたちの登場が期待される。

司会 沖縄県人の子弟のお医者さんは、ざっと数えて、何人位いますか。

知花 現在、およそ200人位いるのではないかと思います。

山里 具志堅（支部長）さんの婿もお医者さんです。知花さんの家にも沢山いるのではないですか。

知花 3人います。ドートル（大学卒）は、全部で8人います。
山里 県人初のお医者さんである山城（コウエイ）さんの所は、

8人が医者で、2人がエンジニア（工学士）です。コロニアで1番数多くお医者さんを出したのは、やはりカンポ・グランデ市ではないかと思います。新里さんの所では、11人が揃ってドクトール（大学卒）です。

海外に住む我々が、いまでも時ある度毎に夢に見る本当の故里沖縄には、他府県人でも聞いて感動する「ていんさぐぬ花」とか「汗水節」などをはじめ、いくつかの教訓歌がある。もちろん、他府県のいたる場所にも、教訓は数多くあるが、歌にして教訓を遺そうとした沖縄の先人たちの発想法は、非常に珍しく、寡聞にして他には知らない。移り住んでいるこのブラジルの日系コロニアでも、おじいさんやおばあさんはもとより、父母の「ゆしぐと」（教訓）を深く胸に刻み込み、とても大切に守って行こうとしているのは、我が県人子弟ではないか、と時々自負したくなる位である。それは、取りも直さず、県人の家庭教育がよりしつかりと行われている証拠ではないだろうか。齢を取っても、子や孫に囲まれて、憂い少なく、安心して身のおけるしつかりした家庭があるからこそ、海外に移り住んだ後でも、沖縄県人が総体的に長生きしている、とも言える。現在、ブラジルに存在している各県人会が果たしていつまで存続できるかを巡って議論がかまびすしく行われているが、よりしつかりした後継者に恵まれた沖縄県人会は、最後まで残りそうな組織である、と確信めいたものを抱くことができるし、カンポ・グランデ沖縄県人会は、さらに長続きする可能性を秘めていそうである。

司会 この移住先で、いつまでも心に残っている「親のゆしぐと」といったものをひとつ聞かせてください。

誠の上にや弓矢や立たん

知花 私の父は、「誠の上にや弓矢や立たん」と、口癖のように言つたものです。その言葉があつたからこそ、私は今まで他人から後ろ指をさされることもなく、いつも正義を貫き通してこれたし、自分はたとえ犠牲になつてでも他人のために尽くしてこれたのだ、と思います。

司会 お母さんのお言柔は？。

知花 母は、「人間、どんなご馳走を前にしても、腹八分目で止めておけば、病氣知らずだよ」と、言つていました。

司会 フェイジョアードとかシュラスコがどつきりあつて、毎日が正月みたいに盛り沢山のご馳走の多いこの国で、腹八分目位で我慢しておくというのも、一種の拷問に等しく極めてむづかしいのではないかと考えますが、知花さん、それをちゃんと守つてきましたか。

知花 はい、私は今年８７歳になりますが、お蔭様で、医者知らずの健康でいることができ、皆さんのお役に立たせてもらつております。どこにも、異常はありません。

司会 ああ、すごく立派ですね。

知花 その代わり、酒もタバコもやりません。

司会 移り住んだこの地での楽しみは、何ですか。

知花 ひたすら皆さんのお役に立つことです。我々の協会の会員は沢山おりますが、中には会費を納めない者もおります。現在の私は、この地方の県人を始めとする日系人の実態調査をして、自分の人生の締めくくりにもう少しお役に立ちたい、と考えています。

司会 今まで調査した家族は、どれくらいになりますか。

知花 各区でやっています。区によっては200家族とか、300家族とかいろいろありますので、集計してみなければ、申し上げられません。

司会 いつごろでき上がりますか。

知花 99年3月あたりを一応のメドにしています。区長が忘れたら、私が歩いていって、集めてくるようにしています。

司会 山里さんのご記憶に残っているご両親の教訓やらお言葉を聞かせてください。

人間は正直に生きることが一番
優しい言葉遣いで子育てを

山里 父は、48歳で病死し、当時私は13歳で、中学の予科（アジミツソン）に通っていました、父の言葉で別に記憶に残っているものはありません。

父の亡き後、母が女手一つで懸命に働いて、私たち6人の子どもを育てました。母は、カマラーダ（労働者）を使って農業をしました。私も学校を辞めて、カロツサ（馬車）に野菜を積んで、町へ売りに行きました。母を助けて、一生懸命働きました。私たちはただ、黙々と働く母親の背中を見ながら育ったようなものです。母は、92歳で亡くなりました。働き詰めの一生でしたが、県人の数多くいらっしやるこの土地で暮らしてきて、きつと幸せだっただろうと、思います。ここにいらっしやる具志堅会長には、大変お世話になっております。母のために、非常に盛大なフェスタをしていただき、心から喜んでいました。

司会 移民であるお父さんのことを、何か憶えていらっしやいますか。

山里 父は、農業をしていて農産物を出荷していましたが、ト

ルコ人の仲買いがいてその人を通して商売をしていたものですから、いつも安く買い叩かれていました。そこで、日本人のために何とか農業協同組合を組織しようとして頑張った一人でした。「おう」は「おう」として立派な一生だったが、病気には勝てませんでした。特別に父の遺した「ゆしぐと」は、ありません。しかし、父が考えていた協同組合が出来てから、随分と日本人の生活もよくなったように思います。あの頃の組合の建物が古い姿のまま、父の「ゆしぐと」の如く今でも残っております。

「人間、正直に生きることが一番大切だよ」と、語りかけてくる父の声が聞こえてくるような気がします。

司会 我が沖縄県人の先人達のお言葉には、いつになっても変わらぬ真実味があつて、私など若輩者の腹にズシンとこたえます。おたがいこれから充分に自戒していききたいと思います。

ところで、同じ事を具志堅会長にもお伺いしたいと存じます。

具志堅 母は、「たとえ自分の子供ではあっても、その人格を十分に尊重して、他人に尽くすような礼儀を以って子どもに接し、優しい言葉づかいをして育てなさい」と、口癖のように言っていました。「荒っぽい言葉は使いなさんな」と、いつも戒めていました。

司会 カンポ・グランデ沖縄県人会の現役員の顔触れを見ても二、三世の若い世代の力強い台頭を感じさせます。第2副会長の大城マリオさん、第1書記の前田オスカルさんなど、いずれもこれからを大いに嘱望されるニュー・リーダーです。そのオスカルさんに対してですが、一世のお母さんから聞いたお言葉の中で、何か忘れられないものがありますか。

前田 やはり、私の母も「他人との和を保ちながら、身を修めなさい」と、たえず教えていました。父眞栄田義人は既に死亡し、母カメだけが元気です。今年85歳になります。

この懇談会に出席していただいた4人の方々のように、一つの会がうまく運営されていくためには、必ず滅私奉公の精神を持って尽くしてくれるような有志たちが、何人かはいなければならぬ。しかし、役員として生身の人間だから、たまには「休みたい」、「休ませてほしい」と、思うこともあるはずである。

司会 右を見ても、左を見ても、こんなにウチナンチュの多い、文字通り移民の故里みたいな所で生活してきて、いろいろ悲喜交々としたこともあったと思いますが、知花さん、これまで一番嬉しかったことや楽しかったことは、何ですか。

知花 私の次男は、リオのペトロブラスに勤務していますが、正月休みにここへ帰ってきた時に、開口一番「お父さん、現金がよろしいですか、あるいは、車の方がよろしいですか」と言われたことが、実際に何を貰うよりも、齡取った私には嬉しかったです。親というものは、子供のちよつとした言葉づかいで喜ぶものなのです。

反対に今まで一番悲しかったことやつらかったことは、自分の子供の中に3人も医者がいるのに、妻のウシにほとんど何一つ看病らしい看病もしてやれずに死なせて、あの世へやってしまったことです。

山里 私はこの沖縄県人の移民の故里でいつも楽しく暮らしております。毎日、淡々と心静かに暮らしていますから夜、都会に住む人のように心配で眠れないということもありません。

司会 具志堅会長には、カンポ・グランデ沖縄県人会のトップという公人としての多忙な生活の他に、琉球古典音楽の指導者というもう一つの生き方もありますが、そういった中での喜びや悲しみといったものについて、お伺いしたいと存じます。

姉妹州県調印式当日に母危篤の電報

具志堅 私は、来伯40年になります。嬉しかったことといえば、諸先輩方に助けていただき、可愛がってもらって、ここまで来ることができ、私の今日があるということです。私は、本職の豆腐製造の他に、琉球音楽（三味線）を教えています。自分のお弟子さんが資格試験に合格した時には本人の努力が認められ、その苦労が報われたということで、自分のことのように嬉しくなり、感激ひとしおといった気持ちになります。その逆に、なかなか他人には語れないような深い悲しみといったものもあります。

司会 人の上に立つ者の宿命みたいなものです。ね、きっと。

具志堅 それは、1986年に沖縄県とマツトグロツソ州が姉妹提携をし、ちょうど州知事以下の関係者のお供をして訪沖した時のことです。沖縄に着いた時は、母も元気な姿で出迎えてくれ、知事夫人にも親しく話をしてもらったりしておりました。ところが、いざ姉妹提携の調印式に向かうバスに皆と一緒に乗ろうとしたら、ちょうどその時、電話が入り母の危篤の報に接しました。誰にも事情を話すこともできず、ただ一人茫然としていたのでしょう。係りの人がどうかしましたかと聞きに來ましたので、やっと母の危篤のことを話したら、昼食の時に政府の車を出してください、何とか母を一目見ることが出来ました。しかし、一目見てすぐに任務に引き返さなければなりません。そのことが今でも私の人生の中で最も悲しい思い出として残り、また人の命のはかなさをつくづくと思ひ知らされました。母は数年前に沖縄へ里帰りして、そのまま親戚のうちでお世話になり、私と一緒にまたブラジルへ戻るつもりで、私の訪日を待っていました。

司会 地球の反対側のブラジルから遠い沖縄までやってきて、

ひたすら自分の使命を果たそうとする我が子の公人としての立場を、亡くなったお母さんも必ず判って下さり、かえって「申し訳なかったね」と、おっしゃったに違いありませんよ。このカンポ・グランデという沖縄県人の移民の故里で亡くなったさっきの山里さんのお母さんも、そして只今の具志堅会長のお母さんも、ウチナーンチュの心根のしつかりしたアンマー達なら、等しく我が子の晴れ姿や立身出世を喜んでくださるような気持ちを抱いている、と私は信じて疑いません。多彩なウチナーチュの移民史を陰から目立たずにしつかり支えてきたのが、沖縄出身のこのアンマーたちなのです。しかし、それにしても実に良いお話でしたね。ありがとうございました。

カンポ・グランデ市には、2泊3日の短い滞在であったが、一夜、或る親睦団体の招きを受けて、非常に心のこもった、熱烈的な歓迎をしていただいた。沖縄県人よりもウチナーンチュらしい温かさとしんぱチアを併せ持ったある他府県人の方の経営するレストランで催された歓迎会に出席してみると、メーザ一杯に並べられた各種のご馳走もさることながら、南マツト・グロッソ州国立大学で土木工学を教えているという県人二世の比嘉アルシーデス教授が片手に三味線を、顔にはいつもニコニコと笑みを絶やさずに、琉球民謡を自ら歌ったり、あるいは進んで伴奏を買って出ることが出来た。伝統文化を大切に守っている民族は、なかなか亡びないという定説が現在でも通用するとしたら、このウチナーンチュの、移民の故里の足腰は、考えていた以上にしつかりしているという思いを禁じ得なかった。

司会　我が沖縄県人は、昔から至って開放的であり誰とでもす

ぐ仲良くなるので、と申しますと付和雷同性に走りがちだと、批判されることもありましたが、私はそれが決して日和見主義などではなくて、祖先代々から争いごととか諍いを好まず、つとめて平和を追い求めようとするあの有名な「イチャリバチョウデー」精神の発露ではないか、と考えております。この「イチャリバチョウデー」精神は、ブラジルで生を受けた県人子弟にも立派に引き継がれているような気がします。我が県人の心と血の中に溶け込んで来た「イチャリバチョウデー」精神の波長とブラジルの「アミーゴ」精神の波長とがいみじくもうまく重なり合い、相乗効果を出し県人子弟は、より水を得た魚のようにこの国で活躍でき、大きな花を咲かせつつあると言えそうです。何よりも、ウチナーンチュにブラジルの水がことのほかよく合った、ということでしょう。特にカンポ・グランデ市に来ますと、噂にたがわず県人子弟の幅広い活躍振りが目立ちます。そういった中での県人の誇り、といったものについてお伺いしたい。

知花　まずウチナーンチュは、県人会だけに入会せず、広く日本人会（文協）にも入って、和を保ちながら皆で協力し合い、政界にもっと日系の優秀な人材を送って、コロニアの発展に寄与してくれることを、一番の誇りとしたい。それと私の長女は、他の兄弟たちに対して「パパイの言うことは、まずいつも正しい。パパイの言う通りに行動しなさい」と言い聞かせています。それは大学を出て、ドクトールになった子供たちから全幅の信頼を一世の親が受けている証拠であり、たとえ古い奴だ、とか、何とかいわれなくても、一世移民の倫理観に基づいて今まで行動してきたお陰であり、それは、間違っていないかったと考えています。

先祖を守り伝統文化を継承する誇り

山里 我々がガイジンと違う点は、こうしてたとえ外国に住んでいても、仏教の教えをちゃんと受け継ぎ、先祖や親の仏壇を大切にしていることで我々の先輩たちが、一生懸命に沖縄の伝統文化を守り沖縄系ブラジル人にも教えていること、歌、三味線、琴、琉球舞踊、琉球民謡など出来るだけ自分たちの子弟へ受け継がせようとしていること、併せて俳句なども盛んであること、子供たちも白米とか、漬物とか味噌汁などを揃っておいしく食べていること、これらの生活文化、習慣といったものがここカンポ・グラндеにはちゃんと根付いたことを誇りに思います。

具志堅 南マツト・グロッソ州連邦総合大学の学生は、11%が県人子弟であり、教授陣も18人くらいがやはり県人子弟によつて占められています。山里さんのお話しにもありましたとおり、我々の子孫が沖縄の伝統文化を見事に継承し、上手にこなしていること、当県人会でも約40人の二、三、四世が喜んで日本語を勉強していること、などを大変誇りに思います。また、毎週水曜と土曜の2回、夕方から翌朝まで沖縄ソバ専門の屋台が30近くもフェイラに並び、殆どブラジル人のお客さん達が肩を並べておいしそうに食べております。そういった風に、沖縄の生活文化がこの地に渾然一体となつて溶け込んでいく様子を大変嬉しく好ましく見ております。

前田 沖縄県人の子弟として私が誇りに思うことは、我が県人は人間性が豊かであり、とても社会性に富んでいることです。人間が温和で、喧嘩になることを好まない点が最もよい、と考えています。

カンポ・グランデという沖縄県人の移民の故里がまだ活力を失っていない反面、一つの大きな曲がり角みたいな所へ来ていることも、滞在中、何度か耳にした。しかし、これは移民のどこの

集団地でも今迄通つて来た紆余曲折の道であり、これからもきつ
といろいろな試行錯誤を繰り返していくことだろう。前にも既に
述べた通り、そういったいくつかの変遷を乗り越えて行つてこそ、
この移民の故里の永続的な発展もまた期待出来る筈である。その
ためにこそ、一、二、三世を問わず、県人関係の各団体が英知を
集めて真剣に検討し、対策する時期が確実にやってきている。

司会 カンポ・グランデという沖縄県人の移民の故里が、今後
一層発展していくために何をしなければならないか、特に若い世
代の耳に痛いことも、この際お聞かせ願いたい。

知花 県人会活動にもっと積極的に参加すべきだ、と思います。
田舎の人は金儲けに専念し、町の人は子供たちに教育を受けさせ
ました。どの家にも今ではドートル連中がおりますが、団結力に
乏しくたとえば政界に有能な人材を送り出せないままでいるのが
現状です。皆で力を合わせて、もっともつと政府内の大事な仕事
に我々の子弟を就かせるようにしようではありませんか。また、
一世には譲り合う気持ちが足りない。欠点があれば皆で話し合え
ばよいのに、陰で批判ばかりしています。それでは一つの会の発
展にはつながりません。その点、当地に住む勝連ひろしさんなど
は、いうべきことを皆の前で堂々と言つてのける。そして、皆で
反省もする。非常に良いことだ、と私は、思います。

政官界へもっと出て活躍せよ

山里 若い世代には、もっと政界に進出していただきたい。政
治は、即国民の生活につながるもので、政治家が皆泥棒という教え
方は間違っています。その証拠に何か問題があれば、すぐ政治家
の所へ走るし、その協力がないと、なかなか問題の解決が出来ま

せん。カンポ・グランデ市には、選挙権を持っている人が8,000人内外はいるでしょうから、3人位の市、州議員は、日系から出せるはずです。

カンポ・グランデ沖縄県人会は、その名が示す通り、サンパウロの県人会本部から独立しても充分にやって行けるほどの組織の規模と実力を兼ね備えている。事実、カンポ・グランデ沖縄県人会は、県人会の支部としての機能も果たしながら、母県とは独自の交流事業を行い、内外からかなり注目されている。そういった状況の中で、ブラジル沖縄県人会本部に対して、どんなことを要望したいのか、最後にその辺のことも併せて忌憚なく語ってもらうことにした。

具志堅 当沖縄県人会も4、5年前にいったん二世に役職を譲りましたが文化、物の考え方の相違からいろいろと不都合なことが起こり、また、私をはじめ一世に再度役員が回ってきました。母県沖縄との交流事業が目玉の一つでありますので、日本の文化などを理解してもらわないと、会長職は容易に勤まりません。ただ、学歴があるというだけで会長になっても、うまく行くものではありません。10年程度一世と共に実際に会を運営してみて、苦労なり経験などを積んでおいてから会長職に就けば、うまく行くのではないのでしょうか。このカンポ・グランデでは、85年の歴史を有していて、戦後移民よりは二世の方がずっと先輩です。母県沖縄との交流を通して日本に広く関心を持っていたきたい。

前田 一つの会が発展していくには、まず、会員が必要です。魅力ある会、行きやすい会、友達が出来やすい会、頼りになる会になるような組織造りをすれば、二、三世の会員も増えて組織そのものも少しは活性化してくるのではないかと考えます。

山里 たたとえば日本語の教育面での教授法などに対するアドバイスを本部がもつと積極的にやつてもらえたら大変にありがたい。具志堅 県人会本部と支部会役員間の交流を更に前向きに頻繁にやつてもらうように希望したい。

② 若きニューリーダーの意見

未曾有の鉄の暴風に見舞われ、第二次大戦で見ても無残に廃虚と化した郷土沖縄が、再建に至るまでには長い苦難の道程があった。その間、沖縄が“本土並み”になり“一体化”するための目安として、県出身の国務大臣が誕生すること、県内の高校が甲子園での野球大会に優勝することである、などと冗談半分に言われてきた。

大臣はとくに誕生したし、甲子園の夢も99年春の選抜野球で沖縄尚学高校がやっと実現してくれた。かてて加えて、2000年の日本サミットが名護市で開催されると、沖縄は“本土並み”どころか、ある意味で、他府県を大きく凌駕することも考えられる。

ウチナーンチュの移民の故里であるカンポ・グランデ市には、沖縄県人会の他にカンポ・グランデ市文化体育協会(日本人会)なる組織が存在していて、その会長も県人二世の比嘉ボニファシオ氏であり、日夜、他府県人との“一体化”と融和を模索し、また、それに向かって努力しているとのことであった。優秀な弁護士である比嘉会長とポルトガル語による次のような単独インタビューを試みた。【赤嶺尚由】

——カンポ・グランデ市に來てみると、沖縄県人の子弟の素晴らしい活躍振りに、今更のように驚かされます。カンポ・グランデ市文化体育協会という言わば連合日本人会みたいな性格を有する組織の頂点に立って、沖縄県人にとどまらず広く日系人全体の“一体化”と親睦のために、いつも汗をかいていらっしやるのが比嘉ボニファシオ会長です。まず、日系人としての比嘉会長の「誇り」といったものからお伺いしたい。

学問は力、高学歴は一番の誇り

比嘉 私たちの親は、二、三世の子供たちの教育に、沢山のものを投資してくれました。たとえば、この町の沖縄県人の家庭で、大学を卒業していないものは、ほとんどいません。一人位は、必ず大学卒がいます。それを一番の誇りにしています。カンポ・グランデ市周辺に住む県人は、その子弟の多くに、医学を専攻させました。それは1979年に南マツト・グロツソ国立総合大学が出来て、ここでも医学を専攻できるようになったためです。それ以前は、医学の道に進むにはリオカサンパウロ、あるいはパラナあたりに行かなければなりませんでした。私たちが子供の頃は、日系人としてまだ肩身の狭い思いをしました。カブラ（山羊）だ、とかジャポネスだ、とか呼ばれて、随分嫌がらせを受けたものでした。いわゆる「カーラ・ノン・アジューダ」（日本人の顔は役立たない）といった悲哀をかこっていました。しかし、自分達が大学へ行き成長するにつれて一目も二目も置かれるようになり、ドートル（先生）と呼ばれるようになりました。実力社会ですから、力を付けなければバカにされます。

——会の性格からして日系人の動静には、何時も注意してい

らっしやると思います。この町は比較的豊かに見えますが、90年に及ぶ移民の歴史が過ぎた今、沖縄県系人で日々の生活に困っている人は、いませんか。

比嘉 ウチナンチュでは知りませんが、日系人では一家族だけいました。主人が日本へ出稼ぎに行つて、生活に困つてしていると聞いて、訪ねて行つてみたら、ブラジルのイグレージャ(教会)の援助を受けていました。食料品を持っていきましたが、教会のその後の世話でもう自立できるようになったと思われます。知花(幸信)さんなら、この町の隅々まで知つていらっしやいますので、ご存知かもしれませんが、私は、日々の生活にそんなに困窮しているという人の存在は知りません。

社会援助は今後の課題

—— 会長として今すぐにやるべきことは何だと考えていますか。

比嘉 会長としてやるべきことは、沢山あります。まず資金を早く集めて、会が所有している運動場の塀を作らなければ、このようなご時世ですからちよつとでも油断していますと、すぐに不法侵入者が入ってきます。こういうことがありました。ある日曜日の午後でしたが、300人位の不法侵入者が我々の運動場に入ってきて、居座つてしまい、非常にてこずり、逆怨みを受けたことがあります。ここの判事に話しましたら、それは双方の言い分を聞かなければ、何も手は打てない、と相手にしてもらえませんでした。そこで話を市長の方へ持つていったら、当時の日本人会の会長も市長もお医者さんで友人同士でしたので、ただちに解決に乗り出してくれました。9月7日の独立記念日の国祭日の朝、不法侵入者が少ない時期を見計らつて急襲し、無事に取り戻すこ

とが出来ました。

—— 会としてたとえば、身体の不自由な日系人へ何らかの援護活動をしていますか。

比嘉 会としてはまだ、何もやっていませんが、APAE（身体障害者援護協会）という団体があるので、そこでいろいろとやってくれています。ただ、この町にはサンパウロの子供の園に協力している人もいます。困っている人たちへの援助は、今後の当会の課題として、ぜひ実現に向け積極的に検討していきたい。糖尿病のため目の不自由な日系のご婦人も当会のカラオケ大会によく参加したりしていますが、その他に日系の方で、目が不自由な方に出会ったことは、この町ではありません。

—— 当地の沖縄県人を含む日系人を幅広くまとめる連合日本人会の総責任者として、サンパウロにある沖縄県人会本部、及びコロナの各団体に対して何かご要望がありましたら、どうぞ、お願いします。

比嘉 別に要望ではありませんが、私は日系人がおたがいもつと強く団結すべきだ、と考えます。二、三世の子供たちは、揃って学問を受け、立派なブラジル人に成長することが出来ました。これからは、皆が協力し合い、それぞれが所属する会を活性化し、盛り上げ、より良く住み易い地域社会を築いていくようにすべきです。地球が各種の情報でまたたく間に、一つに結ばれるというグローバル化の時代には、なかなか人間のあたたか味に触れ、それを知ることが出来ません。人間はもちろんのこと、一人で生きていくことはできず、他人と和して初めて幸せを味わうことが出来ます。今は、たとえ家から一步も外へ出なくても、コンピュータなどでもって外の様子をいち早くうかがい知ることができ、つい出不精になり、一人とじこもりがちになりますが、私の子供の頃には、もつと他人と和し、団結していたように記憶し

ています。

—— 皆が成長して大人になり、特に非日系人と結婚するようになる、他人と和して団結することを排斥しているような傾向はありませんか。

東洋文化、先祖ルーツを忘れるな

比嘉 そのようなことはまずない、と思います。それは、まあ個人の自由です。しかし、結婚についての私個人の考えを言わせていただくならば、日系人はやはり日系人同士結ばれた方がよいし、より幸せになれるような気がします。私の子供は今年25歳になり、三世ですが、日本の文化や習慣は、ほとんど何も知らないのに、非日系人と結婚するとなると、いろいろと障害が多過ぎ幸せになる確率が低いのではないかと考えている様子です。どうせ短い人生ですから、それを大切にして幸福に過ごさないと、もったいないことです。私の考え方が決して間違っていない、とは言えませんが、少なくともそういう風に考えていることは、確かです。非日系人と結婚しますと、東洋的な文化をほとんど忘れ、西洋化してしまいます。私たちの先祖が残した大切なもの、素晴らしいものを学んで、人生を有意義に過ごすことです。すべてブラジル化しては、自分たちのライーゼス（ルーツ＝根）を忘れてしまうことになりかねません。

—— 弁護士として活躍していらっしゃる二世のドツール比嘉には、先祖代々の仏壇は、ありますか。先人たちの気懸かりのひとは、移住した先で仏壇がどうなっていくかということですか。

比嘉 仏壇という文化は、何千年という長い時を経て今日に残っています。今こうして私たちが幸せでいられるのも、それはほとんどが先祖の苦勞のたまもの、といえます。私は四男ですか

ら自分の家に仏壇はありませんが、絶やしていけないものであることは、強く肝に銘じているつもりです。沖縄県人の仏壇は、畏敬のシンボル（象徴）であり、一族の和と繁栄のシンボルでもあります。先祖への感謝のしるしですからないがしろにしたり、軽く扱ってはなりません。

我々の先人たちが残してくれた立派な文化の一つに違いない、と確信しています。

—— ドトール比嘉はじめカンポ・グランデの県人子弟の多くは、一人の人間としてまず何よりも先に自分が踏むべき道や生き方を心得ていらつしやるように見受けられました。一世移民が遺した無形の財産であり、こういった物の考え方をする若き世代が続く限り、カンポ・グランデ市の周辺に形成された沖縄県人の移民の故里の今後にも、尚太鼓判が押せるのではないかと思います。また、何時の日にか当地を訪れる楽しみが一つ増えました。

③移民の故里に生きる先駆者たち

カンポ・グランデ市には、移民の故里の歴史と共に生きてきた、一世の親たちがまだ数多く健在であった。「元気な頃は、あんなにゴーグチャー（強口者）で、日々の仕事にも口うるさく非常に厳しかった夫が、齢老いて病床に臥したらとても優しくなり、特に亡くなる直前には心細さのせいか、夜寝ている時でも私のこの手を求め、探り当ててからやつと寝息を立てるようになりました」と、そつと目頭を押さえる金城文子さんは、文字どおり筆舌に尽くしがたい、ありとあらゆる移民の苦労を味わってきた人である。かと思えば戦前、沖縄名護市にあって皇族が宿泊するほどの有名な観光指定ホテルの次女として裕福に育てられ、カンポ・グランデに嫁ぎ、移民の妻になってからも「手広く事業を営んでいた夫

のお陰で、異郷での苦労を何一つ味わうことなく、これまで楽しく生きてくることができました」と、午後の陽射しの中で明るく笑う大城カメさんは、恵まれた希有の人である。

また、若い頃、ふとした出来ごころから好きな博打の世界に溺れながらも、大切な妻や子の顔を思い浮かべ一念發起して再起を図り、「山と積もる借金をぶじ返済しました」と、75歳になった今でもはにかむ新里三郎さん。さらにこの移民の故里で野村流古典音楽を趣味として、「めでたい時にはもちろん、かぎやで風節、何か心淋しい時には、仲間節を歌いますよ」と、蘊蓄(うんちく)をかたむける仲尾福寿さんなど、それぞれに辿ってきた移民の旅路を振り返っていた。【1999年2月26日、インタビュー・赤嶺園子】

金城 文子さん 85歳

豊見城村真玉橋出身

私は貧困な家庭に生まれ、生活苦からブラジルの金城三郎のもとへ嫁にやられました。沖縄を発ちカンポ・グランデの夫のもとへ嫁いだのが20歳の時でした。着伯間もないある日、灼熱の太陽のもと仕事に勤しむ夫を見て、生活の足しになればと思い、庭のマンゴーを採って町へ売りに行きました。晴天の日は暑さに加され、雨の日はまだ道路が舗装されてなく泥濘に足を取られ滑ったり転んだり、捲り上げたスカートの裾を左手に持ち、右手は頭に乗せた商品のマンゴーをしっかりと握って町まで行つたものです。商売初日は皆目言葉が理解できずに、惨澹たる商いとなりました。夫に「ノン・ケーロ・コンプラル・マンガ?」(マンガはいりませんか)を教えてもらつて出掛けました。商いは私が思案していたよりも楽でした。

ブラジル人はとても寛容なので、言葉のわからない私に「あなたは、ジャポン・ノーボ（新来日本人）だね」といつて自分で御負けを入れ、代金を払って買ってくれました。ここでの生活は人種を越え、言語を越え、萎縮することなく暮らせたのは、有り難いことでした。当時の心境を回顧するに、無我夢中だったこと、早く同化し自立をモットーにしていたこと、他人に迷惑をかけずに夫と二人で新家庭を築きたい、という意気込みというか、願望が強かったのでしょう。私の内職は、庭からもぎ取る果物に原価がなく、売るだけ儲けになるので、小遣い稼ぎの楽な商いだったといえます。売り上げでその日の惣菜の材料を買い、心弾ませながら家路へ急いだ昔が懐かしく思い出されます。渋柿も渋をぬいて売りに行きました。新来者の私への肉体的な“洗礼”は、モスキットの襲撃でした。刺されると疥癬（かいせん）をかき夜ベツトに入って体が暖まると痒さで安眠を妨げ、搔けば瘡蓋になり痛痒いのに閉口しました。

人生の構図の中には紆余曲折はつきものです。

また、どのような豊かさや貧しさの中にも、喜怒哀楽はあるものです。私が自殺寸前にまで追い込まれた事件は娘の死でした。娘はガイジンと結ばれ世間の口の端にのぼるようになりました。母親として肩身の狭い思いをしたことは、いうまでもありません。そんな矢先、娘は親戚の告別式に参列したのですが、9カ月の身重な体で小型トラックから降りようとしたはずみに、転げ落ちて打ち所が悪かったせい、か、帰らぬ人になりました。昔、沖繩にいた古老たちが豆一粒でもこめかみなどの急所に当たれば人間の命は儚いものだ、と言っていたことを思い出させるような夭折でした。世間は、娘をあやめたのは私だ、と囁きあいました。断腸の

思いに耐え、無念さや惨めさに苛まれ、身も世もない状態でした。世間ではガイジン妻だと陰口を言い、後ろ指をさそうとも私にとつては、愛しい子供であり孫なのです。私が2人を呪い殺すような恐ろしく、忌まわしいことがどうして出来るはずがありません。浅学の私は非難を受け悪口罵倒されても、異人種と同じ人間だ、と開き直る勇氣と世間を納得させる説得力はありませんでした。矢面に立たされ呻吟し、娘の後を追おうかと思った日々が続きました。

思い余つ昵懇にしていた具志堅ウトさん（現カンポ・グランデ沖縄県人会具志堅弘会長の母堂）に「ウトウお母、私は死んで詫びたい」と相談を持ち掛けると「あなたが身を殺めたら、残されたもう一人の孫はどうなるの、死ぬのは賢明な手段ではない、混血の孫を立派に成人させることこそ、他界した娘の願いではないか」と諫められ思い止まりました。人間は食に窮してなら昂然と胸を張ることが出来ても、心の痛みには脆弱な者です。

悲しみも苦しみも、時とともに癒されるとよく言われますが、ふみ子さんの場合も例外ではなかったようです。つらい移民の体験を強いられたいくつかの事件から幾星霜、今ではすっかり落ち着いて安らいだ表情を浮かべることが出来るようになった昨今です。このインタビューに一緒についてきて下さった具志堅弘会長は、当地に来了頃、金城さん一家のすぐ前に住んでいて最初に農業に従事、それから養鶏をやっていたが、「今は亡き夫の三郎さんと妻の文子さんに、自分たちの方こそ大変お世話になりました」と、今更ながらのように感謝の念をこめて語って下さいました。

文子さんは着伯当時の追想を「ここでの食生活にはさほどの抵抗もなく、何でもおいしくいただけました。アシティビチにする

材料が安価で豊富、肉も安く、鶏は庭で、野菜や果物は畑に行けば新鮮なものが必要なだけありました。

ここでなら子供を何人生んでも育てられる、と安堵したものです。夫と私は、17歳の年齢差があります。夫を恃（たの）み、子供を頼るのが女の性なのでしょうか。その頼りにしていた夫がリュウマテを患ってから、子供たちと協力して生計を立てるようになりました。今では子供たちも成長し、孫や曾孫にも恵まれ、心静かに過ごす老後です。辛酸を嘗め雨に打たれ、嵐にあい、汗をかき、登り坂の多かった人生ですが、それを克服し細い腕でつかんだささやかな幸福、今はブラジルに移り来て良かった、と思っています。教会には沖縄からシスターがいらして土曜日の集会は日本語でミサをして下さいます。皆と仲睦まじく過ごせるひと時を楽しんでいます。私の夫は若いころはとてもゴーグチャ（愚痴っぽい）でしたが、齡取ってからは大変優しくなり、特に死ぬ直前には夜寝ている時でも私の手を求め、温もりを確かめなければ寝入ることが出来ませんでした。夫にも大変可愛がられ、労られ、女として幸福でした」と語る文子さん、人生を楽しんでいる清々しいお顔でした。

〔取材者から一筆啓上〕

過ぎ去った遠い日々のことを懐かしむように、ゆつくり語る文子さんのお姿を拝見し「子養わんと欲すれど、親またず」の諺を思い出し、ご健在でいらつしやる親の恩にまだ報いられる娘のテレザさんを羨ましく思いました。「私産（ワンナ）チェル親や私ド日当テ」と、頼って下さる親、側に居てくれるだけで仕事にも張り合いが出てくる有り難い存在である親、年老いた母の杖ともなれば、この上ない果報と言えましょう。「どうぞお母さんを大事にしてください」と、祈る気持ちで金城家を後にしました。

大城 カメさん 96歳

名護市出身

移民といえばまず、脳裏に浮かぶのは哀れさや苦労や貧困など暗いマイナスのイメージしか浮かばないのに、大城カメさんの話を伺っていて「珠玉の瓦礫に在るが如し」という感を禁じえないでいます。人は生を受ける時も、ある人は貧乏な家に、またある人は裕福な家庭にと、出発点を異にしています。神様は何故人間を公平にして下さらないのでしょうか。神よ「私はこの身の力を試さん」と自ら望んでマイナスの籤を引くのだ、としか思えないのが人生です。

大城さんに接しお話を伺っていますと、とても96歳のご高齢とは思えません。何と若々しく矍鑠（かくしゃく）としていらつしやることでしょうか。茶菓の接待を受けながら人間味あふれるご温顔に接し「柔より剛を制し、弱より強を制す」とはこのような方を言うのだと納得しました。「則天去私」へ至る道程、実に見事に齢を重ねていらつしやいます。

1926年（大正15年、昭和元年）夫の呼び寄せで渡伯、2歳の花嫁でした。名護の観光指定ホテルの厚養館を経営する岸本兼吉、カナの次女として恵まれた家庭に育ち、嫁いでも夫の庇護の下、裕福な環境で生活には何不自由なく過ごすことが出来ました。青雲の志を持ってブラジルに来たにもかかわらず苦勞し、挫折感を味わい自暴自棄になる人もいましたが、夫武盛は先見の明があつたのでしよう、商売をしていましたが、お蔭様で繁盛しました。地域社会にも貢献し、故郷に錦を飾った1人だと言えるかと思います。人情があり子煩悩で私を幸せにするために呼

び寄せてくれた人です。ブラジルで幾多のハンディを克服しウチナーンチュ（沖繩県人）としての「チバラナヤ（気張ろう）」や日本人としての「誠」を信条とし、勤儉で奢侈をしない人でした。子供9人も授かり、孫26人曾孫23人と大家族になりました。夫には先立たれましたが、孤独な思いをすることなく、和氣藹々と過ごさせていただいています。娘の頃は親に仕え、結婚してから夫に添い、年老いてからは子供たちに靡（なび）き孫達に愛され親しまれ、勞られ安穩な日々を楽しんでいます。女は風に靡き雨に耐え、夫や子供に譲り和を志せば、平穩に過ごせます。夫に自分の意見や主張を聞き入れてもらうようにするのも女の賢明さであり、生きる術です。主人の協力があつたればこそ移民の旅路の悲哀や不安、辛さに身悶えすることもなく、天寿が全う出来ることを有り難く思います、と語って下さいました。

〔取材者から一筆啓上〕

嬉々としてお話をしてくださる大城カメさんをみて、人生とは過ぎ去り消え失せるものではなく、人間の心の中の金庫に蓄積されいづでも、どこでも、思い出として取り出し懐かしむことが出来るもの、それが人生ではないか、との感を強くしました。爛漫と咲き誇る花々に囲まれた豪邸、鮮やかさと芳香に心奪われ、私をしばし別世界に誘ってくれました。快適な生活環境、日本人の自然を愛でる心が子供たちを慈しみ、夫を愛し、夫に働く喜びを与えたのだと思います。斬新で賢明、この妻ありてこの夫あり、という感を強くしました。これからずっと健康で長生きするのだ、という前向きの姿勢がとりわけ老後には必要ではないでしょうか。それにしても今年96歳になる大城さんの元氣さに改めて敬服した次第です。

大里村出身

私は1941年、叔父の呼び寄せでカンポ・グランデに来ました。17歳でした。私は徴兵忌避移民、つまり親が戦争で死なせたくないからブラジルへ行きなさい、といってやられました。こちらでの仕事は日雇い労働者でした。言葉が分からずに困りましたが、それから野菜作りをしました。品物を市場へ持っていくのですが、需要と供給のアンバランスで、余りお金になりませんでしたが。人口も少なく、ブラジル人は肉食でしょう？野菜を食べるようになったのは、最近のことです。日本を発つ時は、ここに来れば濡れ手に粟だ、と錯覚していました。慙愧（ざんき）にたえない話ですが、私は「百年河清を俟（ま）つ」とも知らず、賭博に手を出しました。焦燥感から出たのだと思いますが、甘い汁を吸おうとする無鉄砲さが若さだったのかも知れません。

手と身だけになるといいますが、無一文になり、莫大な借金を抱え込みました。妻子には心配をかけ、世間からは蔑（さげす）まれました。借財を返済する当てはなし、子供たちを育てる力もなく、気が咎め自分に残された道は「死」以外にないとさえ思えました。しかし、自分の過失をどうして妻子に残して死ねましようか。他人に迷惑をかけるな、と教えてくれた親にあの世で合わせる顔がない、と奮起しました。「過ちては改むるに憚る事勿れ」といいますね。自分の失敗は自分で清算するしかないのです。そう決心するとあとは働くしかありません。

不眠不休、奮励努力をしました。当時の金で全額300コントス、今の金で50万ドルぐらいになります。七転八倒です。カンポ・グランデからクイアバーまで900キロの道程が有ります。当時は道路が舗装されてなかったので、22時間から30時間かかりました。トラック1台に8トンの青物、果実、キャベツ、ト

マト、玉ねぎ、ジャガ芋等を満載にして助手と2人で商いに行き、その値段は5倍から10倍になりました。自分で掘った負債の穴でしたが、埋めるのは楽ではありませんでした。徐々に埋まっていくなを見るにつけ、後一息だと自分を激励したものです。販売先は、主にホテルやスーパー、フェイラ（露天市場）でした。奢侈を慎み、家族に緊縮を強いり、清貧に甘んじ、一心不乱に働きました。借金は利子をつけて、全額返済しました。

人生急がば回れといいますが、貪欲になり、金に目が眩むと往々にして道を踏み外す危険性が生じてきます。高い償いをして得た貴重な教訓です。私を匡救（きょうきゆう）してくれたのは妻子でした。苦境に陥った時、胸襟を開いて話の出来る妻がいましました。心配してくれる愛し子たちがいてくれたことが、自殺を思い止まらせてくれました。私には過ぎた女房だ、と今でも感謝しています。涙を呑んで内職の洋裁をし、家計を支え、足りないところを補い庇ってくれた糟糠の妻です。子供たちにも頭が上がりません。

子供は男2人女2人の合計4人ですが、4人とも医者になってくれました。なんと有難いことでしょう。

ブラジルに移り来て良かったですね、といった質問に「来たことを後悔していませんが、良かったとも思いません。一世の世が終わると、漸次日本の習慣や伝統は消滅し、ブラジルに同化することでしょう。私はこの年になっても、いまだに故郷を忘れたことはありません。何時も夢に見るのは、我が懐かしい生まれ島、沖縄です」と、功成り名遂げても、まだ懐郷の思いを胸に秘めて語るところなどは、真に誇り高きウチナアンチュ（沖縄県人）であります。

〔取材者から一筆啓上〕

しつかりと大地を踏み、自分を見失うことなく、生きて来た1人の老移民、今人生を顧み感慨もひとしおではないか、と思われまます。

温厚篤実な人柄、私たち記念誌取材班を送る時の人生の爛熟期を謳歌していらっしゃる爽やかな笑顔、人間は過ちを冒す弱いもの、人間は理知と精神力とで非を改めることの出来る強いもの。「誠」は天の道、これを誠にするのは人の道、という言葉を思い出し「シタイサイ、チバイミソーチャンヤ、ミグト（気張りましたね、お見事です）」と、声援を送りながら敬愛の念を込めてお別れをしました。そして今は、穏やかな雰囲気をたたえた新垣さん夫婦のことがなかなか忘れられず、一昔前流行した演歌「夫婦春秋」の中の次のような一節「愚痴も涙もこぼさずに、貧乏オハコと笑った、そんな強気のお前が一度、やっとオイラに陽がさした、あの日涙をこぼしたなア、お前」が思い出され口遊みたくなるインタビューでした。

仲尾 福寿氏 93歳

名護市出身

1932年6月26日に26歳で来伯してジュキアへ行きました。10年間農業に専念、米作りをしました。ブラジルでの米作りは、山岳地帯での畑作です。厳しい現実をもとめせずに頑張りました。血気盛んな青年期、良く働きました。妻は一人で留守番をするのが恐いといって、どこへでもついてきました。精魂を込めて仕事に打ち込みましたが、利潤を上げることが出来ずにいきました。あの時の心境は「泣クガナシ、泣チン、聞ク人ヤ居ラン、

共ニ泣ク者ヤ山ノヒビキ」でした。家族で相談してカンポ・グラ
ンデの従兄弟を頼って1942年に移転しました。「親戚の泣き寄
り」といいますが、故郷を遠く離れ、身内の居ない旅の空、遠い
親戚でも慕わしいものです。また、「歲月流るる如し」といいます
が、あれから半世紀以上が過ぎ、8人の子宝に恵まれました。

日本から来て一番困ったことは、言葉の障害です。困惑しまし
た。生活はしなければなりません。対人関係を抜きにしては生活
できません。

人とつきあうには言葉が必要です。日本では言霊（ことだま）と
いいますが、言葉がわからなければ魂のぬけた人、白痴に映りま
す。自分がその境遇に置かれて始めて言葉の尊さ、重さを実感し
ました。学校へ行くゆとりがなく耳学問なので60年もこの国に
世話になっていますが、正しいブラジル語が話せません。残念に
思います。

昔は経済的に困窮していましたね。結婚式もお客さんに振る舞
う、ご馳走がなくてポン・ドーセ（甘味のパン）でおもてなしを
したものです。

日本の方々も敗戦で、大変ご苦勞をなさいました。しかし、今の
繁栄を見てください。日本人は偉い、本当に「日出ずる国の民」だ
と思います。私は日本人であることを誇りに、ウチナーンチュ（沖
縄県人）であることを幸に思います。

私はサンシン（三味線）が好きでね、苦しい時、辛い時、悲しい
時、嬉しい時、何時も傍らに三味線があり、それに支えられての
人生でした。琉歌は、人の心を余すところなく、謡っています。
たとえば羈旅歌（きりよか）・賀頌歌（かしようか）・恋歌・教訓
歌・カチャシーと三味線に乗せて奏でるメロディは、淋しさを慰

め、苦しみを癒し、生きる勇氣と希望を与えてくれます。「朝夕持ち遊ぶ三味線ノ歌声聞キバ浮世ノ辛サ忘リテ行チユサ」です。

私の趣味は古典です、とおっしゃる仲尾さんに好きな琉歌は？と尋ねると、即座にめでたい時の「かぎやで風」と心淋しい時の「仲間節」と、答えて下さいました。かぎやで風は、国王の頌歌、国の安寧や五穀豊穰を祈願したり、祝賀の場で歌われるめでたい歌です。歌の大意は「今日の誇らしさ（嬉しさ）を何に譬えようぞ、蒼んでいる花が露に逢ったようだ。大きな果報がつくように、今日も夢をみよう」。

仲間節は

「我が身を抓つてみて人の身の上ぞ知る。無理するな、浮世は情けばかり、思いごとがあつてもよそには語られぬ、面影とつれだつて忍んで拝む、宵も暁も馴れし面影の立たぬ日はない、塩屋の煙」と、インタービューの介添え役に付いて来て下さった具志堅弘会長にご説明いただきました。

諸行無常を歌った「コノ世ノ人ヤ水ノ泡ゴコロ消エテ跡ネラヌ夢ノ浮世」。

親を想う心を歌った「イチャシガナ（いかようにすれば）親ノ心ナグサミテ嬉シ顔、朝夕拝ミブサヌ」があります。

私は卒寿をすぎましたが「心アラタマノ年ヤ重ネテン肝カシヤ我肝イチン童」と好々爺で茶つめ気も充分にありました。

〔取材者から一筆啓上〕

仲尾さんは、1982年12月30日、野村流師範の資格を授かり、後進の育成に当たってきました。歌は時代をこえ人種をこえ、人の心を開き、温め、人生を鼓舞し、和を保つてくれます。このような立派な文化を後世に残さなければならぬことは言を待たないでしょう。

沖縄の誇りを持って民族の融和を図ってほしい、とおっしゃる仲尾さん。この人こそ移り住んだ新天地でも琉歌に恋し、夢と感動を求め、その喜びを他人と分かち合った人生だったに違いありません。その表情は、人生を達観した、実に清々しい微笑みでした。

仲宗根 源昌氏 86歳

羽地村真喜屋出身

私は15歳で移住し、3年間コーヒー園で無報酬の日々を送りました。汗と埃に塗れ日に焼け、雨に汁（かみあら）い風にくしけずる歳月でした。

故郷が恋しく遣る瀬無さと侘しさで、朝夕泣いてばかりいました。日本人の15歳は、体も成熟していませんし、精神的にも幼稚とどうか未熟です。皆と肩を並べて朝早くから夜遅くまで実に良く働きました。

そんなある日の午後4時ごろ雨になりました。

一同は雨宿りをしたのですが、私はてつきり今日一日の仕事が終わったものと勘違いをし、寛ぐために作業着を着替え悠然としていました。

夕方になって雨が止みました。そしたら、何と皆は再び、仕事に取り掛かったのです。あれには参りました。あの時は面目なく消え入りたいほど恥ずかしい思いをしました。親に勤勉であれ、正直であれと諭されていましたのに、誤解とはいえ世間を狭くしたような気がしました。

それからコーヒー園を出て1935年から41年まで源河幸助さんの精米所で働かせてもらいました。5年間、一生懸命に働き独立しました。1951年から79年まで精米所を経営し、一日

に150俵も米を捌きました。仕事は順調に軌道に乗り、充実した毎日でした。敗戦で焦土と化した沖縄県と羽地村真喜屋に救援金の協力が出来たことは、嬉しい思い出の一つです。ブラジルに来たからこそ出来た協力でした。

友をもち、いかに昵懇の仲であろうと、安請け合いをするものではありません。友人に金を貸し逃げられたり、裏切られたりするとこれまでの友の絆が切れ、親交を失い心に傷を負う羽目になりかねません。お金を貸す時は、返済してもらわなくてもやっていける金額を、保証人になる時はそれを払っても生活に支障を来たさない範囲で、という教訓を得ました。私は三度保証人になり、三度とも債務を履行させられました。無責任な行為、ひどい仕打ちだと、憤慨もしたくなります。なかなか機微をうがつことはできません。家族のことを思えば子供たちが不憫でなりませんでした。しかし「怒に難を思えば悔いに至らず、慾に義を思えば恥をとらず」といいます。沖縄の方言では「意地又出ジラ手引き、手又出ジラ意地引き（意地が出たら手を引きなさい、手が出たら意地を引きなさい）」といいます。堪忍するしかありませんでした。他人に欺かれたり、お金を滅ばされたりすることは、決して利口だとはいえません。しかし、相手も計画的に損害を与えようと意図した行為ではなかった筈です。むしろ、こちらより辛い思いをしていたのかもしれませんが。天はきつと見ていて下さいますよね。良いことも悪いことも。

次に精米所を共同経営しました。これも失敗しました。私は人が好きでね、すぐ信用してしまいます。今度も負債を背負いまし

た。その借金も自分で返済しました。私も年老いました。自分の人生は何だったんだろう。これで良かったのかな、借りてもない金を返し、妻子に辛い思いをさせ、馬鹿な人生だったのだろうかと思うこともあります。しかし、後悔はしていません。

その人たちとは今でもまだ付き合っていますから、と淡々と話して下さるお姿からは、恨みや愚痴は一言もありませんでした。

〔取材者から一筆啓上〕

ウチナンチュの言う共存共栄、寛容の思想を身をもって実行していらいしやる86歳の好々爺。いつも人を愛し、どのような仕打ちにも怒りや憤り、嘆きを頭にせず、あるがままに人間を見、人間性そのものを尊重する。決めつけを念頭に置かずに、人間性を模索する。

この人の心こそ「かたよらない心、こだわらない心、とらわれない心、広く、広く、もつと広く」の実行者なのだと頭が下がる思いがしました。5人のお子さんと5人のお孫さんに囲まれ、末永くお健やかで幸福な日々を、と念じながらお別れしました。

金城 平太氏 74歳

名護市出身

私は1941年2月24日移住、カンポ・グランデのナッタ・セローラに入植しました。日本人が最初にカンポ・グランデに来たのが1914年だといわれています。初期移民の26年後ということになります。両親と子供8人の3世代同居の大家族です。兄（長男）が3歳で他界したので、父母の面倒は、私が見ました。「親思う心にまさる親心」といいますが、良い親でした。心行くまで一緒に過ごせたことは、有り難いことでした。

私に全幅の信頼を置き、頼りにしてくれました。

その親の心に報いたく、力の限り孝を尽くしました。私以上に親孝行した人は、居ないのではないかとさえ自負しています。仏教という輪廻転生があるのならば、また来世も、あの両親の子供として生まれ、一緒に仲睦まじく楽しく暮らしたいものです。自分の親を養わずしていくら莫大な財産を貯え、大きな顔をして私は羨ましいとは思いません。親子というのは、不思議な縁で結ばれています。子供が出生すると喜びと可愛さの余り、日夜厭うことなく育児に勤しみます。着る物も、食べる物も、まず我が子に与えます。子供の笑顔が自分の幸福だ、といってくれる親、「這えば立て、立てば歩めの親心」といいます。愛し子の成長を楽しみに、どのような艱難辛苦にも耐えて子供を育ててくれる親、何と有り難い存在でしょう。いや、今生だけではありません。黄泉の国へ旅立つてからも私たちを見守ってくれる親、その恩に報わずして人の道があるでしょうか。

夫婦の仲も不思議なものです。子供といえども入り込む隙のない、固い絆で結ばれています。

私の妻は良く姑に仕え、私を助け子供たちを育んでくれました。大家族ですから男の私にはわからない人間関係の軋轢や腹立たしさや遣る瀬無さなどいろいろあったことと思います。日本ではお母さんのことを「お袋さん」といいますが、憤りや不満、愚痴は全部自分の心の中の袋に仕舞い込み、憩える家庭環境づくりに没頭してくれたお袋さん（妻）にただ頭が下がります。

内助の功あったればこそその今日です。子供たちも親の愛情にこたえてくれました。医者2人、技師3人、経営学士1人と学問では親の手の届かない存在になりました。果報なことです。大学を卒業させるまでは、我が家の経済は、いつも火の車でした。日曜日

も休日も、祭日も返上して学費捻出のために働いたものです。

カンポ・グランデから50キロの地点にボン・フィンという所があります。そこで1940年から農業に携わってきました。42年に独立をして、専ら野菜栽培に勤しんできました。61年から90年まで、養鶏を業としこの分野では先鞭をつけた、といえます。鶏肉のお陰で成長盛りの子供達に栄養補充ができ、丈夫に育ってくれました。

ブラジルに来て嬉しかったことは、沢山あります。たとえば私が生活していた当時の日本は、65パーセントの重税に喘いでいました。こちらは茫洋とした大地、豊沃で恵まれた黄金の土地、農作業をし鶏や豚を飼い、土を愛し、何の束縛もうけずのびのびと自由に暮らせて無税、こんな良い国はないと思いました。移り来て6年目に自分の土地を購入し子供たちに心ゆくまで教育を受けさせられたことは、感謝にたえません。私は一介の水呑み百姓です。自分で言うのも何ですが、とても良い子供たちに恵まれたと思っています、と移り来たことをこの上なく悦んでいらつしやいました。

〔取材者から一筆啓上〕

金城さんは趣味としてペキー(P E Q U I)俳句会に入会していらつしやいます。会員は10数人に過ぎないメンバーですが、日本の伝統的な文芸でこの移民の故郷における老後を充分楽しませてもらっているという金城さんに自作の句2題をご紹介します。ただきました。

移り来てこの土地守り耕せり

夏めくや姥はしよりて庭を掃く

④ 姉妹州県南マット・グロッソと沖縄

南マット・グロッソ州は、1986年4月に、沖縄県と姉妹提携を結び、93年から技術研修員を毎年1人ずつ送り出してきた。また、99年になって、姉妹都市国際交流協会（具志堅弘会長）が窓口となり、沖縄側から最初の交換技術研修員として金城寛信（獣医・沖縄畜産試験場勤務）を受け入れ、6カ月間の研修を無事に終了し、同年3月26日に帰国した。そこで、以下は、金城元研修員に「移民の故郷見たまま、聞いたまま」を特別寄稿していただいた。【赤嶺尚由】

移民のふるさと見たまま聞いたまま

金城 寛信

移民90周年の年にブラジルで研修が出来、そして本記念誌に寄稿できることを光栄に思います。

私が何故、ブラジルで研修することになったかその経緯について申し上げたいと思います。

沖縄県は1986年4月22日にブラジル連邦共和国南マット・グロッソ州と姉妹提携を結び、1993年度より同州から技術研修員を毎年1人ずつ受け入れています。今回南マット・グロッソ州から技術研究生の受け入れの申し入れ（窓口は姉妹都市国際交流推進会具志堅弘会長）があり、沖縄県から派遣された次第です。

私は現在、沖縄畜産試験場で勤務しており、黒毛和種肉用牛の改良増殖に係る試験研究に取り組んでいます。研修先はカンポ・

グランデ市のブラジル農牧研究公社肉用牛研究センター(Centro Nacional de Pesquisa de Gado de Corte/Empresa Brasileira de Pecuária)で集約的な肉用牛の飼養管理と肉質の調査などを研究しました。研修は1998年10月から1999年3月までの6カ月間と短い期間でしたが、滞在期間中に感じたブラジルや沖縄県人会のことについて少し書きたいと思います。

ブラジルに派遣されるまで私は、ブラジルのことは全く無知でした。知っていることといえば南米最大の都市サンパウロ、情熱的なサンバリズムで踊るカーニバル、世界最大の流域面積を持つアマゾンのジャングル、移民の国、それにコーヒーとサッカーといった程度でした。

また、移民で知っていることと言えば1908年から、日本人がブラジルへ移民として行くようになったこと。その理由として当時の日本では、十分な収入を得られる仕事が少ないこと。そして日本人移民の多くが、まずコーヒー農園で働き、苦労してなかには成功して自営農民となった人々がいることぐらいしか知りませんでした。

ブラジルに来ての印象としてはとにかく日本から遠い国で、東京―ロスアンゼルス間よりロスアンゼルス―サンパウロ間が遠いことを初めて知りました。また、飛行機に乗ってはその広さを実感しませんでした。自動車で移動すると非常に広い国であることが実感できました。

海の如く広がる大豆畑や穀物畑、遙か彼方まで続く牧場、果物や野菜の種類の多さ、鉱物資源の豊かさなどを見るとブラジル国の秘めた力を感じました。

また、自然も人もおおらかで時間がゆっくり流れているような

感じを受けました。そして、ブラジル人の生活ぶりを見てみると人生の楽しみ方を知っている様にも思えました。そうしたブラジル国の中で沖縄県人は各種の職業で活躍しブラジル人から尊敬されているのを見ると移民としてきた先人や現在の人達の偉大さを感じました。

沖縄県人の素晴らしいところは働くことを美德とし自分達は苦勞しても子どもの教育に力を入れたことではないかと思っています。その努力と苦勞は現在二、三世の時代になり、都市で商業、工業を営む人や、技術者・学者・政治家になって活躍することにつながったのだらうと思います。ブラジルにおいて沖縄県人が真面目で勤勉でありそして正直であるといったこと等で評価が高いことに対して尊敬と誇りを感じます。

私の滞在していたカンポ・グランデ市は昔ボリビア移民の中継地点であり、沖縄県人がボリビア行き列車に乗っているという情報が入ると差し入れをしていたこと等を聞くと、同郷人に対する沖縄県人の心豊かさを感じます。また、カンポ・グランデ市は沖縄県人が活躍しそして作った街といわれています。そして、現在ではカンポ・グランデ市の市民なら誰でも沖縄ソバ、焼き飯、豆腐などを知っています。

しかし、今沖縄県人の活動は大きな曲がり角に来ている様な気がします。沖縄県人会に対する会員の考え方は彼らが受けた教育、育った家庭環境や社会環境によって変わるものと思います。県人会が活性化し今後とも更なる発展を遂げるには二世、三世の人達に自分のルーツである沖縄に興味を持たせることが必要ではないかと感じました。自分という存在のルーツが沖縄にあることを意識した時に、自ら日本語や琉球舞踊などに興味を持つのではないのでしょうか。

そのきっかけとして沖縄独自の文化や芸能をもっとアピールして

は如何でしょうか。また、世界ウチナンチュ大会に一世だけでなく二世三世の若い人達も沖縄を訪問することができれば、今後次世代の多数の人達が沖縄に興味を持つのではないのでしょうか。沖縄に興味と関心を持った人達が人的な交流のみならず文化、教育、経済活動などの交流を持つなら、益々県人会活動が盛んになると思います。そうするためには諸先輩方が後継者を育成することではないでしょうか。また、このような交流の手伝いが出来ればと思っています。

もし、移民100周年祭が盛大かつ成功裏に行われるとするならそれは、沖縄県人会の活動が次世代へ上手く引き継がれた証拠ではないかと思っています。

ブラジルの大地で沖縄県人子弟がますます繁栄して10年後20年後も沖縄県人会活動が継続されることを祈念申し上げます。

姉妹州県提携の経緯

1979年8月、沖縄県知事西銘順治がサンパウロを訪問した際、ブラジル連邦共和国下院議員野村丈吾からブラジル国との友好親善関係強化のための姉妹提携について提言がなされた。

これを受けて、在伯沖縄県人会会長屋比久孟清等が中心となって、姉妹提携先を検討した結果、県出身者が活躍している南マット・グロッソ州が、最もふさわしいということになった。

1979年11月、委員会を結成し州議員仲里オジロン他委員が、姉妹提携について州政府の意向を打診したところ、マルセロ・ミランダ州知事は、快くこれに賛同した。

1980年7月、沖縄県は知事公室次長、仲里全輝を派遣、南マット・グロッソ州政府に対し、姉妹提携を正式に申し入れた。

同時に委員会は解散し、以後、県との連絡及び事務はカンポ・グランデ沖縄県人会支部長具志堅弘が行うようにとの沖縄県側の意向が伝えられた。

同年7月、琉球民謡歌手、我如古グループの公演が行われた。1980年12月、カンポ・グランデ市、沖縄県人会支部長具志堅弘、市議員新城哲両人はペードロ・シアン州知事に姉妹提携について申し入れたが、同意が得られなかった。

1981年5月、沖縄県議会議長、大田昌知議員団一行14名沖縄県、総務部長新垣久雄一行5名、及び芸能団22名が来訪。州政府、州議会、州最高裁、カンポ・グランデ市役所などを表敬訪問。

郷里沖縄の芸能団による公演が文化協会会館で上演され好評を博す。

仲里正夫より姉妹提携を前提にして寄贈された20ヘクタールの土地に、記念植樹と定礎式が行われた。

1981年12月、カンポ・グランデ県人会役員改選により二世支部長として平良哲夫が就任。

1982年1月、沖縄県国際交流課の移住係長仲田正弘より、姉妹提携に関する書簡を受領。

理事会において書簡の件について審議を行った結果、支部長は対外的なことには経験がないので、能率的に遂行できるように早急に実行委員会を組織し、姉妹州県提携に関する、事務的業務及び其の他は、すべて委員会で行うようにとの意見を採択し、併せて執行員長に具志堅弘を、推薦し承諾を受ける。更に執行員長は直ちに執行員を推薦し承認を得る。

1982年2月、カンポ・グランデ市、沖縄県人会支部を中心に、ドウワードス市、アキダアワナ市による姉妹提携促進委員会

が結成された。

解散した前委員に対し、促進委員になる様に要請したが、仲里オジロン州議のみ承諾を得た。

そして沖縄県には、姉妹提携促進委員会が結成された旨報告、承諾を得る。

1983年8月、沖縄県副知事比嘉幹朗が来訪しウイルソン・バルボーザ・マルチン南マット・グランデ州知事と姉妹提携について協議した。

1984年4月、南マット・グロッソ州議会において、州議員大坪アキラによる州県提携の締結に関する議案が可決された。

7月、カンポ・グランデ沖縄県人移住70周年記念に際し、沖縄県副知事古謝得善一行4名、沖縄県議会議員団長小橋川朝蔵一行、県会議員12名及びサンパウロから在伯沖縄県人会長花城清和始め琉球舞踊並びに地謡の教授陣11名来訪。

沖縄県知事西銘順治揮毫「世界雄飛」の記念碑の除幕式が行われた。州知事始め州、市の高官などが出席、舞踊の教授陣による公演は、70周年祭典にふさわしい雰囲気醸し出した。

1985年5月、委員長具志堅弘、州議員大坪アキラを帯同して首都ブラジリアに赴き、外務省にオラーボ・セツバル外務大臣を表敬訪問、沖縄県と南マット・グロッソ州の姉妹提携の認可を要請した。

1985年10月、具志堅弘委員長、沖縄県を訪問、ブラジル連邦共和国外務省の許可が下りた旨を報告。関係機関との事前調整を行う。

1986年2月、来る4月に沖縄県を訪問し、姉妹提携を締結したいとのウイルソン・バルボーザ・マルチン州知事の意向を沖縄県側へ伝えた。

4月、沖縄県副知事嶺井政治が来伯し、ラーメス・テベット副

知事と姉妹提携の調印を確認した。

4月22日、沖縄県那覇市において沖縄県知事西銘順治と、南マツト・グロッソ州副知事ラーメス・テベットによつて姉妹提携宣言書に調印。

8月、沖縄県知事西銘順治一行及び沖縄舞踊団23名は、沖縄における姉妹提携宣言調印式に出席した、南マ州知事ラーメス・テベット氏への答礼使節団として来伯。

カンポ・グランデ市支部会館で行われた歓迎夕食会及び舞踊団による公演は、州知事を始め州、市の高官が多数婦人同伴で出席、熱心に鑑賞し姉妹県への理解を深めるのに役立てていた。

また西銘順治知事による資料館建設の定礎式が行われた。後に沖縄県の援助で現在の日本語学校が建設された。

1986年12月、カンポ・グランデ市の沖縄県人会支部定期総会において、以後沖縄県との連絡は新しい支部の理事で行うことが決議された。

なお姉妹提携促進委員会は6年間に及ぶ大任を果たし解散、その旨沖縄県国際交流課へ報告。

姉妹都市国際交流推進協会について

1995年3月、姉妹締結10周年を翌年に控えて州庁に国際交流課を新設するよう要請。しかし州では、財政上不可能との回答を寄せる一方で、推進協会で両州県の窓口を作る様にと要望された。そこでカンポ・グランデ市、沖縄県人会支部内に置くか、理事会で検討した結果、理事の交替が激しい県人会支部では、不向きということなり、姉妹都市国際交流推進協会という組織を新設し1998年2月22日に、州知事を名誉会長に推し、法規に従い創設した。

技術研修員交流事業

1993年度以来、南マツト・グランデ州から技術研修員8人を派遣。

反対に1998年度からは、沖縄県から技術研修員

を一人受入れ、(今後継続する)研修員の身元引き受け保証人は、姉妹都市国際交流推進協会長。

姉妹州県提携の展望

南マツトグロツソ州に沖縄県の象徴である、シーサーと赤瓦の家、沖縄県に南マツト・グロツソ州の家を設置し、人的交流を増進させ、国際交流を積極的に推進する。経済交流をも実現させることによって、自然に文化、産業、教育、体育等人的交流も一段と活気が出て、あらゆる分野の交流が創出される。我々一世が現場で環境を創りさえすれば(道を開いてあげたら)県人子弟は必然的にその心を継承するものと信じてやみません。21世紀に備え次代を担う若者に夢と希望を与え、相互に留学研修生を交換し直接、肌で体験させ国際感覚を身につけさせて、国際社会で活躍できる人材育成が急務である。

一世移民は移住してきた当時、家族をやしなうのが精一杯で仕事をし、社会事業などする暇もなかった。しかし現在は、仕事だけやっていればいいという考えは通用しない。幸いにして当州には広大な土地と豊富な天然資源がある。

両方の技術と、協力があれば必ずや新たな展開が実現すると思う。各人が産業を興すと言う認識の上に立って、沖縄県とのあらゆる分野における活発な交流により、高度な情報を得て姉妹州県を背景に、21世紀には、当州において両州県の若者の手による合弁会社設立が、実現することを願っている。磨けば光る、人材は

たくさんいる。しかし今の状態を放置すると、人材流出で目的達成にはおぼつかない結果となる。こうした理想実現には日系人は勿論、州民の絶大な協力が必要であろう。

姉妹都市国際交流推進協会

会長 具志堅 弘

カンポ・グランデ名物“沖縄そば”

24時間営業のフェイラをのぞく



軒を並べて人気を分かち合う名物沖縄ソバの屋台スタンド
(夜を徹して24時間営業のカンポ・グランデのフェイラ[青空市]は水・土曜日の週2回)

沖縄というと、海の美しさと共に温暖な気候、とりわけ日本一の長寿県であること、などを連想する。言うまでもなく、長寿は、食すること、すなわち、食文化と切っても切れない関係にある。沖縄の食べ物としては、豆腐や脂味を排した豚肉を主体とする各種の名物料理があるが、異色の存在として、沖縄ソバがある。そのヘルシイ（健康性）さを買われて、沖縄を訪れる他府県人にも最近では結構人気が高いそうである。

カンポ・グランデに来てみて、びっくりしたものの一つに、沖縄ソバがある。もう少し正確に言うところ、沖縄ソバを専門に売るフェイラ（露天市）が一週間に2回も立つことには、さすがに驚きを禁じ得なかった。毎週水曜日と土曜日の夕方から翌日の午前中までが営業時間となっている。

沖縄ソバの屋台が20軒も30軒も道路の脇にズラリと並び、しかもお客の大半は、ブラジル人の家族連れで、ハシを“オペラソン（操作）”出来る人はハシを使い、それが苦手な人はお得意のガルフォ（フォーク）を使って、はるか地球の反対側からやってきた沖縄ソバをそれぞれのスタイルで、ゆつくりと楽しんでいた。

かつてご自身もこの沖縄ソバの屋台を経営したことがあるカンポ・グランデ沖縄県人会の具志堅弘会長の案内で見学させてもらった日は、ちょうど1999年2月27日（土曜）の夜9時頃であったが、同会長が「思ったより大変な仕事でしたよ」と、おっしゃる通りのテンテコ舞いで、また、「只今盛業中」の表現がピッタリした。

これは、カンポ・グランデ市周辺に、ウチナアンチュの移民の故里が形成されて初めて、母県沖縄からもたらされた食文化である。地球の反対側で、NHKの同時放映を見ながら、時たま泡盛を飲み、興に乗れば、三味線をつまびいて故里の歌の数々も歌い、

そして、沖縄ソバを食べる。移民の歴史や文化も大きく変わった
との思いを今更のように深くする。

豆腐すら満足に食べられないまま、先に逝った戦前移民も多
かったことを思う時、真に今昔の感に耐えず、やはり長生きはし
ておくものである。

〔赤嶺 尚由〕

⑤ クイアバーに新しい移民の故里を造ろう

1960年前後でのカップペン移民は、沖縄からの戦後移住者の
中で、おそらくもつとも苦勞をし、辛い体験をした人たちであろ
う。移住前にみせられたきれいなカラー写真などとは裏腹に、植
えるどの作物もほとんどが実を結ばず、アマゾンの密林の中で”
みどりの地獄”を見た人は多い。

そういった人たちの中の何人かに、カップペン移住地から500
キロメートルしか離れていないマツト・グロッソ州の州都クイア
バー市で1999年2月25日の夜、おたがい膝を交えて話し合
う機会があった。しかし、彼らは約40年も前の暗い辛酸の記憶
をできるだけ忘却の彼方へ押しやり、これから先に希望をいただき、
独立独歩で生きて行って、この地に時たま、まだ夢に見る沖縄に
次ぐ第2の故里を築いて行こうとするたくましさや積極さがあり、
極めて爽快感に満ちていた。

そして、地図の上でちょうど南米大陸のヘソ（中心部）のあた
りに相当するこのクイアバー市で、沖縄県人の意気を高々に示し
たい。

（金城盛吉さんの話）また「カップペン移住地は、我々に忌まわしい
思い出しか残さなかったが、もう一度当時の生活に戻れるか、と
聞かれたら、沖縄健児として確かに戻れる」と言う山内昌吉さん
の話にも、「シタイサイ、ウチナーンチュ」と、思わず拍手喝采を

しなくなった。

■山内義寿氏（クイアバー市に住む沖縄県人のリーダー格、前クイアバー日伯連合日本人会会長）

私は、カツペン移住地に入植するため1960年に渡伯しましたが、どうしてブラジルに来たかと言いますと当時、まだ元氣だった親父と相談して、ひとつ大きな土地で生きて行こう、大陸に出て行って農業をやってみよう、という動機でした。

ちようどポリビア移住も始まっていたましたが、地図で見る限りポリビアには海もないじゃないか、ブラジルにはちゃんと海がある、という簡単なことが決め手となり当時、鳴り物入りで宣伝されていたカツペン移住地へ入植することにしました。

ところが、入植したこのカツペン移住地が調子の良い前宣伝とは裏腹に不毛の地で、最初は見事な大木が繁っているのです、これは行けるかな、と思いました。が、全くの酸性土壌でしたから、ピメンタ・ド・レイノやゴムはできたが、穀物などその他の作物が一切駄目でした。移住地では、どこもそうだと思えますが、穀物を植えて、自給自足できるような態勢にしなければ、とてもやっています。

土地を改良するにも、資金が足りないから、思うようには行きませんでした。1軒当たり10アールケールずつ分譲されていましたが、大体6万本位のゴムの木を植えたところで、とうとうやっっていけなくなり、ゴムの収穫もしない内に、早々と脱耕しなければなりませんでした。

その後のゴムの相場をみていますと、たとえあのままカツペンにしがみ付いていたとしても、ゴムではやって行けなかったことがわかりました。あの時点での私たちの脱耕は、正解だったということになります。

ここ（クイアバー市）に移ってきてから、もうかれこれ35年程度になります。カンポ・グランデ市には、よく沖縄から芸能団体などが訪ねてくれますが、1000キロも離れていない我々の所には、なかなか足を伸ばしてくれません。しかし、ここには日系人もブラジル人の間にも、沢山のアミーゴたちができましたし、また、NHKの海外放送もあって、地球の反対側の日本のことも居ながらにして判るので、今ではどこに行く気もありません。こういう大自然の中で、生きる喜びを満喫しています。

■山内 昌吉郎氏（義寿氏の実弟。兄を助けてよく地元の県人と他府県人との融和や親睦にも努力）

1960年頃の沖縄は、大変な不況でした。軍作業などで確か10ドル位しか貰えませんでした。

これは、いかん、と言うことで、カップン移住地が何処にあるかも知らないまま、ブラジルへやってきました。

ところが、実際に入植したカップンは“みどりの地獄”の言葉通りで、本当にゴムやピメンタ・ド・レイノ以外は駄目でした。しかし、そうした単調な生活の中でも、人間の子が生まれたり、ブタが生まれたら、お祝いをして何か変化を持たせようとする人間の生活の知恵みたいなものは、ちゃんと働いていました。

カップンを出て、ここクイアバーに来る前に4年ばかり収穫を山分けするメーエイロ（歩合作）の生活をしました。カップン時代は、確かに苦しかったという記憶しかありませんが、しかし、もしもう一度、あの時代の生活に戻れるかと聞かれたら、沖縄健児として、戻る自信を私はもっているつもりです。

私たちの先輩方がブラジル人から「ジャポネースはガラランチーだ、ガラランチーだ」と、いわれていたのを最初、何のことかなと思っていました。今になってその意味がよく判り、ありが

たさを感じています。

クイアバー市に住むウチナーンチュは、小人数ですが、カップペンで同じメシを食べた仲間がほとんどで、皆仲良くやっております、今のところ、ここから出て行くつもりは、全くありません。ガランチードだ、ガランチードだ、と高く評価された先輩たちの功績にそむかないように励んでいきたいと思っています。

■山内寅春氏（義寿氏の実弟。クイアバー市内で駐車場T O K Y Oを経営し、これまで自らも何回か日本へ出稼ぎに行ったことがある）

カップペン移住地は、まず自給自足ができなかった。実際に現地へ来てみてから、いかに正確な情報が不足していたかがよく判った。

移住する前に沖縄できれいなカラー写真をみせられ、よろこび勇んできたものの、実に大変な所だった。しかし、今となってはできるだけ過去の暗いできごとなどにとらわれることなく、積極的にもつと前向きな姿勢で生きていきたい。

現地、クイアバーに住んでいる沖縄県人は数少ないが、よく協力し合い皆仲良く生きている。それを大変いいことだと考えているし、これからも大事にしていきたい。また、我々の子や孫の時代には、クイアバーにもぜひ沖縄県人会の支部組織を作り、県人同士の絆（きずな）とその意気を高めるようにしたい、と考えている。

■金城 盛吉氏（クイアバー市の目抜き通りで手広くみやげ品店を経営する県人の有力者で、コザ高校の同期生には芥川賞を受賞した東峰夫がいる。本人も文学肌の商人である）

私は、カップペン移住地に先発隊としてやって来て、3年いまし

た。ピメンタ・ド・レイノ―本槍でやろうとしましたが、一回も収穫することがなく脱耕の止むなきに至りました。ピメンタ・

ド・レイノという換金作物が収穫されるまで、ひとまず食いつなぐための作物があれば、何とか失わないでやれたかもしれませんが、それがありませんでした。

今でも思い出されるのは、当時の食生活のことですが、エンドウに似たガンドウという豆を米と一緒に混ぜて炊いたのが主食でした。ごはんにもおつゆにもガンドウが入っていて、毎日がガンドウだらけという生活でしたが、あの頃は、ただおいしかったという記憶しか残っていません。さつきも話した通り、カップペンには3年いて、それからコザ高校でやはり同期生だった妻の啓子を呼び寄せ、いま住んでいるクイアバーから137キロくらい離れたクルピーラという山の中に入り、米作をしました。クルピーラ時代のことで今でも憶えていることは、ものすごいモスキット（蚊）の群れに毎晩のように咬まれ、一日中かゆくてたまらなかったことです。

それから1年余りで、クイアバーに出て来ましたが、モスキットに咬まれた跡だけは、傷になつて今でもはつきり残っております。

でも、苦しかったことばかりではありません。

当時、楽しかった思い出としては、6月から9月頃まで、パラナチンガ川にアマゾン川から上がってくるマトリシャンという川魚を1年分、それこそ車が一杯になるまで釣れたことです。

ところが、食事係が肝心の塩を持つてくるのを忘れてしまいました。

そこでどうしようかといろいろ迷い、思案投げ首したあげく、付近に住むブラジル人の所へ塩を借りに行くことにしましたが、当時はまだ言葉もできず、塩というポ語を知らなかったので、塩

と同じ白い色の砂糖を手にし、辛いことを伝えてやるために、先に自分の方でそれをなめて、それから顔をしかめて見せたら、相手もまねて同じように手に取って舐めました。が、甘いものだから、げんな顔をしたまま、塩辛いという私たちの伝えたい意味を、とうとう伝えることができませんでした。

どうしてクイアバーみたいなどころにいつまでも暮らしているのか、と不思議におもうかも知れませんが、いいですか、南米大陸を十文字型に切りますと、ちょうど我々の住むこのクイアバーが地図の上で南米大陸のヘソの部分に当たります。皆さんは、アマゾンが奥地だと考えるかもしれませんが、実は一番奥地は、クイアバーなのです。

人間は、どこに住んでいても、そこを地獄と見るか、天国と見るか、その人の気持ち次第でどうにでもなります。冗談半分に申し上げますが、おいしいパクーの魚の味を知ったら、なかなかクイアバーからは外へ出て行けなくなりますよ。

私は、この南米大陸のヘソのあたりで生活して、できるだけこれからも、沖縄県人の意気を高々にしめして行きたい、と願っております。人間至る所に青山有り、ですよ。

■田中 康宏氏（まだ50歳にもならないが、燃料輸送車20台を所有してクイアバー市以北の地域に燃料油を供給している北マツト・グロツソ州屈指の日系実業家。また、自分でもガソリン・ポストや牛800頭の牧場を経営するかたわら、今住んでいるクイアバーから250キロ地点のタンガラ・ダ・セーラ市の将来の有力な市長候補にも目されている）

日本からブラジルへ連れて来られたのは、まだ私が10歳になるかならないかの時でしたから、自分であれもしよう、これもしようという希望らしいものは、何一つありませんでした。それど

ころか、父親（屋部村出身の康春。98年に死亡）にただこれからブラジルへいくんだ、と言われ心細さや何やらで「自分はいかない」と、泣いて駄々をこねたことを、憶えております。しかし、ちょうど40年位過ぎた今では、このブラジルが一番良い所だ、と亡き父親に感謝しております。まだ機会がなくて、沖縄へは里帰りもしていませんが、お蔭様で妻も日系人です。

私たち一家は、1960年にカッペン移民の第3次隊として入植しましたが、父親が早目に「ここでは駄目だ」と、判断してカッペンを見限り、現在のタンガラ・ダ・セーラに移ってきて、米やフエイジョンなどの栽培を始めたのがよかった、と思います。典型的なウチナーンチュの気質を持った父親から、商売をやっている自分に形見みたいに残され、今でもかた時も忘れられない言葉は、「敵をつくるな、ケンカだけはするな」ということでした。

たとえば、こういう商売をやっていると、ファゼンデイロ（大農場主）に1万リットルとか2万リットルの燃料油を掛け売りすることがよくありますが、たとえ払ってくれなくても、ケンカだけはせずに、辛抱強く待つことです。もし法的なエゼクソン（強制取り立て）などに入って、ケンカ同然になったら、後で取れるものでも取れなくなってしまう。

こういう辺ぴなところに、住む者の仕事の息抜きとか一番の楽しみは、釣りをすることで自分でも専用の釣り場を持っています。パクー、ピンタード、ジャウー、ドラードスなどここならではの魚が何でも釣れます。50キロのジャウー、37キロのピンタードも釣りましたし、小さいジャウーでも15キロはありました。99年の正月に、沖縄から安慶名に住んでいて親戚に当たる上田芳子さんが、25歳の息子と一緒に地球の反対側のここまでやってきて、7キロのドラードスを飛沫を上げさせながら釣り上げたら、沖縄では考えられないことだとても喜んでおりました。よ

くモーターボートに乗ってセポツバ川に行つて、ピラプタンガという魚を釣ったりしますが、釣りはいつまで何回やつても、なかなか飽きがきません。

■山内 貞子さん（義寿氏夫人）

昔は、いろいろと苦労しましたが、今ではこの住み易いクイアバーに来て、よかったとおもいます。自分たちの孫は、こちらの方に8人、サンパウロの方に4人います。皆少し位はウチナーグチを聞くことができます。混血の孫でも、沖縄の方言がちよつとでもできるとなりますと、途端に可愛さが増してしまいます。日系人の少ないクイアバーで生活して見て、つくづくと隣近所との付き合いの大切さが、判るような気がします。何かあつたら、真つ先にかけてきて助けてくれますのは、たとえブラジル人であつても、隣り近所の人たちです。世界の至る所で、人種問題に根ざした紛争といったものが絶えませんが、まず隣近所と仲良くすることから、平和は生まれるような気がします。ここには主人の親戚が沢山おります。正月などに親しい者同士が集まつて、おたがいウチナーグチを心いくまで自由に使つて、ウチナーのことなどを話しあうのが一番心がなごみますし、私の楽しみの一つです。

■金城 啓子さん（盛吉夫人。毎日夫と一緒にみやげ品店の店頭に立つ）

1964年に夫・盛吉から呼ばれてカップン移住地にやつて来ましたが、実際にその生活振りを見て、どうしてこんな所に入植しなければならぬのか、と一瞬思いました。自動車の通る国道から何キロも離れているはずなのに、夜、何かの拍子に目をさましたりしますと、車の走る音が聞こえてきたことを、今でもはっ

きり憶えています。それだけ物音一つしない山奥だったということのほか、毎晩、心細い思いをしたためでもあったのでしょうか。

苦しい思い出を語りますとキリがありませんが、今でもはつきり私の記憶に残っておりますのは、朝早く起きてみますと、いつも私の洗濯物だけ地面に落ちていて、一体誰がこういうイタズラをするのかと思っていたら、犯人は私たちの飼っていた馬なんです。ああいうなかなか人も行かない山深い所に住んでいますと、自分も人間と一緒に暮らしている仲間だよ、と毎日のように私たちの馬車を引いてくれていた馬から、人間に運命共同体を求めて送る一種のシグナル（信号）だったに違いません。後で聞いてみたら、馬は人間のニオイを嗅ぎ分けて自分の主人が分かるそうですね。これは、ずっと後になって今住んでいるクイアバーに移って来てからのことですが、ある日曜日の夕方、町の中の公園に行きましたら、きれいな娘さんたちが美しく着飾ってデイスフィーレ（行進）と言うんですか、一つの通りを行ったり来たりしていました。私は、夫・盛吉が好きで、沖縄から地球の反対側にあるこんな遠い所まではるばるやってきましたが、こんなにきれいな娘さんたちが多勢いるのに、どうしてわざわざ自分を呼び寄せたのだろうか、ということもちよっぴり思ったりしました。私たちが生活しているこのクイアバー市は、とても遠い山の中と思われがちですが、サンパウロへも飛行機の直行便ですと、わずか1時間49分程度で行けるんですよ。私は、毎月必ず子供たちの住んでいるサンパウロへ行っていますから、ここがそんなに山奥という感じがちっともしません。住めば都という言葉がありますが、まったくその通りだとおもいます。

これから一世移民の時代は確実に過ぎ去って、二世、三世の時代です。日系人ばかり固まるのではなくて、広くブラジル人とし

てやって行かなければならないのではないか、いつも考えてお
ります。結婚もまた、おたがいウチナンチュ同士、日系人同士
という訳には行かなくなるはずです。幸せになれそうな似合いの
カップル同士、結ばれるという考え方でいいでしょうし、すくな
くとも私たち夫婦は、そういう考え方で、このクイアバーでこれ
からもずっと生きて行くつもりです。

⑥ 移民の故里めぐり

サントスージュキア線訪問記

ブラジル沖縄県人会が、日本移民90周年を記念して「沖縄県
人移民史」を発行することになり、山城編集長からの依頼で“移
民の故里巡り”の一つにブラジルのヤンバル（国頭郡地方）とい
われるジュキア線一帯の県人を訪ねる事にしました。

本職のラジオ・アナウンサーあるいは日本語教師とは勝手が
違って、慣れない者にとつてはそれをまとめて文章に書くという
作業が、想像以上に難しいことが痛感され、何度も匙を投げよう
としたのですが、先輩たちの忠告、助言もあつてどうにかまとめ
てみました。

【瀬名波 美恵子】

◎ミラカツ

初めに、サンパウロから南に約150Km，国道116号線沿
いのミラカツの長田栄治さん宅へ。奥さんや娘さん達が天ぷら、
妙め物、バナナのお菓子などでもてなしてくださいました。

長田さんは名護市屋我地の出身、1935年に渡伯。本職はバ

ナナ農場経営だが、とても社会性に富んだ方で、ミラカツ農村協会会長を振り出しに、汎ジュキア陸上連盟理事長を務め、一年前まではミラカツ市保健衛生局長、市立病院の管理委員長の要職にありました。現在はブラジル沖縄県人会ミラカツ支部長を務め、公職歴は実に30年以上というから驚きます。

長い年月にわたって公職にあったのは、真面目な人柄はもちろん、若いころからの優れた語学力、物怖じしない大胆な行動力にあるようです。80歳とはとても思えない元気な方で、私が請うまでもなく、愛車を駆ってレジストロ市郊外に住む運天政助さん宅まで案内して下さった。



自宅前、バナナを背に長田栄治・久子夫妻

◎レジストロ

運天さんは今帰仁村出身(10万本を超えるバナナ園を持つ大農場主)、1920年にさんとす丸で従兄の政行さんを頼ってブラジルに来たものの、その政行さんにまだ会わない内に、パラナ州のカンバラーから200Kmの地点にあるコンゴニア植民地の12,000アルケールの原始林の中で測量中に何者かに殺害され

るという悲報が入ったのです。

政助さんは親の反対を押しきって、2000円の運賃と2000円の支度金だけで着の身着のまま渡伯してきた矢先、当てにしていた従兄が非業の死をとげ驚くやら失望するやら……。しかしこれではいけないと氣をとり直し、ペードロ・デ・バールに住む伯父の花城清長さんのもとで、2年間米作りに励みました。そこで得た手間賃の中から沖縄にも送金、両親を喜ばせたそうです。

その昔、大志を抱いて開拓に斧を振るい、移民の辛苦を散々舐めた末に、レジストロで指折りのバナナ王になった運天さんは、汎ジュキア日伯文化連盟の副会長を務め、沖縄県人会の発展にも大きく貢献しましたが、既に90歳を越え、「もう我々の時代は過ぎてしまった。ジュキア沿線の古兵もほとんどあの世に行ってしまった。バナナの全盛時代も過ぎた」としんみり語っていました。が、「ここレジストロもほとんどが、日本へ出稼ぎに行ってしまった、過去のバナナやゴヤバ、お茶の全盛時代も影を潜め、県人会へ参加する人も少なくなったそうでこれも時代の流れとしかいいようがないようです。

◎セードロ

レジストロの運天さんを訪ねた後、今度は沖縄県人が開拓したジュキア線のセードロに宮平ジョゼー・清吉さん宅を訪ねました。バナナの葉っぱがうつそうと茂った山の中の別荘風の邸宅。路地には沖縄縄ぞくりの赤花が咲き乱れ、私の祖母や叔父叔母のいる羽地仲尾次を思い出しました。

ジョゼーさんの両親、宮平牛助、カメさんは第1回移民で、かつてここで食品雑貨商を手広く営んでいたそうです。母親のカメさんは104歳の長寿を全うし、話題になりました。

ジョゼーさんは、ミラカツの前身、プランニア郡の第1回郡会議員を経て、ジュキア市の副市長から市長へと昇りつめた人で、政治家としてジュキア市の発展に尽くされた方です。

この日、ジョゼーさん宅には、宮里秀正さん、宮里ツルさん、宮里マリアさん、赤嶺信子さん、赤嶺保さん、当間次朝さん、平良和夫さん、金城安光さん、城間愛子さん、そして元県人会事務局に務めた外間長喜さんら大勢の方々が集まり、イチャリバムルチョーデー（会えば、皆兄弟）の温かい出迎えを受け感激でした。

戦前の一時期、配耕地からの逃亡者が多く出たため、沖縄からの移民が禁止されたことがありましたが、これを憂慮して解禁の手段方法を協議したのがここセードロの赤嶺新野栄さん宅だったということです。この赤嶺さんは、1912年第3回移民として一家4人（夫婦に子息2人）で渡伯したのは、彼が38歳の働き盛りの頃でした。

当初、重労働の鉄道工夫として働き、1914年、具志、当間の両人と共にセードロ川のほとり、サンパウロから150Kmの地点にあったパウリスタ植民会社の土地に小作農として入植、これがセードロ開拓の第一歩といわれています。昔はジュキア線ではなくセードロと呼ばれた頃です。

ところで球陽協会草創期の頃、県人有志が集まっているいろいろ協議を重ねた折の場所が、中央においては翁長助成宅、地方では赤嶺新野栄宅と相場は決まっています。訪問客があとを断たず新野栄さんは、交際でつぶれ経済面に苦しい時代が随分続いたそうですが、のちにバナナで成功し1935年、時の日本病院建設に当たって、地方委員会の副委員長に任命され、多額の寄付を行い日本病院建設に大いに協力しています。

この日集まった長老の一人宮里秀正さん（84歳）のことを記

しますと、宮里さんが4歳のとき父親がブラジルに移民し、11歳になった時、沖縄に帰って来たそうです。その折り「お前にやる力がないから大きくなったらブラジルに行って儲けなさい」といわれた言葉が耳朶にこびりついて離れなかったそうです。中学へ行きたくても行けない時代でしたから、可愛い息子にブラジルで儲けなさいと言わざるを得なかった親心が、長じて理解されるようになってブラジルに移民したそうです。

この宮里さんは、一時青年隊も引き受けた事があり、日本へも5回再渡航なさった成功者で移民90周年に感謝し、将来の沖縄県人会と文化センターの同胞の発展に思いを寄せていました。

セードロから再びミラカツ市に戻り、そこで県系人として政治の分野で活躍されている嘉陽巳代治前市長と天顔ジョルジ影夫現市長を訪ねることにしました。

◎再びミラカツへ

ミラカツ市は、サンパウロ市とクリチーバ市を結ぶ国道116号線の両市の間点より、50Kmほどサンパウロ市よりに位置し、バナナで栄えたジュキア線屈指の町、人口4万人余、周辺は見渡す限りバナナ園に囲まれた閑静なところです。

嘉陽巳代治さんは、今帰仁村湧川出身の宗孝・ウシさん夫婦の次男で、巳代治さんがミラカツ市長に当選したのは93年10月の総選挙の時でした。主要ポストの財務局長に藤田ロベルト、保健・衛生局長に長田栄治、また交通局長に天願ジョルジさんら日系エリートを起用、陣容を固め、その任期中には市立病院増築、託児所、老人ホームの建設等の医療・福祉部門やバス路線の充実、道路網の整備などインフラ整備で県系二世として大いに力を発揮しています。

嘉陽市長の後継者として当選した天願ジョルジ影夫現市長は、嘉陽市政を継承しながら、多角農業経営の奨励指導による農家経営の安定や、企業誘致・大学設置など、ミラカツ市の発展に遠大なビジョンと理想を掲げてファイトを燃やす姿は頼もしい限りです。

◎イタリリ

ミラカツ市をあとにして、こんどはイタリリの上地弘英さん宅を訪ねました。

イタリリ市は、サントス・ジュキア鉄道線のほぼ中央部に位置し、サンパウロからおよそ150 Km地点。1912年、サントス・ジュキア間の鉄道敷設工事が始まり、多くの沖縄県人が鉄道工夫として働いたところです。その頃から鉄道沿線に定着した工夫たちが、農業に従事したことからジュキア線の開拓が始まったと言われています。イタリリからサントスまでおよそ100 Km。有名な避暑地ペルイーベ海岸まで18 Kmの地点、気候温暖で雨量が多く地質も良い。見渡す限りのバナナの樹海の中に上地さんの住宅があります。上地さんは人当たりの良いおだやかな方で、長年の貧乏生活の末、バナナで成功しています。終戦後まもなく、沖縄の人々への救援物資送り出し運動にも協力しています。

イタリリ社会のリーダーである上地さんは、75年に入植60年を記念して「イタリリ日本人の歴史」を編纂しているが、短歌なども詠まれる歌人であり、たびたび日本人会長をつとめ、イタリリ同胞の発展に大きく寄与され、90歳を越された現在も、現役で働いておられる姿に頭が下がる思いがしました。

イタリリといえば、すぐに花城清安さん（故人）のことが思いつきますが、花城さんは沖縄県人社会のトップ・リーダーだった方で、今更私が紹介するまでもありませんが、簡単に記します

と花城さんは、名護市振慶名出身、沖縄県立農林学校を卒業後羽地小学校で教鞭をとったことがあります。1926年に入植後、日語教師のかたわら、小バナナ園経営からはじめて一時はジュキア線バナナ王と呼ばれるまでに事業を拡張1936年頃、宮城利三郎、屋比久孟徳、安田治平、上原直勝の諸氏と計り、「ジュキア地方バナナ生産者組合」を創設、理事長となり、更に1946年には「パウリスタ果実輸出合資会社」を発足させるなど、ジュキア線におけるバナナ生産者の福利増進に大きく貢献してきました。後年サンパウロ市にあって在伯沖縄協会、ブラジル沖縄文化センター創立に尽力するなど花城さんの社会的貢献は数えきれない程です。

花城一家には逸材が多く、清安さんの社会的奉仕の精神を受けつぎ、公共事業や政治の世界での活躍が目立ちます。次男のジョルジ氏は、ブラジル沖縄文化センター理事長、三男のゼツリオ氏は、社会学者から政治家へ。現在はサンパウロ市の交通運輸局長として活躍。四男エドワルド氏は、地元イタリリ市の市会議長、長女のヨランダ田港さんもイタリリ市の副市長の要職にあります。予定していたヨランダさんとは、都合がつかず今回お会いすることは出来ませんでした。

さて、これまで案内役をつとめて下さった長田さんに別れを告げて、こんどはサントス方面へ向かいました。

◎サントス

サントスは、初期移民がコーヒー耕地を逃亡し、故郷への帰国を夢見て集まったところ、県人にとってはノスタルジীর町であつたようです。沖仲仕をしたり、野菜作りをしたりして、苦しい生活を経て県人社会が築かれた頃、第二次世界大戦が勃発、日本人は敵性国民とみなされ、外国に暮らす身の悲惨な日々が始ま

るのです。

ブラジルの憲官から24時間以内に退去するよう強制命令を受け、路頭に迷い再び奥地へ追いやられた歴史を持つ町だと聞いています。

サントスでは、照屋マリオさんの案内ではじめに「移民上陸記念碑」が建立されている海浜公園を訪れ、大陸の彼方を指さす移民初期の夫婦と、男の子の像を目のあたりにして、日本移民の来し方にしばし思いを馳せました。この記念碑は1998年、日本移民90周年を記念して立てられたものです。

この公園でひと時をすごした後、「花やブラジルのサントスに咲かち、ないや（実は）島元のみやぎさびら」という名琉歌を残した第一回移民の名嘉文五郎氏（故人）宅を訪問しました。名嘉さんは伊是名出身で、配耕されたカーン耕地から逃亡、サントスで沖仲仕を一年務めた後、リオ港のドッカスで働き、その後タクシー運転手となり（移民5年目にして日系第1号のタクシー免許証保持者）再びサントスに戻り、漁業に転じて以後35年間、漁業に従事しています。

名嘉氏を知る人は皆「良く人の世話をする人だった」と口をそろえます。名嘉氏の次女イザウチーナさんは同じ第1回移民の上原直松さんの長男松太郎さんに嫁ぎました。

直松さんは県人波止場人足第1号で、日本人部の現場監督になった方です。長男の松太郎さん（1994年死亡）は、ジュキア・バナナ組合理事長を務め、1963年から92年の29年間に亘ってサントス市議会議員を務めた方です。彼は、スポーツ万能でバスケット選手や審判員をつとめ、アトウレチカ・アトランタ・クラブの創立者の1人です。

直松さんの弟・直義さんは上原旅行者の創立者。もう1人の弟・直勝さんは、戦前球陽会の会長。戦後は、沖縄救済委員会の書記

を務め、救援物資送り出しに尽力しています。

◎サンビセンテ

最後に訪れたのは、サントス市と並ぶ海浜都市のサンビセンテ市にある「コートク・イハ公園」でした。ここは、昨年サンビセンテ市と那覇市の姉妹提携20周年を記念して出来たもので、この公園には、正面に守札の門やシーサ、紅型衣装の沖縄娘の写真パネル、沖縄を型どったみごとな芝生の植込みもあり、場所が内海に面していますから沖縄情緒たつぷりです。

1978年に那覇市との姉妹提携を実現させたのは、当時の伊波興祐サンビセンテ市長ですが、その時側面的に協力したのは、ビラ・カロンの上原武夫さんと今回の案内役照屋マリオさんでした。

ここでマリオさんのことを少し書きますと、お父さんの守蒲さんは笠戸丸の3年後にブラジルへ移住し、サントス・ジュキア線・ミラカツを転々と移り住んだそうです。マリオさんもサントスの港湾人夫、ミシンの販売からホテルの経営まで色々な仕事をしてきました。マリオさんは日伯両語に通じ、サントス方面の県人には欠かせない人です。頭には白髪を頂き80歳を越えたとはいえ沖縄県人会常任理事、ブラジル沖縄文化センター理事の任にあり、サンパウロとサントスを往き来している姿からは、とても傘寿を迎えた方とは思えないほどの若々しさです。

この若々しいエネルギーがあればこそ、今日も県人社会の為に尽力しているのだと頭の下がる思いでした。

〔注：本項と次項サントス・ジュキア線リレーインタビューは一部重複部分がある〕

サントス―ジュキア線

駆け足リレー・インタビュー

1999年2月も終わりがけた頃、移民の故里を巡る取材のためにクイアバー市を訪れた時、40年前の沖縄で移住先をボリビアかブラジルのどちらにするかで決意を迫られ、せめて沖縄につながる海に少しでも近い方がよいと考え、「ブラジルにしました」と、答えた県出身の移民がいた。それを聞いて、何故か、移民もただ食べるためにのみ生きるにあらず、の念を強くしたものである。

サントス―ジュキア沿線に沖縄移民の先駆者の多くが、最初の生活の場所を定めたのは、米とバナナの栽培に適していて、食べて生活していくのにより向いていたということのほか、生まれ故郷に必ず続く海にも近く、移民の心の中にたえず潜んでいる郷愁や不安感を癒すためではなかったのか、私の心の中にはいつもそういう思いがあった。

このような自分のこだわりをこの際出来るだけ解きあかし、また、西暦2000年という大切な節目における、最も伝統的な沖縄移民の故里の新しい姿に少しでも触れて見ようと思い立った。

同年2月5日の早朝、サントスを皮切りに、かつては生活のために、船や汽車や馬車や徒歩で辿ったはずの我が沖縄移民の先駆者たちと、ほとんど同じような進路をとり、今ではきれいにアスファルト舗装された道路を、アナジマス、イタリリ、ミラカツ方面へと次第に南下して行き、インタビューのバトンを次々手渡していくようなリレー形式で、いまだ健在の各地元有力者から話を聞いた。

■サントス

インタビューの第1走者は、サントスの島袋牛吉（一世、93歳、中城村出身）と照屋マリオ（二世、85歳）の2人である。静の島袋に対し、いかにも動の照屋。トップ走者としてバトンを持つのにふさわしい。「里帰りして親孝行しよう、と思ったときには既に親は亡し。だから今もつて、ウチナーには帰っていません」といった話には、つい身をつまされた。島袋、照屋さんのふたりに2人分走って、いや、話してもらわなければならない、という気がしてきた。

—— 今やサントス方面の一世の数も、10人内外に減ったとか、先ほど車の中で照屋さんからお伺いしました。島袋さん、今年、何歳になられますか。

島袋 93歳です。沖縄では94歳。沖縄ではシージニで数えますからね。

—— サントス—ジュキア沿線というのは、いわばブラジルにおける最初のウチナーンチュの移民の古里だ、と思うんです。ノロエステ線とかカンポ・グランデとか沖縄移民の古里と言えるところは、他にもありますが、最初の移民の古里といえるところは、ここにあるはずです。

いまは、西暦2000年でしよう。あと8年もしますと、日本移民100周年になります。その頃、この沖縄移民の最初の古里であるサントス—ジュキア沿線がどのようになっていくか、今日はお2人からそういうこともお伺いしたい、と考えています。その前にこのサントス方面が最も栄えたのは、いつ頃ですか。

照屋 1934年から40年頃まで、ちょうど戦争が始まる前が一番盛んでした。というのは、日本語学校も各地区にありました。運動会も各地区単位でやりました。

—— 私たちの沖縄には、昔から「食呉（ムヌクイ）ユ者（シ）

ド我御主(ワガウシユウ)」という諺があります。人間、食べなきや生きられませんか、どこの国でもいかにして食べていくか、どのようにして生活していくかは、大切だと思うんですが、沖縄移民の先駆者たちがサントス―ジュキア沿線に一大移民の古里を築いて行った原因としては、食べやすかったこと、生活しやすかったこと、なども大いに関係あるのでしょうか。

照屋　今おっしゃった食べることが一番簡単だった。というのは、第一資本がいらなかった。

主人の方は、港(ドツカスⅡ港灣公社)で荷役として働いて、女や子どもは野菜の小売り。資本もいらず、雇い主もいない。生活が一番安く付いて、また安全だった。それが第一の原因だろうと僕は思っている。その代わり生活は最低だった。

—— 最低という意味は、例えばどういうことですか。

照屋　最低という意味は、さつきもいったように男は殆どが港で、女は頭に野菜などを乗せて各家庭を売り歩いた。

—— それは、買って？ それとも自分で作って？

島袋　自分で作って。今の青年たちは土地があってもあまり働かんね。

—— 島袋さん、その頃、野菜を中心にどんなものを作っていましたか。

島袋　アグリオン(クレソン)、ナビッサなど、葉野菜が殆ど。
—— ナビッサ？

島袋　葉っぱのあるコーベなど、30日とか40日で作って、あれが一番儲けがあった。

—— それを沖縄から来たアンマーたちが頭に載せてルア(街路)を売り歩いたのですね。

その時のアンマーたちは、皆素足だったということですが、本当なんですか。

照屋 本当です。

——そして、もう一つ、私がお伺いしたいのはあの頃の一世の人たちは、物を売り歩くのに必要なポルトガル語がいくらかできたのでしょうか。

照屋 それは、ね、お金の勘定ができれば、問題なかったです。

—— ああ、真にもっていいお言葉ですね。

それとついでに、サントスにウチナーンチュが多く集まったもう一つの原因は、何かあれば本当の故里であるウチナーに続くこの海に近いところにもいたい、という思いがあったのでしょうか。

照屋 そんなものはなかった。よく皆にそういわれるんですが、そんなもんじゃなかった、と思うんですがね。というのは、さつきも申し上げましたように、仕事は簡単にありましたからね。沖縄よりは、暮らしやすかった。男の仕事は波止場とか、また、モインニヨ・サンチスタとかモインニヨ・パウリスタなどの大きな製粉会社に行けば、荷役の仕事がいくらでも見つかりました。まあ、言葉はそんなに必要ありませんでした。

—— 島袋さん、お父さんやウチナーンチュの先輩たちから、サントスに来たのは、懐かしいウチナーにつながる海に近いので、海を隔ててウチナーがあるから、もつとはつきりいつて、ウチナーに帰りたい、というようなことを耳にしたことがありましたか。

照屋 生活はブラジルがいいんで、そういう考えでいた人はあまりいなかったと思います。

奥地から来た人は、よくそんなことを聞きましたがね。

島袋 私は1932年に沖縄から来ました。その時、1年間に100ミル、ガンニヤ（儲け）しました。今の250レアル位、言葉では良くいい表せませんが、当時の百姓の実入りは、とても少

なかった。そこで私も、町でビール会社とかガラージで働いたりしました。

—— 現在の最低賃金が136レアルだから、その2倍弱ですか。

照屋 あの場合はそれでもよい方で、皆にうらやましがられました。それで私は日本に行つて勉強もできるようになりました。

—— 西暦2000年における移民の故里は、どのようになっているかを少し伺います。サントス近辺に沖縄出身の家族が500家族、一世、二世、三世、四世、五世までいるそうですが、その中で一世は、島袋さんを含めてわずか10人ぐらいになったとか。移民華やかなりし頃と比べ、まさに隔世の感がします。移民も後続がやってこないことには、戦争のときに先陣を切りながら、援軍の来ない部隊のように孤立化して先細りになりますね。

島袋 まだ10人もいますかね。若いので確か82歳です。

—— 西暦2008年には、日本移民100周年。サントスの沖縄県人会支部は、何か活動をやっていますか。

照屋 やつていますよ。

—— 例えばどんな活動をやっていますか。

年中行事は？

照屋 年に一度、親睦会、運動会。それと婦人部の方が敬老会、三味線、民謡、舞踊も盛んです。

—— サントスの若い人たちは、どうしていますか。地元に残っていますか。それともサンパウロへ出ていっていますか。

照屋 殆ど地元に残っています。そして、沖縄県系という感じは、二世まではかろうじてあるが、三世からは全然ない。

—— どういう感じになっていますか。もうすっかりブラジル人つていいますか。方言もわからないでしょうね。

島袋 聞くことくらいは、出来る。

—— 結婚相手は、どうなんですか。県人同士？ それとも他府県人やブラジル人と？

照屋 三世、四世からはもうガッチャイ、ガッチャイ。

—— 三世以降は、ブラジル人と結婚していくのも多いわけでしょう。

—— 30%は、ブラジル人と結婚しているでしょうね。

島袋 日本人を探していたら、結婚できない。何しろいないのだから。

—— このサントスという沖縄移民の故里で生活してこられた島袋さん、照屋さん、親から聞いた「ゆしぐと」には、こういうものがありますか。

島袋 儲けて早く沖縄へ帰ってこい、ということ。私は男4人、女4人の計8人兄弟でした。

先にブラジルへ来ていた長男が、私と入れ替わりに両親の面倒を見るため沖縄へ帰って行った。

そして、戦争になった。あの当時は、お金がなくて帰れなかったが、金が少し出来たら暇がなく、両親もいなくなっていました。というわけで、とうとう今まで里帰りも出来ず、両親との再会も出来ず、「早く帰ってこい」という声だけが思い出されてなりません。

島袋 私の親からの「ゆしぐと」は、会組織などに入って、会長なんかやってはだめだ、ということ。

—— 今は見事に、その逆の方向に歩いておられて、後悔はしていませんか。

島袋 自分の性格がこうなんですからね。私が帰伯した当時、ウチナーグチ、日本語、ブラジル語の出来る人がこの地域には少なかったもので、あちらこちらから呼ばれているうちに、こうなっ
てしまいました。両親としては息子が仕事をしないできつと会の

活動に時間を取られ、いつまでも貧乏生活をするのが心配だったのでしょう。

——じゃあ、自分たちもこんな県人会のためのインタビューを早く切り上げて、金儲けにいそしまなければなりませんね（笑い）。

島袋 やっぱりおやじの言っていたことは、本当だったなあ、つて今ごろになってつくづくと考えさせられます。

——これはもう、一本やられてしまいました（笑い）。この辺で、早々とサントスを失礼して、次の目的地アナジアスに向かうことにしましょう。

■アナジアス

インタビュアの2番走者は、手広くバナナ栽培の傍らアナジアスの沖縄県人会の万年支部長を務めていらつしやる名城政春氏（二世名護市出身78歳）だ。8歳の時の1932年に渡伯したいわば準二世であるが、いつも背筋をピンと伸ばしていて、純然たる一世の気骨と雰囲気を保ち、沖縄移民の古里としてのアナジアスに強い愛着を持ってその行く末も既に深く分析して見据えている人。「たとえば、こんな草深い田舎にいても、それぞれが琉球音楽とか琉球舞踊を愛好し、育み、紹介していくように努めることが沖縄の伝統文化の補充にもつながる」といった意味合いの卓見を披露してくださった。別に沖縄県人にとどまらず、広くこの地域の日系人の指導者の1人である。

——つい先ほどもこのインタビュアのトップ走者の島袋、照屋両氏にサントスでお伺いしてきたところですが、名城さん、この土地で生きていく上で、特に先輩にあたる一世たちのいき様、教訓、とくに触れられて今でも忘れられない思い出、そういった

ものがございますか。

名城 ちょうど少年盛りに戦争が勃発して約5、6年間は空白時代で、全然団体の活動もなかったですよ。戦争が終わって42、3年頃からやっと団体活動に携わってきましたが、その頃に先輩諸氏から受けたさまざまな教訓は、私の一生のうちで人間作りのこやしになり、基礎になりました。ですから今でも、忘れられないものがたくさんあります。

—— ブラジルにはお父さん、お母さんと一緒に来られたのですか。

名城 父は7年前に来ていまして、私は母と妹と3人で呼び寄せで来ました。

—— お父さんやお母さんからは、特にこうしたらいけないよ、こうしなさいよ、というような「ゆしごと」があった、と思うんですが。

名城 父は非常に厳しい人でした。特に日本語を忘れたらいかなとね。私は母と7年も一緒に住んでいて、習慣としてウチナーグチを話していました。父の教えは、「家ではウチナーグチもポルトガル語もいいけれど、日本語を忘れてはいけない」でした。だから、今でも母とはウチナーグチを使いますが、父と話すときは、何時の間にか、日本語に変わります。母とはウチナーグチ、父とは日本語、こんな習慣がずっと身についてしまいました。

—— お父さんが日本語教育に厳しかったというのは、いつか日本へ帰りたい、という思いを抱いていたのでしょうか。

名城 おそらく日本人として、まず恥ずかしくないようにというのと、それからいつかは日本へ帰るんだ、といった希望を持っていたわけなんですよね。

—— このアナジス方面で生活なさって、身を持って接した沖縄文化、食べ物に始まって琉球音楽、琉球舞踊とか、いろいろ

あったと思うんですが、名城さん、先祖代々沖縄の伝統的な食べ物、例えば豆腐を食材としたものとか、今でも毎日召し上がっていますか。

名城 うちは大家族で、沖縄では経済的にも恵まれないところで育ってきたわけですし、殆どが味噌汁と芋だけの毎日でした。学校に行き始めると金持ちの子がご飯の弁当を持ってきていて、その香ばしい匂いが遠くにいてもプーンとしてきました。ですから、ご飯の味が忘れられません。沖縄では非常においしいもんだ、と思っていました。今でも白いご飯を毎日食べております。



—— 沖縄の食べ物にはあまりこだわりませんか。

名城 こだわるほどでもないんですけど、しかし、「ンブサー」とか「ゴーヤー」とか、そういう独特の沖縄料理は、やはり懐かしいですね。

—— 非常にぶしつけな言い方で申し訳ないんですが、こういうアナジアスというサンパウロからちよつと遠隔の地に住んでいらしても、琉球音楽や舞踊に接する機会はよくありますか。

名城 以前、安慶名信夫先生が「沖縄民謡保存会」というのを作られました。あの当時、約2年ほど父がとても好きでしたから、私も一緒に付いていきましたので、やがて下手ながらもサンシン（三味線）を少し弾けるようになりました。また、琉球舞踊も好きです。ちよつと入植50年祭の時に、弟と玉城さん2人で高平漫才を踊ったんですよ。そのちよつと前に、私もやったことがあります、

時々、昔ながらの踊りをやっています。

—— 例えば、そういった沖縄の食べ物とか琉球音楽とか舞踊といったものを、このアナジラス方面でこれからも末永く残したい、とお考えですか。

名城 私の一生の希望です。時々、婦人部の方々がやっている時は、顔を出してチンダミをやったりしていますが、沖縄の舞踊、音楽は、我々の魂だと指導しています。沖縄の文化を永久に残す一つの方法として、舞踊と音楽は絶対に忘れてはいけないと。何を中心にして、我々が沖縄の魂を受け継いでいくか、また受け継がせていくかとなると、音楽、舞踊、それから貴方が先ほどからいわれている沖縄の食べ物、そういったものを核にしてやっていかなければ、いつかは根元がなくなってしまう。我々は世界に誇りうる独特の文化を大切に保存していかなくちゃね。

—— 非常にいいお言葉で感銘を受けました。私がお伺いしたいことに端的に答えていただいて、インタビューの時間も予定より節約できて感謝申し上げます。さて、2008年には日本移民100周年を迎えます。この地域がどんな変化を遂げていくだろうか、希望的観測を交えながら、名城さんのご意見をお聞かせ下さい。

名城 西暦2003年にアナジラス入植90周年祭を是非とも催したい希望を持っています。80周年祭を開催するときに、「さあ、80年周年祭を開催しよう」という案を出したら、「今年是不景気だし、できないでしょう、ちよっと無理ではないか」という意見もあったんです。私は、「それはいかん、もし大きな規模でできなかったらできる範囲でいい、そういう催しごとをちゃんとやることによって後輩に我々の先駆者たちが血と涙と汗と命を賭けて、築いてくださった大切なものを受け継がせ、ひいては日系人の存在そのものを知らしめることができるんだ」とね。

ただ不景気だからという理由だけで、我々の魂（たましい）をそのまま置き去りにすることはできない。規模は分相応であればどうでもいい。まあ、そういう風にして最後には「じゃあ、是非やりましょう」ということになりました。

—— よかったですね。どんな催し物の内容でしたか。

名城 音楽も踊りもいつも同じ物ばかりで、「アチラシケーサー」（二番煎じ）だから、味気ないという意見もありました。冗談じゃない。これはアチラシケーサーするのではなく、沖縄が世界に誇りうるあの独特の文化は、音楽や踊りによって保存されていく。我々は沖縄の文化をそれぞれが住んでいる地域で補充しながら更に育み、いつまでも大事に守って行きたい。我々沖縄県人の一人ひとりが、それぞれの地域で機会ある毎に郷土芸能などをつとめて披露し紹介していくことは、沖縄の伝統文化を少しでも手助けし補充していくことにつながる、と信じて疑いません。伝統文化を育み、大切にしない民族は、きっと滅びていきますよ。出稼ぎが行ったり来たりすることによって、段々日本とブラジルが文化の面でも頻繁に接触出来るようになり、カルチャー・ショック（文化的違和感）なども味わうことなく、いずれは我々が今考えているほどには難しくなくて、若者たちも自然に地域社会の行事に興味を持って参加してくるようになるんじゃないだろうか、といった密かな期待を抱いています。

—— さらに素晴らしいご意見をお伺いすることが出来ました。私からの質問は、これくらいで切り上げさせていただきます。あと、今日、ご同道願っている山城勇記念誌編集委員長と宮城あきら編集委員からも何か補足的なご質問があれば、是非お願いします。

宮城 私から2点、その一つは、赤嶺さんから先ほどお聞きしたことでもあると思いますが、名城さんが80周年祭の行事で今

でも忘れることのできないご苦労、そのご苦労を乗り越えてこられてきて今日があるわけですが、今から振り返ってごらんになって苦しかったなあ、と思われること、その反面よかったなあ、と思われることについて少し伺いしたい。

名城 今まで一番苦しかったことは、母が病気をしたこと。婦人病でサントスまで行って手術をして、最後には治って、今年96歳になります。母が生きるか、死ぬかのあの瀬戸際の時のことは、どうしても忘れられません。ブラジルにきてよかったことは、おそらく日本にいたら戦争で戦死していたかもしれないですね。事実、一つ上の従兄は、戦死してしまいました。

宮城 今2003年に、アナジラス入植90周年祭を催したいということをお聞きしまして、ああ、いいなあ、素晴らしいことだなあ、と思いました。名城さんのご趣旨にとっても感動しましたけれども、90年祭を是非成功させるためにも、また、このアナジラスで生きてきた先駆者の辿ってこられた足跡を何とか残してほしいと思います。一世の方々はもちろんのこと、二世や三世の方々にも自分たちが歩んできた歴史を自分たちの手で書いていただいて、記念事業の一つとして是非発表していただきたい。

—— お話の途中ですけれども、私もそういうことには、もろ手を挙げて賛成したいと思います。私たちの記念誌を出すということは、一つのモニュメント（記念碑）を建てることと全く相通じることだと考えます。もし、2003年の入植90周年祭に向けて、記念誌をお出しになるのであれば、沖縄県人会本部には、山城勇編集委員長を中心に、私たちが今作っているこの記念誌の編集委員会も存在していますし、それを解散せずにかこのまま存続させて、各県人会支部や県人の皆さんが計画していらいっしやることにおよばずながらお手伝いさせていただく、これも一つの方法ではないか、というような気がします。

名城 サンパウロの県人会本部とは、つとめて緊密な関係を保つていきたい、と考えています。

—— 沖縄県人会本部からの協力は、本部が各支部や会員から毎年、会費をいただいている以上、反対給付として当然考えていかなければならないことだと考えます。今の時代、やらざるばかりの方式というか、略奪農法みたいなやり方では、誰も付いてきませんよ。今本部にある編集委員会をそのまま各地域に存在する県人関係団体や個人から持ち上がる記念史発行計画に、主として編集技術面などで、側面から助言なり協力をさせていただくような組織へ移行させていくことは、かねてから私が考え、願っていたことでもあります。山城勇編集委員長あたりと、これからは非検討していくべき課題のように判断されます。

名城 是非そういうご協力をお願いしたい、と思います。

—— どうも本日は、重ね重ね、有意義なお話を大変有り難うございました。名城さんがとてもうまく、順調にお話を進めてくださって、私もホッとしているところです。

■ ミラカツ

かつて名だたる陸上選手として鳴らしたこともあり、最後のバトンを受け取っていただくミラカツ市在住の長田栄治氏（帰化ブラジル人名護市出身80歳）のお話には少なからず手子摺りような予感が最初からしていた。しかし、実際に会って質問のいくつかをさせていただいて、これは予想以上に「難物」であることがすぐにわかった。何しろ、お話が質問からどんどん横道にそれて行ってしまう、インタビュ어의最終走者であるご自身は、信号無視、スピード違反みたいなことを、かなり平気でおやりになる。伴走しているつもりのこちらは、そのハンドルさばきを何とか元へ

戻させるのにフウフウ息を切らし、汗を掻いてしまった。若い頃からこの地域の指導者的立場にあり、ミラカツ市衛生保健局長などの要職も大過なくこなしてきた同氏は、生涯ずっと全力疾走を心がけるようなパッション（熱情）の人、と見受けた。

—— 長田さんは、もうすっかり有名な方ですから、今までにもいろんな方々が訪ねてこられて、お話を伺いしたと思います。今更インタビューでもありませんが、今日は出来るだけこれまでの方々とは、異なったお話が伺いできれば、という風に考えております。瀬名波（美恵子）さんがこちらへ取材にきて書いた記事も出るようになっていそうですので、その足りないものを少し補う形を取りたい、と思います。

長田 ウチには実際、いろんな人が来ます。

今朝も日系人の神父さんが結婚式の帰りにやってこられましたよ。私の場合は、小学校時代から沖縄の歴史が好きだった。父が歴史に関する本を沢山持っていて、それを読んでいたから沖縄のことは大概知っています。一応日本歴史も7年間、勉強しました。特別養成所や軍事教練に入っていたから、純粹の明治憲法を勉強した人間です。私は、7歳でブラジルに家族移民できましたが、向こうへ行ったら向こうの人間になって、結婚して日本には帰ってくるな、といわれてきた。ブラジルへきたら戦争中我々も同胞も大変困ったが、帰化していた人は自由に歩いて他人の為もしていた。私もブラジル人、特に後からこの国の大統領にまでなったジャニオ・クワドロスさんから勧められて帰化しました。あの人が無役の時代によくミラカツへこられて、死ぬときまで個人的に親交があった。私が政界に入ったのもその関係からです。私は日本からやってきて、ブラジル人の間に入って、ブラジル人になった人です。幸い、私が来たときはここがミラカツ市の発展の発祥

地だった。

—— 沖縄県人の移民のことを考えるとき、ここサントス——
ジュキア線といえますのは、沖縄を除きますとブラジルにおける
我が県人の第1番目の故里といわれています。それから2番目に、
ノロエステ沿線とか、カンポ・グランデ市とかがくるところで
す。長田さん、ブラジルにおける県人の第一の古里の中でも、こ
のミラカツを永住の地と決められ、終のすみかを構えられたのは、
どうしてでしょうか。

長田 ミラカツを選んだのは、結局、結婚して農業をやらな
いと、自分が見捨てられる。子どもを沢山産んで増やせ、と家族
会議で選ばれて私は、ブラジルへ来ました。早く結婚して子ども
を増やせ、というおばあさんからの遺言もありました。ジュキア
線にいろんな問題があったとき、ここの市長さんには、実にお世
話になりました。

あの時代、経済的に苦しく食べるものもないときに、融資まで
してくれました。ジュキア線ではここのジョアキン・ダ・フェレ
イラ市長ほど偉い人は、いないのではないかと今でもそういう
風に思います。必要書類に署名をしてくれたり、金を貸してくれ
たり、土地を借りてくれたり、保証人になってくれたり、宮城利
三郎さんがここに土地を買ったのも、この人と親交があったため
です。

—— ミラカツのバナナ栽培がさかんになったのは、いつ頃か
らでしょうか。

長田 1945年あたりからだと思っています。

—— ブラジルにたとえ50年住もうが、60年過ぎそうが、
「われ尚旅路にあり」という思いがなかなか消えずにいるのが移民
の宿命であり、性でもあると思います。長田さん、このサントス
——ジュキア沿線といえますのは、サントス港にも海にも比較的近

いですよね。カンポ・グランデなどのもう一つの沖縄移民の故里に住んでいる人たちとはおのずから異なつて、本当の故里であるウチナーに対する郷愁の念が一段と強かつたのではありませんか。先ほどの長田さんのお話の中にもありましたように、「棄民だけでも、5年したら沖縄へ帰るんだ」という沖縄に対して向けられる郷愁の思いといったものは、この沿線でバナナ栽培に携わっていた人たちには、ひとしお強くまた、たえず残つてたわけですか。

長田 今でもあります。イタリリ、アナジアスの連中、もう年を取った人は殆どいなくなりました。私が何かの用事で行つて、座つたら昔の話しかない。ウチナーへの郷愁を忘れたらいけない、皆がいます。

——でも現在の長田さんがおつしやる郷愁というのは、沖縄へ帰りたいたいという気持ちではなくて、単に懐かしむということのように感じられます。あの頃は、ひたすら生まれ故郷のウチナーへ帰りたい、という望郷の念が強かつたわけですよ。昔はサントスへ行きさえすれば、港があり、船も出る、というせつない思いがあつたわけですか。

長田 それがあつたのは、最初の5年間だけです。結婚してしまつたらあとはこのブラジルに踏みとどまつて、子どもや子孫を生めよ、増やせよ、といったことばかりひたすら考えてやつてきました。

——大変結構なことじゃないですか。それが発展の秘訣であり、原動力ではないですか。つい涙が出てしまうほど、非常によいお話でした。

長田 私は結婚したとき何もなかったが、勇氣だけはあつたつもりです。家内が野菜をミラカツまで売りに行つて、レイテ（牛乳）を買つてきて、そういう風にして12人の子どもたちを元気に育てました。

—— これまた実に感動的なお話です。その子どもさんたち、殆どここですか。サンパウロですか。

長田 サンパウロです。

—— 向こうでどんなお仕事をやっていますか。

長田 いろいろですよ。

—— 沖縄県人会の支部はミラカツにもあると思いますが、支部活動は、活発に行われていますか。

長田 県人会の支部活動は、日本人会の中で行われています。1937年に日本人会を作ったときは、県人も多かった。戦争中にミラカツ日伯青年会を作り、それが動機となって汎ジュキア日伯陸上競技連盟を結成して、イタリリで汎ジュキア陸上大会などをやりました。

—— 約1年前にカンポ・グランデにやはり記念誌の取材に行って、県人子弟がかなり規模の大きなスポーツ・クラブを経営したり、まとまっていることに感心しました。現在、この地域の沖縄県人の子弟たちは、県人会活動に関心を持っていますか。活発に活動していますか。

長田 関心は持っていますが、仕方なく付いてきている、といった感じです。昔は会という会の役員や幹部、その他の指導者層は皆ウチナンチュでした。ちょうどその頃、臣道連盟などの組織に入っている者を入れないで、ジュキア線がこぞって汎ジュキア青年連盟なるものを作ったんです。

—— 長田さんの場合、ジャニオ・クワドロスさんとかブラジルのトップ級の政治家、影響力のある多くの有名人などと付き合いをかなり幅広く持っています。その外にこのサントスージュキアお話の中でもよくわかります。その外にこのサントスージュキア沿線で生活した沢山の沖縄県人の先駆者たちの生きざまや教訓にもいろいろと触れられたと思います。長田さん、我がウチ

ナーンチュの先人たちの、ここは偉いなあ、他府県人にも負けな
いなあ、と感心せざるをえないところはとういったところ
ですか。

長田 例えば、ある問題を巡つての議論をやるとします。当然、
反対意見も出ます。喧嘩もします。だが、多数決で決まったこと
は、最後まで一致協力して盛り立てて行く。それが我が県の先人
たちの一番よいところでした。ブラジル人の偉い人のところに
いって「沖縄生まれだ」といいますと、ちゃんとその精神面の優
れた点を認めてくれました。ところが、それが我々の特に二世、三
世の政治家には不足しています。

—— 今のお話で、今日のインタビューの結論みたいなものが
出つつあるように思います。
とても素晴らしいお話です。

長田 昔のウチナーンチュは劣等感が強くて、自分がやったこ
とでも、自分がやった、とはなかなかいいませんでした。他府県
人は自分がやらなかったことでも、自分がやったとよく言いまし
た。

—— 沖縄県人は得てして、でしゃばらなくて、謙譲の美德が
あるということかも知れません。
他府県人が欲しいというんだったら、まあ、譲ってやりましょう、
ということではないですか。

宮城（あきら編集委員）長田さん、それはよい意味で言ってい
るのですか、それともウチナーンチュは、ここを直さなければい
けない、という意味ですか。

長田 よいところもあります。

—— 長田さん、今さっき、立派な先人たちが数多くいた、と
おっしゃいましたが、その先人たちあるいは、お父さんやお母さ
ん、その他肉親から聞いた「ゆしごと」で、何か忘れがたいもの

がありますか。

長田 私 の兄貴は、自分の進む道は「いつも自分で切り開け」と口癖のようにいい、また事実、そういう勇氣と頭脳と健康にも恵まれていました。その兄貴から私は、ずいぶんと訓導を受けました。健康にあまり恵まれていなかった私に、兄貴が言ったことといえは「今からの人間は、すべて自分の道は自分で切り開いていくような魂がなければならぬ。君のように病弱のまま、何もしないで生きていくよりは死んだ方がいいから、これから自分のいうことを聞くか」というので、「絶対聞きます」といったらその日以来、学校から帰ってきた私を捕まえては、器械体操をさせる、走らせる、海に連れて行って、ボートから水の中へほうり込んで泳がせる。医者 は用心しろ というのに、兄貴は、全く意に介さず、その逆のことをやりました。そうすると、小学四年の頃から他の子どもがとてもやれないことまで、なんでも出来るようになりました。空手も剣道も、兄貴が教えてくれました。兄貴が自分に残した「ゆしごと」は「自分の道は、自分で開ける。そして、いい先輩のあとを信じて付いていけ」ということでした。

—— ところで、ミラカツではどうですか。

沖縄の伝統文化、音楽や踊り、それに料理などは、大切に守っていらつしやいますか。

長田 日本人会の中で以前はかなりやっただんです。今は止まっています。止まってしまった原因は、三味線を引く人がなくなつて後継者がいません。

—— 二世、三世の人たちは、それを受け継いでいませんか。実に残念ですね。

長田 バナナ園を経営したり、衛生局長をやったりしながら、そんな中で県人会の支部長としての仕事を一切合切やってきたのですが、踊りのための組織までは、手が回りませんでした。また、

時間ありませんでした。

—— 長田さんご自身はミラカツで、こんな立派なバナナ園を経営なさっていらつしやいますが、日々の生活の中で沖縄の食べ物とかは、つとめて食べていらつしやいますか。

長田 しよっちゅう。とても好きです。豚肉、昆布、豆腐、ゴボウ、人参など。

—— 豚肉は、ウチナー式に脂を取ってやる同じやり方ですか。

長田 豚肉は大抵ウチナー式です。

—— あと8年もしますと、日本移民百周年祭が回ってきます。これからサントス―ジュキア沿線という我が移民の古里がどういう風に変化を遂げていくとお考えですか。特に若い人たちとの関係も考慮に入れながら、少しお話になつてください。

長田 今のところ見通しは立っておりません。何故かといいますが、私の家族を例に取つてもイタリア系など広くブラジル人と結婚したりして、これからどのような変化を遂げていくのか、なかなか先が読めません。

—— 大変唐突で申し訳ありませんが私は、今日、サントスを振り出しにアナジラス、イタリリ、そしてこのミラカツに至るまでの道すがら、街道の左右の山肌にちょうど耕して山に至るといった感じで、見事なバナナ園が造成されているのを見ながら、ふと、思つたんです。この立派なバナナ園も、一世の人たちがすっかりいなくなると、やがてどのようなになるだろうか。

サントスを起点に、ジュキアを終点とする全長160キロに及ぶこの鉄道は、廃線同様になつてからかなり久しくなり、往時茫々といった感じがしてきていますが昔は、まさしく「移民鉄道」にも等しく特に、我が沖縄移民の先駆者たちがさまざま喜怒哀樂をお互いの胸に秘めながら、日々の生活の為に利用した、いわばその生命線にあたる鉄道だつたんでしょう？。

長田 実に多くの初期移民がとてもお世話になった。

—— 先ほど大変唐突、突飛な感じで申し訳ありません、と
いったのは私は、司馬遼太郎の歴史小説、なканずく「街道を行
く」などの歴史紀行文が好きですが、司馬史観ともいうべき独特
の視点を持った司馬さんが健在な間にブラジルへ来て、移民の哀
歓のひとときを漂うこのサントス—ジュキア沿線にも足を伸ばして
貰って、そしてあの「移民鉄道」がまだ動いていて、それに乗っ
たと仮定したら、日本移民というものが今まで辿ってきた足跡、
これから辿りゆく先などについて一体、どのようにユニークな感
慨を抱き、また、明快な判断を下したか、といったことに大変に
興味を覚えるんですよ。そういったことを、あのバナナ園を見な
がら考えてきました。司馬さんを生前、ブラジルへ呼ぶ話は、文
協あたりを中心に実際に出たこともあったそうですよ。ニュー
ヨークに住むユダヤ系民族のことについても、非常に示唆に富ん
だ見方を発表していましたね。

長田 このサントス—ジュキア鉄道と喜びや悲しみを共にした
実に多くの県出身の先人たちがこの世を去り、残っているのはわ
ずかになりました。

—— ブラジルに生きるものとして、いわゆるブラジル人と結
婚して次第に同化していくのが一つの避けて通れない道、宿命み
たいなものと考えられますが、どうですか。

長田 赤嶺さんたちが今一生懸命にやっていること（記念誌の
編集作業のことか）もあと10年すれば、今昔の感に堪えない、と
いうことになりますよ。私たちも昔は、食べないでいても、喜ん
で県人会の仕事をよくやったもんです。ただ、あの時代と今の時
代とでは、県人会の理事の気持ちの間に大きな隔たりがあるよう
に思われますね。きつと、一つの時代の流れでしょうね。

イタリリの地元有力者たち

―気骨のある清水としお先生―

マラソンみたいなこのインタビュー記事の取材中、イタリリにある上地弘英さん（名護市出身）の家でちよつと少憩をさせていただいた。上地さんは今年90歳を過ぎたいまでも、野良仕事の陣頭指揮を取り、自分の作物を手塩にかけている。山肌を利用してきれいに造成されたバナナ園がいかにも謹厳実直そのものといった感じのお人柄を表しているかのようだ。見事なバナナ園を一望のもとに見渡せるところに建てられた上地さんの家には、地元の有力者数人が既に待ち構えていた。その中に、イタリリ日本語学校で日本語を教えているという清水利男先生（東京都出身、63歳）の姿も見受けられた。清水先生は、イタリリに赴任なされる前は、ワーゲンなどの大手自動車メーカーで勤めてきた根からのエンジニアである。沖縄県人に囲まれた、唯一の他府県人である清水先生に使命感を帯び、真正面を向いて歩いている人のさわやかさを感じた。

こういう方々が折角、あつまってくださいだったんだから、ということで山城勇編集委員長から私に「少し今のブラジルの政治経済の状況について、何か即席の話でもしてもらえないだろうか」といった指示が出された。一通りの話しを終えて、簡単な質疑応答の時間に移ったとき、かなり積極的に質問してくださいだったのが清水先生であった。そして、清水先生のご質問は、殆どが例の「沖縄サン」についてであった。私事にわたって恐縮であるが、この「沖縄サン」という表現の仕方には、少し苦い思い出がある。それは今から約20年前のことだろうか、あるコロニアの主要公団体の会長が沖縄県人関係のある公式の催しものの席上、挨拶の中で、「沖縄サン」を連発したことが邦字新聞の社会面で報じられ、当時まだ若くて血気盛んで、多少向こう見ずだった私は、す

ぐに同じ新聞の読者欄に、かなりきつい内容の抗議文を掲載してもらった。それから数カ月にわたって、ああでもない、こうでもない、と、読者同士による賛否両論が紙面を賑わした。今ではお亡くなりになった極めて人柄の良いあの会長が最後にはきちんと謝罪までしてくださって、ひとまず一件落着となったが、この「沖縄サン」という言葉を耳にすると、今でもある種のおどましさを覚える。言葉というものは、まず、使われる身にもなって少しでも不快感、違和感を与えるものであれば、出来るだけ使用しないように、避けて通るべきでありまた、それがその人の教養、というのが日ごろからの私の一貫した考え方である。いろんな人種に交わって生活しているこの国においては、なおさらのことであろう。

もちろん、清水先生の「沖縄サン」に関する質問は、悪意を帯びたものでは決してなかった。少し記憶が不鮮明で、おぼつかなくなりつつあるが、多分、先生の疑問は「つい先日、ある邦字新聞の連載小説の中で、かさと丸移民の間でも、この沖縄サンという言葉が使われていることを知りましたが、そんなに古い歴史を持つ言葉なんですか」であつたように覚えている。清水先生のお顔は、心なしかこちらの方を向いていて、私に答えを求めているようにも見受けられたが、この言葉にまつわる暗い思い出があるので、ちょうど同席してくださっていた宮城あきら編集委員に助け船を求めた。物知りの宮城さんは、蒞蓄（うんちく）を傾けるようにして「沖縄サンなる言葉が使われだしたのは、おそらく日露戦争の頃だったでしょうから、相当使い古されて年季の入った言葉です」と、さすがに明解な答えを出してくれた。

ちょうどその時、約20年間もおとなしくしていたはずなのに、体の中のある虫がまた妙にうごめいてきたようで、私は逆に清水先生に「先ほど、先生は、沖縄サンという言葉が差別語、蔑みの

意味合いを含んでいるようにも感じられる、ときつきおっしゃいました。仮に、この沖縄サンという言葉をお使いになる時の先生は、そういう蔑みの意味合いがある、ということをお分かりになりつつ、あえて使っていらいやいますか」と、およそこのような質問をしてしまったのである。



右から2人目上地弘英氏、3人目は清水利男教師

この問いに対する間髪入れない清水先生のお答えは「私は、もちろん沖縄県人ではありませんが、沖縄県人というのは、何か時がたつにつれてかえってしつかりしてきたように思います。

例えば、他の日本人会というのは、次第に屋台骨が傾きかけている状態なのに、このように皆さんは、いまだに立派な記念誌を出すそうとしていらっしゃる。これからも大いにがんばっていただきたいですよ。私がこの沖縄サンという言葉、仮に東京あたりで仲間たちと何の気なしに使った時は、差別語ではありません。これまででは、皆が使っているからつい自分も使ってしまったくらいがあります。かえって沖縄の人のほうが礼儀正しく、今では、他府県人が沖縄サンと使いますと、違和感さえ覚えます。差別語と意識するようになってから、尚、その言葉を使うような人を私は、

無知だと思います」と、真にもって秀逸というか、真情のこもった内容であった。

沖縄には昔から他人の悲しみや苦しみをただ黙って見てはいられず、出来ることなら共に手を取り合ってその気持ちを一緒に共有したい、といった意味で「肝苦サン」(チムグルサン)という美しい言葉がある。こういった我がウチナーの名言の数々に、やはり一家言を持つ宮城編集委員が日本語にもなかなか訳すことのないこの「チムグルサン」のいわれを、ひも解き始めたとき、清水先生がいち早く両手を膝の上に置き、その姿勢を正したのには、見ているこちらのほうが思わず感動してしまった。

移民の故里で父から聞いた

沖縄の教訓歌

ブラジルにおける沖縄移民の故里の一つ、ジュキア線ビグアーで金城勲(糸満市武富出身。サンカエターノ・ド・スール市在住、70歳)は、厳父・亀吉(1937年渡伯、99年5月死亡)から沖縄の偉人で、新井白石や荻生徂来とも親交のあった名護之親方(程順則・1663-1734)にまつわる物語と同親方の作と伝えられている「いろは歌」を聞き、現在でもその教訓歌を鮮明に記憶している。

バナナ栽培という毎日の重労働に追われ、また、月の光が漏れる寒風吹き込む粗末な田舎のあばら家の中で、薄暗いカンテラを囲んでの一家団欒のときに、亀吉がこの教訓歌をかたり聞かせたのは「エンシャーダを握り、バナナを担ぐ明け暮れの中で、物心のついた私をはじめとする子供たちをそのまま土着の力ボクロミたいにさせてはならないという父の強くて温かい思い遣りがあつ

たために違いない」と、一家の長男だった勲さんは、今更のように感謝の念をこめて語っている。

沖繩の先人たちは、確かに立派である。光陰矢の如く六十年の歳月が流れ、あの頃のことや往時茫々となりかけた現在でも、勲はジュキア線という遠い昔の移民の故里で聞いた名護之親方のいろは歌を時々思いだしては、拳々服膺（けんけんふくよう）しているそうである。

【赤嶺 尚由】

名護之親方のいろは歌

い 意見（いちん）ゆしぐとや身（み）の上（うい）の宝（たから）
ら

耳（みみ）の根（に）ゆあきて肝（ちむ）に止（と）みり

ろ 櫓舵（ろかじ）定（さだ）みてる船（ふに）ん走（はし）ら
する

寸法（すんぷ）はじらすな肝（ちむ）の手綱（てじな）

は 恥（はじ）ゆ思（うみ）ちみり朝夕（あさゆ）物事（むぬぐ
と）に

わ肝（ちむ）修（うさみ）ゆる要所（かなみどころ）

に 憎（にく）さある人（ひと）ん憎（にく）さどんするな
肝（ちむ）の道（みち）すじや広（ひろ）く開（あ）きり

ほ 螢火（ほたるび）ぬ影（かぎ）に墨習（しみなら）てでんし
油断（ゆだん）さん者ど沙汰（さた）や残（のこ）る

へ下手（ひた）からる習（なら）て勝（すぐ）りゆんすゆる
及（うゆ）ばらんともて思案（しあん）するな

と年取てて居（う）てん従（いたじ）らに居るな
一事（ちゆぐと）どんすりば為（たみ）どなゆる

ち智能才（ちぬざ）ある人や世（ゆ）の中（なか）の手本（て
ほん）

朝夕（あさゆ）ちとみとて沙汰（さた）ゆ残（ぬぐ）す

り利根詐（りくんいち）わりやの芥子（けし）の花ぐくる
風（かじ）や吹（ふ）かなてん落（う）ちる繁（しげ）さ

ぬぬが苦（く）りさともて油断（ゆだん）どんするな
あまく働（はた）らちぬ仇（あだ）になゆみ

る瑠璃（るり）ぬ玉（たま）とむて肝（ちむ）ぬ持（む）ちな
しや

傷（きじ）ちかんえまる宝（たから）さだみ

を男生（うところ）まりてん女生（いなぐう）まりてん
油断（ゆだん）さん者（むぬ）ど身（どー）や持（む）つる

わわ身（み）に傷あらばわ身（み）ぬ傷（きじ）なおし
他人（ひと）ぬ傷すして益（えき）やねさみ

か隠（かく）ち隠さりみ人ぬ失（あやま）ちぬ
急（いす）じ改（あらた）みてわ肝磨（ちむみが）き

よ 他所（ゆす）ぬ上（うい）ぬ傷（きじ）んよそぬ傷とむな
わ身（み）ぬ良（ゆ）し悪（あ）しや定（さだ）みぐりさ

た 誰（た）るん勤（ちと）みりば年寄（としゆ）てぬ楽（らく）
ゆ

子孫（しすん）ゆしぐとや為（たみ）どなゆる

れ 礼儀（れいぎ）忘（わす）りりば闇（やみ）ぬ夜（ゆ）ぬ小
道（くみち）

ただ損（すん）なとて歩（あゆ）みぐりさ

そ 謗（すし）らわんかむ褒（ふ）なみらわんかむな

わ肝（ちむ）思染（うみし）みり朝（あさ）ん夕（ゆ）さん

つ 常（ちに）に思（うみ）ちみり人ぬ習（なら）わしや

わらびしぬ肝どじふくさだみ

ね 妬（ねた）さ腹立（はらだ）ちや怪我（きが）の基（むと）で
もの

義理（じり）ゆ思染（うみし）みてわ肝責（ちむし）みり

な 今（なま）わらびやてん白髪（しらが）かみとてん
重（んぼ）さ軽（か）っさしや肝（ちむ）どやゆる

ら 楽（らく）に育（すだ）つしや苦（く）りさする基（むと）い
物（むぬ）ゆ思（うみ）ちみて浮世（うちゆ）わたり

む 胸（むに）にある鏡（かがみ）朝夕（あさゆ）思（うみ）ち
みり

塵積（ちりつ）むてからや磨（みが）ちぐりさ

う 惜（う）しで惜しまりみ玉（たま）ぬ緒（う）ぬ命（いぬち）
若（わか）さたるがきてすそに持（む）つな

い いぬ春（はる）になてん人ぬ花咲（はなさ）つみ

年（とし）ど寄（ゆ）て行（い）つる油断（ゆだん）するな
の 能羽（ぬは）ある者（むぬ）ぬ肝足（ちむた）らん者や
花（はな）や咲（さ）ち出（んじ）らん枯木（かりき）ぐく
る

お 重（んぶ）さ賢（かしこ）さや生（う）りじちとむな
油断（ゆだん）ゆい他（ふか）に科（とが）やねさみ

く 曇（くむ）や風（かじ）たゆて天（てん）の涯行（はてい）つ
い

人（ひと）や肝（ちむ）しちる浮世（うちゆ）わたる

や 貧（や）しる者とむて人ゆ嘲（あざ）むくな

明日（あちや）や身（み）ぬ上（うい）ぬ定（さだ）みぐり
さ

ま 勝（まさ）る痛（いちや）さとむて人誹（ひとす）しら故（ゆ
い）か

他人（ひと）に劣（うと）りたるわ肝責（ちむし）みり

け 怪我（きが）ぬ源（みなもと）や酒（さき）と色好（いるぐ
ぬ）み

朝夕（あさゆ）思（う）ちみり按司（あじ）ん下司（げし）ん
ふ 仏神（ふときかみ）でしん肝ぬ上ぬ捌（さば）ち
誠（まくと）ゆい外（ふか）に神やねさみ

こ 黄金（くがに）さち居（う）てん銀（なんぎ）さち居てん
肝（ちむ）ぬ持（むち）ちなしる飾（かざ）いさだみ

え 得（い）ての者（むぬ）ともて自慢（じまん）するな
人ぬ嘲笑（あざわれ）や毒（どく）るなゆる

て 手墨（てしみ）勝（まさ）りてん知能才（ちぬぎ）勝（まさ）
りてん

ど肝（ちむ）さだみ世界（しけ）ぬ習（なれ）や

あ 遊（あし）びたわむりぬ肝に染（す）りからや
意見（いちん）ゆしぐとん益（えき）やねさみ

さ 栄（さか）い衰（うと）るいや夏（なち）と冬（ふゆ）ぐく
る

繰（く）り返（けえ）し返しぬがりぐりさ

き 肝（ちむ）ぬ根（ね）ぬ責縄（しみな）すそにしちからや
手墨（てしみ）学問（がくむん）ん仇（あだ）どなゆる

ゆ 欲悪（ゆくあく）ぬ事（くと）や塵程（ちりふど）ん持（も）
つな

塵積（ちりつ）むてからや山（やま）どなゆる

め 珍（みじ）らさる物（もの）と肝に逆（じやく）するな
逆（じやく）や人間（にんじん）ぬ怪我（きが）の基（むと）
い

み 見（み）なり聞（ちち）ちなりや覚（うび）らじに染むん
粗相（すそう）にある人ぬ側（すば）に居（う）るな

し 子孫ゆしぐとや油断（ゆだん）どんするな
命（いぬち）ながする責縄（しみな）とむり

え 絵書（えが）き字書（じかち）や筆先（ふでさち）の飾（か
ざい）い

肝（ちむ）ぬ上ぬ真玉（まだま）朝夕（あさゆ）磨（みが）き
ひ 他人（ひと）や物事（むぬぐと）にわ身勝（みまさ）いとも
り

自慢（じまん）する者（むぬ）やばかどやゆる

む 無理（むり）ぬ銭金（じんか）にや仇（あだ）どなて行（い）
つる

義理（じり）ゆ思（うみ）ちみて無理（むり）にするな

せ 世間（しきん）立（た）つ波（なみ）に渡（わた）る身ぬ船
（ふに）や

肝ど舵でむぬすそに持つな

す勝（すぐ）り不勝（ふすぐ）りや肝からるやゆる
念（にん）ぬ入る者に下手（ひた）やねさみ

ん皆（んな）が読（ゆ）で朝夕（あさゆ）肝（ちむ）に思染（う
みし）みて

名護之親方（なぐぬうえかた）ぬ徳果（とくくあ）偲（しの）
ば

絆は堅くサンビセンテ・那覇姉妹都市

サントス市と並んで海浜都市として知られるサンビセンテ市と那覇市との姉妹都市提携は、時のサンビセンテ市長伊波興祐（後に連邦下院議員）が移民70周年を記念して実現したものだ。若さと行動力に満ちた伊波市長は、ブラジルと沖縄との友好と親善を深めようと、沖縄の首都那覇市との姉妹都市提携を企画、当時の平良良松那覇市長の理解と協力を得て移民70周年に合せて調印の準備を整えた。1978年10月23日、サンビセンテ市役所で行われた調印式典には都合よく、沖縄県人会の会館落成式と移民70周年の記念式典に出席のため来伯中だった屋良博副知事、那覇市長代理の前田武行助役、那覇市市議会議長の金城重正、島袋宗康市議、宮平洋総経部長及び在伯沖縄県人会会長代理の嘉陽宗備副会長らが出席、また、サンビセンテ市側からは伊波市長をはじめ、セバスチョン・リベイロ市議会議長、各市議、来賓としてマリオ・テイシェイラ・フレイタス地区裁判所長、第2軍管区のパウロ・ヌーネス・デ・アキーヌ大佐、照屋マリオ通訳、

その他官民多数が参列して調印式を行った。

資料：盟約書

日本国沖縄県那覇市とブラジル連邦共和国サンパウロ州サンビセンテ市は、経済、文化、産業及び教育等、あらゆる分野の交流を通じて、日伯両国間並びに両市間の友好親善と理解を深め、

さらに世界恒久平和に貢献することを念願し、ここに姉妹都市として提携することを盟約す。

サンビセンテ1978年10月23日

調印式終了後、屋良副知事一行は、サンビセンテ歴史博物館と歴史研究所を訪問、一方、那覇市の前田助役一行は当時建設中であったグルッポ・エスコラル（小学校）内に設置された「ナハ市幼稚園」の命名式に臨んだ後、市主催の歓迎レセプションに出席した。このレセプションには、政界、実業界の有力者や同市及びサントス近郊在住の県人や子弟が多数参加し、沖縄との姉妹都市提携第1号を祝った。

爾来、両市間に人的交流が始り、調印式の翌年1979年には、那覇市より平良市長がサンビセンテ市を表敬訪問。80年にはサンビセンテ市より伊波市長及び市会議員らが那覇市を表敬訪問している。

また81年8月には那覇市より、親泊康晴助役（現市長）と金城義夫秘書課長、謝名堂誠学校教育課長らがサンビセンテ市を訪問、姉妹都市提携調印時に取り決められた事項のひとつであった幼稚園教諭の交流事業について、アントニオ・ドレイス市長と具体的な話し合いを行った。その結果、82年には第1回目の交歓

教諭として、サンビセンテ市からマリア・ルイザ・コジオーラ、シブリーナ・モーラ教諭の2人が、また、那覇市からは松田スミ子、金城ルリ子教諭の2人がそれぞれ那覇市とサンビセンテ市で3カ月の研修を行った。

この幼稚園教諭の交換研修制度は各方面から好評を博し、93年までほとんど毎年のように実施されてきたが、94年以降は諸般の事情により中断を余儀なくされてしまった。しかし、交換研修制度を継続して欲しいという声が高まり、2,000年からは再開される予定である。

この幼稚園教諭交換研修制度はブラジル側にとっては、日本の幼児教育現場をつぶさに肌で感じ、学ぶことができ、また沖縄側の教諭にとつてはサンビセンテの幼稚園だけでなく、広くブラジルという国を見聞できる機会となっている。

姉妹都市提携15周年を迎えた1993年には、親泊那覇市長一行が来伯、在伯那覇市民会（上原 武夫会長―当時）は県人会ビラ・カロン支部会館で盛大な歓迎会を催している。この歓迎会の席上で、親泊市長から両市の交流事業を幼稚園教諭研修事業だけではなく、他の分野にも広げたいという意見が出され、早速翌年からはサンビセンテから土木技師と造園技師が、また那覇市からは都市企画技師と建築技師がそれぞれ派遣され、技術交流が行われるようになった。

また、同年には、那覇市よりサッカー研修のために13〜16歳の中学生6人（引率者知念安則教諭・稲福政賢交流担当主幹）が来伯、12月25日から30日まで、ジャバクワラ・サッカークラブで研修を行い、30日には同クラブチームと混成チームを組み、地元チームと親善試合を行った。

姉妹都市提携20周年の1998年には、サンビセンテ市に姉妹都市提携20周年を記念する公園——姉妹都市記念公園——が建設された。その公園には「守礼之門」が建設され、同市の観光スポットになっている。そして、その落成式には「ナハ・フェスティバル99」が1999年5月14日から16日（守礼之門落成式典は15日）、21日から23日にかけて盛大に実施され、姉妹都市20周年が祝された。このフェスティバルでは、琉球舞踊をはじめとする沖縄の伝統文化がサンビセンテ市民へ紹介された。16日には、姉妹都市提携の功労者として上原武夫前那覇市民会会長に、市議会から名誉市民章が授与された（この名誉市民章第1号は照屋マリオで94年10月）。



「ナハ・フェスティバル」はサンビセンテ市始まって以来の大イベントとなり、市民の間からは年中行事として毎年実施するよう要望が強かったことで、同市は毎年5月の第2週末と第3週末に開催することを決定した。

ブラジルと日本の間で、数多くある姉妹都市提携の中で、サン

ビセンテ市と那覇市のように20年以上も活発な交流を続けているところは数少ないだろう。この事業に最初からかわった照屋マリオは「この事業が順調にここまで育ってきたのは、両市長の尽力と市民の深い理解もさることながら、在伯那覇市民会はじめ県人の温かい協力があつたからこそであり、当初からかわるこゝとが出来た一日系人として大変嬉しく思います。そして、この有意義な事業が末永く続くよう各方面の皆様の御協力と御支援を御願ひします」と語っている。

【上江洲 清】

F A M I Gクラブの横顔

ブラジルに移り住んだ沖縄からの初期移民たちの中で、当時の余暇を利用して、自分の生活を楽しむこと、つまり、今で言うところのリクリエーション（レクレアソン＝娯楽）にまで思いをいたし、考えた者が果たしていただろうか。

耕地や開拓地におけるエンシャードと斧を手にしての毎日の明け暮れの中にあつては、一日も早くお金を儲けて、我が懐かしい故里沖縄に錦を飾りたい、と夢にまで見ることはあつても、この異郷の地でのつかの間の楽しみにひたることなど、先ず、考えなかったのではあるまいか。

今の沖縄県人関係の娯楽、もっと平たく言えば、自分たちの日々の生活の楽しみ方といったらどうだろう。場合によっては、母県にいる我が同胞たちよりも、お互いのライフスタイル（生活の型、あるいはその仕方）を、むしろ良く心得ているように思えてならないのである。それにこの国には、踊り好きな人たちが居ても立ってもいられなくさせ、室内外でのドンチャン騒ぎに駆り

立てる名物のサンバのリズムがある。

最近の日本では、よくインドア(室内での娯楽やスポーツ一般)とか、あるいはアウトドア(室外での娯楽やスポーツ一般)といった専門用語みたいなものが、もつともらしく使われているが、琉球舞踊とか琉球民謡は室内専用であり、そしてこの国名物の足を使つてのフットボールはもちろんのこと、晴れた日も風の日も屋外専用である。若い世代の沖縄県人子弟たちは、嬉々としてこの代表的なアウトドアのスポーツを楽しんでいる。

それにしても笠戸丸組に続く初期移民の先駆者たちの殆どが、見ている楽しく、自分でやつても楽しいインドアや、アウトドアを満足に楽しむこともなく、ただひたすら金を儲けて早く沖縄に帰ることだけを夢見て、くる日もくる日も額に汗してそのまま逝つたかと思うと、ここでもまたとにかく長生きだけはしておくべきだ、といった思いを深くするのである。

1999年7月現在で、日系コロニアと称される社会の人口は130万前後だろうか。その中のおよそ10%(13万人)くらいがまあいわゆる沖縄県系人だ、と見られる。政界、財界、官界及びその他の分野への県人子弟の進出は、すばらしくて目を見張るものがある。真に県人子弟の活動の裾野は果てしない。現代の人間は当然のことながら、我が先人たちのように働いてばかりはいられない。時にはリクリエーションをすること、つまり息を抜くことが大切だし、息を抜くための施設をもたなければならぬ。それにこの総ストレスの時代ときている。

若い世代の県人子弟の経済力が高まるにつれて、そういった県人主体の娯楽施設もだんだん増えてきた。シッポー(CIPO)の町から少し外れた、こんもりとした森の中に建つFAMIG(Familiaとamigoの意味)というクラブも、まさにそんな県系人が作つた娯楽施設の中の一つなのである。

前述のごとくFAMIGとは、Familiia（家族）とamigo（友達）から合成した言葉で、週末や祭日などに、一族郎党を引き連れて行ったり、あるいはお互いに活動する分野が異なり、これも日本の今の流行り言葉でいえば、異業種間で働く、主としてウチナンチュ同士のアミーゴが集まって楽しく語らい、併せて仕事に役立つ情報などを交換し合うというのが1975年に設立された時の目的であった。医者も弁護士も、経営者も商売人も、一般サラリーマンもそしてアウトローモ（独立職業人）も、それこそこの国の憲法で保証されているとおり、それぞれの職業の自由を重んじつつ、またともに衿襟を開いて、もつともつとアミザーデを育んでいくことを創立以来の何よりも大切な狙いとしている。

ご参考までに1975年4月の発足当時、1999年7月現在における役員の顔触れを紹介しておきたい。

■1975年7月当時の役員会

会長 LEONALDO NAKASONE

EROYHIRAKAWA

SERGIO NAKASONE

MAUROSHIGA

HIROJIO OMINE

ALCIDES ODO

SEISSU YAMAUTSI

CLAUDIO ISHIBASHI

■1999年7月現在役員名

会長 LEONALDO NAKASONE

SERGIO NAKASONE

ROBERTO ODO
SEISU YAMAUTSI
EROYHIRAKAWA

【赤嶺 尚由】

イーリア・グランデ

漁業から海浜リゾートへ変身



あれがイーリア・グランデと指さす幸良信吉さん

本記念誌に収録される特別記事として、「移民のふるさとめぐり」が企画された。移民の歴史もすでに90年が過ぎ、一世最後の記録を残すにあたり“移民のふるさと”を訪ね、埋もれた移民史の発掘を試みようというのがこの企画である。この企画にそって、いくつかの地方の名前と共にイーリア・グランデの名が上

り、記念誌編纂委員長の山城勇さんから「キミ、行ってみないかねー」と声がかかった。

イーリア・グランデと言えば勝連町津堅島出身者が多く移り住み、かつて漁業で栄えた所。しかし、今は時代の流れにともない、観光客相手の民宿へと変身、世代も一世から二世、三世へと移り変わり、知られざる“移民のふるさと”となっている。その知られざる“移民のふるさと”イーリア・グランデへ取材旅行に行つて見ないかというわけだ。

山城さんから声がかかった時、一瞬、ためらったがイーリア・グランデと聞いて、半ば反射的に「よろしいですよ」と答えた。そう私が答えたのは、実は10年前一度その島へ行つたことがあり、そこで南洋生まれの私にはなんとも懐かしいパンの実の木に出会つたことが思い出されたからである。あの時、島に住んでいる渡名喜樽正さんのうら庭で八つ手のような大きな葉っぱをつけた、パンの実の木に出会い、「ヤアーこれはまざれもないパンの実の木だ」と思わず一人ごとを発し、そこに立ちつくしたものだ。まさか、ブラジルにパンの実の木があるとは思つても見なかった私にとつて、それは大発見だった。しかし良く見ると実がなっていない。

それを残念がると、渡名喜さんが「実がなるのは4、5月頃だからその頃、また来なさい」と言っていたのだが……、あれ以来、島へ行っていない。島の取材を引き受けた私は、パンの実がなっていることを心密かに期待しながら、10年振りに島を訪ねることにした。

以下はそのイーリアグランデのリポートであるが、記念史の1ページを飾ることが出来れば幸いだ。それでは、まず、イーリアグランデの概略から述べるとしよう。

イーリア・グランデの概略

サンパウロからおよそ400km、サントス〜リオ街道BR101の149km地点に、リオ州のアン

グラ・ドス・レイスの港町がある。ここは大西洋を前に、日本の瀬戸内海にも似て風光明媚な景勝地で、その内海には大小365もの島が点在し、これらの島々を含めアングラ・ドス・レイス（以後アングラと略する）の沿岸地域一帯には政財界、芸能人などブラジルを代表する有名人の別荘、保養地があることで知られている。それと、もう一つアングラといえば、ブラジルで唯一の原子力発電所があることでも知られている。もちろん漁港でもある。

このアングラの沖合いおよそ14kmのところに、イーリア・グランデがあり、アマゾン河口のマラジョー島、サンパウロ州のサン・セバスチオン島（一名イーリア・ベーラ）に次ぐ、3番目に大きな島とされ地図で見るとアングラの沖合いに、まるでカニが横ばいしているように見える。

島全体は山並みがいく重にも重なり合い標高1030mのペードラ・ド・アークア、990mのピーコ・デ・パパガイオ、740mのピーコ・デ・フェレイラなどの山々がそり立っている。

緑で覆われた山並からなるこの島には、ほとんど平地はない。島の北東部にあるプライア・デ・アブロンという人口4000人の港町が唯一の町らしいところで、66軒の民宿があり、夏場には月間1万4、5千人の観光客で賑わうという。この港町とアングラ間を1日2往復のフェリー（500人乗り）が航行している。ところが、ここには日本人の民宿は一軒もない。島の大西洋側のプロベタというところに、新興宗教団体の村落があり、2000人ももの信者が住んでいるという。

島全体の人口はおよそ8000人といわれているが、山また山の島には道らしい道はほとんどなく、交通機関は船だけで海岸線

以外、住み場のないこの島のどこに、これだけの人が住んでいるのかと思われる。

島の周囲は155km、面積はおよそ193キ平方メートル。美しく入りくんだ海岸線に106のプライア（浜）が連なり、それぞれに名前がついている。ウチナーンチュの民宿はその全部が、アングラの港に対面した海岸線に点在している。現在この島には11軒のウチナーンチュ系の民宿があり、県人が築いた別天地となっている。

民宿めぐり

さて、私が今回、この島を訪ねたのは観光シーズンも終わりを告げた4月半ばすぎのこと。以前に住んだことがあり、島の事情に詳しい幸良信吉さんに同行をねがい、ロドビアリア・チエテより夜行バスで発ち、7時間の旅ののち翌朝アングラの町についた。出迎えてくれたのは、アングラの町に民宿を持っているイーリア・グランデ生まれの仲真次ゼンコウ君、40代の三世。住まいはサンパウロ市（ビラ・グスターボ）で、家族と共にパステル業を営んでいるが、観光シーズンの夏場になると、アングラの町で民宿を経営、ヨットで島々の観光案内もするという働き者。このたび特別に彼のヨット（エスクーナ、二本マスト）でイーリア・グランデへの案内をしてもらうことにした。（彼はこれからのべる仲真次蒲氏の孫にあたる。）10年前来た時は、アングラの港にヨットらしいのは見当たらず小型発動機船で波しぶきを浴びながら島へ行ったものだが、今では船着き場の横にヨットハーバーもあり、湾内にはいくつもの大型ヨットが停泊、白い船体の影が波にゆれている。

ゼンコウ君のヨットも60人乗りの大型。この日は私たち2人だけの客を乗せてアングラの港を出た。天気は晴れ。青く澄みきった海原には波一つなく、快調なエンジンの音をひびかせて沖へつき進む。頬をなでる潮風がなんとも心地よい。目指すはアングラの港から正面に見えるプライア・デ・バナナウ。

島の草分け、仲真次牛助氏

港を出てからほぼ1時間後にヨットは、ウチナーンチュの民宿で一番初めに出来た「POUSADA DO PRETO」の棧橋に着いた。今日はここを訪ねてから順々に民宿めぐりをする予定にしている。

出迎えに現れた主人の仲真次イワオさん（二世、66歳）に見覚えがある。「レンブラデミン？」（私を覚えていますか）と声をかけると、大きくうなずいてニッコリする。互いに手を差し延べ、握手を交わす。偶然にもここは10年前に、私が3日ほど泊めてもらった所だ。来意を告げると、広々とした食堂へ通された。前に来た時は、ベニア板で仕切られた粗末な部屋だったことが思い出され、「とても立派になりましたネー」と目を細める。漁業用にたてられた古い倉庫だったのが今は見事に改装され、2階建ての下が食堂で、上が客室になっている。

出されたコーヒーをすすりながら、席に着いたイワオさんに、10年前お世話になったお礼を述べた後、さっそくいろいろ話を聞いてみることにした。

民宿を経営しているのはイワオさん夫婦と長男のキヨシさん（40歳）夫婦。民宿を始めたのは87年頃からで、現在34室（4人1部屋）を持ち観光シーズンの11月頃から3月末までは、毎日40〜50人の来客があり、大変賑わうとのこと。

4月以降になるとシーズンオフ。来客はほとんどないので、この期間は建物の補修、管理に当てるという。半年足らずの商売でも、なんとかやっていけるので困ることはないらしい。

イワオさんの父親の牛助氏（1980年没、行年81

歳）は1917年、17歳の時見蒲夫婦と共に津堅島から、はじめてブラジルへ移民した一人。当初モジアナ線チビリサに配耕されるが、当時の移民のほとんどがそうであったように、配耕先のコーヒー園での生活に耐えられなく知人を頼ってサントス市サボア区に移り、野菜作りをするかたわら漁業に従事、5年後に沖縄から波田間次郎氏の三女、シゲさんと呼ばひ寄せて結婚した。

22歳になったばかりのシゲさんは自ら作った野菜と、夫が捕ってくる魚をかごに入れ、頭に乗せて売り歩き生活を支えなければならぬ苦闘の時代を過ごした。

サントスで半農半漁の生活を送ること5年、今度は新興の港として知られつつあったサンセバスチオン港に移り、いわし節（ダシコ）の製造に従事することになった。

対岸に浮かぶサンセバスチオン島は、別名イーリア・ベーラ、日本語で「美しい島」と呼ばれる程島のたたずまいの美しさは、故郷津堅島を思い起こさせたに違いない。イーリア・ベーラにはすでに日本人18家族が漁業に従事しており、その中には糸満出身の大城亀小氏とその義弟の上原牛助氏（のちにイーリア・グランデに渡る）の2家族がいて、いわし節作りをしていた。

サン・セバスチオン港に移ってから2年後に、牛助氏は誰の手づるか知らないが1人で、いわし漁船に便乗して、リオ州のイーリア・グランデの視察に出かけた。着いて見るとアングラの港内一帯はバケツですくえるほどのイワシの宝庫。すっかり気を良くした牛助は引返すと、兄の蒲氏の家族ともどもイーリア・グランデへ移り住むことを決心した。当時はまだ、リオ州へ向かう陸路

はなく、バナナ搬送用のモーターつきカノア船をやとい家財道具と家族を乗せて、沿岸づたいに何日も航海を続けイーリア・グラндеにたどりついたという。津堅島に育った海洋民族ウチナーン・チュらしい逞しさだ。時に1935年のこと、これがイーリア・グランデで漁業を始めたウチナーン・チュの第1号で草分け的存在となった。

漁業といってもここでは、主にイワシのダシコや塩づけの缶づめや魚粉などを製造する加工業のことだが、牛助氏は始めにサン・セバスチオン港で覚えたダシコ作りから順次、塩づけの缶づめ（10kg入り）作りに移っていった。当初は販売にたいへん苦労したそうで、出来たダシコを箱に詰め、島からまず対岸のマンガラチーバまでカノアで渡り、そこからリオまで汽車で行き、なお夜汽車を乗り継いでサンパウロへ着き、カンタレイラのメルカードで卸ろしたり、時には奥地の植民地まで足を伸ばしたこともあったという。

ダシコは日本人には大変喜ばれたが、市場が限られていることと、製造に手間がかかりすぎるので今度はイワシの塩づけ缶づめを始めた。

それは生の海魚がほとんど手に入らない奥地の一般ブラジル人の需要が多いことに着眼したからだという。こうして始めたイワシの塩づけの缶づめはペルナンブーコ州など東北伯地方にまで販路をのばした結果、需要に供給が追いつかず、工場は拡張に次ぐ拡張を行い年々売り上げは伸び、輝かしい経済的地盤を築いた。そして次から次へと島へ渡ってくる同郷の者が増えた。一時はイワシの加工工場も22、3軒を数えるまでに増え漁業成り金と言われるほど島での事業は発展したという。

ところが、これほど隆盛をきわめていた漁業も1960年代後半までで、その後イワシの漁獲量が年々減って行くのと同時に奥

地から都会への人口流出に伴い食生活の変化、交通の発達により奥地でもなまの魚が手に入る。ダシコに至っては化学調味料の普及により消費が激減、加えて自然環境保護政策が強まり、衛生上の取り締まりも厳しくなるなど、諸条件が重なって魚の加工業は、年々衰退の一途を辿り80年代には工場を閉鎖して島を去る者が多くなっていたという。こういう状況の中で仲真次家ではダシコは70年に、塩づけの缶づめは86年に生産を停止せざるを得なくなり、その後工場を改装して現在の民宿業へ移ったという。

波田間家の民宿

次に訪れたのは、仲真次さんの隣りの波田間家の民宿。ここは津堅島から第2回目にブラジルへ移民した波田間実氏（故人）の長男実義氏（二世、故人）の末亡人フミ子さん（73歳）が子息たちと一緒に経営している。フミ子さんには7男3女があり、その内長男ヨシトク、四男ヨシノブ、五男ミノル、六男トクヨシの4人が民宿にたずさわり、残りはアングラの町やサンパウロに住んでいる。ちょうどこの日、サンパウロからフミ子さんの子や孫たちが遊びに来て、広い食堂で賑やかに談笑していた。休みともなると、こうして皆んなが集まってくるのが何より楽しみですと、フミ子さんは話す。民宿は漁業が立ち行かなくなったので仲真次さん同様87年頃からはじめ、現在、4人部屋18室がありなお9室を増築中である。

実氏は樽夫婦の長男で1918年、15歳の時、両親と共に着伯、モジアナ線のファゼンダに配耕されるが、1年後に同郷人の多いサントスのサボア区に移る。ところが、ここでも長続きせず再び奥地へ、今度はパラグアス・パウリスタで綿作りに取り組むが、実氏は過労で倒れ肺を患い、妻モーシーとの間に出来た4男1女（実義、実明、実夫、実徳、ハツ子）を残してサン・ジョゼー・

ドズ・カンポス市で1941年に死亡、(行年38歳)残された家族は、祖父樽氏(1986年死亡行年93歳)にともなわれて奥地からアングラ管轄のジャクイバという所へ引越し、しばらく野菜作りをするが、結局1947年、イーリア・グランデへ移り、やっと安住の地を得る。その後1986年までの40年間、魚の加工業に従事、前述の通り87年頃から民宿へ転業した。

ここに見るように、転々と移り歩いた様子から他の多くの初期移民同様、波田間家の苦勞がうかがえる。

渡名喜樽正さん

波田間家を辞して次の訪問地、プライア・デ・マタリーシへ向けヨットを走らせる。しばらく行くと、海上遠くからでもすぐ目につく白い建物が海岸線に見えてくる。その建物のカベに「K A M O M E (カモメ、商標)」と書かれた文字がはつきりしてきた。この文字には見覚えがある。

10年前来た時たしか、「ここが最後に残っているイワシの加工工場です」と案内された所だが、浜に降り立って見るとあたりに人は人影もなく、門が閉ざされてひっそりしている。この工場の持ち主は唯一の他県の方で、埼玉県出身の名を小高邦次といった。島一番の生産高をほこっていたが、91年に魚粉の製造を最後に閉鎖、小高さんは現在アングラの港に製氷工場を持ち、漁船用の氷を作っている。

この小高さんの工場のすぐ隣に、半分壊れかけたこれもイワシの工場のあとがあり、その裏にこれから訪ねる渡名喜樽正さんが住んでいる。

あのパンの木があったところだ。なんだか心がはずむ。あたりは以前と少しも変わっていない。

門をたたくと無精ひげをなでながら樽正さんが出て来た。10年ぶりに来訪した私のことがすぐには思い出せない様子。同行の善良さんがとっさに私とパンの木のことを話すと「やあ、あの時の：」といつて顔をほころばせた。どうやら私のことが思い出されたいらしい。あいさつする間もなく「あんた、良い時に来た。パンの実なら、今なっているよ」と言つて、さっそく10年前と同じように裏庭の方へ案内された。そこにはうっそうと茂っているあの時のパンの木にメロン大の実が枝もたわわになっている。夢にまで見たとはいわないが、期待していたパンの実が目の前にある。幼少の頃、南洋で食べた石やきに似たパンの実のおいしかったことを思い出しながら私は、何度もカメラのシャッターを切った。

さて、パンの実の話はまたの機会にとっておき、渡名喜樽正さんのことにペンを進めよう。樽正さんは今年75歳で、この島のウチナーンチュの長老格。日本語もウチナীগチもとても上手なので、てつきり一世かと思つたが、サントス生まれの二世だという。「どうして、ウチナীগチが上手なのか」と聞くと、親から「ウチナークトウバヤ、ワシテーナラン」(沖縄のことばは忘れてはならない)と教えられたという。本人には二世だという意識はないのでは、と思わせる程、ウチナーンチュという感じを受ける。

樽正さんの父、朗儀氏(1986年没、行年86歳)は津堅島から第2回目のブラジル移民として18歳の時、父樽金と母カメの3人で1918年来伯。モジアナ線レシチナ耕地へ配耕されるが、5カ月後ジュキア線ペードロ・デ・トレードへ移転、ここで5、6年米作りに従事するが落ち着かず、今度はサントス郊外へ移り野菜作りや養豚を始める。この頃、朗儀氏の弟亀三氏を呼び寄せる。サントスに10年程いたが、あまり恵まれず、次は当時綿ブームで湧くパラグアス・パウリスタへ、アーグアデポンバ耕地に入植して綿作りをはじめ。幸いこの綿作りが当たり、そこ

その資金が出来たところで考えることあり、1947年、イリア・グランデへ移り、漁業に従事するようになる。先に書いた波田間家と同じように、結局津堅島で漁業で育った者には農業は向かなかったらしい。

島に渡ったのは樽正さんが23歳の時で、その頃から島には津堅島出身者が多く集まり、活気にあふれていたという。

樽正さんは76年頃まで、塩づけ缶づめ工場を続けていたが、81年に隣りの小高さんにその工場を売却、その年に父親を郷里訪問させている。

それから5年後に85歳で父・朗儀は他界した。樽正さん自身は93年に訪沖、津堅島を2度訪問出来たのが何よりうれしかったと語る。樽正さんは妻ナミ子さんとの間に3男4女があり孫は15人を数え、ほとんどがサンパウロに住んでいるので、島には夫婦2人だけ。子や孫たちが時折帰ってくるのを楽しみに悠々自適の生活をおくっているという。話を聞き終えると、いつのまに用意したのか、もぎたてのパンの実数個と昨夜、捕ったばかりという海ウナギをお土産にいただいた。人なつっこい樽正さんの心尽くしに感謝して浜へ出る。

波田間実明さん

次はプライア・デ・マタリーシからヨットで1時間、島の左端にあるプライア・デ・ベルメーリヤへ。ここには波田間実明さん（二世、72歳）家族の民宿がある。実明さんは先に紹介した波田間実氏の次男、1947年、20歳の時、パラグアスー・パウリスタから家族と共に転住、当初、プライア・デ・バナナウに居たが、52年に独立して現住所へ。86年までイワシの塩づけ缶詰工場を経営。民宿は93年頃から始める。現在、25の部屋を持ちなお増築中である。

実明さんは妻シズさんとの間に5男5女があり、孫14名と子宝に恵まれ、この日もサンパウロにいる子や孫たちが大勢来て賑わっていた。

実明さんは渡名喜樽正さんに次いで、島の長老格だが、日本語やウチナীগチは樽正さんのようには話さない。おもしろいのは10人の子息の名前が皆、日本名である。民宿を見ているのは長男、ユーセイさん、五男のユートクさん、それに四女のトミ子さんの3人。次男と四男は日本、五男はサンパウロ、長女、次女、五女の3人がアングラの町にいて、三女はシンガポールに滞在しているという。

上地ユーセイさん

次に訪れたのは、プライア・デ・マグアリケサーバの上地ユーセイさん（二世、75歳）の民宿。

ユーセイさんの父・次郎氏（1989年没、行年88歳）は旧小緑村字大嶺の出身。15歳の時、長嶺信一さんの構成家族の一員として1917年（大正6年）に着伯。モジアナ線ビエーラ・ボンフィンに入植、コーヒーや綿作りに従事する。ユーセイさんは8人兄弟の長男で四男以外は皆ここビエーラ・ボンフィンで生まれる。1941年、ミナス州のカシャンブーに移り、野菜作りを9年間したのち1950年にイーリア・グランデへ移る、当時行商をしていた同郷人の上原安次郎氏からイーリア・グランデの漁業の話聞いて移ったとのこと。イワシのダシコ作りは65年頃まででやめ、86年まで塩づけの缶詰作りをしていたが、これも思わしくなくなり、工場を閉鎖してユーセイさん一家はサンタ・カタリーナへ移り、にんにく作りを始めるが、これが失敗に終わりサンパウロへ引き返し商売を試みる。そんな時、島にとどまっ

て民宿を始めていた上原文三さん（後述）から民宿が有望であることを聞かされ1991年、再びイーリア・グランデへ戻り、以前住んでいた住宅を改造して民宿を始めた。

あれから僅か10年足らず、写真で見るようなモダンな民宿へと生まれ変わり、建物と砂浜が島一番美しいことが評判になり、観光シーズンはもちろんだが、冬場でも遠くアルゼンチンからも観光客が来る程、客は切れないという。この民宿の良さと砂浜の美しさが買われ、ユーセイさんの民宿には、世界を周遊する豪華観光客船「ラプソディ号」が年に4回やってくるという外では見られない特色を持っている。現在この建物には19のバスルームつき部屋と六つの普通部屋があるが、写真上で見る建物と同じ作りの建物をその反対側に建築中である。

ユーセイさんは妻ツルさんとの間に2男4女があり、民宿はユーセイさん夫婦と長男夫婦が経営。ユーセイさんは96年に沖縄を訪問している。



上地さんのモダンな民宿

上地文三さん

次に訪れたのは上原文三さん（二世、66歳）の民宿。文三さんの父・牛助氏（1973年没、行年71歳）は糸満市字中村の出身、大城亀小の構成家族として17歳の時1918年着伯、ノロエステ線リンスへ入植。1934年頃まで農業に従事した。妻カメとの間に3男1女が出来、文三さんはその三男、上原一家はリンスからイーリア・ベラに渡り漁業を始める。1940年にイーリア・グランデへ移り、イワシの加工業に専念する。文三さんは85年頃までイワシのダシコや塩づけの缶づめ製造を続けるが、事業が立ち行かなくなり工場を閉鎖、この頃多くの者が島を去っていったが文三さんは島に留まり、88年頃から民宿を始め、これが刺激となって一旦島を離れていた者が、ぼつぼつ島へ戻ってきて民宿を始め出したという。文三さんは工場を改造して現在33室の民宿があり、夏場には1日80〜90人の観光客で賑わうという。文三さんには妻ハツさんとの間に1男3女があり、民宿は長男夫婦と共に経営している。

仲村ツル子さん

次の訪問先は、プライア・デ・ジャコネーマの仲村ツル子さん（60歳）の民宿。久米島出身。島で見る唯一人の戦後移民。1960年、父仲村一作さんを家長に10人家族の一人としてイーリア・グランデへ移住、蛭田徳弥さん（元パウリスタ新聞社長）が呼び寄せ人で、同氏の所有するプライア・デ・マタリーシのイワシ加工工場「KAMOME」へ家族ぐるみで就労。ツル子さんは着いたその年（60年）に同工場で働いていた小高邦次さん（渡名喜樽正さんの項で記述）と結婚、2人は蛭田さんから工場の経営を任される。

数年後、同工場を蛭田さんから譲り受け経営者となる。

60年から80年にかけて、イワシの加工業が最も盛んな頃で、ツル子さんの話によるとイワシを満載した漁船が次々に入り3、4日寝ずに働いたこともあり、常時50〜80人の人夫がいて月間80〜100トンものイワシを処理、塩づけするのに目が廻るほど忙しかったという。

この小高さん夫婦が経営する工場は仲村家と一緒にあって働いたこともあって島一番大きな工場へと発展した。しかし1991年、魚粉の製造を最後に閉鎖、前述の通り夫・小高さんはアングラの港で製氷工場を経営、ツル子さんは94年頃から、兄勇、弟進と共に現在のプライア・デ・ジャコネーマで民宿を始めた。ツル子さんには1男3女があり、末娘のひろ子さんがマネージャーをつとめている。

ツル子さんの民宿は海に面した小高い丘の上にあり、ヤシの葉かげごしに海が見える見晴しの素晴らしい所、写真で見えるように玄関先に船が横づけできるのがなんとも良い。この岸壁の先には、砂浜が広がり、その浜辺を駆け上がると、そこにはバナナや自生のパンの木がうつそ

うとおい茂っている。丘の上には1戸建ての民宿が7棟（3人、4人部屋）ほかに2人部屋が15室用意されていて、夏場になるとダイビングを楽しむ若者が多くやって来るという。

玄関先に停泊している船の改裝作業でいそがしいツル子さんに別れを告げてヨットに戻った。

このツル子さんの民宿を最後に今回の民宿巡りのルポを終えて、私たちはアングラ向け帰路についた。

イーリア・グランデの取材を終えて

今回、埋もれた移民史の発掘を目的にイーリア・グランデを訪

ね、漁業から民宿への移り変わりを取材して、私が強く感じたのはウチナーンチュ移民の遅しさだった。

冒頭の島の概略でも記したように、みどりに覆われた山また山が連なり道らしい道もなく、海岸線以外に人の住める所のほとんどない、この島によくも移り住んだものだと思う。すぐ隣りへ行くにも、14km向こうのアングラの町へ買い物に行くにも、小舟を漕いで行き来するという大変不便な島で、魚の加工業を興し、移民の故郷を築き上げた人々の遅しさは特筆に値しよう。

次に取材の余録を記し、島の“移民のふる里”の様子をのべることにしよう。

◎戦争当時のこと

サントス方面の沿岸地域に在住していた日本人が敵性外国人として強制的に立退きを命じられた当時、イーリア・グランデ在住のウチナーンチュは、官憲によつて家宅捜査こそされたが、特に異常が認められなかったので立退き命令を受けることなく安泰に過ごしたという。

取材に出かける前、その昔小さな沖縄からブラジルの大陸にあこがれて渡ってきた筈の移民が、なぜ、イーリア・グランデのような島へ渡り漁業に携わったのか、という疑問を抱いていたのだが、この疑問に答える当時の一世の姿は今はなく、その苦労話も充分に聞くことが出来なくていささか残念だった。

◎お祝い事

生活が落ち着いてくると出産祝い、誕生祝い結婚式なども催されるようになり、沖縄式にブタをつぶしトーフやモチやテンプラのごちそうを作って祝った。

正月には、この家からあの家へとカノアに家族をのせて1週間も

年始まわりをしたという。

◎会館

50年代になると家族数も増え仲真次家の屋敷内に会館も出来、青年男女の社交の場となり、むこ取りよめ取りも島内で行われ、島にいるウチナーンチュはほとんど親戚関係になっている。

青年男女に佐藤さんという人が日本語を教えていたが、長続きしなかった。

◎琉球舞踊

サンパウロから宮城定信さんという琉舞の先生がやってきて1、2カ月程滞在して琉舞の手ほどきをし、三味線は波田間樽正氏が弾いた。

◎県人会活動

ウチナーンチュは3人集まれば会を作りたがるというが、県人会（同志会）組織はどうか。県人会発行の「ブラジル沖縄移民誌」（屋比久孟清編著）によると1954年に県人会イーリア・グランデ支部が結成され渡名喜亀三氏（樽正氏の叔父）が初代支部長を7年間務め、次いで伊覇菊一氏（54年着伯）が61年から67年までの6年間務めたがその後は支部長のなり手がなく自然消滅している。

漁業組合については、話はあったが実現するに至ってない。意外なことに頼母子講はなかったという。

ウチナーンチュは地縁血縁をたよって一カ所に集まる集団性があるのか、例えばジュキア方面の気候風土がやん原によく似ている為もあってか、あの一帯には名護や羽地出身が多いように、イーリア・グランデに津堅島出身者が多いのも興味深い。島に対

する郷愁からだろうか。

さて、80年代以降漁業が立ち行かなくなり多くの者が島を去り、その殆どがサンパウロ市北部のビラ・グスターボでパステル業を営むようになったが何人かが島に留まり民宿業に変身したことが島の様子を一変させ、観光地として脚光を浴びるようになった。

一世が築いた基盤の上に二世、三世が民宿をはじめてから10年余り、観光地としては余り知られてないが取材を終えて島からアングラへ帰る途中のヨットの中で、私の取材に協力してくれたゼンコウ君に「民宿業は今後有望と思えるか」とこの質問をして見た。すると、彼は即座に「シン」（はい）と答え、その理由として陸沿いの海浜とちがい、波がとても穏やかで海水も青く澄み、入り江が美しく連なるイーリア・グランデは、海洋レジャー（つり、ダイビング、カヌーやヨットで島巡りをするなど）が楽しめる。

観光地として家族連れや地域の団体のほか、特に若者に人気があり年々にグループツアーが多くなっていること、また自然環境保護地域にも指定されているので、保養地として長期滞在するには最適であることなどを上げている。

そして彼は「自分の夢はイーリア・グランデにプライアを買ってそこに立派な民宿を建てて、多くの人をヨットで案内することだ」と付け加えた。

彼の頼もしい話を聞いて“移民のふるさと”イーリア・グランデは漁業から今や海洋レジャーで人気を呼ぶ観光地へと生まれ変わり、新しい時代の到来を見る思いを深くすると共に、これはわが沖縄県人の大きな財産ではないかと明るい気持ちにさせられた。最後に一人でも多くの方にイーリア・グランデを訪れることを

お勧めしたい。(1999年9月記)

〈付記〉

イーリア・グランデに津堅島出身者が多いことに鑑みて彼らのふるさと津堅島とはどういう島か参考までにそのあらましを付記することにした。

津堅島のあらまし

津堅島は沖縄本島中部の与勝半島(与那城村と勝連村)から南東の沖合い5kmの所にあり、中城湾の入口に位置し、南側は「ホワイト・ビーチ」への出入航路になっている。

島の周囲はおよそ8km、面積16平方km人口は862人で戸数が241戸(1989年9月現在)となっており、島の周囲がイーリア・グランデの約二十分の一。人口が約十分の一という小さな島。地形は平坦で一番高い「新川城」が海拔37、5mしかない。この丘に上ると東の方に太平洋、西の方に沖縄本島が広がっている。海岸線には防潮林として「アダン」「ヤラブ」「木麻黄」のほかに多くの樹木が植えられている。

島は水資源に乏しく、本島から海底送水管で給水を受けている状態で、電気も本島から海底ケーブルで送電されている。

去る沖縄戦では、米軍によって徹底的に破壊され住民は本島に強制移転させられた。米軍は無人島と化した島に居座り、住民は戦争終結後もしばらくの間、島へ帰ることを許されなかった。

1949年、米軍は島への居住を認めたものの、いざ帰島してみると島は廃虚と化していた。このため津堅島出身者の多くがそのまま本当に居残り、現金収入を求め軍作業に従事した。これら島をはなれた者が1953年に郷友会を結成、現在では会員数約

2千名を数え、それぞれの会員が企業を経営したり、あるは公務員としてその活躍ぶりは目覚ましいものがある

組織も那覇支部、宜野湾支部、コザ支部、具志川支部、与勝支部が結成され支部毎の活動も盛んで、島との交流を深めている。

津堅島は何処に住んでも漁と耕地の便には事欠くことのない半農半漁の島であるが、戦前の農業は芋作りが主で大根、大豆、麦、粟、野菜を栽培し、やぎ、豚を飼育して有畜農業の自給自足だった。換金作物としては、大根が主で正月の費用をまかっていた。大根は一本で10kg位に生育し那覇の市場では鏡地大根と共に津堅大根として有名だった。

戦後は、戦前の大根栽培に代って人参栽培が換金作物として有望視され、津堅島の人参は味も良く品質良好で好評を得、農協を通して県外にまで出荷されるようになり、1979年には国から人参の特産地に指定されている。

◎津堅島と海外移民

戦前、津堅島では半農半漁の自給自足でその日暮らしの生活だったため、将来への希望が持てないということで若者達の目は必然的に海外に向けられていた。

特にまわりを海に囲まれ、ケシ粒みたいな島の住民にとって海の遙かかなたの世界に憧れを抱き若者達の多くが海外移民として島を離れて行った。津堅島の人達が移民した国々は、南洋諸島が最も多く鯉漁業に従事した。次に多かったのはフィリピンでマニラ麻栽培と追込み漁業に従事した。3番目に多かったのがブラジルで、大正6年（1917年）、「海外興業株式会社」の幹施により第1回家族移民として、前仲真次家の蒲夫妻と弟の牛助、幸良次郎夫妻とその従弟、比嘉蒲夫妻と弟の次郎ら合わせて10名だった。

大正7年（1918年）には第2回目の移民として古喜屋亀夫妻と弟幸徳、渡名喜樽金夫妻と長男の郎儀、波田間樽夫妻と長男の実、後萩堂次良夫妻と妻のいとこの仲間徳十郎、東棚原武戸夫妻と甥の伊覇樽金ら、計17名だった。

戦後は仲真次牛助によって、53年に知念謙一夫妻が呼寄せ移民の第1号となり、それ以降54年から59年の間に渡名喜菊一、波田間正順、仲真次栄徳、幸良信吉、知念スミ、謙次らの家族合わせて50名がイーリア・グランデに移民してきた。ブラジルの次にはペルー、アルゼンチン、カナダ、ハワイにそれぞれ小人数が移民した。

津堅島にちなんだ歌

ゆがふ津堅島

1、津堅ている島や畠青々と

人参ぬ波ぬあん美らさなびちゆがふ

2、初原に出じて風んすいすいと

ゆかて人参やみるく世ぬしるしうがふ

3、みどり葉ぬ美らさ肝ふくらしやぬ

何時ん言語れや芋つくいぬ話ゆがふ

4、昔の屋ケ名までサバニ小し通て

今やまぎ船ぬ出じやい着ちやい港うがふ

5、あらか山ぬぶて東海見りば

港入る船やましくぶんたまん大漁ゆがふ

6、港来る船ぬ五色旗立てて
我した津堅島まさてかりゆし繁盛ゆがふ

このレポートを記すに当たり、次の書籍を参考にした。

①津堅島の記録

（比嘉繁二郎著）

②在伯沖繩県人・50年の歩み

（城間善吉著）

③ブラジル沖繩移民誌・同移民 名簿

（屋比久孟清著）

⑦ 結び 笠戸丸移民から何を学ぶか

（イ）われわれのルーツⅡ笠戸丸県人移民

笠戸丸沖繩県人移民の足跡をたどり、その苦難の歴史にふれて思うことは、今日のわれわれ在伯沖繩県人のルーツは、笠戸丸移民である、ということである。このことを私はあらためて実感せずにはおれなかった。それは、彼らがブラジルの地に最初に降り立った県人である、という点からだけ云っているわけではない。笠戸丸の先人たちが、ブラジルの荒野を開拓し、そこに定着した最初の開拓者である、という点においてである。彼らは「出稼ぎ」のために渡伯してきた移民であったが、彼らの大地開拓と定着なしに、今日の在伯沖繩県人の社会的発展は、決して創り出すことはできなかったのだ。この意味において笠戸丸移民は、われわれのルーツ・元祖である。

先人たちの大地定着の道程は、まさに血を吐くような苦難の連

続であつた。彼らは、艱難辛苦をのりこえて、道なき茨を切り拓いた。「艱難辛苦をのりこえて」といっても、言葉では到底いいつくせぬ受難の日々を、貧苦に耐えぬいてのりこえたのであつた。

彼らのこのような日々を、「目前の金儲けのみを追い、沖縄人10年、100年先を考えなかつた誹りはまぬがれないであろう。逃亡ということが、どんな結果になつて撥返つて来るか、考えてみた移民が一人でもいたであらうか」と捉える見解の人もいる。しかし、このように批判を提示するには、先人たちが直面した現実には、あまりにも重く、深いものであつた。じつさい笠戸丸移民の一人が、「そんなことを考える余裕もなければ、自分達の前途も真暗な有様だつたとしかいいようがない」と語っているように、のつぴきならない現実には、彼らは、直面させられていたのだ。

「金のなる木」の夢に魅せられて、錦衣帰郷のはずであつた「出稼ぎ移民」としての彼らは、耕地に到着したその日のうちに夢を打ち砕かれ、裏切られた。そして彼らの頭上に大きくのしかかつてきたのが、渡航費捻出のために郷里に残してきた借金の返済期限の切迫であつた。笠戸丸の先人たちは、私利私欲に走つて金儲け主義的に耕地を逃亡したわけでもなければ、守銭奴になりさがつていたわけでもないのだ。

とはいえ彼らがより高い賃金を求めて、ドツカス人夫や鉄道工夫など転々と職を変え、流浪を重ねて必死に働いても、目的を實現することは到底できるものではなかつた。「出稼ぎ移民」としての彼らの夢は、むなしく挫折を余儀なくされた。

しかし笠戸丸の先人たちは、ここで挫折はしなかつた。彼らは挫折のどんづまりのなかから純農者としてのみずからの才覚に目覚めて、ドツカス人夫や鉄道工夫賃金の貯えで土地を購入し、開拓地Ⅱ植民地づくりにのりだしたのである。

彼らは、カンポ・グランデにおいて蔬菜・米作り・コーヒー栽

培を、ジュキア沿線において米作り・バナナ栽培を、そしてサントス市郊外において蔬菜づくりを、森林や荒地を切り拓いて大々的に開始した。彼らの農業道への転換は、決定的なことであった。「錦衣帰郷」の夢を捨てたわけではないが、しかし大地への定着がはじまったのだ。ここにおいてはじめて、ブラジルにおける沖縄県人の真の意味での移民定着は、その基礎が築かれたのであった。流転の歲月はあまりにも長かったが、土地を開拓し定着への道を切り拓いた先人たちは、開拓史の真の1ページを開けたのである。それは、今日のわれわれ在伯沖縄県人社会の発展を支えるエネルギーの源泉である。この歴史的意味の大きさを、われわれはいささかも見失ってはならないであろう。

（口）県人結束のための組織を創設

笠戸丸の先人たちは、切り拓いた開拓地Ⅱ植民地に、後続の県人移民を呼び寄せ、受け入れて彼らと協同してその発展を期すべく県人結束の組織を創設した。サントス沖縄県人会、カンポ・グランデ沖縄県人会、そしてこれらを統合した全伯の県人組織・球陽協会の創立がそれである。彼らは、それぞれの開拓地Ⅱ植民地に支部組織をつくり、それぞれが直面している生活上の具体的なさまざまな問題を、共同して解決していった。ジュキア線アナジマス支部における救済事業部の設置とその具体的活動は、笠戸丸の先人たちが実践した、きわめて先進的な事業であった。サントスに流浪し仕事にあふれている人々の就職の世話など、物心両面からのさまざまな支援をおしすすめ、また後続の移民が港に降り立つたびごとに、激励と援助を一手に引き受けて活動したサントス沖縄県人会の人々。

広大な土地に広がる県人開拓地Ⅱ植民地の人々をよくまとめ、県人内に発生した移民ブローカー不正問題の糾明を独自に展開して

解決し、移民呼び寄せを着実に実現したカンポ・グランデ沖縄県人会。そして1926年に球陽協会が結成されるやこれらの県人諸組織は、同支部へと発展的に解消し、全伯46支部2300会員の活動の中核的支部となり、協会本部を支えたのであった。

日本政府当局の「沖縄県人移民禁止」の差別的暴挙にたいし、球陽協会は、本部と各支部が一致結束して、その全面撤廃運動を展開したのであった。彼らはこの運動の過程で、みずからの反省すべき諸問題を整理し、その克服を問いつつ、目的の実現を期したのであった。もちろん、種々の問題点があったとはいえ、彼らの組織のあり方、運動の方法、そして本部と支部の結束に示される「美風」は、今もなおわれわれが心して学び、継承すべきことなのであらう。

この初期県人会や球陽協会の運動を指導した人々、翁長助成・上原直勝・赤嶺新野栄・山城柳吉らと共に、笠戸丸移民の上原直松・与那嶺仁五郎・城間真次郎や宮城利三郎・平良松六郎・比嘉秀吉・栄門松・官平牛助らの指導的先覚者たちが、奮迅活躍したことを、笠戸丸移民の末裔たるわれわれは、永くその名を心にとどめおくことであらう。

(ハ)ブラジルの大地にうまんちゅの心が根づく

それぞれの開拓地Ⅱ植民地に定着した人々の中に、誰からともなく頼母子模合が呼びかけられて組織された。それは、人々が相互に助けあい信頼の絆を強め、より大きく県人同志の結束を固めていくうえで大きな礎となった。それは、開拓地Ⅱ植民地で労苦を共にする人々の生活の中に、相互扶助の精神を広く根づかせるものとなった。

笠戸丸の先人たちは率先して、後続の移民（親類縁者や同郷の知人、あるいは他市町村の県人）を呼び寄せたりあるいは受け入

れて、彼らの独立のためのさまざの支援の手をさしのべた。このような形で進められた開拓地Ⅱ植民地づくりが、はるか異郷の地で困難に直面している人々をどれほど勇気づけ、力づけるものであったか、その功績ははかり知れぬものがあつたであらう。

じつさいカンポ・グランデのリンコン植民地に典型的にみられたように、若き移民者たちを積極的に導入し、彼らが先輩に学びつつ、自立の基礎を作って、新たな開拓者として巣立っていった例は、数多くみることができる。

このような同郷人・同県人や親類縁者を呼び寄せたり受け入れる形で、いわば地縁血縁の絆を基礎にして展開された彼らの開拓地Ⅱ植民地づくりの方法は、沖縄県人に固有の独自なものであつた。もちろん、鹿児島県人など他府県人にもなかったわけではないが、それは沖縄県人に固有な歴史的・社会的・文化的特質をもつて展開された。

ところが、このような開拓地づくりにたいし、これを沖縄県人のみが寄り固まつた「閉鎖的で狭隘な集団地」であるかのように、偏見の眼で差別視する人々がいた。ブラジルにおける日本代表機関である大使館や領事館の高官たちであつた。彼らは、沖縄県人移民を「契約を無視して耕地を逃亡する者多きこと」とか、「一個所に定住する風を欠き移動甚だしきこと」とか、「団結心強く他県人との融和を欠き紛擾を醸し易きこと」などの「理由」をあげて、政府に「沖縄県人移住禁止」の「上申書」を提出した張本人たちである。彼らは、「沖縄県人が群をなす行動」をなじり、「裸足」や「手の甲の入れ墨」を俗悪化して忌み嫌い、県人の開拓地をあたかも「夜逃げした県人の留り場」であるかのようにさえとらえていたのである。このような在伯日本代表部指導者たちがつくりだす沖縄県人蔑視と社会的差別の中にあつて他府県移民者たちが、沖縄県人を、「沖縄産」と高踏的に揶揄したり、「日本人の中のカボ

クロ（土人）「沖繩県人」とみなしたりする、許しがたい雑言を生みだしたのである。

しかし、このようなことは、日本の中の沖繩県が有する歴史的・社会的・文化的な独自性にたいする全くの無理解にもとづく偏見そのものであった。当時、沖繩県人が使用していた日常の言語は、沖繩方言が基本であったし、その生活習慣や伝統的習俗は、他府県人のそれとは全く異なる沖繩県人に固有な独自のものであった。それは、琉球弧の中に王国を形成してきた独自の歴史的過程、さらには廃藩置県（琉球処分）後の明治政府の対沖繩政策、いわゆる国内植民地化政策（近代化遅延政策）に深く規定されてもいた。だから当然にも、ブラジル移民の県人たちは、その当時の生活様式・慣習に従って生活を営んでいたのだ。彼らは、政府当局者や他府県人たちの偏見や差別的言動にたいし、馴染み難さや異和感からくる、一種の隔絶感にとらわれたり、これに直接的に反発したり、あるいは逆にコンプレックス（劣等感）にさいなまれて、内向化する苦渋をなめつくしていたのである。

だが、このゆえに、たしかに県人たちの中には他府県人やその集団地から、可能なかぎり自分自身を遠ざけたり、没交渉であったりした人々がいたのは事実である。だが、笠戸丸県人移民たちが先導し、後続の県人たちと共に切り拓いた開拓地「植民地は、「閉鎖的で狭隘な集団地」などでは決してなかった。彼らは、地縁・血縁の絆で強く結ばれていたのだとはいえ、それ以外の人々に門戸を閉ざしたり排除したりする、「排他的集団」などではなかった。

そもそも、ジュキア沿線開拓の発端であるアナジラス植民地の始まりは、州有地払い下げをめぐるブラジル人弁護士バンプレーとの、友情あふれる協力関係によって支えられたのである。

土地の購入資金に困窮した平良松六郎・宮城利三郎が、星名謙一

郎の協力を得てこれを実現し、その温情に謝してブレジョン植民地創設の際に籽種子10俵を贈呈した秘話は、彼らの植民地づくりのあり方をはつきりとしめしている。イタリリ・ビグアでの、花城清安や翁長徳らのバナナ栽培への転換もまた、スペイン系移民やブラジル人との協力の中から生まれた。仲尾権四郎が、カンポ・グランデに初めて植え付けたコーヒー栽培の発端も、イタリア系ブラジル人との交流の中で得た発想の転換が契機であった。

このような歴史的事実に照らしてみれば、笠戸丸の先人たちが、後続の先駆者たちと共に切り拓いた開拓地Ⅱ植民地が、「閉鎖的で狭隘な集団地」でないことは、全く明らかなことであった。彼らは、地縁・血縁の絆で結ばれて結束しながらも、近隣する欧州移民の人々やブラジル人、さらには先住民とも良く心を通じ、彼らから多くのことを学び、新しい分野に挑戦して、開拓地Ⅱ植民地のより大きな発展と繁栄をめざしたのであった。

それは、彼らが、「万国津梁の鐘」に刻まれている「うまんちゅの心」を、わが心として、沖縄県人の良き精神的伝統をブラジルの大地に根づかせていたからにほかならない。しかし、それを実現することができたのは、多民族が混在する国家でありながら、民族抗争や、民族的差別・偏見の少ないブラジルの社会的土壌に、わが先人たちがよく馴染み、とけあっていたからなのだ。地縁・血縁の絆で結ばれた彼らの県人的結束が、県人ナショナリズム的な閉鎖的で排他的なそれになりおわることがなかったのは、このことと深く関係しているのである。

こうして笠戸丸のわが先人たちは、うまんちゅ（万人）の心を、ブラジルの社会的大地に根づかせ、人々と心を開いて交流し、切磋琢磨することができたのである。開拓地の盛衰の中にあっても、この「初期移民時代の美風」は消えることはなかった。笠戸丸移民ら先駆移民が生み育て、今日に受け継がれてきた、この「ブラ

ジルにおけるウチナーンチュの心」こそ、在伯県人社会の発展を支えている精神的土台なのである。

（二）子弟教育に心血をそそぐ

笠戸丸をはじめとする先駆移民が、子弟の日本語教育に心血を注いできたことも、われわれは決して忘れてはならないであろう。カンポ・グランデにおける「日本語小学校」ヴィスコンデ・カイル小学校」、サントスの「ウニオン小学校」、ジュキア線セードロにおける日伯両語教育のための学校（のちの「ウシスケ・ミヤヒラ」州立小学校）などの創立と、その運営をめぐる苦闘をみれば、彼らがいかに子供らの教育に熱意をこめたかを知ることができる。

セードロの赤嶺新野栄、山城柳吉らは、私財を投じて学校敷地を購入し、学校創立に努力した。サントスではマラペー在住の蔬菜づくりの県人たちは、ときの副領事による実質上のウニオン小学校つぶしの工作（サントス日本人会兼小学校建設のための）に抗して、学校の継続・運営に心血を注いだ。カンポ・グランデでは山城興昌が、成長しはじめた子供らへの日本語教育の重要性を訴えて、小学校の設立に奮励努力した。彼ら先人たちの脳裡には、いずれ錦衣帰郷の日にそなえたい、という思いがあつたであろうが、同時に、「国家百年の大計は教育にあり」と説諭した福沢諭吉の箴言も去来し、ブラジルにおける沖縄県人移民の未来を思い描いていたにちがいない。彼らは大地開拓に力を入れれば入れるほど、移民者としての未来のために、子弟の教育の重大性を痛感せずにはおれなかつたのである。

こうして先人たちは、植民地の近隣には州立の小学校がないところが多い時代であつたから、創立した学校に日伯両語を教育する体制を保障したり、州立学校のあるところでは、午後に日本語

学校を運営する体制をとったりの努力を重ねた。彼らは日本語教師を特別に雇用し、そのための費用を皆で支えあった。なによりも各家庭において、日本語あるいは沖縄方言を常用して、日本語・ウチナーグチを身につけさせるための日常的努力を怠らなかったのである。この努力の中から、ブラジル語と日本語（あるいは沖縄方言）を併用することのできる二世、三世が輩出し、今日の在伯県人社会と県人会組織を支えることができているのである。

（ホ）沖縄の独自文化の定着

先人たちはまた沖縄独自の文化・芸能の伝承にも努力した。彼らは、望郷の念にかられればかられるほど、沖縄の島唄や琉球舞踊を愛しみ、1日の労働を終えて夜にもなれば、蛇皮の弦をつまびいて唄い、踊り、子弟にこれを伝えた。それは、移民者の苦勞多い生活の中から、生活に根ざす形で受け継がれていった。今日、母県の沖縄民謡・琉球舞踊のあらゆる流派の支部が結成され、その芸の道を競いあい、ブラジルの社会に琉球（沖縄）芸能の独自の領域を確立するほどに発展している、その文化的・精神的土壌は、笠戸丸移民以来の先駆移民が、「生活の歌」として歌い継いで、その子や孫の心の中に息づかせてきた、「ウチナーンチュの心」にほかならないのだ。

笠戸丸から90年の今日、在伯沖縄県人は、在伯邦人140万人の中の14万人口を擁し、その結束力は群を抜いて峻立している。その最大の証しは、4000会員を擁するブラジル沖縄県人会の団結力とその活動力の多彩さにある。県人会（本部および各支部）を中心に、県人は一世、二世、三世、四世、そしていまや五世の人たちが、さまざまな文化的行事やレクリエーション、県人にかかわる生活上の諸問題の解決などをめぐって、活動をくりひろげている。この力の源泉は、笠戸丸以後の先人たちが、苦難の

生活の中から歌いつづけてきた沖縄芸能に深く流れる「ウチナーンチュの心」であり、これを絆として日本語や、ウチナーグチを身につけさせるための努力を子や孫の世代に積み重ねて、彼ら子弟にブラジルにおける沖縄県人としての自覚をつくりだしてきたことにある。しかしそれは、笠戸丸移民の先人たちが、受難と流浪の日々をのりこえて、また在伯日本代表機関＝領事館内部からの様々な差別的抑圧を打開する努力を重ねて、ブラジルに定着し、沖縄県人移民の土台を築きあげたことによってはじめて可能となったのである。

まさに笠戸丸県人移民は、われわれ在伯沖縄県人14万人のルーツ＝原点なのである。

笠戸丸沖縄県人移民総代城間真次郎は、つぎのような琉歌を残している。

雨（あみ）や降（ふ）て湿（し）めて季節（しち）待（ま）ちゆ
らでもの

播（ま）き置（う）きし種子（さに）のはえなうつみ

笠戸丸移民から90年の今日、もしも城間真次郎が健在であったなら、盛大に举行された県人会主催の移民祭りを、どのような感慨をこめて眺めていたことであろうか。雨は降って地は湿っており、播いておいた種子は、その季節を待つて必ずやはえるにちがない、いやはずにおくものか。「はえなうつみ」―この反語にこめられた語気こそは、笠戸丸移民の苦難の日々が播きおとした新たな胎動への、城間の痛切な希いであり、未来にたいする確信でもあった。またそれは、今日のわれわれにたいする叱咤激励として読みとることができるのだ。

1897年(明30)に、沖縄師範学校を卒業して本部及び西原国民学校の訓導を歴任したあと、校長代理となった城間真次郎は、知友の鮫島佐太郎の説得に応じて笠戸丸沖縄県人325名の総監督となって渡伯したのであった。フロレスタ耕地に配耕され、一介のコローノとなって激しい労働に耐えて農耕に従事した。その後、他の移民同様に職を転々と変えて最後はサンパウロ市に居を定め、中央市場の農産物仲買商人となって後半生を過ごした。移民たちの信望は厚く、生涯名もなき人々の相談役であった。

わたしは、笠戸丸沖縄移民の先人に、あらためて敬意を表さずにはおれない。みずからが遭遇した困難を、「雨や降て湿めて」というように、雨降って地固まるのおもいで受けとめ、そして、自分自身をあくまで草創期の「種子播く人」として捉え、その苦闘の成果のすべてを未来に託している。

わたしは先人のこの心意気に胸を打たれる。

そして、彼らが播き置いた「種子」の一人であることを誇りに思う。いや、その末裔の一人たるべく、彼らが切り拓いた足跡に学び、それを受け継ぎ、ブラジルにおける沖縄県人社会の発展に尽くしているすべての同胞たちと共に、これからも沖縄県人移民としての自覚をもって生きていこう、と思う。わたしは、このことを印して、この一文を締めくくりたいとおもう。

【宮城あきら】

第3部

記録編

座談会、懸賞論文

特別企画 座談会

沖縄移民、埋もれた史実を探る

■出席者

山城 ジョゼー (86歳、二世、ジャーナリスト)

山里 アウグスト (73歳、二世、作家、翻訳家)

上原 幸啓 (71歳、準二世、大学教授)

赤嶺 尚 由 (本誌編集委員)

山城 勇 (本誌編集委員長)

■司会者

仲川 実留 (前ブラジル沖縄県人会長)

日本移民90周年、沖縄県人会創立60周年、会館本部建設25周年を祝って、これまで長く埋もれてきた県人移民の先駆者たちの生きて来し方のこと、その足跡などに関する史実を改めて掘り起こし、歴史の光を当ててみる必要があるのではないか、といった意見が編集スタッフの間からでた。その結果、企画されたのが本座談会である。

一世移民のたどってきた軌跡を発掘して、歴史の光を照射するには、まず、移民の先駆者たちから実際に生を授けられ、それからずっと親子同士という固い血の絆でもって結ばれ、毎日の肌の

触れ合いと寝食を共にすることによって、その生きざまをつぶさに目のあたりにしてきた二世層の中のいわゆるトップ・ランナー（先頭者）たち、もう少し言葉をかえて言えば、古参二世たちを除いてほかに適当な人たちは少ないのではないか、といった点でも、企画の段階での編集スタッフの意見が一致したのであった。

幸なるかな、わが県人の中にはそういった二世層の中のトップ・ランナーとか、パイオニアみたいな人材が数多くいる。時が経つのは早いもので、笠戸丸移民から90余年の歳月が流れ、これら二世層の先頭走者たちも既に老境の域に達し、故里沖縄からほとんど徒手空拳のいでたちで、また、一日も早い錦衣帰郷を夢見てサントス港に第一歩を印しながら、何時の間にか永住を余儀なくされ、とうとうこの異郷の土に還っていった同じ我が郷土の「おとうやおかあ」のことを語るには、もう充分すぎるほどに円熟していて、相当の年輪を刻んできている。



開会前の挨拶を述べる仲川前会長
(中央右へ山里、山城、上原の3氏、左端は赤嶺編集委員)

数多い該当者の中から、山城ジョゼー（86歳、二世、ジャーナリスト）、山里アウグスト（73歳、二世、著作業）、上原幸啓（71歳、準二世、大学教授）、以上の3氏に特にご出席いただいて本座談会は、99年7月17日午後2時過ぎから県人会本部で4時間あまりにわたって延々と行われた。

実際に、座談会のふたをあけてみたら、話題はやはり三人三様で、彼ら二世層の中の先頭者であってはじめて、披露できるような話が次々と飛び出し、今まで隠れていたいくつかの史実の部分にも光りが当てられ、大いに談論風発して時には笑いを誘い、時には目頭を熱くせずには聞けない程の興味深い内容となった。

【赤嶺尚由】

司会 移民がいかに艱難辛苦に耐えて現在の基盤を築き上げたかということは、これまでかなりの人が書いていますが、今日私達がこの座談会でやりたいことは、そういうことでなくて「埋もれた史実」を書き残したい、ということとで編集委員長の山城勇さんや編集委員の赤嶺尚由さんと話をしたら、それはいいことだ、じゃやりましょうとなったわけです。

ところで、やるとなれば現在ブラジルでこれを語れるのは、ここにお集まりの先生方しかいらっしやらないわけです。まあ、生きた字引です。だから、今日は宗教も政治もすべて一応忘れて、ただ「埋もれた事実」に焦点をおいて、お話をしてもらいたい。ひとつよろしくおねがいします。では、ご参加して下さいる先生方に自己紹介をお願いしたいと思います。

9歳で渡伯、大学で日本語を独学

上原 上原と申します。私は州立サンパウロ大学に勤めています。生まれは小禄です。沖縄県島尻郡小禄村字小禄。今は那覇市になっていますけれども、もともとは田舎です。



上原 幸啓さん

司会 先生、ブラジルにこられたのは9歳頃ですか。

上原 はい、僕が来たのが9歳の時でした。

昔は尋常小学校というのがあって、尋常小学校の3年生の1学期を終わって、僕はブラジルに来ました。日本語はそれからすぐ戦争勃発ですから、禁止になりました。もっぱら伯語でしたから、日本語は大学に入ってから、自分で参考書を集めてですね、ちよつと勉強をしました。だから、多くの日本語はもっぱらチャンポンで中途半端ですから（笑い）：、よろしくお願いいたします。

リベロン・プレットの近くのセルトンジンニヨという耕地に配耕されました。僕は、伯父と一緒にブラジルへ来まして、兄貴がすぐ引き取ってくれました。私の兄貴が引き取ってよいかと尋ねると、まだ9歳です。お蔭様でその支配人が手でV a iといつてですね、S i mとかN a oとかいう言葉ではなくて手で示して、連れていけ、というので引き取られることになりました。（笑い）

司会 山城先生どうぞ。

1年間で日本語の小学校課程を終了

山城 僕の親父柳吉は、第3回移民でブラジルへ来ました。それは、明治45年に明治天皇が亡くなられて、大正に変わった年です。私はサントスで、大正2年（1913年）に生まれました。で、親父があつちこつち歩き回った末、ジユキア線セードロに落ちつきました。そこは、いろんな不便がありました。とにかく日本人植民者が協力して小学校を建て、われわれもこの小学校で、日本語を勉強することができました。



山城ジョゼーさん

僕も上原先生と非常に似ていますが、日本語を習わずに10歳ぐらいになっていましたので、大急ぎで1年間ちよつとで小学校課程を終えました。そのお蔭で、今、自分は何とか、日本語を上原先生のようにちゃんとではなくて、文法も何もないですが（笑い）、

でもとにかく、日本語の本なども読めるようになりました。17歳でサンパウロに出て、仕事をしながら中学校を出て、えー、当時の中学校は5年です。それから、大学も自分の考えで化学部に入りました。

ところが、1日中授業と実験なので1年間でやめて、当時すでに「日伯新聞」という戦前の日本語新聞があり、そこにポルトゲス欄があつて、記者の見習いとなつたわけです。戦争中は日本語の新聞がなくなつたので、戦争が始まるちよつと前にブラジル語の公証翻訳人の資格を取っていましたので、その仕事でいくらか助かりました。戦後はまた、「パウリスタ新聞」の発刊に参加しま

して、1年ほどポルトガル語の記者をやって、それからはずっとブラジルの新聞社に働いて1954年から67年まで、当時の雑誌「ヴィゾン」で働きました。この雑誌は景気のいい時でしたし、非常に真面目な編集方針を取ったので読者が増え、特にインテリ階層や経済界の首脳者達の支持があつて、新聞記者としての働き甲斐もありました。国内だけでなく外国、日本にも行き、自分として大変勉強になりました。コチア産業組合の機関紙「C o p e r c o t i a」の編集をやり、またサンパウロ州工業連盟の機関紙の編集長などを経て、20年程前から現役をしりぞいて徒食、何もしていないから（笑い）、お陰様で健康で勉強をしながら、ウチナーの歴史も書けるようになりました。

司会　じゃ、山里先生お願いします。

日本語が出来なかった笠戸丸の県人移民

山里　近頃、先生と呼ばれるのは、ちょっと、何だかおもはゆいような気持ちです。私の名前は、山里アウグストといっていますが、これはペンネームではなく、本当はアウグスト・シゲル・ヤマサトです。私はサントスに生まれまして、実はこの名前で相あいじめられたんですね。



この繁と言う漢字はね、日本字では恐らく一番書きずらい字なんですね、繁茂の繁なんです。敏と書いて、下に糸ね。このバラ

スが取れないんですね。（笑う）

へたすると二つの字になって、敏・糸になってしまいますね。だから、その日本語の習い始めは、親を非常にうらんだんです。（笑う）何故ならね、親というものは、ユークー（欲）なもので、「アウグスト」というのは、ラテン語の一つの王様称号ですけど、それを訳すると「雄大」という意味になるんですね。「雄大に繁る」て（笑う）欲張った親もいたもので、そういうふうな名前を付けられて、とうとう名前負けして、ダチノアカン（笑う）程度の人生しか歩めなかったんですが、まあ、先にも申しましたがね、ちゃんと生まれて、ウチナーグチ（沖縄語）が非常に達者だったんですね。ウチナーグチと言っても、本当のウチナーグチではなくて、久米島のウチナーグチなんです。（笑い）

最近、野口（浩）さんのお世話で、「ニッケイ新聞」に一つの小説を連載させていただいています。この小説で笠戸丸移民が自分の国を後にして飛び込んできた国は、どんな国であったか、そこに住んでいる雑多な移民の中で、どういうふう生き抜いていくか、ということを描いてみたかったです。それと同時に、あの当時は沖縄移民と言えば、異国人だったんです。僕が知っている一回移民の人々のほとんどが、日本語を知らなかったのですね。ですから笠戸丸移民の中において、また植民地の中においても、いろんな問題が起こったに違いないと思うんです。

このあいだ赤嶺（尚由）さんから電話を貰い、第2回移民に沖縄の人を採らなかったのは、ある公使が公文書で、「沖縄移民は、定着性がなくて、脱耕してしまうので、もう受け付けなくてくれ」と本省へ報告したためではないかと指摘されましたが、その結果として正式に渡航できなくなった。うちの祖父さんの密航事件が、まあ起きたわけですが、あれからあらためてカンポ・グランデの大城幸喜さんの伝記を読んではいたら、赤嶺さんが言われた通

り、耕地から計画的に引っこ抜きに来たのではないが、脱耕したのでもなくて、自分の意志で逃げ出したんでもない。誰かが外から引っ張り出していったのもありうるな、と思つて調べてみると、大城さんの伝記に載っているのは、やつぱりよそから来てそんな所にいつまでいても、らちがあかないから、鉄道工夫として連れていかれたというケースが現れているんですね。それと同時にもうひとつ私が考えたことは、ウチナンチュとのコミニケーションが非常にややこしかったとおもうんですね。ですから通訳連中も手をやいたに違いないと想像できるんです。あんなわずらわしい集団は、もう次からはやめにしてはどうか、と言う意見もかなりあつたのではないか、ということは想像できるんですね。

ですから、すでに記録に残っている移民史の外に、隠れた移民史に光を当てていこうじゃないかということとで座談会を催されることを聞いて、あー、これだと思つた。何故なら埋もれている人はアイスバーグ（冰山）みたいなもので、上に出ているものがほんのちょこつとでその奥にひそんでいるものがどれだけあるか、ということとはまあ、私の祖父もその埋もれた例の一つであるけれど、出会つた何人かの人々の話を聞いていると、これらのものもみんな埋もれていて、私が死んでしまえばもう、これも跡形もなく消えるわけなのです。できればそういった記録が残されたら、今すぐ次の世代のためにというのではなく、恐らく四世、五世の場合になると、自分たちはこんな顔をしているけど、いったい何者かと聞く人も出てくるに違いないから、その時に老婆心ながら親として、あるいは祖父として一つそれを形として残しておけば、また辿りやすいのではないか。ということとで私は諸手を挙げて賛成しながら、この座談会にやってきたわけでございます。どうぞよろしく願ひします。

赤嶺 いずれも劣らぬもうほんとうに私達の大先輩と言うべき

先生方お三方をお招きできまして、名誉なことでございます。私は沖縄は島尻郡豊見城村字渡嘉敷出身の赤嶺尚由です。ほんとは「ひさよし」なんですがポルトガル語の発音の加減で「なおよし」にいたしました。いま、私達が発刊を計画しています沖縄県人会の60周年並びに沖縄県人ブラジル移住90年記念誌は、おそらく私達人が日本語で残せる最後の記録になるのではないかと思います。(勿論、ポルトガル語での記録は私達の後輩が、これからもずっと作っていくことでしょうけれども。)こういう大がかりな記念誌の発行というのは、もうこれが最後かも知れないといううな、いわゆる万感の思いを込めて今準備を進めているところがあります。

私はウチナー民間大使もおおせつかっております。りっぱな勤めは果たしておりませんが、せめて山城勇編集委員長の手助けをしながら、この記念誌に取り組むことによって、今まで民間大使をおおせつかったことの責任の一端を果たしたい、せめて借りをお返ししたいと肝に銘じ、念願しているわけであります。

山城勇 時間がだいぶ過ぎてしまっています。誠に申し訳なく思っています。先生方は大変お忙しい中を御出席下され、心から感謝申し上げます。特に今回の場合は先程から何回かお話がありました、この90周年記念誌に、花を添えてもらうという企画からの今日の座談会でございますので是非、この「埋もれた歴史」を身を以って体験されたみなさん方のお話、それが一つでも多くそこに現れてくることを念じてやみません。実は私、今回の記念誌編集の責任をおおせつかっているものでございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

司会 では、本題に入ります。最初に山里先生に移民80周年に書かれた文章を見まして、1963年から64年頃にラジオ・サントアマーロの放送原稿を書かれた。あの時にだいぶ奥地に

る一世移民とお会いしたということを書いています。その時にお会いした先駆移民の方々についてお聞かせ願いたい。

ラジオ・ドラマ「笠戸丸」は女性が主人公

山里　あの時、私が笠戸丸移民という、沖縄移民にも、日本移民全員にも一つの歴史的な画期的な出来事をですね、単なる歴史として記録するより、物語としてその中におりしながら、そのうちに興味のある人は、それぞれ必要な史料に向かって研究出来るのではないか、ということ、始めたわけなんです。で、あの当時、確かにいろいろ資料あさりもし、かなりの資料も集めてあったんですが私は、あっち、こっちの宙ぶらりん人生を渡って来たもんで、その間にかかなりの資料を紛失してしまいました。

ここで私が、特に印象に残っているものは、カンポ・グランデで大城幸喜さんとカメさんに出会ったこと、特にカメさんからいろいろな体験談を聞いたことに、何か非常に胸を打たれて、一つの感動を覚えたことです。移民というと必ず男の名前しか、表に出てきませんが、しかし、その縁の下の力持ちとなった女性達が、どんなにか苦しみ、悶えたことか。男は自分のわがままを通して自分の栄光の道を辿っただろう。女はかなりみじめだったのではないか、ということを感じさせられたわけなんです。このカメさんの話を断片的に申しますと、大城幸喜さんがコーヒー耕地の契約を終ってから、引っこ抜きをやられるような形で、ノロエステ鉄道の工夫として流れて行ったらしいんですね。で、話によりますと、あの当時あのあたりは湿地地帯が多くて、いわゆるパンタナールですね、かなりの難工事です。そこへ大勢の沖縄移民が流れ込んで行ったということは、これは恐らく沖縄県人移民史の悲劇であつたし、また勇壮な一面もあつたのではないか。カメさんの話

によれば、あのあたりは蚊が多かったそうです。一匹や二匹ではなくて雲をなして、もう前が見えないくらいに蚊の群れがやって来ると、仕事にならんもんだから、生木を焚いて周囲に煙を撒いて働いたというのです。それを聞いて私は、びっくりしたんですね。もう一つは湿地帯なのでちよつと雨が降ればたちまち洪水になって、浮いている所といえ、家がたっているわずかなその周囲だけであつたという。カメさんの話で、「みなさんは信じないかも知れないけど、窓を開けてそこから釣りをしたこともあるんですよ、そして、晩のおかずにしたこともあるんですよ。想像できますか」と言われたんです。

また、私たちは飯炊きをして、仕事をしている男達の所に運んでいく。ところが男たちがみんな仕事で出払っている移民小屋に、ある日突然、一人の男が飛び込んで来て寝台の下にもぐりこんだ、そこにその男を追っかけて来た3人の警察隊が、ものも言わずに部屋に上がり込み、家中を探し回り、寝台の下を男を見つけてそこでバーン、バーンと銃で撃ち殺した。その時はもうびっくりして全身が震え上がってへたと座り込んだ。そのような話をカメさんはやつておられたけれども、それだけあの当時のあの未開の第一線に、いわば開拓の第一線に女性達が出て行ったということ、これはほんとうに歴史に明記すべきだなーとつくづく感じました。

司会　山城先生はサントスにお生まれになって、ジュキア線あたりは詳しいですね。

山城　僕は17、8歳までおりました。サンパウロに出てきて学校を出ております。そうですね、当時はうちの親父も土地を買って農業をやったけれども、川のへりで毎年洪水があつてバナナ園が潰れるんですね。

山里　だから有名だったよね（笑い）。

家の借金返済で炭焼きもやった

山城 うん、だから借金また借金と何年か続いたんですよ。僕は新聞などを読んでいたので、小学校を出るだけでは一人前の人間にはなれないとずっと思っていたものですから、親父にもつと学校を出してくれと、毎年、年の始めに頼んでいたが、まだ出来ない。それでバナナ園の仕事ばかりではなく、当時は木炭づくりもやっておったんです。山を借りて山の中で窯を造ってやっていました。その山の中に僕一人行って、小屋で監督をやっておったんです。ところで木炭をつくる窯は、火をつけてから生の木の中に入れる、入口で火をたいて木炭になるまでずっと燃やしつづけると蒸発するんですね。

蒸発すると窯のうしろに煙突みたいな物があるんですが、何日間か焚き続けていると、木炭になりかけた時に蒸気の代わりに煙になるんです。

その煙がだんだん色が変わって薄くなり、その薄くなるものがある点に達したら、それをふさがなくてはいけない。勿論、その作業が夜中になる時があるんですよ。僕一人が小屋に残っていてね、何時頃に木炭になるかはだいたいは見当がつくので、その小さな山小屋で一人で寝起きして木炭製造を手伝ったわけです。親父はその仕事を記録に書いていますね。息子が14、5歳から木炭製造の手伝いをした事について、後で感心した様な事を書いておられますがね。当時、自分は特別何も変わった子ではなくて、外にも貧乏人は炭焼きをやっておりました。あの当時を考えて見ると、やはりたびたびやれるものではなかった…(笑い)。

司会 山城先生、先生は現在86歳と言われましたが、その最初の移民の一番悲しい話というのが何かありますか。

山城 そうですね、セードロは小さい集団でみんな協力し

合っていましたので、あったかもしれないけど、覚えていませんね、毎日毎日が貧乏して生活がやつとという人達もおりましたが、悲しい話はあまり覚えていません。

司会 先程も申し上げましたが、私が98年に沖縄に行きました時に、各市町村会の新年会の席上で、ブラジルでは聞いたこともない話を聞いたんですよ。うちはおじい達も最初の移民で、或いは2回目の移民で、ブラジルではデージャタンドー、雨降りの後はオンサ(ブラジル豹)のこんな大きな足跡があったとか、カフエーザール(コーヒー園)で草を刈っている時に、息子がオンサに噛み付かれたとか、というような

事があったことを聞いたのです。ブラジルの現地に居られるみなさんも、そのような話を聞いておったのではないかと思います。

山里 ありうるでしょうね、そういうことは、何故ならジュキアで聞いた話だけど、ブラッセーロ・トランチですか、あそこには昔ブジューという子供ぐらいのサルがいっぱいおったらしい。それをそこに住んでいる連中が殺して、それを背負って来て、そして皮をはいで食ったという話があります。

山城 うん、うん、あります。向こうの川べりに住んでいるカボクロが、山の中でそんなに大きくない猫ぐらいの大ききのそれを食べておりましたよ。県人の中にもそれをつかまえてきて、ワラバーみたいにして、皮をはぎ取ると中身をうさがって(食して)(爆笑)。

司会 上原先生どうでしょう。

オンサは黒人の肉が好き…は本当

上原 オンサの話ですか(笑い)。オンサに食われる話ならです

ね、僕は子供の時にオリンピックという田舎で育った人間で、そこで野良仕事をしていましたが、オンサの話は嘘ではないですよ、ほんとの話です。オリンピックの近くの町に日系人がアルゴドン（綿）を植えていました。

野良仕事をしていて夜になっても帰って来なかった。日本人とカマラーダの黒人二人。それでみんな心配して畑まで行ってみるとオンサに食われていたそうです。ブラジル人の間では、オンサは黒人の肉が好きだといわれていますが、それはほんとうなんです。じつさい、黒人の肉は食われてしまっていたが、日本人のそれはただ血をすっていただけだったそうです。これはほんとうの話です。

日本人は、あっちこちで毒蛇に噛まれて死んでいます。私のソブリンヨ（甥）も噛まれて死んだ一人です。それから日系のコロニアと関係ない話ですが、ジュキア方面はブラジルで最も大きな豹が住んでいる所なんです。アマゾンでないですよ。一番大きな豹はサントスの山なんです。それは昔の話なんです。サンプウロ・クリチーバ街道を測量している時、ポールを持って前へ進んでいる人が豹に食われたんです。大きな豹です。その人も黒人だったそうです。確かに日本人も豹やヘビに噛まれてだいぶ死んでいます。そういうことは移民の歴史には出ていないですよ。

司会 それからですね、ブラジルに最初に来た第1回移民のパイオニアの方々、言葉も知らない、何も知らない所に入り込んで、どういうふうに住生活したのか、そのことについてもお話し下さい。

山里 私の家にはね、上江洲カメさんというおばあさんがいましたが、このおばあさんは第一回笠戸丸移民です。久米島から4人来たうちの一人で、女は初めてです。盲になって引き取り手がないもんで、うちで亡くなるまで面倒を見たんです。この人の話を断片的に聞いたんですが、耕地に連れて行かれて、その時に

始めてだまされたということに気が付いたらしいね。

というのは移民小屋というのは、豚小屋というのは、牛小屋というのはやらからない所にみんな放り込まれたのだそうです。それでひどいのはね、ビツショ・ド・ペー（砂蚤）というのが、もう足から手の爪の中にまで入ったんだそうですね、もう、それを取るのが仕事でね。けれどもばあさんの話によれば何をする楽しみもなかったから、終いにはそれを取るのが楽しみになってね（爆笑）。しかし、ぐじゅぐじゅほじくって後はね、化膿するので塩水に手をつけたり、足をつけたりして消毒をしたという。そのうちに誰かがフーチバーね、よもぎですよ、それを煎じてつけたらいいということを何処からか聞いて来て、それが漢方薬のようにみんなに使われたというんですね。

移民、奴隷、夜逃げ、家庭奉公、夜会服

そのおばあさんに言わせると、ほんとうは自分らは、移民ではなく奴隷だったというんですね。何かもう活動範囲がかぎられてしまつて、朝仕事場に連れて行かれて監視の下に置かれて、日が暮れてから連れ帰されて小屋に放りこまれる、というかつこうだったということなんです。

そして、先に沖縄移民は脱耕して定着性がなかったという話がありました、これは眉唾ものかも知れないです。何故なら契約を一応終った後の話で、みんな敗残兵みたいにてんでんばらばらになったということは考えられるんですけれどね。で、そのばあさんはね、ファゼンダで醜い目にあって、それが為に収穫が終つて区切りが出来た時に、夜逃げしたらしんですよね、みんなで。その時は別に計画的ではなくて、いや誰かが引っこ抜きに来たのではなくて、自発的にとにかくサントスに行こう、サントスには海

があるし自分らが着いた港があるし、向こうへ行けば何かの便があつて、沖縄に帰れるであろうという望みですねー、淡い望みを抱いて、サントスへ逃げて来たんですよ。

赤嶺　今、まさに先駆者移民の埋もれていたひとつの歴史に光があてられそうな予感がしてきました。

山里　ばあさんの話によるとサントスに来てから家庭奉公をしたらいいんだね。で、あの当時、家庭奉公は殆ど月給を払っていないから、食べさせて寝かせる程度で、みんな女中になったり、男までもが家庭奉公をやった時代だったらしいですよ。このばあさんは日本語は出来ないが、ポルトゲースは出来るようになっていたんです(笑い)、ポルトゲースの方が先になっちゃって死ぬまで日本語は覚えなかったけど、ポルトゲースは話しておったんです(笑い)。そしたら、奉公先の奥さんに気に入られて、バイレと一緒にいくために夜会服まで買い与えられたり、たとえばロング・スカートのね、かかとの高い当時のフランスから輸入した靴までもらって、そしてダンスまで覚えてダンス・パーティなどへお供として連れて行くために、一応の素養としてダンスを教えたんでしよう、そのマダムが。

そのばあさんは、うちで寢床を与えたら寢床の頭の所に大きな葛籠(つづら)、ブラジルではバウーというけれどそれを置いて、後生大事にしていた。絶対に開けさせないんです。そうしますと、子供は覗きたくてたまらない(爆笑)、だけど当時ばあさんは、もう視力がなくなって、何というか白内障でね、目が見えなくなっていたけれど、そおつと行って葛籠をあけようすると気付くわけ(爆笑)。そしたら何をいうかと思つたら、うちの祖母に、「この籠はね、自分の宝物だから沖縄に絶対に持って帰る」というんだね。もう誰にも開けさせない。そしてとうとう亡くなったから、これ幸いと思つて早速開けたんだ。そしたらその中に夜会服がね、

ちよつと考えられないでしょう？ 1回移民がこう長い夜会服を何枚も、また、ヨーロッパから輸入した靴もみなきれいにして。それからお金をこんな袋の中に入れて貯めてあるわけなんだ、ブラジルのお金を。もらったのかどうか知らないけど、とにかく普通の着物じゃないんだ、みんな上等な物が一杯入っている。ああだからどおりで、ばあさんが非常に大事にして島へ持って帰ると言っただんな、と思っただんです。

赤嶺 それは大事なことなので、出身地はどこですか。

山里 沖縄は久米島具志川村字西銘です。うちの親戚です、上江洲姓だからうちの祖先なんです。

山城 今の上江洲カメさんのことを聞いて思い出すのは、僕のおばさんね、移民は当時3人家族で来ました。3人が働ける年齢でした。うちの両親と父の妹、その人が日本から来た時は14、5歳ですよ。勿論ファゼンダで3人一緒に働いたんです。ところが、その人達も夜逃げした組なんです。私の父は、自分の記録には自分個人としては、契約期間の2カ年間で全部済んでから出たいと思っていた。ところがみんなサントスへ行こう、サントスでは先に逃げて来た人達が、サントスの方が金になるというので、それでみんな相談して結局父も一緒に逃げたそうなんです。半年ぐらい働いて逃げて来たそうです。しかし、サントスに行っても仕事がない、結局ドッカス（港灣会社）で働いたんです。親父はあまり体が大きい人ではなかったし、仕事をいろいろ捜してもなかったの、ドッカスで働いたんです。その間、自分たちの生活を支えていたのは、家庭奉公をしていた妹、叔母さんですね。歳も若かったのでポルトゲースを習ってすぐ覚えてうまくなったんです。そういうふうにポルトゲースを習った人もいるんですよ。

100人余の大家族となった笠戸丸移民の末裔

もう一つこれは変わった話ですがね、その父の妹が渡久地政人という笠戸丸移民の人と結婚したんです。この人がファゼンダ生活を終えて、サンパウロに出て仕事を捜したが見つからない。しばらくして州軍警（註・当時は州兵と呼んでいた。その頃の各州はもつと政治的に自立していた）の採用があつて、傭兵制だったので誰でも入れたんです。その話を聞いて、渡久地はそこに入つたそうです。そこでポルトゲースを習つて市内の警備にあつてゐる騎兵隊になつたそうです。そういう経験の後サントスに移つて野菜作りをしたそうです、郊外のカンポ・グランデという所で。ところが渡久地政人はハイカラで百姓向きではなかつたんです。そこで普通の人には全然考えられない仕事ですが、博打場で働いたんですね。そして、1年1回ぐらいサントスに出て、叔母さんの所に泊つてね、叔父さんは昼寝て夜起きてスモーキング着て仕事に行く（爆笑）：：：そういう人がいたんです。その人が10人以上子供ができたんです。その子孫がサント・アンドレー市に住んでいて、赤嶺（尚由）さんご存じですか、この間亡くなつた渡久地ミゲル、その家です。このまえ長女オルガの88歳のお祝いがあつて、僕行つたんですが、渡久地政人の子孫が100名越しているんですよ（笑い）。大変にぎやかなフェスタでしたよ。

司会 その頃ですね、いろんな警察問題があつたでしょう、そういう時は旧移民のみなさんは、どうしていたでしょうね。

山城 ジュキア線は、非常におとなしい人間ばかり集つておつたんですね、特にセードロなどは、リベイラ川流域に住んでいるカボクロの人達もみんないい性格の人間ばかりでした。で、ウチナンチュは外国人ともよく付きあうんですよ、あまり差別しない。だからみんなアミーゴになつてしまふんです。勿論、地主はカボクロを日雇いで使つていた、そこで仲良くなつた。だから

喧嘩とか、そのような事件はあまりなかった。

司会 日本からブラジルへ来られて5年、10年いるうちに何か警察問題とか、あるいはブラジル社会に関する問題が起きたとき、どういうふうに対処されたか、通訳もいたんでしょうか。

山里 これは変わった話ですが、そうね、私がまだ6歳か7歳の頃のこと、サントスに住んでいた頃、又吉蒲戸という人がいて何処の出身か調べてみたところ、よく分からないのですが、とにかく久米島チューではなかったんですね。

このお祖父さんの話は子供ながら非常に哀れと思ったのは、島に妻子を残して出稼ぎに来ていたわけで、勿論そういう人は多かった、ただどあの当時の人はみなピンガ（火酒）を飲みました。1リットル座って飲むんだから、みんな凄いですよ（笑い）。

山城 ピンガは、ただみたいに安かったから、誰でも買えたんです（笑い）。

山里 酒飲んではこちらに来よったんですよ。

うちは沖縄移民のもう溜まり場みたいになってしまっていたんです。で、うちの祖母がお人好しで、何でも聞いてあげたからね、ぐたぐた愚痴やら、いろんな話をしにやってきた。その人は酒を飲んではこちらへ来て、「アンマーヨー」と言って入って来るんだよ（爆笑）。朗らかな酒飲みではなくてね泣きじょうごなんだね（笑い）。

そして何を喋っているかと思ったら、あの当時自分はウチナーグチをよく知っていたから、島に残してきた妻子の話をして泣いていたんです。

うちの机の所に座り込んで泣いて泣いてしばらくして、帰りますといって帰るのだが、また戻って来て、「アンマーヨー」と泣くんですね。

今振り返って見ると、よっぽど寂しかったんだな、当時の移民

達はね。だから酒に何とかごまかしを求めたんですね。この人は、どこかの小監督で、当時の移民からすればかなりの給料を取っていたらしい。ドッカス（港灣会社）の給料をもらった日は、すってんでんになって帰ることが多かった、途中で酒を飲んでね。僕等子供にもね、はいはい繁、持って行けと金をやるんですよね。

司会 やっぱり、山里先生から見ると、あの当時のこのおじいさんの場合は、酒を飲むと泣くということは、沖縄に残してきた家族に対する切ない気持ちだ、…。

山里 あー勿論ですよ、だって妻子の名前を言って泣いているんだから。それが、ただの泣き方ではないですよ、もうわんわん泣いてねー。そんなら金を貯めて、仕送りをし、そして帰ればいいのになと思ったんだけど、何か事情があつたのかどうかは知りません。

司会 先生方にお聞きしますが、山城先生、

山里先生は二世で、上原先生は幼少の時に渡伯なさっています。準二世という言葉がありますね、いつか新聞でも問題になっていました。これは何時頃から使われているのでしょうか。

山城 それは戦前に使われていますね。

上原 そうそう、そうです。

司会 日本から小さい時に来た人のことを準二世と言うんですね。

上原 そういうことですね。もうこれからはそういう言葉はなくなりますよ、そろそろ僕等が最後になりますから（笑い）。

司会 二世の立場から見たと一世、これをどういうふうに見たのでしょうか。

赤嶺 ちょっとよろしいですか、僭越ながら私がピンチヒッターみたいにお伺いいたしますが、上原先生の場合は、只今司会の方からも質問がありました様に、一世で9歳の時にブラジルに

来られたんですか。

上原 9歳の時です。

赤嶺 9歳の時、来られて、一世の先駆者としてのお兄さんが人一倍苦勞して、先生に協力なさって、あの当時は大変めずらしかったであろう大学へ進む機会を与えられて、サンパウロ総合大学の水理学の専門家・教授というところまで育てあげて下さった。先生からご覧になって、当時の沖縄移民の先駆者たちの優れたところをお話しいただきたい、と思います。山城先生、山里先生にもお伺いしたいと思いますが、まず上原先生からお願いします。

日本人の誇りを忘れるな

上原 僕の場合はですね、山里先生のお話を聞いて、ほんとに羨ましいと思いましたな。視野の広い、いろんな生活の道を歩まれて。僕は勲章ものですからね、ボオーとやって来た人間ですからあまり面白くないですよ。面白い話がありませんですよ、その話は大体私の第1番目の伝記に載っております、ポルトガル語です。

「KOKEI UEHARA DO MADOR DE RIO S」, 「川を統治するもの」という題です。これを書いてくれた人は、ブラジルでも有名な新聞記者で、アウド・ペレイラさんです。半年ほど毎週4時間程話して、そして最後にこの小さな本が出来たのです。何千ページにもなるものを、そうしたら誰も読まないのです、125ページ程に納めてあるんです。

その本は私がサントス港に着いた時のことから書かれています。日本での事は書いていないです、また彼は書けないと思います。彼はポルトガル系の人間ですから。最初の何ページかは移民の生活の話です。僕はただ沖縄県人、日本人だということではなくし

て、ブラジルに遠い何処かの国から来た移民の皆さんにさずけるために、またその人達の二世、三世の僕の教え子達が沢山いますから、何千人といますから、その人達に何か残したいと言うことで、私がしゃべったものです。その中にみなさんが話したことと似たりよつたりのものがあります。僕もそういう体験をした人間です。そんな面白い話はないんですが、苦労の話とか、おかしな話とかありますけれど。

僕の場合は、あまり日系コロニアと関係のない生活をして来た人間なんです。ほんとに羨ましいですね、今のいろいろな話を聞いてですね。

沖縄県人とか鹿児島県人とか県人ということが、僕の頭にはないんですよ。同じジャパニーズではないかと。

山里 先生はそう割り切れたんですか。

上原 いいえ、僕はそういう中に住んでいなかったんです。僕はすぐ学校はですね、小学校時代4年間は家で温かい家族に囲まれて、今の質問に対してたいした返事が出来るかどうか知らないんですが、僕の場合親父と母は沖縄に残ったんです。うちは大家族だったんです。お祖父さんの代までは偉い家族で、子供が一人二人なのに潰れてからうちの親父が8人の子供を生んだんです。それで食えなくなつて、外国に出ろということでもブラジルに来たんです。それでうちの兄は僕より3年か4年前に来ました。

僕が来た時には、兄貴は最初はコロノをして、1、2年コーヒー園の仕事をしていた、僕が来た時は、もう4アルケールの土地を借りて綿づくりをしていました。

それから10アルケールに拡張して15年後に、僕が大学に入る時には70アルケールに拡張していました。これは、ほんとに大した努力だったと頭が下がりますよ。日本からゼロで来て、15年

後には70アルケールの土地を持っていたんです。最初は貧乏な
んですよね、しかし、貧乏なんだけど兄貴達が、お前は学校へ行
けと言ってくれた。

僕は8人兄弟で2人妹が沖縄に残って戦争で死んじゃったんで
す、爆弾で、親父も。ですからブラジルでは僕が一番年下で（男
3人兄弟で僕は3男坊）、兄弟達がお前学校へ行け、ブラジルへ来
た以上はと。日本語の学校はありましたが、5km位の所であつ
たんです、うちから右の方にね。そしてブラジル学校が4km左
にあるわけです。日本語学校を午前中行けば、ブラジル学校には
行けなかったんです、10km近くもありますから。バスはまだ
通っていませんでした。

だからしかたがないから、お前はブラジルの学校に行けと。日本
語学校には行けないから、しかし、ブラジルの学校には行けと。そ
の時兄貴が言ったことは、「お前は出来るだけブラジルの社会の中
に入っていけ、しかし、ジャパニーズの誇りはいつまでも心の底
に保つようにしなさい」ということだった。この事は、うちの兄
弟だけではなかったと思います。ブラジルに来た大半の日系の方
は、みなそのように教え込んだ、と思います。

司会 それが、1937年のことですか。

一世が一番偉い、自己犠牲を強いて子に教育

上原 もうその時に41年、42年だったかなあ、戦争が始
まった頃です。第二次大戦の時、僕は中学だったんです。寄宿舎
だったんです。しかし、そこですね、皆さんの話とは違って、圧
迫が全然なかったんです。というのは、校長先生がりっぱな先生
だったんです。その校長先生は、ポルトガル人で、ポルトガルで

勉強をして、イタリアでドクターを取ってきたんです。

ちよつと、変わった人間だったんです。イタリアでドクターを取った人が田舎の校長先生をしていたんですからね。その先生は、ユーモアのある先生で（笑い）、女の事でおっぱらわれて、田舎の方に流れてきたというロマンチイクな話があった先生で、でも、りっぱな先生だったんです。僕に絶対にいじめとか、いじわるはさせなかったんです。ですから他の人の話を聞いて、ほんとに僕はよかったなあと思っています。

それで、今の質問ですね、準二世とか、二世が、最初勉強した人達はみな同じルートを辿ってきています。ですから、僕は一世ですけど、二世みたいな生活をしていますよね、とにかく、一世が一番偉いと僕は思っています。日本では大して学問を受けてない人達がブラジルに来ていますよ。学問を受けた人はパーセンテージは少ないですよ。しかし、自分達は苦勞しても、子供達は勉強させる。死にももの狂いになって、病気になるまで仕事をして、二世、三世を育ててくれたことがほんとうに有り難く、今でも尊敬しています。僕一人じゃないですよ。

山城 大賛成です。その通りです。

上原 しかし、お前はブラジル人になれ、しかし、ジャパニイズの誇りは失っていけないぞとね。

だから、お前は日本の小説を読め、と僕は小説を読まされたんですよ。その頃の小説はですね、みんなふりがながうってあったんです。日本語の雑誌も、「キング」も、「主婦の友」も全部ふりがながついていましたね。毎晩それを読みすぎて怒られたんです。その頃の吉川英治とかを、全部読んだんですよ。それから戦前、講談全集というのがありましたね、その「宮本武蔵」とか「塚原卜伝」とかね、うちの兄貴のソーグロ（姑）さん、インテリイでしたから、そういうものをだいぶもってきてあったんです。兄

貴がお前は、日本語が下手だし、日本語学校も行っていないから、ポルトガル語のきちんとした教育を受けるようにしろ。日本語は、そのかわり忘れないように小説とか、本を読めと。そうしたら、それが好きになって逆に困ったんです。読みすぎてですね。僕は、サンパウロ大学へ入ってから、勿論フランス語は得意だったんです。うちのフランス語の先生はですね、ポルトガル語が出来ない先生だったんです。アラビア・レバノンの方で、昔は、ソルボンヌ大学の分校みたいなのがあったそうです。恩師は、その卒業生だったんですよ。僕は中学4年生の時にですね、『ああ、無情』を原文で読んでいます。そんなに、教え込まれたんですよ。頭がいいからじゃないんですよ、いい先生いたんですよ。運が良かったと何時も思っているんですよ。神様の恵み

だと（笑い）。特に兄貴たちとかですね、周囲から大事にされた人間なんです。ですから移民の苦勞した話とか、ああいう事、あまり経験のない、ほんとにすみません。（大笑い）。

赤嶺 あのうち、このテーマは非常に大切だと思いますので、次に山城ジョゼー先生にも、先駆者たちについて印象に残っていること、特に先駆者たちの優れた、忘れがたいこと、そういうものを、ちよつとお話いただきたい。

子供に学問をさせるの気概

山城 そうですね、あまり、覚えておりませんが（笑い）。とにかく、まあ、話にあったように、一世は、特に古い一世の方々は、自分たちはどんなに苦勞しても、子供は学校を出す。そのお蔭で、僕なんかも勉強できたんですよ。その当時を考えますと、それはなみたいいていの苦勞じゃなかったですよ。例えば、さつき話しま

したが、セードロという小さな部落ですね。日本人が30から40家族おって、自分たちで会をつくって学校を設立し、それを州政府に寄贈して公立の小学校にした。そして正式に先生をよこし一般住民の子弟教育に当たらせたのです。私は、そこでブラジル語を教えられた。当時は田舎では、満9歳で小学校にいかなくてはいけないことだった。だから家がセードロにあったから、ジュキアに最初小学校があつたので、鉄道線沿いに歩いて6km、毎日往復するんですよ、ブラジル学校にね。

そうしているうちに、親父たちが学校を造ってセードロに日本語学校ができたんです。当時の移民達はみんなまだ貧乏ですよ。農民が金持ちになりましたのは、戦後ですよ。もちろん成功者もありましたけれども、ジュキア線なんかで成功したのも、せいぜい中程度でまだ借金があり、また子供たちは学校にやらなくちゃいけないので、非常に苦勞をした。そういうような、日本人の特長といひましょうか、中には無学の人でもね、子供をどうしても学校をだしたい、といった気概が先駆者たちにはありました。

上原 そう、そう。

山城 僕のパイ、それから赤嶺新野栄さんたちは、セードロに着いてから第一次世界大戦の終る前に、そこに落ち着くことを決意していたんです。僕のパイは1924年にね、お母さんを日本に迎えに行ったんです。だいたいのひとは、日本に年寄りの両親がいて世話する人がいなかったら帰っていったんですね。うちの親父は、永住する決意に向かって、そこにいたほうがいいということ、わざわざお母さんを迎えにいったんです。そのように、すでに永住するという意思が固まっていたんです。だから、そのように決意していた人達は、落ち着きがあるんです。子供達はどうせそこに落ち着くんですから、子供たちを一人前の人間に育てたいと。僕の場合は、当時ジュキアの小学校には、二世が僕一

人でしたよ。言葉も良くしゃべれなかったのですが、でもね、子供はすぐなれますから。みんな子供らはカボクロでしたから。（笑い）。

ジャポネーズと呼んではいけない

そのなかに金持ちの子供がいて、みんなフッテボールなどをして遊んだ。彼が僕に、「ジャポネーズ」というんですよ。僕たちの学校は、男だけの学校で先生も男の先生で、僕を「ジャポネーズ」と呼んだ子供にたいしてね、授業が始まったらさっそくその先生は、「ジョゼーを誰かがジャポネーズと呼んだだろう。そんな事は言ってはいけない、われわれブラジル生まれは、みんなブラジル人だ。それぞれみんなブラジル人の名前がある。これからは、ジャポネーズと呼んではいけない、彼もブラジレイロだから」といった。その時の、その先生の言葉が非常に印象に残った。やはりそうだなあと。そうすると親父たちも、みなそうだろうと。ブラジルに生まれて育って、ブラジル人として生活するんだから、ブラジル人のつもりで生きていきなさい、と教えられた。そのお陰で、ずっと今までブラジル人として生きてきました。

僕の職業の新聞記者としてもね、全然差別なくやってきました。戦争中も友達はみんな差別をしなかったですよ。アミーゴ、アミーゴでした。だからその点では、ブラジル人は人間性がありますね。戦争中でもそういう関係はずっと続いていますよ。

司会 先生、先程の「ヴィゾン」という雑誌は月刊誌ですか。山城 週刊誌です。最初は15日おきに出ていましたが、その後、週刊になりました。週刊になったのは1957年頃だったと思います。

司会 雑誌は今もありますか。

山城 もう、なくなっています。

司会 先生は記者だったんですか、編集長ではなかったんですか。

山城 編集長ではなかったです。出版局長という肩書きでした。主に経済関係の記者をやっていました。例えば、戦後59年にはドイツ政府から、記者を一人寄越して復興中のドイツを見て書いてくれという招待状があつて、それでは向こうに派遣されました。そこでブラジルに投資しているドイツの企業の本社を見回って、取材をしたんですよ。そして、その2年後の61年に日本の外務省から招待されて、その時も僕が特派員として取材しました。そういうように、ブラジルの記者として、通っていたわけです。

ところが、日本ではね、取材が終った頃朝日新聞の記者がね、僕にインタビューに来て、ブラジルの事をいろいろ聞かれた。非常に勉強家でね、辻登という記者でいまだに名前を覚えています。当時は61年ジャニオ・クワドロスが大統領になった頃ですよ。日本の外資系の企業では、この新しい大統領がどういう人か、まだよく知られていなかったんで、そういう事についていろいろ質問された。翌日新聞には、4段抜きで記事が載りました。僕の写真入りでね。最後の方にね、山城ジョゼー氏は“日系”雑誌の「ヴィゾン」の記者です、と紹介がありましたね。（笑い）日本では日本関係でなければ、日系人は働けないと思っっているんですよ。日系人がブラジル語の有力紙の新聞記者になれるということは、当時はまだ考えもしなかったでしょうね。

（笑い）

赤嶺 もう、そろそろ時間もないと思うのですが、私の方から質問が後少しありますので、先にすすめさせていただきます。今度は一転して、二世の大先輩にあたられる3先生方から、これ

から続く若い2世達に贈りたい言葉、特にこの場合は沖縄県人子弟に限らず、広くこれから続く日系の若い人達に希望したい事、望みたい事、贈りたい言葉、そういった事をお聞かせ願えれば、と考えております。特に打ち明けた話ですが、わが沖縄県人の子弟はあまり日本語が出来ない、その代わりポルトガル語は上手である、というような評価も巷で聞くんですけれども、日本語と県人子弟という問題も含めて、これから、先生方の後にくつ若い世代の日系子弟に贈りたい言葉など、日頃考えている事をお聞かせください。まず、山里先生からお願いします。

ブラジルに東洋の心を残そう

山里 私からすればですね、日本語を習うということは、限界があるんじゃないかと思う。何故なら、その必要性が出稼ぎの関係上そういった面もあるけれど、実際にはそんなに痛感されるものではないと思うんです。だけど、日本語を知らないでそれですむかというところ、正直のところ日本語は知るべきであると、私は言いたいんです。じゃ、貴方は自分の子供たちに、ちゃんと日本語を教えていますか、と問われると現実にはノーなんですよね。うちの娘は何か日本語をかけるけど、倅は聞くのは聞いているみたいですけど、話す分になるとお手上げの方でありまして、日本語学校にも出していないわけなんです。まあ、それは親の責任だと言ってしまうと、こっちも言うことではないんですけど、でも、全体的に見てブラジルで日本語が続けられるというのは、恐らく限界があるんじゃないか、と私は思うんですね。

しかし、私自体が日本語をならつて、それで何を得たかといいますと、正直なところブラジルにおける日本人社会というものは、さつき言われたような少数民族の悲しさというのか、もう底が見

えている訳なんです。いくらわれわれが、肩をいからして見たところで、少数民族というものは、上原先生のような分野で生きる面も、もちろんありますが、全体的には今だに一人のセナドル（上院議員）も出し得ないというような、どちらかと言うとバラバラな状態に日系社会はある。昔の群雄割拠といえますか、県人会は至るところにあるし、文化協会は至る所にあるけれど、ここに一つの統合した、何かの目的に向かってチャレンジする団体ではないわけなんです。みんなそれぞれ勝手なことをして、まあ、喜んでいっている状態に置かれているわけなんです。けど、いま、全部さじを投げてしまえというんじゃないですね。私には、残念でたまらないことは、日本、もちろん沖縄にも、是非これは子孫に伝えねばならない、伝えるべきであるというものがあるということは、私自身が身をもって体験してきたんですね。それは決して文化的なものでもなければ、そこに会館という形で残すものでもない。

私は、東洋の心というものを、非常に大事にしています。東洋の心こそ、日本移民がブラジル国民のために残すべきものであるということ、を、再々繰り返しているわけなんです。残念ながら不徳の至りで、そういうムードをつくり出す力がないというのが私の現状なんです。何回もやりかけたんです。ところが、何回も失敗しました。しまいにはえいつ、ブラジルより日本にいつて日本から始めようと思って、7、8年位前に向こうで運動を起こそうと行ったのですが、残念ながら体調をくずして、とうとう子供らに早く戻って来い、と言われて、余り皆に心配掛けるもんで戻って来たわけです。だけど、この東洋の心は、是が非でもわれわれが残さなければ、これで途絶えてしまうものです。

赤嶺 それでは、山城ジョゼー先生、お願いします。

山城 そう言われますと、難しいですね。（笑い）

赤嶺 日頃考えていらっしやることをお願いします。

山城 アウグストさんの話を聞くとますますわからなくなるように（笑い）：難しいですね。何と言いますかね、われわれが生きている世紀は、非常に困難があつたですよ。現在もまだ続いていますね。ちよつと平和が戻っているようだけでも、なかなか中では燃えているんですよ。だから、そういう点から見るとまだまだですけど、現在は世界は一つですよ。あっちこっちに、いろんな問題はあるけれども、世界的に考えないと結局生きていけないです。そういう点で、もちろん各民族・各人種のいろいろな特徴といつところを、世界を一つの自分の国として考えて生かし、そして各自が一緒に進んで行ったらいいんじゃないかと思う。それは、もちろん大きな空想かも知れない。直接自分の子孫には出来るだけ日本人のいいところを受け継いで、直接間接にブラジルの国を良くするように生きていったら、勿論、世界の中のブラジル、世界の中の日本であるという考えは、もう常識になっていると思いますから、そのように生きていったらと思います。

赤嶺 さて、それでは上原先生は、大学の教育の場とか、あるいは日系社会の中における文化活動の場を通じて、若い世代との接触も多い方だとお見受けしますけれども、先生から特に日本語を中心に、若い世代に対して希望したいことをコメントして下さい。

学問教養を身につけた上で平凡な人間に

上原 僕が住んでいる社会は、小さい社会ですから両先生方のお話とはちよつと違うかも知れないですけどもね。

いろいろなところから見てですね。将来、これから二世、三世に何かのこす言葉というのは難しい質問だとは思いますが、まあ

しかし、自分の希望としてはですね、とにかく第一、二世・三世はどういうプロフィール（横顔）の人間であるか、どういう社会をこれからつくるか、それを今いつも心配して考えています。三世の結婚を見ますと、データでは63%が国際結婚ですね。今の日系社会は140万です。そのうちの3割が混血の方です。そして、四世、五世になると、確かに9割ぐらいが国際結婚になるだろうという予想ですよ。そうしますとあと20年、30年たつと日系コロニアというのは、僕たちみたいな人間の社会じゃないはずですよ。もつと変わった、金髪、銀髪、黒人の混ざったコロニアができると思います。実際に僕がサンパウロ大学の工学部に入学したのは1949年ですよ。その年はだいぶ日系人が入ったんですよ。「だいぶ」というのは、5、6人。（笑い）工学部の中に、150人だったかな、その中の4、5人だったんです。それでも「だいぶ」だったんですね。しかし、今はですね、サンパウロ大学の工学部の2割ぐらいが、日系人ですよ。20パーセント（%）。工学部には先生が一人もいなかったんです。今はたくさんいます。サンパウロ大学に入学する学生は16%か18%、実際にはもつというかも知れないです。というのは、もう日本人の名前でない日系人がいるんです。（笑い）ですから、新聞見てもですね、あるいは統計に入っていないはずですよ。2割位いつているんじゃないかと思えますよ。そうしますと新しい社会ができます。日系社会を意味する「コロニア」というのは、これはまあ、ただ他にいう言葉がないから「コロニア」と使うだけですね。

山城 そう、コロニアとは全然違いますね。

上原 違います。僕等が話したコロニアと、新しい「コロニア」とは全然違います。ただコロニアというのは、日系人の集まりとか、ユダヤ人の集まりとか、それをあらわすために「コロニア」と呼ぶことになるか知れないです。

僕は、学生時代にうちの兄貴から言われた言葉なんですが、「前はエンジニアになったから人間になったとおもったら大間違いだ、これは一つの仕事であって、それを通して人間になる」と。それはいいことだ。しかし、それでも、人間としての一般常識ですね、ゼネラル・カルチャア。宗教とか、いろいろな本を読んだり、音楽が好きになったり、踊れたり、いろんなことを身につけて、平凡な人間になれば、僕が学生たちにいうんですよ。最後には、とにかく幸せになるようにしなさいと。貴方たちが、何かをやっていること、自分たちの生活、自分が人間としてこの社会の中で、恥ずかしくもなければ、何も偉いとおもわなくてもいい、ただ平凡に隣近所の皆さんと、平和でこう話も出来る、生活も出来る人間になって下さい。それをいつも言っています。すみません、どうも。(笑い)

山里 いいですか、ちよっと、一言。

赤嶺 どうぞ。

山里 今、上原先生のお話を聞いておりますとわれわれは、三人三様で先生はずうとはるか上の風の当たらないところにおいて、山城先生が中間で、僕が一番風が激しいところに立っている。(爆笑)

上原 いやいや、そんなことはない。宗教の話は人間にとって大事なことですよ。私は宗教はゼロですよ。

山里 じつに、上原先生のお話を聞いているとね、はあ、平和だねという感じがするんです。

(笑い)

赤嶺 ですから、今日座談会はお三方、それこそ三人三様で、風当たりが、おのおの違いますから、たいへんいい座談会で、ずうと興味深くうかがってまいりました。

最初に仲川前会長から要請がありまして、私、座談会の準備を

させていただいた時に、山城先生と電話でお話いたしました。その時に先生から、ティグナー先生の思い出がありますからそのことを是非誌面に記録していただきたい、という趣旨のお話がありました。そのティグナー先生についても、最後に少し掘り起こして光をあてていただきたい、と思います。

山城1951年の末にですね、当時沖縄はまだ軍政府から、ジェームス・ティグナー先生、この先生はアメリカのスタンフォード大学の教授で沖縄軍政府の委属で、沖縄県人が海外で移民しているところの国々を視察し、どの国が沖縄移民に適しているか調べてくれということで、先生はこちらへ調査に来られた。当時の沖縄文化救援会の方々から山城さん、協力してくれないかといわれ、私は喜んで引き受けて一緒に各地をまわって来ました。その時から私は、その先生が大変な人格者で、沖縄県人に対して懇切で、調査の面においても真面目で、全ての県人に対して同じように尊敬しあって、マット・グロツソやジュキア線そして北パラーをまわって来ました。それ以後先生とはずっと文通を続けて来ました。そのために1997年、私は翁長英夫と一緒にネバタ州に居られる先生を訊ねた。先生は子供がなく夫婦二人ですが、現在ネバタ州立大学の名誉教授でまだ活躍中で講演会などもなさっている。奥さんも日本びいきで、先生のお宅に2回も食事に招待され部屋も見せてもらったが、中はみんな日本物でほんとに日本びいき、そして沖縄びいきの方ですね。

先生は心臓を患い一度入院していたが、元気を回復して研究活動も続けられていて、時々移民に関する専門雑誌に沖縄移民に関する論文を書いておられる。ブラジルやボリビア移民についてのものなどです。今も沖縄移民に関心をもっておられる。それで私はポルトゲースで簡単に記事を書いておりますが、今準備されている刊行物に適しておれば、どうぞ利用して下さい。ここにある

写真は、県人会にもあるかもしれませんが、これを利用して下さったら私は非常に嬉しいです。

司会 時間もだいぶ経過しておりますが、編集委員長、何かございますか。

山城勇 テイグナー先生がみえたのは1951年ですか。

山城 51年の末から52年の2月頃までおられた。

山城勇 で、その時、山城ジョゼー先生が最も適当だったということ、ちょうどその頃文化救済協会という、全伯組織ではなかったが、ウチナアンチュがつくった戦後の沖縄救援活動の母体としての組織、その組織が引き受けてジョゼー先生にお願いして、地方まわりの通訳と案内をお願いしたということですね。

山城 はい、そうでした。

司会 えんえんと4時間以上にわたり大変有意義なお話の数々、ありがとうございます。3人の先生方に心から感謝いたします。

論文テーマ

県人会の活性化について

第1位

ブラジル沖縄県人会が直面している焦眉の課題

宮 城 あきら

「二」発展する沖縄県人会

1998年8月9日に、ブラジル沖縄県人会(仲川実留会長)が挙行した日本移民90周年・県人会60周年・会館建設20周年の記念式典は、母県から大田昌秀知事(当時)の代理として東門美津子副知事、友寄信助県議会議長、宮城健一市町村長代表をは

じめとする県人多数からなる慶祝団を迎えて、南米の県人関係者も含めた当会員など700余人が、県人会館の大サロンを埋めつくして盛大におこなわれたのであった。式典にさきだっておこなわれた先亡者慰霊法要をはじめとする記念祭プログラムは、式典当日の記念レセプション・芸能公演・国際親善ゴルフ大会・国際柔道交流大会・ゲートボール大会、そして移住先国代表者会議など、記念祝賀にふさわしく多彩そのものであった。とりわけ8日の前夜祭、――母県から参加した高校生バンド隊やエイサーをはじめ、県人会各支部の琉球舞踊や民謡踊りなどおりませで、リベルダーデ・ガルボンブエノ街を華やかに色どった街頭パレードは、沿道を埋めつくした観衆の大喝采をうけ、さながら沖縄祭りの観を呈し圧巻そのものであった。

沖縄県人会の90周年移民祭は、このブラジルの大地に移民沖縄県人が永い年月を通じて、ウチナーンチュとしての生活と文化を、一世から二世・三世・四世へと継承し根づかせて、大きく花開かせている今日の発展した姿を、内外に強く印象づけずにはおこなった。じっさいブラジルの最大の邦字紙『サンパウロ新聞』は、連日社会面のトップに沖縄県人会の記念祭を報道し、「世界に散らばるウチナーンチュが、共に助けあって生きていく『ゆいまーる』（共生）の考え方を確め合った」と、讃え賛辞を惜しまなかった。まさに沖縄県人の結束力と、「万国津梁の鐘」に刻まれている国際性豊かな「うまんちゅの心」が、90年の歴史を通じて脈々と受け継がれ、今日のブラジルのウチナーンチュの生活に生きびいているのだ。

このようなブラジルの沖縄県人社会と県人会の発展は、しかし開拓先人たちの血と汗と涙の苦難の歴史に支えられて、はじめて可能となったのである。1908年の第一回笠戸丸移民の先駆移民をはじめ、新天地を求めて参集した先人たちは、気候・言語・

宗教・習慣の違いからくる様々な困難に直面し、辛酸をなめつきました。また言語に絶する苛酷な労働と県民にたいする種々の差別的抑圧に直面し、屈辱を強いられた。

しかし、このようななかにあつてもわが先人たちは、「共生」の魂を決して失わず、県民の結束を積み重ねたのである。

こうして1926年8月、翁長助成・与那嶺仁五郎氏ら県人有志が大同団結して、初の全伯県人組織・琉陽協会を創立したのであった。全伯に46支部が結成され、2,300余名の会員が参加した琉陽協会は、県人移民の様々の問題を解決するために奔走し、友情と団結の礎となった。けれども第二次世界大戦の過程において、ブラジルと日本は敵対国家となり、ときの政府によって日系諸団体はすべて解散を命ぜられ、県民組織もまた消滅を余儀なくされた。

戦後、戦禍で廃虚と化した母県沖縄を救援するための運動がブラジルでも開始され、そのための救援会が設立された。やがてそれは、戦後の混乱と貧窮の中で問われはじめた琉球政府の移民策、いわゆる戦後移民の開始とともに、移民受け入れのための全伯沖縄海外協会の設立（1953年）へと発展した。それは戦後の県人会運動を名実ともに担うものであった。つぎつぎと増大する戦後移民とともに、組織も拡大し、在伯沖縄協会と改名されていた県人組織は、1977年に在伯沖縄県人会と改称し、4,000余名の会員を擁する組織として今日に至っている。

創立60周年を迎えている今日のブラジル沖縄県人会は、在伯県人14万の生活と文化の交流の場として、またこの大国ブラジルの政治・経済・文化・スポーツなど、あらゆる分野に輩出している二世・三世・四世の県人子弟たちの交流と研究の場として、さらには母県との文化的・人的交流の窓口となって様々な問題を解決していく場としての役割を担っている。とりわけ沖縄文化の粹

である琉球舞踊、民謡など芸能、文化の交流伝承の場となり、ブラジルの大地にそれを根づかせ発展させるに寄与している役割は絶大である。世界のウチナアンチュの中で最大の組織を誇るブラジルのウチナアンチュとわが県人会にたいする期待の声は、当会員のみならずブラジルの内外から益々高まっていくであろう。

「二」直面している問題

だが、ブラジル沖縄県人会は、いま大きな問題に直面している。それは県人会組織を今後担っていく後継者の問題である。県人会を生み育て担ってきた一世の人々は、14万在伯県人人口構成の約10%に減少し、いまや県人会を構成する二世・三世の世代が半数に迫る時期にさしかかっている。他県人会組織がそうであるように、人口の自然的推移に規定されたこの難問に沖縄県人会もまた直面しているのである。だがそれは、打開されなければならない。

沖縄県人会の歴代の指導者達は、このような組織の現状に鑑みて、これを打破するために、すでに1970年から母県当局の理解と協力を得て、海外移住者子弟の県費留学生制度の適用を実現し、後継者の育成にこれつとめてきたのであった。今日では毎年4名の県費留学生が、日本語とそれぞれの専門分野の技術研修を重ねることができるようになり、その恩恵を受けている留学生は、すでに70数名を数えるに至っている。この県費留学の修了生たちが、いまあらゆる分野で活躍しつつ県人会の後継者として大きく期待を寄せられているわけである。

けれども、帰伯した留学生たちはそれぞれの分野で活躍しているのだとはいえ、留学で修得した日本語を実際に使用し生かすことができているとはいえない。また日本語をさらに身につけていくための、機会や場所が与えられているともいいがたい。その

ゆえに、せっかく留学中に修得した日本語についての知識や理解は、それぞれの職場や日常生活において、ポルトガル語をコミュニケーションの手段としているなかにあつては、深めることができるどころか、むしろ薄らいでしまっているというのが実情ではないだろうか。じつさい、彼や彼女らと語ってみると、このことを実感する。

とはいえ、県人会を後継していくためには、日本語を話し言葉としてのみならず、読み・書きの言葉としても身につけ、さらには日本語の心も深める努力が問われるであろう。またウチナーンチュとして、その心と文化を理解するためにウチナーグチ（沖縄の方言）の基本をある程度修得することも問われるであろう。

【三二】一つの課題

そこでいま、ブラジル沖縄県人会にとって、その後継者を育成するために何が問われているか、そのための課題は何であるのか。わたしは、つぎの二点を提起したいとおもう。

（1）日本語をより深く学ぶことを目的とし、向学心に燃える人々に広く門戸を開いた日本語学校を沖縄県人会の下に創設し、もって県人会の後継者を育成する。

移民一世は、その草創期のころから子弟の日本語教育のために心血をそそいだ。日本語学校を創立し、あるいは他の日本語学校に子弟を通学させて、学ばせる努力を重ねてきた。それは今日においても営々と引き継がれている。また、それぞれの家庭で日本語による日常会話を習慣づける労苦をも続けてきた。このような移民一世の営為のなかから、日本語を語り理解する二世・三世の県費留学生在が生誕しているのである。

移民一世のこの努力を継承し、これを基礎に一世と同じように日

本語で語り、日本語を読み・書き、そして理解しうる二世・三世の育成をめざして、この日本語学校は創立されなければならない。そのために、この日本語学校における教育の方法は、日本語のみによる日本語教育を推し進めることである。

では、この学校の教師は誰が担当し、それをどのようにして確保すればよいのであろうか。

率直に言って、沖縄県人会が直接的に教師を雇用する財源やその諸条件をもっているわけではないとおもわれる。そこでわたしは、沖縄県人会が母県教育庁やその他の団体と連携し、退職した学校教師に日本語学校設立の趣旨と県人会の切実な要請を御理解いただき、ボランティアを呼びかけて、これを実現していくことを提起したい。退職教師のなかに、この要請に応える志豊かな人々が必ず存在すると確信する。

ボランティア精神で教える教師の自由な教育の中で、日本語の読み・書きの高学的基礎、そして日本語の心、さらには日本の歴史や文化のガイストを一步深めて学習することができるであろう。また沖縄の歴史や文化、伝統的慣習（年中行事）や人々の生活習慣、そしてウチナーンチュの心（ゆいまーる・うまんちゅの心など）を学ぶことも不可欠であろう。

県費留学を終了し帰伯している県人子弟たちは、日本語をさらに修得したい向学の志をもちながらも、それを具体的に実現していく機会に恵まれず中途挫折している場合が多いようにおもわれる。県人社会の後継者・ニューリーダーを育成すべく実施されている県費留学制度の意義を積極的に生かしつつ、県人会の下での日本語学校の運営はなされなければならないであろう。

（2）沖縄県ブラジル出張所の開設を母県当局に働きかけ、これを実現する。

在伯沖繩県人14万の人口は、母県の市町村別人口比からすれば、第2の県都沖繩市に匹敵する。ブラジルの大地に大きく根をはり成長している県人社会が今後さらに飛躍し発展していくために、母県の行政組織、沖繩県ブラジル出張所の開設を県当局に強く働きかけて、これを実現すべきであると考ええる。この出張所の開設は、母県との文化交流のみならず、社会経済的、人的交流をよりスムーズに実現していくための架け橋として、必要不可欠にして切実な課題である。母県当局は、ブラジル沖繩県人会が10数年来問い続けているこの問題に、今こそ正面から向きあい、真剣に取り組むべきときである。

いま、母県は、日本国全体の経済構造が危機に瀕している中にあって、県の基礎産業であった製糖・パイン産業が国際競争力に破れ低落して久しく、観光産業のみにその活路をたよっている。この県経済の現状打破をめざして母県当局は、「国際都市形成構想」を策定して県経済の自立的発展を模索している。それは、①自由貿易地域の新たな展開、②情報通信関係産業の集積促進、③国際観光保養基地の形成を柱とする「国際都市形成」にむけた新たな産業振興策である。つまり母県は、第一次産業が衰退する中で第三次産業への転換を急務としているのである。

今日このときにあたって、ブラジル県人会は、資源大国ブラジルの資源と技術立国日本の技術力を、母県のブラジル出張所の開設を通じて交流・結合し、民間レベルの経済的活力を促進しつつ母県の経済的發展に寄与し、同時にブラジル県人社会の一層の発展を実現していく構想を策定して、母県当局に積極的に提起すべきである。ちなみに、「国際観光保養地」の振興策と連動して沖縄県を、日本におけるあるいは又、アジアにおけるブラジ尔特産物製品の発進基地とすべく、「自由貿易地域の新たな展開」を生かす貿易振興策は、その一例である。それは、ひと昔ならいざ知らず、

情報通信・運輸産業が世界的規模で著しく発展している今日では、非現実的なことでは全くない。県経済の再興を期す一つのプランとなりうるのである。

沖縄戦で十数万人の肉親同胞を失い、戦後の廃虚のうえに外地からの引揚者や疎開家族の帰還、そして米軍による軍事基地建設のための土地の強制接収など、混乱と貧窮の続く社会状況の中で、ときの琉球政府が「食糧Ⅱ人口」問題の解決策として打ちだした移民政策。この政策にのっとり戦後移民の同胞は、ボリビアそしてブラジルの大地に新天地を求めたのであった。

以来、幾多の困難をのりこえて、自力でブラジルにおけるウチナンチュ社会を、ブラジル連邦共和国の人々の理解を待つつ着実に築きあげてきたのである。

母県当局は、ブラジルのわが同胞の努力に深く敬意を表しつつ、県人同胞が海外に建設している社会を、沖縄県を構成する市町村と同様の一つの地方自治体組織として認知する発想と感覚で、ブラジル出張所の開設の問題に対応すべきである。この観点に立つならば、県当局はブラジルの県人社会にたいして、たんなる儀礼的關係としてではなく、まさに「国際都市形成構想」を現実化していく一つの社会的關係として、行政組織的關係の確立をつうじて社会経済的交流を実現し、これを基礎にあらゆる分野の交流をより大きく創り出していくことができるであろう。

母県との社会経済的交流の拡大は、同時にブラジルの県人社会にも大きな経済的活力を生み、母県との貿易を軸とする新たな産業・企業の振興を促進せずにはおかないであろう。それは、二世・三世の県人子弟がその専門技術を生かしつつ日本語を活用する職場を確保することに連動する。県人子弟にとってそれは、日々の生活に根ざしながら、日本語を常用する機会や場所を創造することでもある。つまりそれは、創立される日本語学校の社会的基礎

ともなり、県人子弟の学習意欲を一層もりたて広めていく、様々の契機をつくりだすであろう。

沖縄県ブラジル出張所の開設は、このように母県とブラジル県人社会に相互の経済的活力を生み出すとともに、それが基礎となって、県人社会に日本語をより一層普及し、もって文化的・人的交流をも一段と活気あるものとしていく、まさにその架け橋となるものにほかならない。

わたしは、以上の2点を沖縄県人会が積極的に実現するならば、その後継者を必ずや育成し、今後ともブラジルのウチナーンチュ社会の立役者として、その発展に一層寄与しうるものと確信する。

第2位

県人会活動の活性化と将来

赤嶺 磯乃子

日本人がブラジルに移り来て、はや90周年の歳月がすぎ今年は、母県沖縄をはじめ北米や南米の同胞のご臨席を賜り共々に慶賀の栄に欲したことは誠に喜ばしいことでした。

初期移民を回顧するとき脳裡に浮かぶのは筆舌に尽くせぬ幾多の艱難辛苦の時を閲した、ということです。当時の国際状況は奴隷解放の真っ只中にありました。移民政策は奴隷解放による労働力の需要、つまり奴隷に代る労働力の入用から採られた一策だったのです。

沖縄を発つ時の移民の心境は希望に燃え、欣喜雀躍として夢の新天地に赴いたことでしょう。

しかしそこで直面した現実は、想像だに出来なかった苛酷な労働条件ではなかったでしょうか。

課される仕事の量、こなさなければならぬ辛く厳しい馴れない仕事、天災や人災に呻吟する日々。経済的病弊は極に達し、糊口

の資を得る術を知らず、雨漏りのする我が家で、食べなれた和食もなく、愛し子の教育もままならない情けなさ。困惑する言葉の壁、相手の話が理解出来ないくやしさ、自分の意志も表現出来ないもどかしさ、言葉の不自由さから生ずる誤解、意志の疎通を欠く日常生活。蔑まれ、辱められてもなお耐え忍ばなければならぬ憤り。習慣の違いからくる他民族との違和感。食文化や精神文化の差異からくる戸惑い。人間関係の乱轢等々、どの観点から見ても決して恵まれていたとは言えない境遇、踏まれても、蹴られても、躓いても、転んでも決して挫折することなく希望を明日に託して、汗と涙の人生に自らの限りを尽くして生き貫いた先達。難儀を厭わず開拓に肝胆を砕いて仕事に精を出し、辛い労働に堪えかねて「汗水ゆ流ち働ちゆぬ人の心嬉しさや、他人ぬ知ゆみ、ゆいやささ、他人の知ゆみ」気張らや童達と民謡を口遊びながら、家族を労り、励まし、慰め、皆の士気を鼓舞したであろう先輩達。汗なき人生に成長はなく、苦なき人生悦びなし、若い時の苦労は買ってもしなさいと身をもつて教え、今は人生の冬を過ごしているが暫くの辛抱だ、冬は必ず春となることを信じ撓まない努力と真摯さをもつて一段また一段と階段をあがり、後輩のために軌跡を残して下さった方々。

幾星霜が過ぎ、ブラジルにも馴染み、教育を受けた子供達の成長につれ伯国社会が理解出来る世代になると、親達が誤魔化されたり搾取されるのを見て、怒りが心頭に発し「お父さん、私達も同じようなことをして利益を得よう。正直者が損をし、馬鹿を見る社会なら郷に入っては郷に従えばよい。」と憤慨する息子に「童達よ、誠は一生の宝ぞ、誠の上に弓矢は立たぬ。他人に迷惑をかけてはならぬ、大切な金、ほしい金ではあるが人間にはそれ以上に尊いものがある。

人間として永遠に変わらない人の道、それは誠であり正しい心で

あり魂なのだよ。自分を研いて人生を全うしなさい。この世の財産はここだけのものの心の宝は永久に失われることはないと言え諭します。学問を修め頭と心を研いて他人に騙されないように務めなさい。「知恵出でて大儀あり」というけれども悪知恵を働かせてはいけない。頭だけ研くと片手落ちになる。心を研いて正邪の判断を誤ってはならない。望んでブラジルに移り来た。この地で自分を研いて成長しなさい。玉も磨かなければ光沢がないように人間も鍛えなければ人格者には育たない。「宝玉やてん研かにば錆す、朝夕肝研ち浮世渡ら。」と歌いながら義を教えます。また兄弟喧嘩には、兄弟は両の手、片手だと一つのことしか出来ないが両手だと10倍の力が出、3人が力を合わせると百の力が出る。心の一つにして助け合いなさい、父母なき後、頼りになるのは肉親だよ。どれ聞かせてやろう「言ち足らんくとや一人足れい足れい互い補なてる年やゆいる。」と歌う温厚な好々爺。その温顔に接していると移住当初貧困に打ち拉がれ月に涙し、旭日に故郷を恋い、み仏にどうぞこの困難を克服する知恵と勇気を授けたまえ」と祈り、帰国を口にした昔日の苦労の日々は忘却の彼方に追いやられてしまったかに映ります。老いてなお隠然たる影響力を持ちブラジルに移り来てよかったと悦楽するえも言われぬ老顔、順風万帆だけでなく人生の辛酸を嘗めつくした人の豊かに実る晩年。先人は家庭教育の中でも伝統文化の先祖供養を中心に血のこさを教え、目上を立てる心を育み、感謝の心、お蔭様の心を教えることも疎かにはしませんでした。

「お父さん、日本人は法事にご馳走を作るけれどもここはブラジルだし、そんな習慣はないからご馳走をお供えする必要はないと思う。ミサも教会だけでいいじゃないか」という息子にお釈迦さまの弟子、日蓮の話をして聞かせます。ある時日蓮が黄泉の国へ行った母はどうしているだろうかと思ひ、あの世を観てみると喉

が渴いている様子なので母に水を与えます。口に持っていき飲むとすると火となり喉を潤すことが出来ません。そのことを師に相談しますと、お母さんの代わりに供養をしその徳を回向しなさいと教わります。日蓮は一生懸命に供養します。

息子の供養により火炎地獄から救われた話をして法事の由来、ご馳走の謂れを説明して民族祭祀の尊さを教えます。

前人は財と地位だけを求めて汲々としていたわけではありません。個人の微力を知り協会を組織しブラジル社会という脈々と流れる大河の中で自らの根、源を忘れさせない努力も怠りませんでした。会員の力を結集し、会館を建てて相互研磨の場を設け、伝統文化や民族文化を伝承せんと尽力していることでも窺えます。南十字星の輝くサンパウロの空の下琉球文化の殿堂が燦然と煌いているのは心強いかぎりです。棺をおおいて事定まれりといいますが、先駆者の偉大さに頭が下がります。卓越した人材の育成は、人類恒久の課題です。良い子供は親に孝を尽くし、和樂の家庭を築くでしょう。良い社会人は秩序を守り、住みよい世の中を形成することでしょう。よい国民は平和国家の安寧に繋がり、人類愛とその繁栄に貢献していくはずです。

人材を育成することにより国家の礎が築かれ、個人の幸福も享受出来「地平らかにして天成る。」という理想郷の実現をみるのではないでしょう。

親達は協会を設立し学校や病院、農業組合、銀行、日本文化センター等子孫が必要とする財産は、すべて形を整え後世に残して下さいました。

90年の光陰が矢の様に過ぎ、その遺産を相続する世代になりましたが、後継者はそれを隆盛にし発展させるだけの器に成長したでしょうか。

恒産がなければ恒心もないといいますが、経済的基盤は盤石で

しょうか。相続する時点ではその資格を持っていた人も非を指摘し、忠告をしてくれる親が減少している昨今、自分の非を顧みるだけの大器になりえたでしょうか。私の様に後継ぎは育つただろうかと後継者の成長を危惧するのは取り越し苦労、老婆心なのでしょう。ブラジルに住む私達は日本人として世界に誇りうる、すばらしい文化を持っています。ブラジル社会に貢献しなければならぬ使命があります。会員一同知恵を絞り力を合わせ「守礼の邦」の文化の花を爛漫と咲かせてほしいのです。人の道は悠久の時の流れの中でいかような時代の推移をみようともし決して変わることなく続く道です。その真理の道に沿って生き、子を育て、実を結ばせ、花を咲かせる努力を惜しんではならないと思います。私達沖縄県人の人間形成の土壌は「ユイマール」共存」と「チュイシイジ」共栄」と「クネエレー」寛容」の精神が基底になっているように思います。その土壌に和と信頼と謙譲という樹が育ち、その枝は多岐の専門分野にわたり正しく多士済々と人材が輩出しています。県人会はその人達を起用してボランティア・グループを作ってみてはいかがなものでしょうか。

例えば

- 1、医療グループ
- 1、心理療法グループ
- 1、法律グループ
- 1、経営者グループ
- 1、文化グループ（語学、踊、舞、歌、楽器、スポーツ）等、ボランティアを通し専門分野で相談を受け会員の啓蒙をはかる。

婦人会活動

- 1、講師を招聘し、講習会、研修会等の講座部門を拡大し豊かな人間性づくりに努める。

1、慈善活動グループ（高齢者や病人のいる家庭への介護サービス、協力網リストを作成し活動する。

1、料理講習会やその他の講習会の受講者は発表会、展示会などを開催し即売会を行う。

1、コーラス、カラオケ、書道、華道、茶道、香道など趣味としての部をつくり活動する。

沖縄県人会本部へ

1、傘下に婦人部、青年部、少年部を設ける。

老若男女が仲良く手を取りあい、積極的に参加し和氣靄然たる雰囲気の中で先輩を敬うことを学び、他人を労る心、他人の痛みの方かる心を培い、寛仁な人間形成をめざし活動する。

少年部

1、情操教育の（心を育む教育、個性を尊重しパーソナリティーを発揮させる）場をつくる。文学作品や民間説話等を教材にふれあいの場を提供し遊びを通して夢と希望を育む。

1、学習成果を発表させる（文化祭、発表会、展示会、スポーツ競技大会、弁論大会、児童民謡コンクール等子供達の心身を鍛え、視野を広め人間性を豊かにする遊びを充実させる。

1、身体に障害をもつ子供達にもふれあいの場を与える。（目の不自由な子、口のきけない子、耳の遠い子、体に障害を持っている子、そんな子供達にも場を提供してほしい。このような子供達も忘れないでいただきたいのです。

留学希望者受験について

現在のシステムだと原則としてすでに留学生を送った家庭の子弟は、受験が認められていないとのことですが、それは不条理な

約束ごとだと思えます。受験資格は一家に1回だけでなく全会員子弟に等しく与えられるべきだと思えます。真面目に規則を守る会員にはその資格がなく、掟を無視（知らずに願書を提出）した人にはその資格が認められたのでは不公平です。実力のある青年、才能のある若人、意欲のある優秀な希望者を送ればよいのではありませんか。

試験は公平に受けさせ優秀、適否を決定する時点で審査員は話し合い必要ならば優先させればよいと思います。理事の方々としては多くの会員家庭にその機会を与えたいとのご高配の結果だと推察致しますが、私には学問の自由を束縛する行為に思えるのです。協会発展の為に心血を注いでいらつしやる理事の方々には腑に落ちない意見だとも思いかもかもしれませんが外部から見た一会員としての所見をのべさせていただきます。

私達の廻りの自然の営みを眺めてみると草木は春になると青々とした芽を出し、夏にはきれいな花を咲かせ、凋落の秋に実をつけ、冬になると枯れたかに見える木々も地下でしっかりとその厳しさに堪えて力を蓄え、新春を迎えるとまた新しい芽をだします。人間も死によって体は終熄を迎えるかもしれませんが。しかしその志、魂は大宇宙の営みの中で連綿と続き子孫に受け継がれていきます。私達が先人から継承した文化遺産、後世に伝承しなければならぬ宝、それは何なのでしょうか。人は個が集って社会を形成しています。社会は個である一人一人が主であるならばどの様な時代にも対応出来る個人、人づくりこそ私達に課せられた任務ではないでしょうか。今や時代は分明の利器コンピューターの普及により世界は一つになり、宇宙開発や宇宙での研究が進み、人間がクローン人間を創る科学万能時代を迎えています。しかしそこで生活している人間は戦争の脅威に戦慄し、貧困に悩まされ、疾病になき、心の荒廃等に苦悩しているのが現状です。人間は物質

文明のみに生きられる存在ではありません。物に多少のゆとりが出たら足ることを知り、心を探るのが日本人ではないでしょうか。精神文化から培われた慈しみの心、愛でる心、人間としての奥床しさ、心静かに楽しむ人生の味わい、日本とブラジルに生かされた幸福、心こそが私達に安らぎをもたらすものと信じています。目前に迫った21世紀、人を育て、和を保ち、日伯の繁栄を願い、共に健康で新世紀を謳歌しようではありませんか。

県人会の一層の発展と会員の方々のご健勝ご多幸を祈ってやみません。

第3位

県人会の将来について

高江洲 義盛

結論として県人会に将来を求めるなら

- 1、教育、文化の継承者指導者を優先事業とする。
- 2、現制度の市町村による研修生受け入れ体制の枠を県単位に広げてもらう。

- 3、県人会費留学及び研修生送り出し制度を作る。

- 4、現在行われている記念行事を50周年単位として、経費の削減を計り育英資金に当てる。

県人会とは県出身者の移民（移住者）の組織である。移民とは現在以上の生活を県外（ブラジル）に求めて活動し、更に在県の縁者同輩者以上の生活を求めて努力するのが、移民の心情であると思う。それ故に移住者は言語、生活習慣、異文化のハンデを克服して、雑草のような逞しい生活力を発揮しうるのである。然

し乍ら初期移民はその家族構成からしても、その全てが期間労働者としての移民であり一にも二にも金儲けが目的であったことは明らかだが、わが県人移民だけが粗悪視され2回に亘って移民禁止が行われた理由は色々取り上げられている。

皇殖移民会社の宣伝にのせられたとは言え、数多くの有識者が同行したことは県人間に惹起した色々な問題解決において、彼等が救いの主となったことは注目すべきである。

あの時、問題解決に立ち上がった有志の人達は何を憂い、どのような説得の文句を使ったのだろう。そして結果として生まれたのが何だったのか。

我々は今21世紀の100年考えるとき、先人の心を察することが大事なことはなからうか。

今10年後という目の前のことを考えるなら何も成す必要はない、50年後100年後の事を考えればこそ、今生まれたばかりの子供から教育を施さねばならないのである。今我々県人の一人ひとりが、90年の過去を振り返り91年の現在から明日を考える為に、色々な角度から深く掘り下げて、県人界の将来について議論を尽くすことは有意義である。

なんら学問的根拠もなく、説得力もなく、取るに足りない拙案と知りつつ討議の種にもなればと思ひ意見を述べさせて頂きます。

我々は移民する前に於いて地方分権制度による、県人意識はもっており、集団の利害に関しては同意識同士が一つの組織を形成することは、いとも簡単であったと思われる。第1回移民の325人に於ても植民地集団を離れて異民族の生活圏内に入った以上、その利害関係からして小なりにも字人、或いは知友同志の組織に似たものは存在したかもしれない。ブラジルに於ける県人の組織は、日本外務省による沖縄県人移民禁止令に対しての、無条件の解禁運動を目的とし、禁止原因に対する自主申し合わせ14

条の徹底の為に、1926年8月22日に設立された球陽協会が前身であろう。球陽協会の10年に亘る県人意識改革への努力は、自己本位で身勝手のそしりをうけた個人行動から集団協力体制への目覚めとなり、耕地定着という落ち着きをとりもどした。

県移民にたいする耕主の心証も好転するようになり、1934年に時の総領事市毛孝三氏より沖縄移民禁止令は解除されたとの報告がもたらされたのであった。その試練克服と悲願達成の喜びが大同団結という県人会の活性の基になったと思う。

県人会とは移住者の相互扶助と親睦を目的とした現地組織であるが、母県との繋がりをもつ団体組織であり、県は県出身者を後方支援して移民を定着させ、その子弟をして移民国との友好親善を計り、相互扶助の発展と利益に役立つ要になることを理念とした公共性の親睦団体である。

従って会の運営に当たっては、県との繋がりが重視されるわけで、現在に至るまでその指導者は日本語能力と、職の無報酬奉仕が求められている。しかし無報酬奉仕のまままで何時まで通せるかも疑問は残る。

県人会の最盛期は次の理由からして所謂、戦時という非常事態と1963年以降の日本国内に於ける高度経済成長に因る移住者の激減などを勘案すれば、日本語を日常語とする人口が一番多かった1960年代であろう。その時期に沖縄協会では会館が購入され、後に新築移転して現在に至っている。

沖縄県人会には、他県には見られない現象が70年代前後に起きている。それは、隣国ポリビアからの大量移住である。70年代といえば初期移民にとっては老齢期に入り、死亡者の率も多くなって日本語使用者の数は減ったと思うが、それを補填したのがポリビアからの再移住者であり、その存在がブラジル沖縄県人会活性化につながったのは明らかである。

更に、80年代は、沖縄県人ボリビア移住地入植30周年記念式典の為、県を挙げての大型慶祝視察団の来伯となり、地方自治体との連絡機関としての所謂市民会、町人会、村人会の結成が行われた。その歓迎会場には、祖父母の血縁ということもあつて日本語を話さない二世三世も出席したのであるが、母県からは出身者子弟の留学及び研修生の受け入れ制度が設けられたことが伝達され、二世三世達の帰属意識の高揚となり、制度も有効に活用され二世三世の出身関係市町村との教育的交流が盛んになり、県人会にも二世三世の台頭となったのである。

更に80年代後半に起きた所謂日本の好況と人手不足は、ブラジル貨幣と¥との経済効率の較差による出稼人口の大移動を（延べ40万人とも50万人とも言われる）もたらし、さらに多くの日本語の読解者を生むことになった。この現象は県人会の将来の活動に少なからぬ影響を及ぼすこととなろう。正に天与の慶事と受け止めて良いのではなからうか。

ブラジルに於ける日本語を日常語とする一世移民の人口はどれぐらいいるか、大まかに調べてみたら、一世移民がいかに稀少価値的存在となったかがわかった。ここでは12才未満で移住した者はブラジル語使用として、13才以上の戦後について屋比久孟清氏の編著のブラジル沖縄移民名簿から年齢順に調べてみた。その名簿にはすでに他界された人もいると思うが、戦前移民の生存者にボリビアからの移住者を合わせると、総領事館の97年発表の人口動態に近くとも遠からずで適当な数字であると思う。

1997年10月1日現在

ブラジル在留邦人数永住権者長期滞在者 86, 906人

永住権者 83, 831人

長期滞在者 3, 975人

沖縄県人名簿から

(1982年に2才で渡伯したのが現在16才)

16才〜30才……	63人
31才〜40才……	392人
41才〜50才……	2,510人
51才〜60才……	1,466人
61才〜70才……	1,663人
71才〜80才……	739人
80才〜100才……	847人
合計	7,680人
12才未満で入国……	2,702人
13才以上で入国……	4,978人
合計	……7,648人

以上の数字からすると日本語を日常語とする県人一世の数は約5,000人である。しかし実際には1939年の調べの正確な数字の記録によると、当時の日本語学校は486校生徒数19,463人とあるが未調査数をいれると優に30,000人に達するといわれていたから、その0.9%が県人子弟とすると約2,700人で(当時一世の数に等しく総勢ではおよそ10,000人に達することになる。又いままでは日本語を話せなかった一世二世も日本で働いたことによって日本語が話せるようになったと思うからこれも今後の県人会の活動に少なからず影響するだろう。しかしそれはあくまでも想像に過ぎず、また現象としては一時的に過ぎない。今後、母県との高度な文化の交流に携わるもの或いはその習得を試みる者は、ある程度の日本語能力が要求されるのである。ではブラジルに於る現在の日本語教育の状況はどうなっているだろう。

1988年〜93年頃の出稼ぎブームには増加をたどっていた

日本語学校の生徒も、出稼ぎの沈滞に伴い今は全国的に減少の一途をたどっていることは、常々邦字紙の報道によつて周知の通りである。

この状態を放置して何ら対策を講じなければ、将来の県人会のあり方にも大きな変化を来すだろう。

ではブラジル移民より40年も先に移民したアメリカ合衆国の日本語教育の事情はどうだろう。

勿論アメリカに於ける日本人の数は、商業関係その他の短期及び長期滞在者の数は284,008人とダントツであるが、使用語は殆ど英語ではなからうか、それに永住者ではないから数Ⅱ文化活動の活性化にはならないと思う。

日系新聞1月20日号の掲載記事に依ると、ロサンゼルス地区では日本語学校の生徒が激減しているという。ロサンゼルスの日語学校の数は現在24校、その内には創立100年の名門校も含まれるが生徒数は最盛期の3割の485人、因みに中国語学校は140校その中のアーバイン・チャイニーズ・スクールは創立22年で生徒数1,000人という。また朝鮮語学校は350校、ベトナム系でも55校で日本語学校の倍を越しているという。

日本語学校の生徒数の減少について学校関係者は次の様に分析している。

1、一番の要因は二世三世の親の世代が、子に日本語を習わせようという意識が無くなっている事。

2、日本の経済が隆盛期を過ぎた今、日本語よりスペイン語に価値観を感じたことを挙げている。

一方日本語を習う理由として

1、父母の何れかが日本人だから。

2、旅行して日本が印象的だったから通訳になりたい。

3、日本人とも意思を伝え合いたい。

となっている。

現在のアメリカの事情をしることは、我々にとっては40年後の未来を見ることに等しく、重大な警告として受けとめねばなるまい。では将来の県人会を角度を変えて見てみよう。

まず、県人会の運営は現段階においては、当事者の殆どが無報酬である。それが月給制度になった場合現在の運営のあり方では成り立たないだろう。従って当然の成り行きとして、クラブ制度に変わっていくと思われる。そして日本語を話さない会長も当然生まれるだろう。その時今まで以上に母県との交流即ち、現在盛んな（教育、芸能、スポーツ）郷土文化普及活動の成果を維持することが出来るであろうか、残念ながらそれは否定的であると思う。

一世の影が段々薄くなっていくに従い、家庭でも公の場でも日本語による意思表示は少なくなつて来ている、日系人といえども一般の人達の日本語の必要性に対する認識度は、日常生活の有利性に左右されるということは、ブラジルに於てもアメリカにおける日本語教育者の見方は同じである。

アメリカ移民はブラジルに先立つこと40年、我々は彼等を通して40年先の現実を知ることと等くそれは前車の轍として、大いに参考すべきである。

アメリカ社会に於ける沖縄系市民の郷土文化の普及活動についてはよく知らないが、我々ブラジルの県系人には（舞踊、古典、民謡、柔道、空手）などの研ぎが盛んであり、それぞれの文化の継承が指導者に依って行われている、これらの生徒数の中からどれだ

けの数が後継指導者として修業し得るかは未知数であり、その多くはたしなみとしての稽古事に終るかも知れない。

何れにしてもそれは大衆文化の普及につながるののは確かである。しかしながら真の指導者としての資質は、教育（言語）による奥深い文化の知識と理解を基調としなければならないだろう。日本語教育を施す目的はそこにある。

ビラ・カロン沖縄県人会では、50年後更に100年後を目標に指導的人材の育成を最重要課題として日本語学校「おきなわ学園」を開設して現在6年目の日本語教育事業を推進中である。これは単に一地域の人達の為の教育ではないかと、片づけてはいけない問題だとおもう。一人でも多くの優れた指導者が育つ事こそ、万人を益しました日伯両国の国益につながる事を考えれば、県人全での事業として支援して頂く事も当然の道ではあるまいか。

学園の経営に於てはビラ・カロン支部は、支援こそすれ1レアルも支部収入財源扱いにはしていない。言わば人材育成という非営利事業である。本来なら県人会本部の推進事業であるべきではなからうか。教育こそ郷里の文化の継承。そして更にブラジルに於ける大衆文化への普及振興発展を期する原点である。願わくば県人の総意を以って施し、偉大なる我が先人の文化遺産を、誇りを持って継承すべき子、子孫、育成に努めて欲しい。

教育事業こそ何時の時代にも常に優先して実行さるべきである。その推進を乞う。

懸賞論文ポ語翻訳文

テーマ：在伯沖縄県人会と各支部の将来

在伯沖繩県人会（天願貞雄会長）では、1998年8月8日におこなわれた日本移民90周年、県人会創立60周年、会館建設25周年を記念して、ポルトガル語による懸賞論文を募集した。「在伯沖繩県人会と各支部の将来」をテーマとしたこの論文コンクールでは、別掲の通りに、第1席Ⅱ金城R行秀（カンポ・リンポ・フルナス支部）、第2席Ⅱ与儀アキオ（サンタ・マリア支部）、第3席Ⅱ神谷ヒデオ（カンポ・リンポ支部）の順位で、3氏の入賞が決定した。将来の在伯沖繩県人会本部と各支部がどのような道をたどっていくのか、いわゆるその将来像について、2世層が描いているものを、特別に日本語に翻訳して、広く会員諸賢のご参考に供することにした。（尚、ポ語から日語への翻訳は、第1席が山里アウグスト氏、第2席、第3席は赤嶺尚由編集委員が担当した）。

第1位

金城 R行秀 30歳

（エコノミスト）

カンポ・グランデ支部

今日、われわれが立脚している歴史と文化の構造を分析すれば、ブラジルにおける日系社会の将来に影響をおよぼしている基本的な3つの重要なポイントが考えられる。

まず、はじめに多人種系構造を持つ国家としてのブラジルを好例に考察を進めれば、国民全体の世論的な誇りとしてあげられている特殊性は、いろとりどりの色彩の文化が調和よく、あたかも変幻鏡に映し出された多彩な色調が渾然一体となって融合共存し得る条件がこの国にはそなわっていることである。ブラジル国民

は、多人種や多文化を受容する高度な吸収力と適応力を持っており、その性格が文化的同化・融合などに大いに貢献しているのである。自国のアイデンティティと自負を強調するあまりに、極端なブラジル化を主張して自らの信念を確立しようとしている多くの例が日系人の間に見受けられるが、それはしばしアイデンティティ主張によっても少し出される内面葛藤の所在を示すものにはかならないのである。

次は、グローバリゼーションの観点から考察すれば、国際消費市場のパターン化をめざす生産分野においては、世界中の大都市の全家庭の日常生活の上に、直接的な影響をもたらしている事實は、見逃すわけにはいかない。発展途上国のほとんどは、先進国の文化や社会の消費習慣や生活スタイルなどの再現を生産することをけんめいに試みているが、これによつて地域的に生産物のコストを引き下げることによって貢献しており、また、それによつてアメリカナイズの世界をますます拡充させる結果をもたらしている。

第3には、近年において見受けられる各会館やその他の集合所での文化、娯楽、それに日本語学習活動などの低下は、昔と比べて日系社会の日本文化離れ、無関心を示すものである。これらの文化活動は、現代社会の多忙な雑事や他の価値追求に時間を削減されることによつて生じている現状である。したがって、同胞は、時が移り変わるにつれて、ますます県人会活動に参加する時間を減らしているのである。これらの傾向は、総じてブラジルの日系社会が集団ごとに大なり小なりのスケールで常に摩擦を繰り返しながら、避けることのできない文化混合・融合プロセスにさらされていることを物語っているものである。別に、文化混合、プロセスの不可避性は、テロ的な悲惨事をもたらすものではなく、また、コミュニティがそれによつて完全に壊滅しざるわけでもない。その文化的・民族的な混合と融合のスケールとスピードを予

測することは出来ないが、国内・国際歴史の流れの部分として、それに対する理解は、おろそかにしてはならないのである。

それゆえに、ブラジルにおける沖縄県人会の重要な役割は、絶えず批判を浴びながらも、その文化の保存とその活性化にあることを、認識しなければならない。さらにまた、県人会は国の内外においても、その歴史的プロセスの指針に基づいて、伝統文化の保存と継承するバトンの受け渡しの任務をも果たしてきたのである。

伝統の評価とその保存は、いまだに県人社会において、多くの同胞から重要視されていることは、確かである。県人社会を密接に結びつかせる家庭内で伝統的にあがめられているもつとも重要な要素の一つとしての宗教信仰は時には拒否されながらも、いまだに継続されており、われわれが参加している国際化ムードの中で、なおも息づいているのである。

伝統文化保持を主義しているわけではないが、特殊性と表現性ゆたかな沖縄文化は、世界の真実の宝とみなすべきであり、その保存によって、単に地域的のみならず、広くは全ブラジル社会にも貢献するものと確信している。したがって、その価値は、忘れさられてはならないし、末ながく次世代へ受けつがせる必要がある。また、この保存と継承は、家族の団結と切りはなしておこなわれるべきものではない。なぜなら、伝統文化の保存・継承は、その普及に側面からの奨励と援助が必要だからである。それを実行する組織の構造は、全体の価値づけをより充実させ、伝承させる可能性をつちかうとともに、それによって、より広く受容されるように仕向けねばならない。かくして、ブラジルの県人会および各支部や同郷コミュニティの役割は、それぞれの集合体に属している各家族を積極的に統合して、一つの総合組織をつくりだすことが肝要である。文化、娯楽、宗教、スポーツや経済活動の奨

励・発展をうながすには、コミュニティー自体、およびそれに参加している全会員の要望と利益に応えうるように、デモクラシーと近代感覚に基づいて組織だてて行わなければならないし、また、近代社会の進歩・発展に沿って推しすすめていかなければならないのである。

歴史プロセスにおいて、もたらされてきたコミュニティーの变化には応答できないにしても、これを文化喪失として、一概に消極的にみなしてはならない。変化は、必要欠くべからざるの要素であり、われわれは、つねに進化プロセスに順応・対応していく心の準備をしなければならない。たとえ、現代社会のいちじるしい貪欲な活動がわれわれの余暇をもどんどん貪りとつても、われわれは、つねに自分らの好む活動をおこなうゆとりを持たなければならぬのである。コミュニティーの公益に向かつての活動姿勢は、決して個人の利益活動と混同せず、これは、自己の人間形成をよりゆたかにするものであることを認識すべきである。会員たちの活動の近代化と統合化（たとえば、コンピューター、英語、ダンス、体操、競技など）でもって、会館へ多くの人々を集合させるための目的・手段を達成させうるならば、会館へ寄りつかなくなった元会員たちをも再び呼び戻すチャンスにつながるだろう。しかしながら、これらの活動は、あくまで沖縄や日本の伝統文化保存・伝承という責任の自覚のもとでおこなわれることが肝要である。

沖縄の文化的アイデンティティの確立は、多くの同胞によって伝承されつづけられるだろうが、コミュニティーの強化と近代化によつてのみその文化は、保存・確保され、新しい世代によりよき将来をもたらすものである。

第2位

与儀 アケオ 51歳

(土木技師)

サンタ・マリア支部

在伯沖縄県人会と各支部の将来についての私見を明らかにする前に、その過去、とりわけ現在に至るまでの過程について、いくつかの考察を行ってみたい。

古い記録文書の中に散見される資料などによれば、現在の沖縄県人会の創立は、1926年に翁長助成氏を会長とする球陽協会が発足したことに端を発するが、その主なる目的は、沖縄からブラジルへやって来た移民たちが最初に結ばれた契約を守らず、配耕先から逃亡したため、秩序を保つていく上で好ましくなく、後続の移民の受け入れ禁止といった重大な事態になんとか対処し、善後策を講じるためであった。

実際のところ、こういった問題は、日本移民全体に共通していることであつたが、多くの沖縄移民が方言しか話さず、他府県の移民達から時代遅れの烙印を押され、移民禁止の責任をすべてなすり付けられてしまったというのが真相である。しかしながら、労働契約が過酷なため、1日の食べ物を得るために、なんとか身をを粉にして働かなければならず、それでも生きていく上に充分でない場合がしばしばあつた。

当時の指導者達は、そこで一体なにが起きているのか、お互いに啓発したり、警告しあつたりするために団結し、また、組織化に向けて立ち上がったのである。さらに、関係当事者らと配耕先からの逃亡を二度と繰り返さないといった契約書が交わされた結果、約8年間(1919-27)の中断の後に移住が再開されるにいたつた。

従って移民が相互の移住問題について話し合いを持ったのは、同協会においてであった。その際、年長者が若い人たちに必要な教示をおこない、情報を提供したり、あるいは新天地へいかにして適応していけるかについて、援助したりした。さらに、初期の日系ブラジル人たちに生まれ故郷の伝統、文化、習慣、民謡、舞踊などを教えるための社会性のある集会にも次第に利用されるようになった。

早く沢山のお金を儲けて沖縄の島へ錦を飾るんだ、といった強い決意があるだけに、われわれの先人たちは、ポルトガル語を学ぶことにはさほどの関心も示さず、また、自分たちが知っていることでも若い世代へなかなか教えようとしなかったのである。

そして、第二次世界大戦が来た。この戦争における日本の敗戦とそれに続く米軍による占領や支配は、しかしながら、移民たちにブラジルへの永住を決意せしめ、錦衣帰国の夢を捨てて再出発を余儀なくさせ、そこで始めて自分たちの子供の教育にも心を砕くように仕向けた。農業者としての生活の厳しさを感じ、また、自分の家族をよりよくブラジル社会へ同化せしめるべく、彼等は、やがて近くの都市近辺への転住を意図するようになった。

このような理由により、1950年に、なканずく1960年代と70年代に、多くの日本移民の家族がサンパウロへの転住を果たし、彼等はそのほとんどがそれまでの伝統を踏襲して、集団社会を形成しながらお互い助け合い、絶えず古い移民が新しい移民を教えるといったやり方が行われた。そういった沖縄系移民の集団地の多くが、現在見られる県人会各支部の原型となり、そのほとんどが1960年代と70年代に設立されたということができよう。設立された県人会の各支部において話し合われた問題といえは、まずいかにして大都会に適応していくかであったが、それと同時に、若い世代に自分たちの伝統や習俗を教え、若い世代

は若い世代で、映画会やピンポン大会と平行しておなじみのバイレなどを主催し、会員の娯楽にこれつとめたのであった。

そうこうするうちに、戦後移民が大量にどっとやってきて、すみやかにサンパウロ方面に居を構え、各県人会組織の中において二世たちと共存するようになった。まだ少数の者しか自家用車というものを持っていなかった時代であり、そのことが娯楽のために遠隔地へ行ったり来たりすることを難しくさせていた。さらにその頃は、お互いが言葉もよく理解していなかったために、一世と二世の間に誤解がよく生じたこともあった。しかし、一世と二世の間のこの種の問題は、地域によつては、現在でも尚発生していることがある。

適応という試練の時が経ち、多くの二世たちが大学を卒業したり、あるいは在学中であつたり、また、大成功を収めた自由職業人とかブラジル社会で極めて重要な地位に就く者が増え、それにつれて、他人種との自然な同化現象が進みさらにその結果として、必然的に各県単位の組織の常時参加することに、興味を失つたりしたために、現在見られるような組織そのものの弱体化につながり、今日の組織や団体にも共通しているこの問題を掘り下げて検討する必要性に問われている。

われわれは、現在等しくすべてがもう一度、二世、三世、四世たちを組織の中に呼び戻し、活性化させる必要性を痛感しているが、どうしたら、それが可能になるだろうか。それに対して、奇術的な方策があるようには思われぬ。なぜならば、今起きていることは、他国に同化するために、住む場所を移し替えた移民の集団の適合の歴史においても、常に伴う進歩の中の一部であり、自然の流れというふうに理解されるからである。組織そのものを強化し、拡充するために別に同県人ばかり対象とせず、広く非県人にも門戸を開放すべきという人たちの声も少なくない。

しかし、これは、県人会組織の存在理由に合致しないことのようには判断されるので、ここではそういった考え方は与（くみ）しないことにしたい。なぜとなれば、沖縄という小さな島の出身者を集め、それらを代表する団体として正しい身分を喪失させることになりかねないからである。たとえば、「沖縄」という言葉をのぞいて、ただ単に「ブラジル県人会」としても、あるいは、沖縄の祖先と何の縁も（ゆかり）もない人を理事に選んでも、ほとんど意味を成さないものと判断されるのである。

ここで、私見を述べることにすれば、たとえそうすることがやがて県人会組織自体の弱体化につながっていくにしても、祖先に県人との縁を持った人でなければ、会員として迎え入れるべきではない、と考える。また、私が想像するに将来の県人会は、ブラジルにおける沖縄移民の足跡を残す資料館みたいになり、そこで郷土の文化、及び芸能のことを理解することが出来るようになるかもしれない。さらにもう一つ、私が予想するに、将来の在伯沖縄県人会は、ブラジルに住む県人子弟と沖縄県庁が連携を保つためのセンター（本拠地）となったり、あるいは世界各地に散在する他の沖縄県人会組織と文化面や企画面での交流関係を深める場所になるような気がする。

現在の状況下において、指摘すべきもう一つの問題点は、各病院とコンベーニオ（協定）を結んで、救済を必要としている県出身者にたいして医療援護を行うことである。これには勿論、法律、医療技術始め他の分野に精通した、やはり県出身の専門家たちを動員し、おたがいのためにより役に立つサービスの提供を行い、医療活動を活性化させるようにしなければならない。

どのようにして、必要な基金を生み出すかについては、県人会がたとえば、全県人を対象に慈善バザーに加え、太鼓、三味線、あるいは他のアトラクションを併せ持ったショーを企画することが

可能である。各県人会支部は、一つか二つのスタンドを引き受け、そこでは特徴のある産品や食べ物を販売するようにすればよい。そして、純益の中から1部は、慈善団体へ、もう1部は、参加している各支部へ、さらに残る1部は、県人会本部へ寄付するようにすることが可能である。

各支部に対する私の態度の取り方は、極めて特異なものである。ほとんどの県人会支部の法律上の存在は、本部とは全面的に切り離して独立させ、双方の間には単に精神面での杵（きずな）をもたせるだけにとどめることにする。そうすることによって、各支部はそれぞれの生存を期して、沖縄文化が好きでそれを求めてくるすべての人たちに門戸を開放することが可能だし、いや、それよりも、積極的に支部の門戸を開放していかざるをえなくなる、と思われる。したがって、その名称も今までの「在伯何々県人会」からそれぞれの会員たちの意志に沿うように改めるべきである。

各支部によりよく人が集まるようにするために考えられる選択肢のひとつは、やはり、出身県を問わず琉球民謡、三味線、舞踊太鼓、カラオケ、ゲートボール、社交ダンス、等を愛好するグループを編成する事であり、それによって、沖縄文化の継承や保存に寄与できるものと確信する。

最後に、すべての者が先ず考えなければならぬこととして、私がここで強調したいことは、いかにわれわれの県人会を助けることが出来るかを問うべきであって、県人会が何をわれわれにしてくれるかを問うべきではない、ということである。

第3位

神谷 ヒデオ 52歳

（コンピューター・アナリスト）

在伯沖繩県人会（A O K I B）は、1998年8月8日に創立60周年、本部会館建設25周年、及び日本移民90周年記念式典を公式に主催した。その際、沖繩県人会が60年間の長きにわたって文化、スポーツ、さらに広く社会面に至るまで、郷土の伝統と美風の維持に寄与したという理由により、われわれの先駆者達に対し、しかるべき表敬の行事が執り行われた。

われわれの言語、琉球音楽、琉球舞踊、ひいては、もっと広く日本文化といったものの普及を図っていく上で、各支部と一体化した上でブラジル沖繩県人会などの組織の存在が必要不可欠であったことは、特に言うをまたない。より上手に組織化され、また、その時代その時代に沿うように作られた沖繩県人会本部を始めとする各支部が博愛の精神に満ちて、強調性を帯び、かつ、打ち解けた雰囲気の中で、日系社会のさらなる発展をもたらしてくれるであろうことは、ほぼ確信を持って指摘できることなのである。

私のこの結論は、一見単純なように思われるかもしれないが、それではいかにして、実行に移して行くのか。はたまた、世界中が瞬く間に、一つになるというグローバル化の時代の流れも含め、絶えず大きな変革の波に洗われてしまいがちな社会の現状に、我が沖繩県人会本部と各支部をうまく適合させるように骨組していけるのか。沖繩県人会が存在するための理由のほとんどは、間違いなく、創立当時とは異なってきたいる筈である。それは、一世の人たちがたえず減少し、その反面二世や三世を始めとする他の世代の人たちの数が次第に増えてきており、今日において優先されるべき事柄も、同じように異なってきたのである。

第二次世界大戦に先立つ何年間における沖繩県人会と支部の活

動は、主として一世の県人を対象に絞られていた。その頃の活動といえば、琉球舞踊、琉球音楽、郷土演劇一般といったようなものが優先されたり、あるいは誰もが早く稼いでお金を儲け、錦衣帰郷を夢見ていたので、まず、それぞれの子弟に日本語教育をすることに重点が置かれていた。また、いくつかのスポーツや社会面の活動も行われた。戦争中と終戦直後においては、そういったすべての活動が中止の憂き目にあった。多くの支部組織は、戦争が終結した後に、大変な産みの苦しみも伴いながら、産声を上げている。さらにその頃になって、戦争のために廃虚化し、復興作業の槌音が響き始めていた郷土沖縄から新しく戦後移民たちがブラジルへやってきたのである。その後における在伯沖縄県人会の役割は、言うまでもなく重要なもので、いろいろな催しものが行われたり、お互い一体化をはかるために各支部対抗のスポーツ行事も挙行された。しかしながらやがて、若い世代を中心に「われわれは、これからもずっとブラジルで生きて行くのだから、何も日本語のような難しい言葉なんか勉強する必要はないんだ」といった理由で、父母の国の言葉を習得することに次第に興味を示さなくなってきた。

こういった動きがひいては、各支部の中にあつた日本語学校がばかりでなく、他の文化スポーツ団体内に併設されていた同じ種類の学校も閉鎖しなければならぬ事態へ追い込んでいったのであつた。

ただ、それからさらに何年か経過し、日本が奇跡的な経済成長を遂げ、世界の中の経済大国としての地位を揺るぎないものにし、各分野への日本のプレゼンス（参加）が強くなり、日本的なもの、とりわけ、風俗、習慣といったものから柔道、相撲、空手、合気道、剣道のような各スポーツ、果ては日本料理に至るまで、さらには日本語などもあわせて学ぼうといった機運が生まれてきた。

しかし、これはブラジル及び他の諸国に日本へ出稼ぎとして行つて働こうといったような副作用を起こさせた。この出稼ぎ現象により、ブラジルの日系社会に若い青年男女が少なくなり、また、彼等の多くは支部組織の中にある青年会の指導者の立場にあつたことから、後継者不足をもたらした。出稼ぎ現象は年齢を問わず、また、学歴とか職業（農業者、青空露天市商、一般商人、弁護士、教師、一般技術者など）のいかんを問わず、すべてによんだため、かなりの面に亘つて空洞化が見られた。その結果として各支部はもとより県人会本部も、文化社会スポーツ活動において厳しい試練に直面せざるを得なくなった。

したがって、沖縄県人会と各支部は会議、講演会、セミナーなどを主催することによって、今日すべての組織に共通している問題、たとえば会員の減少、なかんずく青少年層の脱会とか資金的な理由や人手不足のために、各種イベントの挙行が困難になつているとか、また、ボランティア活動の難しさ、日本語を始めとする各講座の効率的な運営の仕方、出稼ぎに行く人たちへの必要なおリエンテーション（指導）を与えること、などといった課題にも解決の糸口が見出せるように、たえず組織そのものの刷新や活性化を図っていかねばならない。

もし、組織を刷新したり活性化するための努力がなされず、ブラジルにおける日系コロニアの問題一般に対する沖縄県人会からの無関心さがさらに度を増すようなことにでもなれば、その否定的な影響は、すぐにこの次の県人会創立70周年、会館建設30周年、そして日本移民100周年記念祭の時に、間違いなく発生するに違いないのである。

アナジマス村の一家惨殺事件と「七輪の花」

戦後県人移民がジュキア沿線に大挙して入植し、志を高くもち

ながらも、なお困難な日々を重ねていた1960年代前半期のころ、人々の耳目を揺るがす大事件が発生した。生後10カ月の幼児を含む県人福地才治さん一家7人が皆殺しにされた事件であった。

1964年7月24日午前9時ごろ、死後すでに1週間が経過しているとみられる血みどろの死体が、ジュキア線アナジアスの自宅で発見された。福地さん一家の惨殺体は、近所に住む人たちによって発見されたが、台所のムシロと麻袋にくるまって長女安子ちゃん（6歳）、次女光子ちゃん（3歳）、次男健次ちゃん（2歳）の3人の子供が、頭をぐちゃぐちゃに割られて死んでいた。サーラ（応接間）には、長男健吉ちゃん（7歳）が頭を割られ足を折られて、また寝室のカーマの上には、10カ月の乳児が顔の判別もできないほどメッタ打ちにされて死んでいた。母親の照子さん（30歳）は、裏庭の井戸端近くで後頭部をたたき割られ、こめかみをファツカ（ナイフ）のような凶器で突き刺されて、また父親の才治さん（38歳）は、家から50メートル離れた草むらの中で、同じように頭をメッタ打ちにされて死んでいた。

あまりにもむごたらしいこの事件は、一家惨殺強盗事件という、当時のブラジル犯罪史上でも類をみない残虐な殺人事件であった。凶行の原因は、現場状況からして物盗り説が強く、当時のブラジル警察は、「悪魔のような極悪犯人」の割り出しに必死の捜査を続けた。しかし、事件は犯人逮捕に至らず、遂に迷宮入りとなって未解決のままである。

家長の才治さんは、寡黙で隣近所の人々とのつき合いもあまりないおとなしい人柄で、他人から恨みを買うような人ではなかった。なぜこのような極悪犯罪にまきこまれたのか、人々の悲しみは癒えず、記憶の底から消えることはなかった。

琉球民謡保存会ブラジル支部の支部長であった安慶名信夫さん

（故人）は、このいたましい事件に胸を痛め、無念の思いに荒ぶれているであろう福地さん一家への鎮魂の思いを、「七輪の花」に昇華している。

七輪の花（作詞・作曲 安慶名信夫）

〈ツラネ〉

生（うま）り島向（じまん）かて七輪（しちりん）の花や
誰（たる）ゆ怨（うら）みとて朝夕（あさゆ）泣（な）つが

1、生り島向かて七輪の花や
誰ゆ怨みとて朝夕泣つが

（哀（あわ）りさや七輪の花や）

2、ままならんあてる親子（うやく）押（う）し連（ち）りて
世界（しけ）の裏国（うらくに）に渡（わた）て来（ち）や
しが

（連りなさや 七輪の花や）

3、昔（んかし）眺（なが）みたる恩納山岳（うんなやまだき）ぬ
姿忍ばするジュキア村に

（哀れさや 七輪の花や）

4、奥山（うくやま）の村（むら）にグワラニ族（びと）居（う）
てん

志（し）情（なさけ）の深（ふか）さ肝（ちむ）に染（す）み

て

（連りなさや 七輪の花や）

5、訪（たち）に訪（たち）やい頼（たゆ）て来（ち）やる親子
（うやく）

無情（むじょう）の山嵐（やまらし）ぬ吹（ふ）ちやい萎（し
ぶ）で

（哀りさや 七輪の花や）

〈ツラネ〉

ジュキア山岳（やまだき）に掛かる白雲（しらくむ）や
恩納山岳（おんなやまだき）の白雲（しらくむ）と思（うむ）て
勇（いさ）みとて朝夕泣くな

何日（いち）か沖縄（しま）戻て 行（い）つらでむぬ

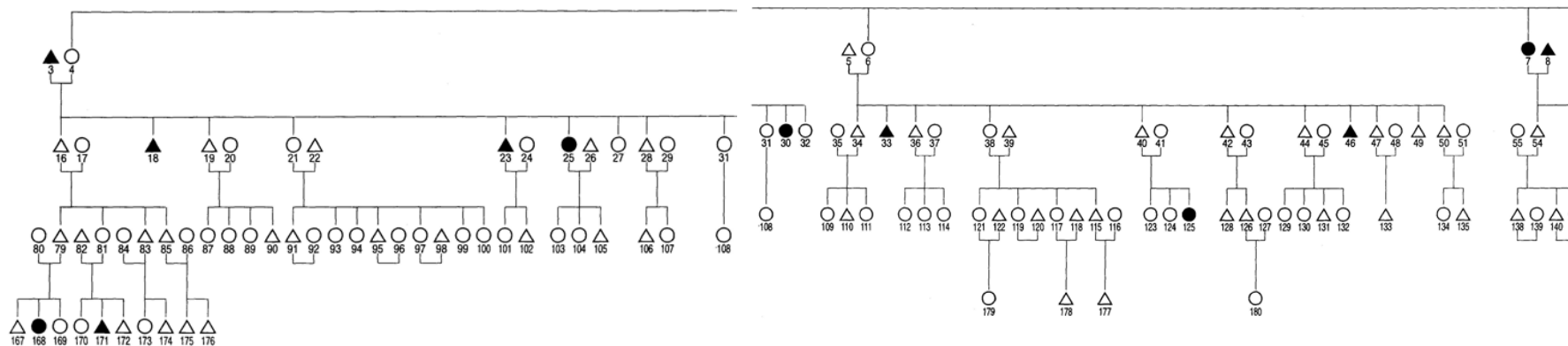
「七輪の花」は、沖縄民謡大会など様々の場面で今も歌いつが
れ、哀切の情深く人々の心をとらえて離さない名歌の一つである。



1890.08.10 - 1932.

笠戸丸移民 石原須家（昌三・ウシ）の家系図

一世
二世
三世
四世
五世

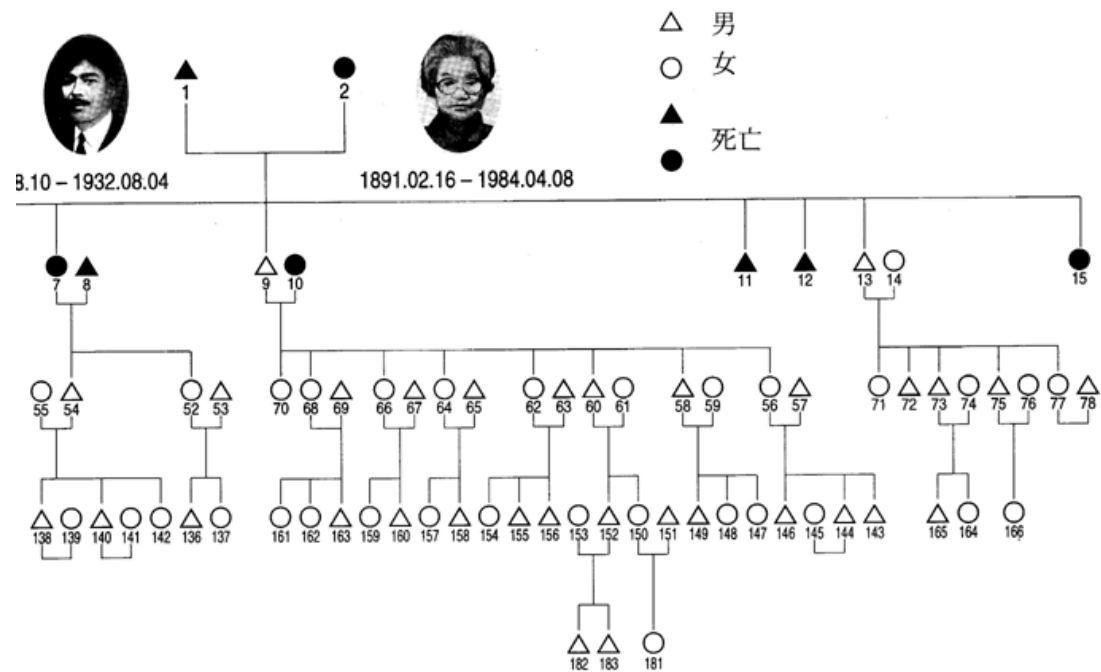


笠戸丸移民石原家の末裔

番号	氏 名	生年月日	族柄	番号	氏 名	生年月日	族柄
01	石原 昌三	1890	本人	32	ジャシラ 桑江	1956.03.21	孫娘
02	石原 ウシ	1891.02.16	本人	33	オスカル リョウエイ 小渡	1934.12.18	孫
03	リョウジ 桑江		長女婿	34	オズニール リョウソウ 小渡	1936.10.23	孫
04	マリア 石原 桑江	1912.04.01	長女	35	イザベル セツ子 小渡	1941.11.03	孫妻
05	リョウシュン 小渡	1904.01.08	次女婿	36	アウシデス リョウセイ 小渡	1939.01.29	孫
06	カルメン カメ 石原 小渡	1914.03.10	次女	37	マリナ エミ子 小渡 Y.	1946.04.09	孫妻
07	ウシ 石原		三女	38	リウジア カズエ 当山	1940.12.17	孫娘
08	モリキヨ 仲宗根		三女婿	39	ゼンショウ 当山	1936.02.09	孫娘婿
09	ミグェール 昌順 石原	1917.12.13	長男	40	ネウソン リョウメイ 小渡	1942.12.16	孫
10	ウシ 石原	1920.09.09	長男妻	41	オルガ ミツ子 N. 小渡	1945.09.21	孫妻
11	アントニオ 昌忠 石原		次男	42	ヘイナウド リョウシュウ 小渡	1945.09.10	孫
12	昌次郎 石原		三男	43	ローザ 小渡	1945.03.05	孫妻
13	ジョン 昌盛 石原	1922.11.26	四男	44	ホベルト リョウキ 小渡	1947.09.23	孫
14	ルイス チヨ子 石原	1925.03.12	四男妻	45	アナ ラウラ エツ子 小渡	1949.04.09	孫妻
15	マリナ ノブ子 石原		四女	46	ヘジナウド リョウホウ 小渡	1950.01.31	孫
16	オズワルド 桑江	1932.04.15	孫	47	ジュベルト ヨシマサ 小渡	1951.11.26	孫
17	ナンシー 桑江	1933.10.16	孫妻	48	アドリアナ ヴァルカス	1965.08.25	孫妻
18	オスカル 桑江	1934	孫	49	ルイス ヨシミ 小渡	1953.08.28	孫
19	オズマル 桑江	1935.07.19	孫	50	ニヴァウド リョウシュン 小渡	1957.01.06	孫
20	エイ子 桑江	1939.11.20	孫妻	51	リマセーマ キミエ S. 小渡	1956.03.21	孫妻
21	ヒュウダ 栄門	1938.02.23	孫娘	52	ネイジ 仲宗根 石嶺	1941.06.16	孫
22	セイキチ 栄門	1936.02.19	孫娘婿	53	タケヤス 石嶺		孫娘婿
23	アルナウド 桑江	1940	孫	54	エドアルド セイエイ 仲宗根	1938.12.14	孫
24	ネウザ 桑江	1952.08.14	孫妻	55	ローザ シズエ 仲宗根	1941.06.29	孫妻
25	エジチ シズ子 勢理客	1943	孫娘	56	マルレーネ シゲ子 マキハラ	1643.08.05	孫娘
26	ミツノリ 勢理客	1938.10.03	孫娘婿	57	アツミ マキハラ	1942.10.20	孫娘婿
27	ディウマ 桑江	1945.03.14	孫娘	58	クラウディオ チュリストヴァン 石原	1945.07.19	孫
28	ワルテル ヨシヒロ 桑江	1947.04.17	孫	59	アナ マリア 与儀 石原	1942.11.16	孫妻
29	ミリアン クラウジャ チコン	1961.02.11	孫妻	60	フラヴィオ ショウソウ 石原	1948.08.21	孫
30	ヨネ 桑江	1950	孫娘	61	ミチ子 松田 石原	1953.07.18	孫妻
31	セシリア カズエ 桑江	1952.04.04	孫娘	62	ヘジーナ ヤエ子 屋宜	1950.12.13	孫娘

笠戸丸移民石原家の末裔

番号	氏 名	生年月日	族柄	番号	氏 名	生年月日	族柄	番号
63	セイショウ 屋宜	1946. 11. 30	孫娘婿	94	シレーネ 栄門	1966. 12. 28	曾孫娘	125
64	モニカ ヨシ子 石原 仲村渠	1952. 09. 19	孫娘	95	シルヴィオ 栄門	1968. 08. 12	曾孫	126
65	ジャイミ ヨシナリ 仲村渠	1947. 04. 27	孫娘婿	96	クリシチーナ ハルミ 尾崎 栄門	1967. 01. 02	曾孫妻	127
66	エリザベッテ ハル子 石原 田場	1954. 08. 08	孫娘	97	シルレイ 栄門 安里	1970. 01. 17	曾孫娘	128
67	パウロ ケンエイ 田場	1950. 03. 13	孫娘婿	98	ルイス ケンジ 安里	1968. 05. 06	曾孫娘婿	129
68	エリアーネ シズ子 石原 田場	1956. 08. 16	孫娘	99	シルマーラ 栄門	1972. 03. 05	曾孫娘	130
69	オズヴァルド ケンキチ 田場	1954. 02. 14	孫娘婿	100	シンチア 栄門	1976. 10. 11	曾孫娘	131
70	ロセーリ ユキ 田場	1959. 02. 08	孫娘	101	カチア マリア 桑江	1977. 08. 31	曾孫娘	132
71	ノルマ アキ子 石原	1952. 03. 09	孫娘	102	アドリアーノ 桑江	1980. 07. 04	曾孫	133
72	モアシリ マサテル 石原	1955. 05. 27	孫	103	サンドラ 勢理客	1968. 07. 05	曾孫娘	134
73	リカルド マサヨシ 石原	1956. 08. 26	孫	104	マリザ 勢理客	1970. 04. 16	曾孫娘	135
74	リージア シジ ディエゴ 石原	1959. 12. 31	孫妻	105	ワグネル 勢理客	1971. 04. 14	曾孫	136
75	アダウベルト マサユキ 石原	1958. 04. 15	孫	106	リョウジ 桑江 ネット	1991. 12. 19	曾孫	137
76	セリア ヘジナ カズヨ 奥原 石原	1963. 09. 14	孫妻	107	カミール チコン 桑江	1993. 05. 09	曾孫娘	138
77	アンゲーラ ミチ子 石原 イヤマ	1954. 03. 30	孫娘	108	ジャイナーナ 桑江 デ アンドラデ	1996. 06. 04	曾孫娘	139
78	ヴィセンチ リョウジ イヤマ	1956. 06. 14	孫娘婿	109	アドリアナ 小渡	1972. 05. 31	曾孫娘	140
79	カルロス アウベルト 桑江	1957. 01. 29	曾孫	110	マルセーロ 小渡	1974. 06. 04	曾孫	141
80	エージナ アケミ 名嘉真	1959. 05. 25	曾孫	111	カリア 小渡	1977. 12. 09	曾孫娘	142
81	マリア クリシチーナ 桑江 比嘉	1961. 05. 08	曾孫娘	112	ルシアナ ミチ子 小渡	1975. 07. 12	曾孫娘	143
82	ミルトン 比嘉	1960. 02. 27	曾孫娘婿	113	リリアナ マユミ 小渡	1976. 09. 22	曾孫娘	144
83	オズヴァルド 桑江 フィーリョ	1964. 09. 16	曾孫	114	レチーシア メグミ 小渡	1980. 11. 19	曾孫娘	145
84	ヘジーナ 比嘉 桑江	1960. 17. 01	曾孫妻	115	カルロス 当山	1965. 09. 18	曾孫	146
85	オルランド 桑江	1966. 03. 18	曾孫	116	マリー 豊田 当山	1963. 06. 14	曾孫妻	147
86	デニセ ミユキ 屋富祖 桑江	1968. 07. 17	曾孫妻	117	クラウジア 当山 日野	1968. 02. 28	曾孫娘	148
87	ホズイメイレ 桑江	1965. 10. 03	曾孫娘	118	マルセロ 日野	1968. 10. 31	曾孫娘婿	149
88	ヴァウキリア 桑江	1967. 05. 11	曾孫娘	119	カルメン ルシア 当山	1969. 06. 14	曾孫娘	150
89	ヘジアーネ 桑江	1969. 08. 08	曾孫娘	120	ミルトン 仲宗根	1965. 09. 21	曾孫娘婿	151
90	エメルソン 桑江	1972. 02. 22	曾孫	121	アンドレア 当山 佐藤	1972. 01. 26	曾孫娘	152
91	シドネイ 栄門	1962. 09. 14	曾孫	122	エジソン ササハラ 佐藤	1971. 01. 07	曾孫娘婿	153
92	リリアン ユウ子 座嘉比	1969. 04. 16	曾孫妻	123	ジセルダ 小渡	1975. 04. 26	曾孫娘	154
93	シモーネ 栄門	1965. 06. 16	曾孫娘	124	ケリー クリシチーナ 小渡	1976. 09. 16	曾孫娘	155



笠戸丸移民石原家の末裔

番号	氏 名	生年月日	族柄	番号	氏 名	生年月日	族柄
125	カレン クリシチーナ 小渡	1976. 09. 19	曾孫娘	156	アンデルソン アウグスト 屋宜	1989. 03. 21	曾孫
126	ホビンソン 小渡	1976. 10. 12	曾孫	157	ジュリアナ ケイ子 仲村渠	1981. 09. 21	曾孫娘
127	リジアネ ヘジナ F.小渡	1978. 11. 18	曾孫妻	158	ジャイミ ホベルト 仲村渠	1984. 03. 24	曾孫
128	ホドリゴ 小渡	1979. 04. 09	曾孫	159	パウラ クリシチナ 田場	1985. 08. 04	曾孫娘
129	ホベルタ 小渡	1977. 08. 13	曾孫娘	160	エヴェルソン ケンヘイ 田場	1991. 05. 14	曾孫
130	ヘナタ 小渡	1979. 02. 06	曾孫娘	161	ミゲール ケイ子田場	1983. 06. 29	曾孫娘
131	リカルド リョウキ 小渡	1981. 07. 07	曾孫	162	エライネ 田場	1984. 08. 12	曾孫娘
132	ラクエウ 小渡	1982. 11. 14	曾孫娘	163	シロ ケンキチ 田場	1990. 09. 24	曾孫
133	ハファエル ヨシカツ 小渡	1994. 09. 22	曾孫	164	ミシェレ 石原	1984. 09. 24	曾孫娘
134	カロリネ 小渡	1987. 05. 15	曾孫娘	165	ダニエル ゴ 石原	1991. 08. 26	曾孫
135	フェリッペ リョウエイ 小渡	1989. 02. 01	曾孫	166	レチシア メグミ 石原	1996. 09. 10	曾孫娘
136	デニルソン 石嶺		曾孫	167	ヴィクトル ケイ子 桑江	1987. 07. 30	曾々孫
137	マリアネ 石嶺		曾孫娘	168	アリネ スエミ 桑江	1988.	曾々孫娘
138	ミルトン 仲宗根	1965. 09. 21	曾孫	169	パトリシア チエミ 桑江	1991. 04. 26	曾々孫 娘
139	カルメン ルシア 当山 仲宗根	1969. 06. 14	曾孫妻	170	マリアナ 桑江 比嘉	1983. 02. 09	曾々孫娘
140	エジソン 仲宗根	1966. 09. 19	曾孫	171	レアンドロ アキオ 桑江 比嘉	1984	曾々孫
141	シルヴィアナ ミチ子 コウチ 仲宗根	1967. 07. 29	曾孫妻	172	マウリシオ 桑江 比嘉	1987. 04. 02	曾々孫
142	エリゼテ 仲宗根	1971. 11. 09	曾孫	173	ガブリエラ ミキ 桑江	1993. 03. 18	曾々孫 娘
143	ファビオ マキハラ	1972. 07. 15	曾孫	174	ブルノ ユウジ 桑江	1997. 02. 23	曾々孫
144	アレシャンドレ マキハラ	1974. 09. 29	曾孫	175	ダニロ リョウジ 桑江	1986. 10. 29	曾々孫
145	シレネ マキハラ		曾孫妻	176	エンリケ ヒデキ 桑江	1993. 06. 20	曾々孫
146	マルシオ マキハラ	1976. 10. 13	曾孫	177	ヴィクトル ケン 豊田 当山	1998. 07. 03	曾々孫
147	タチアナ 石原	1977. 06. 16	曾孫娘	178	ブルノ ヒデキ 当山 日野	1998. 11. 21	曾々孫娘
148	ダニエラ 石原	1978. 10. 23	曾孫娘	179	アナ クリシチーナ 当山 佐藤	1997. 06. 12	曾々孫娘
149	クラウドリオ ホベルト 石原	1980. 06. 16	曾孫	180	アマンダ アケミ フェレイラ 小渡	1997. 03. 01	曾々孫娘
150	ヴァネッサ 石原	1976. 01. 30	曾孫娘	181	ヴィクトリア サユリ 石原 シルバ	1997. 03. 24	曾々孫娘
151	アンドレ ルイス マシャード ダシルバ	1975. 12. 12	曾孫娘婿	182	ユーリ コルデイロ 石原	1996. 05. 22	曾々孫
152	フラビオ ショウジュン 石原	1977. 04. 04	曾孫	183	ミュツ ショウジュン コルデイロ 石原	1997. 12. 07	曾々孫
153	ネルシー コルデイロ	1974. 03. 02	曾孫妻				
154	フラビア ヘジナ 屋宜	1982. 01. 15	曾孫娘				
155	マルソ アントニオ 屋宜	1984. 04. 12	曾孫				

別刷りの家系図は、笠戸丸県人移民石原昌三・ウシ家のものである。90年の時間を経過するなかで石原家は、今日第5世代が誕生するまでに拡がっている。

二世8人、三世37人、四世71人、五世17人と総勢133人の末裔がブラジルに生を受けた。現在、このうちの117人が健在。その一族は実に183人を数える。

笠戸丸移民石原昌三・ウシ家の人々



石原家の祖昌三・ウシ夫妻は、18歳と17歳の若さでブラジルに渡ってきた「出稼ぎ農業移民」であった。第1回日本移民は、

家族形態の農業移民で、しかも1世帯に3人以上の労働力を持つという条件があったために、独身の島袋ウシは、家長である叔父島袋蒲の飯の妻となって、独身の石原昌三らと共にその「構成家族」の一員として、笠戸丸移民となった。

50日余りの長い船旅は、いつしか若い昌三とウシに恋心を育んだ。サントス港に上陸する頃には、「結婚」を心に誓い合う仲になっていた。ふたりはカーン耕地に配耕されてまもなく夫婦になった。

その後、耕地を退耕したふたりは、汽車賃すらなく、線路づたいに徒歩でサントスに辿り着き、そこで昌三は港湾人夫、ウシが野菜売りをして糊口をしのいだ。以後、艱難辛苦の生活が続いた。アララクアラでのコーヒー栽培（4年契約）、サントスでの野菜売り、ジュキア線アナジラスでの甘薯づくりと流転を重ねた後にサントス市に定着した。

1912年に長女マリアが誕生、その後次女、三女、1917年には長男昌順が誕生、それ以降も昌忠、昌次郎、昌成、千代子、信子が生まれ、夫婦は四男四女の子宝に恵まれた。

1932年8月に家長昌三が病没するという不幸に見舞われたが、石原家は昌順を初めすでに成長していた子供たちが一致協力して母ウシを助け、家計を支えた。

第二次世界大戦中の海岸部からの敵性国人立ち退き措置により、ウシは子供たちと分かれてカンピーナスへ移動を余儀なくされてしまった。しかし、子供たちの奔走により、ウシは早くも一カ月後には、サントスの我が家に戻り子供たちとの生活を再開した。やがて、石原家はサンパウロ市に移り、長男昌順が自動車修理工場に就職、一家を支える柱となった。ここから子供たちが次々に分家し、石原家第2世代もサンパウロ市およびその周辺都市に定着していった。1984年4月、石原ウシは93才の長寿を全う

して他界した。

1998年現在の石原家の家系図は、笠戸丸移民90年の歴史を語る「生きた資料」である。「写真中央で花を持っているのがウシさん、1963年撮影」

笠戸丸移民乗船者名簿

笠戸丸移民乗船者名簿 (1908年4月28日発～1908年6月18日着)						
移民家族名		続柄	年令(才)	出身地	駅名	路線名
外間 賀眞 銘 尚眞 沢 岨眞 船 長三 船 長仁	賀眞 メ 眞 通眞 良眞 要眞	家長	24.8	西原 幸地	カナーン	モヂアナ
		妻	24.0			
		従弟	24.0			
		従兄	34.3			
		妻・弟	19.2			
玉 城 仁王 マ 加那 屋 宜加 新 垣電 玉那頼善 金 城武 又 吉 亀	仁王 マ 加那 電 信一 武 亀	家長	25.10	西原 小那覇	カナーン	モヂアナ
		妻	20.3			
		従兄	35.10			
		妻・従弟	15.8			
		従弟	19.5			
大 城 仁牛 ナ ベ 玉那頼亀 仲宗根薩 新 川善助 嘉手苺加那 知 念 仁牛	仁牛 ベ 亀 薩 助 那 牛	家長	26.8	西原 内間	カナーン	モヂアナ
		妻	28.1			
		妻・従弟	21.5			
		従弟	16.6			
		妻・従弟	18.6			
呉 屋 仁 和 ウ ト 島 袋五郎 金 城 曉仁 名 嘉文五郎 末 吉 徳平 新 城 尚 助	仁 和 ト 五郎 曉 仁 文五郎 徳 平 尚 助	家長	27.3	西原 小橋川 具志川 宇堅 伊平屋 勢理客	カナーン	モヂアナ
		妻	25.9			
		従弟	25.10			
		妻・従弟	24.10			
		従兄	22.2			
宮 里 盛秀 ウ ト 沢 岨太政 渡久地 政 松 本 人 崎 間 松 亀	盛秀 ト 太 政 政 人 松 亀	家長	23.3	西原 棚原 " " 美里 東恩納 具志川 天嗣 西原 棚原	カナーン	モヂアナ
		妻	19.10			
		従弟	21.9			
		従弟	19.5			
		従兄	41.0			
佐久田 安 里 城 間 古波蔵 玉 城	亀メ志喜眞 宇 鍋賀 志 眞 喜 眞 眞 亀	家長	18.9	西原 棚原 " 宜野湾 普天間 " " "	カナーン	モヂアナ
		妻	18.6			
		従弟	16.8			
		"	17.9			
		"	14.9			

移民家族名	続柄	年令(才)	出身地	駅名	路線名
新垣 善良 宮城 次郎 山内 博	従兄 従弟 "	36.11 16.10 40.10			
比嘉 松助 比嘉 マツ 喜屋武 加那志 亀 薩三 亀 薩	家長 妻 従弟 妻・従兄 " "	19.6 16.6 11.6 35.10 18.7 30.8	中城 久場 " 中城 比嘉	カナーン カナーン	モヂアナ モヂアナ
吉元 三良 仲宗根 ツル 仲宗根 薩牛	家長 妻 従弟 " 妻・従弟	27.9 29.0 16.5 27.4 15.1	美里 桃原 " 西原 翁長	カナーン	モヂアナ
仲宗根 牛 知念 カメ 知念 薩松 典 武太 知念 政庭 知念 亀	家長 妻 従弟 " 叔父 " 従弟	26.7 27.5 16.7 20.11 34.1 28.6 16.0	美里 与儀 " " " " 美里 泡瀬 " 古謝	カナーン	モヂアナ
島袋 薩 金城 カマ 石原 徳三 高江洲 昌三 池原 義勝 島袋 文鳳 高江洲 義藏 高江洲 義好 高江洲 義廷	家長 妻 従弟 " 叔父 従兄 従弟 伯父 伯父	25.10 17.1 18.4 18.10 29.4 34.4 15.3 32.11 35.9	美里 比屋根 " " 美里 泡瀬 美里 泡瀬 " " " " 美里 泡瀬	カナーン	モヂアナ
儀保 薩 宮城 マカト 兼城 加那 宮城 松助 平良 山戸 新垣 松数	家長 妻 妻・従弟 従弟 妻・従弟 " 妻・叔父	36.0 29.6 22.3 16.5 28.3 22.8 40.7	美里 比屋根 " " 具志川	カナーン	モヂアナ
宮里 亀 島 カマト 宮袋 利平 宮城 伊孝 大城 朝義	家長 妻 従弟 " 妻・従兄	34.3 30.7 18.3 18.7 34.8	美里 比屋根 " " 読谷 伊良皆 " "	カナーン	モヂアナ

移民家族名	続柄	年令(才)	出身地	駅名	路線名
古波蔵 古波蔵	巖 亀	25.3 19.0	宜野湾 普天間 ＊	カナーン	モジアナ
田 場 藩 戸 ウ シ 天 顯 南 神 田 南 城 間 仲 任 喜屋武 加 那	家長 妻 妻・従兄 ＊ 従兄 ＊	18.6 18.6 22.3 18.10 17.0 17.7	西 原 安室 具志川 具志川 ＊ 具志川 西 原	カナーン	モジアナ
新 里 樽 カ マ 比 嘉 光 永 比 嘉 徳 松 玉 城 加 那 大 城 亀	家長 妻 従弟 ＊ ＊ ＊	35.0 29.5 27.5 14.10 18.1 25.4	中 城 安谷屋 ＊ 中 城 久比 中 城 渡口 ＊ ＊	カナーン	モジアナ
新 垣 藩 戸 カメジャ 亀 松 南 比 嘉 牛	家長 妻 従弟 ＊ ＊ ＊	26.1 22.8 19.0 17.3 17.6 25.8	中 城 久場 ＊ ＊ ＊ ＊ ＊	カナーン	モジアナ
新 垣 松 カメジャ 比 嘉 松 比 嘉 山 新 垣 藩 戸 南	家長 妻 従兄 ＊ ＊ ＊	18.5 17.4 28.0 19.0 22.0 21.3	中城 久場 ＊ ＊ ＊ ＊ ＊	カナーン	モジアナ
比 嘉 牛 カ メ 南 藩 盛 宗 正 藩 戸	家長 妻 従弟 従兄 従弟 従兄	27.4 23.8 18.6 28.10 16.11 32.8	中 城 久場 ＊ ＊ ＊ ＊ ＊	カナーン	モジアナ
比 嘉 山 カ マ 加那一 三 良 亀 新 垣 山	家長 妻 従弟 ＊ ＊ ＊	30.8 28.8 24.5 27.1 19.3 18.10	中 城 久場 ＊ ＊ ＊ ＊ ＊	カナーン	モジアナ
新 垣 亀 カ マ 城 間 宇 志	家長 妻 従兄	19.4 21.2 22.9	中 城 安谷屋 ＊ ＊	カナーン	モジアナ

移民家族名	続柄	年齢(才)	出身地	駅名	路線名
城間 就次郎	家長	35.2	南風原 津嘉山	イトウ	イトエンセ
城間 鉄夫	妻	31.1	" "		
城間 鉄平	従弟	14.8	" "		
神里 妻	妻・従兄	33.7	" "		
大城 武一	従弟	31.3	" "		
比嘉 仲直	妻・従弟	26.11	大里 仲里		
城間 佐一郎	家長	18.7	南風原 津嘉山	イトウ	イトエンセ
城間 力メ	妻	21.2	" "		
長嶺 加那	従兄	34.7	" "		
瑞ヶ覧 長義	"	32.9	大里		
上原 山	妻・従弟	18.9	"		
金城 善助	家長	17.10	南風原 津嘉山	イトウ	イトエンセ
金城 才サ	妻	17.10	" "		
大城 判四郎	叔父	30.7	" "		
大城 実太郎	従兄	29.10	" "		
宜保 藤太	従弟	12.8	" "		
新垣 美三郎	妻・叔父	23.6	" "		
宮城 栄良	妻・伯父	28.7	" "		
大城 幸博	甥	15.11	" "		
大城 真吉	妻・兄	25.11	" "		
大城 照太郎	妻・従弟	15.6	" "		
新垣 茂一	家長	28.4	南風原 与那覇	イトウ	イトエンセ
大城 マカト	妻	27.5	" "		
大城 亀三郎	従弟	26.0	" "		
大城 礼平	"	24.8	南風原 宮平		
大城 眞吾	従兄	31.2	" "		
金城 由三郎	家長	22.5	南風原 津嘉山	イトウ	イトエンセ
金城 力メ	妻	18.9	" "		
金城 代三郎	従兄	25.4	" "		
大城 ウシ	姪	15.6	" "		
大城 俊一郎	妻・従弟	15.8	南風原 津嘉山		
大城 幸喜	家長	19.3	豊見城 上田	イトウ	イトエンセ
大城 力メ	妻	16.11	"		
大城 長信	従兄	24.7	"		
大城 加那	従弟	14.2	"		
大城 薩戸	妻・従兄	24.4	" 上田		
大城 龜	甥	16.6	"		
大城 弘齊	伯父	32.7	"		
大城 保吉	妻・伯父	34.7	"		
大城 盛吉	妻・甥	14.11	" 高入端		

移民家族名	続柄	年齢(才)	出身地	駅名	路線名
山入端 立仁	叔父	33.4	読谷 伊良智	カナーン	モヂアナ
比嘉 藩	従弟	25.7	"		
池原 次郎	甥	16.7	読谷 古堅		
島袋 松	家長	36.10	美里 比羅根	カナーン	モヂアナ
ナベイ	妻	34.1	" "		
徳	妻・従弟	31.3	美里		
伊波 亀	従弟	21.7	西原		
島袋 三良	家長	40.7	美里 比羅根	カナーン	モヂアナ
カメ	妻	21.5	" "		
大城 松	従弟	23.4	"		
大当 嗣亀	"	25.1	"		
伊波 加那	"	19.6	"		
金城 太二	家長	18.6	北谷 北谷	カナーン	モヂアナ
カマド	妻	21.6	" "		
金城 亀	妻・従弟	19.1	西原		
宮平 松	"	18.9	宜野湾 普天間		
城間 米蔵	従弟	20.10	西原		
崎山 並吉	家長	18.6	北谷 嘉手納	カナーン	モヂアナ
カメ	妻	26.10	" "		
読波 必達	妻・従兄	35.0	北谷		
古謝 三良	従兄	32.7	"		
仲宗根 蒲助	"	23.3	読谷 渡久地		
山田 三良	"	27.10	読谷		
平安名 次良	家長	22.10	勝連 平安名	カナーン	モヂアナ
カメイ	妻	24.10	" "		
栄門 松	従弟	19.2	" "		
吉浜 加那	従兄	25.2	" "		
前川 益	"	26.9	与那城		
古謝 国領	"	36.8	北谷		
金城 彦助	家長	18.7	南風原 津嘉山	イトウ	イトエンセ
カメ	妻	19.6	" "		
与座 敬三郎	妻・兄	23.3	" "		
金城 義平	従弟	15.4	" "		
与座 音六	妻・従兄	35.1	" "		
赤嶺 蒲	従弟	18.1	" "		
金城 万助	家長	26.10	南風原 津嘉山	イトウ	イトエンセ
カマト	妻	28.10	" "		
金城 庄内	兄	37.10	" "		
金城 山戸	妻・従弟	14.7	" "		
赤嶺 供儀	"	22.6	" "		
仲座 健徳	従弟	35.8	" "		

移民家族名	続柄	年令(才)	出身地	駅名	路線名
山城 梶一郎 タマ	家長	32.3	本部 崎本部	イトウ	イトエンセ
山城 甚三郎	妻	17.0	" "		
金城 双三	妻・従兄	25.8	" "		
仲地 甚八	従弟	20.7	" "		
具志 善吉	従兄	38.8	" "		
知念 蒲	"	38.11	" "		
安慶名 寅之助	妻・従弟	15.8	" "		
	従弟	24.5	" "		
盛吉 智珍 カメ	家長	27.8	久米島 具志川	イトウ	イトエンセ
宮城 保守	妻	24.11	" 西銘		
上江洲 智武	従兄	31.9			
吉浜 智昌	従弟	23.7			
	妻・従弟	18.1			
知念 三良 ナベ	家長	24.0	那覇 西	イトウ	イトエンセ
宜名眞 邑一	妻	19.10			
有銘 兼徳	従兄	31.4			
	妻・従兄	22.1	那覇 泊		
石川 兼順	妻・従弟	17.5	" "		
石川 達吾	従兄	30.9	" "		
石川 賀名	従弟	18.6	" "		
	従弟	23.3	那覇 泊	イトウ	イトエンセ
嘉数 亀一 カメ	家長	34.3	眞和志 国場	イトウ	イトエンセ
太田 向雪	妻	22.2	" "		
具志 幸七	従弟	26.10	" "		
宮城 宇志	"	16.11	小録 当真		
知念 次良	"	18.5	眞和志 安謝		
山入端 川秀 ウシ	家長	18.10	名護 宇茂佐	イトウ	イトエンセ
岸本 謙一	妻	17.11	" "		
比嘉 安元	叔父	32.8	" "		
比嘉 永松	"	38.5	" "		
比嘉 嘉永	妻・兄	18.6	" "		
比嘉 直那	従兄	25.1	" "		
比嘉 永水	妻・兄	18.10	" "		
神山 徳助	従弟	18.5	名護 山入端		
宮里 富一	"	18.0	" 宮里		
岸本 松吉	叔父	29.9	名護		
宮平 牛助 カメ	家長	26.6	名護 東江	イトウ	イトエンセ
比嘉 善太郎	妻	26.7	" "		
山城 武太	甥	13.11			
比嘉 松助	妻・従兄	27.0			
比嘉 登嘉	妻・従弟	18.0			
玉城	従弟	23.0			

移民家族名	続柄	年令(才)	出身地	駅名	路線名
外間 亀ト ミト	家長	19.4	豊見城 眞嘉部	イトウ	イトエンセ
赤嶺 喜佐	妻	18.11	" "		
大城 宗人	従兄	25.9	" "		
大城 良宗	"	40.0	" 根差部		
太田 亀	妻・従兄	26.0	" "		
新垣 カマト	妻・従兄	24.3	" "		
	従妹	18.4	" 眞嘉部		
大城 蒲戸 ウト	家長	26.4	豊見城 上田	イトウ	イトエンセ
大城 亀代	妻	22.6	" "		
儀間 眞享	従兄	28.0			
宮城 仲盛	妻・従弟	18.11			
外間 蒲戸	妻・従兄	36.9			
新垣 平太	従弟	16.4			
	"	15.10			
照屋 堅喜 カマ	家長	18.3	大里 古堅	イトウ	イトエンセ
宮城 誠孝	妻	15.11	" "		
宮城 博	従兄	27.0	大里	イトウ	イトエンセ
宮城 眞鶴	"	27.0	"		
仲本 恭光	妻・従兄	19.4	"		
大城 徳太郎	"	21.5	"		
大城 立蔵	従兄	27.0	"		
知念 南徳	妻・従兄	19.3	"		
照屋 堅仁	従兄	26.5	"		
知念 松八	"	24.2	" 古堅		
知念 五郎	妻・従兄	34.0	" 板良敷		
新里 三良	従弟	17.5	" "		
伊良皆 成定	"	18.3	" "		
安谷屋 与元	従兄	25.7	" 与那原		
新里 南吉	従弟	18.3	" "		
	従兄	26.6	大里		
金城 孝八 カマ	家長	22.3	玉城 垣花	イトウ	イトエンセ
金城 基吉	妻	21.4	" "		
金城 次郎	父	45.3	" "		
仲村 常昌	従弟	18.3	" "		
	"	19.4	" "		
座覇 政憲 ウト	家長	17.7	本部 具志堅	イトウ	イトエンセ
仲程 仙五郎	妻	16.3	" "		
	妻・従兄	17.8	" 渡久地		
	"	18.10	" "		
	"	19.0	" "		
玉城 伝吉	妻・叔父	27.3	本部		
仲井間 憲昌	妻・従兄	19.3	本部		
玉城 仙三郎	"	17.10	本部		

第2表 県別第1回出移民数（註：単独渡航者も含む）

順位	県名	家族数	出 移 民 数 (人)		
			男 性	女 性	合 計
01	沖 縄	49	276	49	325
02	鹿児島	46	141	46	187
03	福 島	21	53	24	77
04	熊 本	19	50	29	79
05	広 島	09	44	10	54
06	山 口	09	19	12	31
07	愛 媛	06	15	07	22
08	新 潟	03	06	03	09
09	高 知	02	12	02	14
10	宮 城	02	11	03	14
11	東 京	01	02	01	03
	計	167人	629人	186人	815人

移民家族名	続 柄	年令 (才)	出 身 地	駅 名	路 線 名
山 城 保次郎 宮 城 利三郎	従弟 "	19.0 21.9	大宜味 "		
仲 里 新 三 ウ シ 新 志 新 忠 仲宗根 宗 忠 島 袋 幸 助 仲 村 善三郎 松 田 太 郎 仲 村 善 篤 仲 里 新 清	家長 妻 妻・従弟 従弟 妻・叔父 妻・従兄 妻・従弟 妻・従兄 妻・叔父 妻・従兄	23.9 22.11 20.11 20.7 23.3 31.1 19.5 28.0 27.2 16.5	今帰仁 湧川 " " " " " " " " " 識名 " " " " " " " 湧川	イトウー	イトエンセ
与那嶺 仁五郎 カマダ 平 良 松六郎 津 波 新次郎 上 原 直 松 島 袋 栄 一	家長 妻 従兄 妻・従兄 " "	21.5 17.8 27.6 28.5 22.4 34.4	今帰仁 与那嶺 " " " 仲宗根 羽 地 興我 国 頭 奥 "	イトウー	イトエンセ
宮 城 幸四郎 ナ ベ 大 城 孫四郎 玉 里 源次郎 玉 城 平 七 山 里 要四郎 比 嘉 久 一 上 間 静 吉	家長 妻 甥 従兄 " 従弟 " 妻・従弟	28.5 27.11 17.8 33.6 28.11 25.11 21.11 14.10	羽 地 済井田 " " " " " " "	イトウー	イトエンセ
嘉 陽 宗 貞 マス 宗 源 比 嘉 梅 助 比 嘉 秀 吉 比 嘉 徳 次 島 袋 善五郎 宮 城 仁 助 松 田 貞 七	家長 妻 甥 妻・従弟 妻・甥 妻・従弟 従弟 従兄 従弟	31.6 24.6 16.6 16.7 18.0 23.7 31.4 33.4 31.1	久 志 辺野古 " " " " " " " " " " " " " "	イトウー	イトエンセ

第3表 第1回移民出身地別出移民数

順位	市 町 村 名	出 移 民 数(人)		
		男 性	女 性	合 計
01	南 風 原 村	35	08	43
02	中 城 村	35	07	42
03	美 里 村	33	07	40
04	西 原 村	31	07	38
05	豊 見 城 村	17	04	21
06	大 里 村	18	01	19
07	本 部 村	14	02	16
08	名 護 村	14	02	16
09	今 婦 仁 村	11	02	13
10	久 志 村	08	01	09
11	那 覇 市	07	01	08
12	羽 地 村	07	01	08
13	読 谷 村	07	00	07
14	宜 野 湾 村	07	00	07
15	北 谷 村	04	02	06
16	具志川(久米島)	04	01	05
17	真 和 志 村	04	01	05
18	勝 連 村	04	01	05
19	玉 城 村	03	01	04
20	具 志 川 村	03	00	03
21	国 頭 村	03	00	03
22	伊 平 屋 村	03	00	03
23	大 宜 味 村	02	00	02
	計	276人	49人	325人

ブラジル沖縄県人会定款

第1章 名称 目的

第1条 本会は「ブラジル沖縄県人会」と称し本部をサンパウロ市ドットール・トマス・デ・リーマ街72番におく

第2条 本会の目的は下記の通りである。

- イ) 会員相互の親睦を計る
- ロ) 文化福祉救済及び慈善に関する活動をする。
- ハ) スポーツの振興を計りスポーツに関する事業を主催し実施する。

- ニ) 育英制度を設け学生子弟に資金的支援を行う
- ホ) 他の同種類の団体と交流を計る

ヘ) 母県との連絡を緊密にし、日伯間の親善と友好を深め、ブラジル社会の発展に寄与する

第2章 組織と存続期間

第3条 本会は営利目的を持たない社会法人で宗教・政治並びに人種の如何を問わない、ブラジル沖縄県人とその子弟及び県人との縁故があり、その趣旨に賛同する不定数の会員で組織される。

単項 入会希望者ある場合は会員3人の推薦状を理事会に提出し、理事会の承認を得て成立する。

第4条 本部と支部会員との連絡を緊密にし、本会の目的を遂行する為に10人以上の会員所在地で地域的考慮の下に支部を置く。

第5条 本会の存続期間は無期限とする。

第3章 会員の権利 義務

第6条 会員の権利は次の通りである。

イ)総会に出席し会に関係ある全ての問題を提案討議議決する。

ロ)本部に出入りし事務局の許可を得て、その施設を利用し活動する

ハ)本会員の選挙被選挙権

第7条 会員の義務は次の通りである。

イ)本会の定款及び内規を守り、会の目的達成に協力する

ロ)本会規定の会費を納入する。

ハ)役員に選挙せられ、又は指名された場合不可抗力以外は就任すること。

第8条 定款並びに内規に抵触し、又は本会の名譽を損ない秩序を乱す行為をなしたる会員は評議員会及び総会の決議に基づいて除名の処分を受けることがある。

第9条 会員は個人的にはもちろん、連帶的にも会の債務を負わない。

第4章 歳入・歳出と財産

第10条 本会の会計年度は毎年2月1日に始まり翌年1月31日に終わる。

第11条 本会の収入は次の財源による。

イ 会費並びに寄付金。

ロ 補助金

ハ 財産並びに施設による収益、行事による収入。

第12条 会費は評議員会の賛同を得て定期総会で決定する。

第13条 本会の歳出は運営費会館維持費と理事会の認めた特別経費よりなる。

第14条 一定の目的に設定された基金はこれを通常経費に充当することは出来ない、総会並びに評議員会の議決によつてはその限りでない。

第15条 本会の財産は拡張又は移転をする場合議決により売却することが出来る。

第5章 理事会 会計監査会

第16条 本会は下記構成の理事会によって管理運営される。

会長Ⅱ1名、副会長Ⅱ3名、書記Ⅱ2名、会計理事Ⅱ2名その他理事Ⅱ30名

第17条 県人会会長並びに第一、第二、第三副会長の選出は評議員並びに理事の中から評議員によって選挙される。

単項 法定会長は第17条の規定による副会長の中一人は法定会長の任にあたる。

第18条 評議員会で選出された会長副会長は評議員会々長副会長を加え県人会々長主宰の下に15日以内に理事を選出する。選出された理事は就任台帳に署名し就任する。

第19条 第18条により理事は活動的で有能且つ信望ある出席可能な会員で、各支部を考慮に入れて選出されなければならない。

第20条 就任した理事が辞退した場合は理事会の承認が必要である。

第21条 理事に欠員が生じた場合会長及び副会長は適任者を選出し評議員会に報告し合議の上任命する。

第22条 評議員以外の会員が理事に選出された場合は入会後3カ年以上経たることが必要である。

第23条 理事の任期は2カ年とし再選を妨げない。

第24条 顧問は理事会が推薦して総会の承認を得ておくことが出来る。

第25条 理事会の権限は次の通りである。

イ) 本会運営の任にあたり資産を管理し事業を統括する。
ロ) 定款及び内規の履行を図る。
ハ) 総会を招集し事業報告、収支決算報告、事業計画、予算案その他の事項を評議員会並びに総会に提出する。

ニ) 職員の採用、解雇、給与の決定。

ホ) 本会の目的達成の為の事業の執行。

ヘ) 諸部門、委員会の組織と委員の任命。

ト) 顧問を推薦する。

チ) 必要に応じて内規を制定する

リ) 総会並びに評議員会の決議を履行し又は履行させる。

ヌ) 組織活動の円滑化を計るため常任理事若干名をおきその掌にあたる。

第26条 理事会は月1回、必要なときにその都度臨時に開催し過半数の出席を以って成立し多数決により決議される。

第27条 会長の権限は次の通りである。

イ) 会長は本会を代表し会務一切を統括する。

ロ) 法定会長は裁判または法的事務に支障が生じた場合、これ进行处理する。

ハ) 理事会及び総会を招集してこれを司会する。

ニ) 緊急の問題を解決し事後理事会の承認を受ける。

ホ) 信書に署名する。

第28条 副会長は会長を補佐し会長不在または支障ある場合その順位により之を代行する。会長任期中前半期に空席となった場合には評議員は新会長を評議員の中から選び、後半期の空席には順位により副会長が残任期間を勤める

第29条 第一書記の権限は次の通りである。

イ)事務局の業務を統括する。

ロ)総会及び理事会の議事録を作成する。

ハ)本会の通信文書の作成発送。

第30条 第一会計の権限は次の通りである。

イ)会の収支を受理し承認を受けた支出を行う。

ロ)小口現金及び有価証券を保管する。

第31条 第二書記は第一書記を補佐し第一書記不在または支障ある場合之を代行する。

第32条 第二会計理事は育英基金及び諸行事の会計を担当管理する。

第33条 その他の理事は理事会に出席し会の運営について審議決定を行い理事会のきめた担当業務及び委員の任務を遂行する。

第34条 評議員会で選出された会計監査は、監査会を構成し正監査3名、補充監査3名をおく。任期は2カ年とし再選を認めない。

単項 監査役会に空席が生じた場合或いは不在又は支障ある場合は得票順に之を補充する。

第35条 監査役会の権限は次の通りである。

イ) 本会の会計帳簿及び経理書類を定期的に監査する。
ロ) 総会に提出される理事会の決算報告書に意見書を作成する。

ハ) 監査役会は評議員並びに理事会正副会長選挙の管理委員をも兼任する。

第36条 本会の役員は名誉職で報酬を受けない。

第6章 評議員会

第37条 評議員会は2年毎に総会で選出された評議員130名を以って構成し再選を妨げない。

単項 理事及び監査役に選出或いは指名された者は、その任期中評議員を休職する。

第38条 評議員会の権限は次の通りである。

イ) 評議員会会長1名、副会長2名、書記2名を選出し就任させる。再選は妨げない。

ロ) 県人会会長及び第一、第二、第三副会長を評議員並びに理事の中から選出し就任させる。

ハ) 監査役を選出し就任させる。

ニ) 理事会の提出する年次予算案、事業計画案について議決する。

ホ) 本定款は全部または一部の変更、その他本会に関する

る理事会提案事項または評議員会の自発的提案事項を決議する。

第39条 評議員会は評議員会会長もしくは10名以上の評議員の要請により招集され、多数決により議決される

単項 評議員会は第1招集に際し過半数の出席者を得て成立する、尚30分後行われる第2次招集において出席者の数を問わず開催される。

第40条 評議員会に欠員が生じた場合は各推薦団体が之を補充する。

第41条 評議員会会長は評議員を招集し之を司宰する。第1第2副会長は会長を補充し会長不在もしくは支障ある場合順位により之を代行する。

第42条 第1書記は評議員会に於ける議事録を作成しその書類の保管に当たる。第2書記は第1書記を補佐しその不在若しくは支障ある場合その代理を務める。

第43条 評議員会の招集は会期15日以前に公文書を各自に発送して日時、場所、議事日程を明記せねばならない。

単項 議事日程に記載されない事項は討議することは出来ない。

第7章 総会

第44条 総会は本会の最高機関で定期総会と臨時総会に区別する。

第45条 総会は会期1カ月前に文書で通知し、最低10日前に新聞に広報する。

第46条 第1次招集は会員の3分の1をもって成立し、その30分後の第2次招集では数の如何を問わず成立し議決は有効とする。

第47条 総会の議決は多数決によるものとし、賛否同数の場合は議長が裁決する。

第48条 定期総会は毎月2月に開催し、次の事項を行う。

イ)収支決算並びに事業報告の承認

ロ)評議員会並びに理事会及び支部提案事項の審議決定。

ハ)新年度予算並びに事業計画の審議決定

ニ)その他議事日程に記載されている事項についてのみ議決される。

ホ)2年毎評議員を選挙する。

第49条 臨時総会は必要に応じて理事会又は会員の3分の1以上の要請によって招集することが出来る。

第50条 評議員の選挙は各支部並びに本部理事会の推薦により細則で決定する。

第51条 評議員選挙の結果は各推薦団体と評議員名を明記して保管すること。

第8章 解散

第52条 本会の解散はその目的の為、特に招集された総会において決議される会員総数の3分の2の出席を要し、出席委員数の5分の4の賛同を要する。

第53条 本会の解散が決議された場合、当総会は3名の清算委員を選出し債権債務の清算をなさしむ。

第54条 清算に際し計上された残余の財産は解散総会に於いて決定される。ブラジルに於いて正規に設立された慈善団体に寄付される。

第9章 細則

第1条 年度の最初と最後の理事会は総役員会とし顧問、評議員会役員並びに会計監査の出席を要請する。

第2条 選挙権被選挙権は会費完納者に限る。

第3条 選挙管理委員会は評議員会会長の指示により選挙に関する事務的業務一切を施行する。

第4条 選挙管理委員会は正監査役3名と補充監査3名で構成し、委員長は互選で決定する。

第5条 評議員選挙は2カ年毎に、定期総会2カ月前に各支部並びに本部理事会の

推薦で行う。

第6条 評議員選挙は各支部並びに本部理事会から推薦された候補者130名を以って構成し一般投票を行わない。

第7条 各支部の評議員候補者はつぎの基準による。

イ	50名以下の支部	1名
ロ	51名～100名	2名
ハ	101名～150名	3名
ニ	151名～200名	4名
ホ	201名～250名	5名
ヘ	251名～300名	6名
ト	301名～350名	7名
チ	351名～400名	8名
リ	401名～450名	9名

第8条 第7条の規定による候補者リストを本部理事会で検討の上、不足員数を本部理事会が推薦補填する。

第9条 選挙管理委員会は第七条に基づいて選挙2カ月前に評議員候補者を各支部に推薦を要請する。

第10条 評議員候補者の推薦にあたっては事前に候補者の同意を得る必要がある。

第11条 候補者リストの提出は指示する日まで本部事務局に必着すること。

第12条 選挙管理委員会は指定日までに支部からの推薦候補者名簿を作成し理事会に報告せねばならない。

第13条 評議員会会長1名、副会長2名並びに書記2名は互選により選出され就任する。

第14条 選挙管理委員会は選挙の結果をまとめ保管し正式に推薦された評議員リストを総会に報告し承認を受け就任させる。

第15条 第38条（ハ）項にもとずいて会計監査は評議員会で投票により選出され総会の承認を受け就任する。

施行年月日 1998年2月22日

第61回定期総会において一部改正され即日施工される。

県人会の財源

県人会の財源は会員の会費、会館施設の賃貸料、各種行事に対する寄附金（行事収入）、母県や外国からの来訪者による寄附金、並びに母県からの助成金などが主で、年度によつて差があるので1998年度の収支決算報告書を例に説明しておく。

まず、歳入予算でもっとも大きな比率を示すのは施設賃貸から得られる収入である。表で説明されている様に、県人会は年間12の定期的な年中行事を催している。特に琉球古典音楽民謡大会と琉球舞踊大会、それに資金カンパ演芸大会などが主な収入源である。年中行事の中、スポーツ行事で柔道と蹴球、陸上競技大会は参加チームより参加費を徴収し、その行事の費用にあてがって

いる。その理由は、これらスポーツ行事にたいしては一般会員からの寄附金が少なく、運営費が不足するため資金対策の一手段として参加費を徴収しているのである。

同時に近年ブラジル国の経済悪化に伴い県人会の財政も窮迫状態におちいり、運営難のため年一回資金カンパの演芸大会やバザーなどを催し、運営資金を工面している。こうした行事によって得られたいわゆる行事収入が県人会の取る大きな収入源である。それから会館の大サロン、中サロンと階下の駐車場の賃貸料金がそれに次ぐ最も大きな財源で、行事収入と会館賃貸料は全収入の64%を示している。

つぎに歳出の面では会館の維持費が最も大きい。即ち備品や施設の補修改善など常に経費が大きくかかるのと、事務局職員二人と管理人（家族で会館内に住み込み）一人半の給料が人件費として支出され、全体の40%がその費用に出る。尚会員との連携を保つ会報が発行される場合は、その印刷費が高いために会費をはるかに上回る額となる。そのため最近は各支部長宛事務局便りで応急処置をとったりしている。

会館の施設

特に今年1998年度は、移民90年祭と県人会創立60周年記念式典の開催で会館の補修改装工事で、会員の負担も大きくなり、年中行事を一部中止し記念行事に主力を注いだのである。

現在の県人会館は1978年10月に出来たもので屋上の体育館を除く会館は20年前に出来たそのままの姿である。1978年移民70周年を記念して完成したものであるが、ブラジル都道府県大会の中では最も大きな会館であり、屋上の体育館は日系コロニアで数少ない施設と言える。

サンパウロの中心街にこの様な会館を持つ沖縄県人会の誇りと

期待を担つてこの施設の果たす役割は大きい。

琉歌

語てなぐさむる 友の居るうりさ

互に語りやい 浮世わたら (金城シズ子)

顔にしわあてん 心がんばとて

働ちゆる人や 笑い福い (宮平ヤス)

婦人会たてて十の年迎けて

う年ゆい共に あしぶうりさ (前田セイ)

月々のすりや 打ち揃て互に

話し花咲かち 暮すうりさ (比嘉キク子)

八十としなてん いじゆ引ちみせな

からだいたわやい 長命みそり (奥原うと)

物事の習い 肝いさみいさみ

はげみある中ど 肝や光る (比嘉ウシ)

御万人ぬうかぎ さかてちよる協和

めでたしやことし 十年ぬうゆえ (宮城よし子)

琉歌

故郷

サント・アンドレ 和字慶 朝六

くかと離りりは 梯じどまする
忘して忘しららん 故郷のくとか

月ゆ眺めてん 五月雨の降てん
故郷の面影や まさて立ちうさ

わが思るぐとに 故郷の親兄弟ん
見ぶさうらちらさ しちよらんとみば

いすぐ日ん待たち 故郷ん訪じりて
くくる行くまでん 語れぶさぬ

琉歌

月

サン・カエターノ

山内 ハル

夏の夜涼み 親祖父と共に
眺めたるお月 思い出ち

ブラジルに渡って 四十年（ゆとし）なるまでん
十五夜になてん 月見ねらん

生り島

サン・カエターノ

玉城 登吉

勇み旅出たる 幼な心ゆい
地球裏の異国 渡てちやしが

高山に登て みぐて眺みりば
恋し古里ん 見ゆらやしが

琉歌

述懐

梶門 寛俊

誰に暇乞い 語て先なたが
数多た思事や 後に残ち

悲しさやアリが 死出の旅立や
去年の月今の 今宵やたら

後生の長旅や 戻らりとむて
旅にことよせて 行じやらやしか

戻らん旅路 誰頼ゆて行ちやが
迷ゆるなよカナシ 死出の暗路

夢

プ・ベルナールデス 東谷

南の緑の島

わたしの故郷沖縄

島は小さくとも

愛情につつまれた

親しみやすい人々

戦いで荒れたれど

乙女達の純情は

美しく咲くだろう

初秋の夜聞いた

歌の流れ

涙で船出した

悲しさ想い出よ

私はあの時の夢を

今も抱いている

あの沖縄言葉

我々の愛の言葉

詩のみちた琉歌

忘れられぬ歌を

私は今も

くちづさむ

詩

郷愁

プ・ペルナルデ トカシキ 生

悲しき秋風に吹かれて 思い出す故郷
月照る夜ふみし 砂濱 なつかしの友
あのやさしい乙女の唄い聲
戦争はすべてを奪い去った
今くるものは苦難の嵐

然し屹度たち上ります 私は信ずる信じます
今天に向って唄ってみたい琉歌を ！！
故郷を遠くはなれた南の國で
硝煙の臭いもせず 楽しく働いているわれ

夜になれば無言のまま
吾々を見つめて居る友の顔、顔
許してくれわが友よ
はたしますわが使命 重いぞわが使命

昔とうふうの前でやせ蛙が柳にとびついた
私もとびつきましよう 希望の枝に
兎が亀に言いました もうまけませんと
さてわれわれの手で
井の蛙を出して見せましよう 大海原を

あとがき

本記念誌編集委員会が、正式に活動を始めたのは99年2月からであった。資料の収集、整理、取材、そして執筆と原稿作りをしているうちに1カ年余の月日をすごしてしまった。実に早い1年だった。

ところで、今回の記念誌は、日伯両語別冊にした画期的事業であった。日語の記念史である本誌は、記念行事や事業の報告だけでなく、第1回笠戸丸移民325名が一獲千金の夢を追ってサントスに上陸して以来90年後の今日、先人達の足跡を追い、その末裔達を訪ねながら、戦前戦後の移住者を併せた沖縄移民の歩みと実態をできるだけ広範に書きとどめておきたい、その思いで纏められたものである。これは初めての企画であるため、試行錯誤を重ねて何回か軌道修正を余儀なくされた。

そして、いまようやく出来あがった、という、いい知れぬ安堵感を覚えるのである。

編集の主旨としては、先にも申し上げたが、ようするに「4000会員に易しく読める記念誌」ということで、学術用語やカタカナ語を出来るだけ避けた。形式にとらわれない、移民の原点を探る「手作りの移民史」を旨とした。その意味で、第1部歴史編は、移民県を自認するわれわれにとって「移民とは何か」を問うため、12章37節と広範なスペースを費やして記述し、後世に語り継いでもらうことを念じて取組んだ。第2部は先駆者が定着したサントスを始めジュキア線沿線やサンパウロから北にのびるノロエステ線沿線及びカンポ・グランデ、クイアバー地方、或いはリオ・デ・ジャネイロに近いイーリア・グランデなど、沖縄移民にとって「移民の故里」といえる場所を、戦後移民の我々にとつ

ては思いもよらないこれらの地域にどうして生活の場を求めて住みついたのか、奇異な心持ちと驚嘆の思いで取材を試みたのである。そこには今昔の時代差をみせながらも、5世代に亘って育まれた県人特有のウチナアンチュ意識とその心が受け継がれていた。第3部では、二世層の先輩格であり、また日系コロニアの指導者でもある山城ジョゼー氏、山里アウグスト氏、上原幸啓氏等ご3名による初の座談会を催した。そこには興味深い数々の「埋もれた歴史」やこれまで理解しがたいブラジル事情、これからの日系社会についていろいろ有益な話を語ってもらった。それに県人会の将来を背負って立つ若者達に「県人会の在り方」、または「活性化」をテーマに懸賞論文を募集して入賞した作品を掲載した。第4部では、移民80周年記念誌で果たせなかった県人会年譜を県人会、コロニア、ブラジル、沖縄の4項目に分けて纏めた年表編と、県人会にとって必要性の高い資料を網羅した資料編が修められている。ただ県人会の創立が戦前の球陽協会でありながらも今年（1998年）何故創立60周年なのか納得がいかない、と10年前の総会で論議されたにも拘わらず、年譜に正しく記述できなかったことは心残りであり、残念であった。その誤りが問われ、去った定期総会で次年度からは正されることが決議されている。

貴重な土・日曜日を返上して繁雑な原稿作成から読み合わせ、そして校正と、一連の編集作業に全く無報酬でご活躍下さいました委員各位に深甚なる感謝の意を表したい。申し上げるまでもなく、第1部歴史編の第2、3、4、5、7章の宮城あきら氏、第1、5、6、8、9、10、11章の森幸一氏、そして第1、12章、並に第2部ルポルタージュ「移民の故里を訪ねて」の執筆を担当して下さった赤嶺尚由氏ご3名は、それぞれ多岐にまたがる分野を労をいとわずによくまとめてくれた。同時に他の部門で、上江洲清氏、与那嶺恵子さん、宮城滋氏、赤嶺園子さん、瀬

名波美恵子さん、与那嶺真次氏、仲吉清盛氏などの一致協力によって、項目内容の拡張、充実が計られた。更に、総括的な編集、校正、レイアウトを丹念に監修の労をとられた野口浩氏、前園博子さん、それに表紙やグラビアの構図を担当された鈴木紀男氏、また生原稿のパソコン打込み作業に全面協力下さった大城初子さん、大城栄子さんに重ねて感謝の意を表しお礼申し上げます。

最後になりましたが、母県の稲嶺恵一知事並に友寄信助議会議長の熱誠溢れるメッセージを巻頭に戴いたことは、在伯県人にとって大きな励みとなり喜びにたえない。

会員の皆様が、こぞつて本書をご一読下さることを願ってやみません。

2000年6月18日

編集委員長

山城 勇

編集後記

▲「沖縄」を知らずに、「ブラジルのウチナンチュ」研究を初めて数年。調査研究の過程で出会った縁で、今回の記念誌の編纂をお手伝いすることになった。他の編集委員のお書きになった文章と自分のモノを比較すると、いかに自分が表面をサツとなでてるかに過ぎないかが分かってしまう。編集会議では「おまえさんにはまだチムグクルーが、沖縄の心が分からんさー」と言われ続けてきた。自分でも「チムグクルー」はまだ理解できていないことは十分に承知しているが、いつの日にか、「おまえさんも随分上等になったネー」と言われるようなモノを書きたいと思う。それ

は恐らくヤマトウーの立場を超えることは出来ないだろうが、ヤマトウーの立場からの「チムグクルー」理解の仕事に今後も携わって行きたいと思っている。今後ともご指導の程宜しくお願い致します。（森幸一）

▲ブラジルには色々な熱帯果実があるが、“パンの実”があるとは知らなかった。私がイーリア・グランデの取材に出かけた動機は、この島にパンの実があることを知ったからである。パンの実が私が生まれた南洋では原住民の主食の一つだった。一見ジャークの実に似ているがタネらしいのはなく、澱粉質の実は熟れるほど甘みが増し、蒸し焼きにするとトロピカルな芳しい匂いと独特な味がなんとも言えない。このパンの実をイーリア・グランデの観光資源にする事は出来ないものかと、取材から帰るバスの中で同行の幸良さんと語り合ったものだが、この話に関心のある向きはイーリア・グランデまで足を運んでみては。一考の価値はありそうです。（上江洲清）

▲日本語で母親のことを「お袋」といいます。家族の不平や不満、文句や愚痴を心の堪忍袋の中に納め、しっかりと紐を締め家を丸く納めていくのがお袋です。日本女性もブラジルに移住し、母となり、灼熱の太陽を物ともせず、泥や汗にまみれ、夫に協力し、子ども達を自立させるまでは断腸の思いをした異国での子育てだったことでしょう。文字通り清貧に甘んじ、いとし子に愛情を注ぎ、「誠」を教えた90年の齢でした。

わが身は忍辱に耐え家族の幸福を願って迎える老後、この方々に大和撫子のゆかしさと偉さを見せていただきました。子どもや孫達にいとお生まれ、上手にお年を召していらつしやいます。

その喜びを私も分けて頂き、心暖まるインタビュー旅行でした。

（赤嶺園子）

▲この記念誌は、やがて暮れゆく少し前の日系移民社会の残照の風景を描いた一枚の絵のようなものではないか、と考えている。しかし、たとえ草深いアナジアスの黄昏時の中に立っていても、80歳近いある県人指導者からは「それぞれの住む地域で、琉球音楽や琉球舞踊の普及につとめることが母県沖縄の伝統文化の裾野を広げ、併せてその補充につながるものと信じている」と、大変に気概あふれる貴重な言葉を聞くことができた。私は、主としてカンポ・グランデ市やサントス―ジュキア沿線といった沖縄移民の故郷を取材させてもらったが、黄昏時にある移民社会の中で、ウチナーンチュたちがより長く踏ん張って行くためには、言葉（ウチナーグチ）、音楽、舞踊、郷土料理などの伝統文化をもっと大事にし、それを車の心棒みたいにして行く必要があることを痛感したのである。（赤嶺尚由）

▲笠戸丸県人移民325名の足跡は、長い間歴史の深い霧の中に埋もれていた。この「埋もれた歴史」を掘り起こし、先人たちの苦闘とその足跡を歴史の舞台に等しく明らかにすることが、本記念誌のひとつのテーマであった。なお出発点に立っているにすぎない思いであるが、ひとつの仕事を終えた充実感もある。私たちの合い言葉は「移民者自身による手作りの記念誌」であった。先人たちが生きた過酷な時代に思いを馳せ、彼らに我が身を移し入れてその足跡を追体験することの困難さ、しかしその大切さを痛感せずにはおれなかった。資料の収集・検討、聞き取り調査など

に、それぞれ皆高齢でありながら労を惜しまずに御協力下さった金城政喜、佐久田朝智、石原昌順、比嘉長栄、山里智才・清子の各皆様ありがとうございました。深謝。（宮城あきら）

▲故里の母の面影を重ねて見るせいでしょいか、中央市営市場（メルカード）の小母サンたちとは、18年前初めてブラジルの地を踏んだときから仲良し。その小母さんたちのほとんどが協和婦人会の会員で、記念誌の「協和婦人会」の執筆担当になったのも当然のような気がしました。

移民史の表には現れない女たち（イナグンチャー）の苦労や悲しみがあつて当然ですが、それらをすべて超越してカチャーシーを踊る小母サンたちが大好き。記念誌の編纂に携わつて、女性にとって移民とはなんだったのか、というテーマでまた勉強し直したいという気になったのは大きな収穫だと思っています。（与那嶺 恵子）

主要参考・引用文献

・ブラジル日本商工会議所編『ブラジル経済事典 1993』古今書院 1993年

・日本ブラジル交流史編集委員会編『日本ブラジル交流史―日伯関係100年の回顧と展望―』1995年

・日本移民80年史編纂委員会編『ブラジル日本移民80年史』サンパウロ 1991年

・沖縄県教育委員会編『沖縄県史第7巻各論編6：移民』沖縄 1974年

・沖縄県編『沖縄37年のあゆみ』沖縄 1982年

・沖縄県編『沖縄―戦後50年の歩み』沖縄 1995年

・三田千代子『『国民国家』から『多人種民族国家』へーブラジル日系人の辿った道ー』

・水野一編著『日本とラテンアメリカの関係ー日本の国際化におけるラテンアメリカー』上智大学イベロアメリカ研究所 1990年 51ー66頁

・サンパウロ人文科学研究所編『香山六郎回顧録』サンパウロ

・香山六郎編著『移民40年史』サンパウロ1949年

・香山六郎編著『在伯日本移植民25周年記念鑑』バウルー 1934年

・聖州新報社編『のろえすて年鑑』バウルー1928年

・海外興業株式会社編『日本移民概史』東京 1937年

・堀部洋生『ブラジルコーヒーの歴史』サンパウロ 1973年

・半田知雄編著『ブラジル日本移民史年表』サンパウロ人文科学研究所 1976年

・ブラジル日系人実態調査委員会編著『ブラジルの日本移民』東大出版会 1964年

・泉靖一編著『移民ーブラジル移民の実態調査ー』古今書院 1957年

・野田良治『実査18年 ブラジル人国記』博文館 1926年

・日本移民50年祭委員会編『かさと丸』サンパウロ 1958年、同編『物故先駆者列伝』サンパウロ 1958年

・日本移民80年史編纂委員会編著『ブラジル日本移民80年史』サンパウロ 1991年

・在伯沖縄県人会編（屋比久孟清著）『ブラジル沖縄移民誌』サンパウロ 1987年

・城間善吉『日本移民50周年記念在伯沖縄県人50年の歩み』東京 1959年

・移民70年史編纂委員会編『ブラジル日本移民70年史』サンパウロ 1978年

・在伯沖縄県人会編『沖縄県人ブラジル移住80周年・在伯沖縄県人会創立50周年記念誌』サンパウロ 1988年

・在亜沖縄県人会連合会編『アルゼンチンのうちなーんちゅ80年史』アルゼンチン 1994年

・ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻 1941年

・半田知雄『移民の生活の歴史―ブラジル日系人の歩んだ道―』サンパウロ 1970年

・高木俊郎『狂信』朝日新聞社 1950年

・サンパウロ人文科学研究所編著『ブラジル日本移民・日系社会史年表―半田知雄編著改訂増補版―』サンパウロ 1996年

・太田恒夫『日本は降伏していなかった』文芸春秋社 1998年

・輪湖俊午郎『バウル―管内の邦人』サンパウロ 1939年

・前山隆『ブラジル日系人とエスニシティーブラジル移民の文化人類学的研究』御茶ノ水書房 1996年

・琉球政府編(訳出)『ディグナー報告書「ブラジル」編』沖縄 1957年

・外務省領事移住部編著『わが国の海外発展 移住百年の歩み(本編)』東京 1971年

・入江寅次『邦人海外発展史 下巻』東京 1938年

・児玉正一『ブラジル移民の父上塚周平』サンパウロ 1940年

・石川友紀『日本移民の地理学的研究』沖縄 1997年

・沖縄タイムス社編『新沖縄文学：総特集・沖縄移民 45号』沖

縄 1980年

・沖縄タイムス社編『新沖縄文学：特集 ユタとは何か―沖縄精神風土の根を探る―57号』沖縄 1983年

・沖縄タイムスおよび琉球新報

・大城立裕『ノロエステ鉄道』文芸春秋社 1989年

・大城立裕『内なる沖縄―その心と文化―』読売新聞社 1972年

・斉藤廣志『ブラジルの日本人』丸善 1960年

・桜井徳太郎『沖縄のシャマニズム―民間巫女の生態と機能―』弘文堂 1973年

・富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』日本経済評論社1990年

・小熊英二『〈日本人〉の境界―沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮―植民地支配から復帰運動まで―』新曜社 1998年

・渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル大論文編』明石書店 1994年

・沖縄心理学会編『沖縄の人と心』九州大学出版会 1994年

・大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂1998年

・東北大学文学部社会心理学研究室編『ボリビアのオキナワ村―移民の社会心理学的研究―』仙台 1998年

・日ボ協会編『うるまからの出発』（コロンビア・オキナワ四十周年記念誌）サンタ・クルス 1998年

・在ブラジル小緑田原字人会編『小緑田原字人移民80周年 記念誌1917―1997』サンパウロ1998年

・ブラジル沖縄県人会協和婦人会「会報」創刊号―第23号

・宮城松成『ブラジルの沖縄県人トップ・リーダー』サンパウロ1998年

・在伯沖繩協会ビラ・カロン支部編『1976年20周年記念誌』
サンパウロ1976年

・在伯沖繩青年協会編『移民青年隊着伯25周年記念誌』サンパ
ウロ1982年

・野村流音楽協会ブラジル支部編『創立30周年記念誌』サンパ
ウロ1984年

・石田甚太郎著「米軍に土地を奪われた沖縄人」ブラジルに渡つ
た伊佐浜移民 1997年

以上は主要参考・引用文献。なお、これら以外にも、沖縄県系
各種団体が発行した機関誌やパンフレットなどを参照している。

刊行委員会

委員長

山城 勇

副委員長

宮城 滋

委員

大城 良雄

〃

伊差川 実

〃

知花 真勲

〃

宮城 松成

〃

翁長 みどり

〃

宮城 調智

〃

宮城 信吉

〃

末吉 業幸

〃

松堂 忠顕

〃

島袋 安雄

〃

勝連 比呂志

〃

小渡 克男

〃

長嶺 明広

〃

知花 稔

伊波 保
久場川 沢子

日語編集委員会

委員長 山城 勇

副委員長 宮城 滋

執筆委員 森 幸一

上江洲 清

赤嶺 園子

赤嶺 尚由

宮城 あきら

与那嶺 恵子

瀬名波 美恵子

仲吉 清盛

与那嶺 真次

沖縄県人ブラジル移住90年、ブラジル沖縄県人会創立60周年記念誌

ブラジル沖縄移民史

笠戸丸から90年

2000年6月1日 印刷

2000年6月18日 発行

発行 移民史刊行委員会

編集 日本語編集委員会

編集協力 日毎叢書企画出版

R u a d a G l o r i a, 3 3 2 ° a n d .

S a l a 3 2 S a o P a u l o — S P

C E P : 0 1 5 1 0 — 0 0 0 T e l e f a x :

(0 1 1) 2 7 9 — 5 2 2 8

フォトトリト・デザイン 鈴木 紀男

R u a T a b a t i n g u e r a, 1 4 0 1

3 ° a n d . C j . 1 3 1 6 S a o P a u l o — S P

C E P : 0 1 0 2 0 — 0 0 0 T e l e f a x :

(0 1 1) 3 1 0 6 — 0 6 2 8

発行所 ブラジル沖縄県人会

A s s o c i a c a o O k i n a w a K e n j i

n d o B R A S I L

R u a D r . T o m a s d e L i m a, 7 2

S a o P a u l o — S P B R A S I L

C E P : 0 1 5 1 3 — 0 0 0 F o n e : 3 1 0 6 —

8 8 2 3 F a x : (0 1 1) 2 3 9 — 0 8 7 4

印刷・製本 サンパウロ州営印刷所 I m p r e n s a O f i

c i a l d o E s t a d o d e S a o P a u l o S

／ A — I M E S P

I m p r e s s o n o B r a s i l, j u n . 2

0 0 0